

090-1-591

明治大学大学院 政治経済学研究科

2002 年度
博士学位請求論文

バーナード・ボザンケの政治思想

Political Thought of Bernard Bosanquet

学位請求者 政治学専攻

芝 田 秀 幹

凡例

1. ボザンケの著作からの引用は、1999年にイギリスのテムズ社（Thoemmes Press）より刊行された『バーナード・ボザンケ著作集』（*The Collected Works of Bernard Bosanquet*. 20 vols., Edited and Introduced, by W Sweet.）によった。また、ボザンケの著書以外の主要論文に関しては、本著作集の編者であるスイート（William Sweet）によって選別され、著作集に収められた2つの論文集を、またボザンケの書簡に関しては、かつてミアヘッド（J.H.Muirhead）によって編まれ、同じく著作集に収められた『バーナード・ボザンケとその友人』（*Bernard Bosanquet and his Friends*）をそれぞれ用いた。なお、著作集に収められていない論文については、そのまま原論文から引用した。註では、著作名あるいは論文集・書簡集名の後に、巻数（ローマ数字）、頁数を記した。また、著作名、論集名、書簡集は略記とした。原タイトルとの対応は次のようになっている。

BBF *Bernard Bosanquet and his Friends*
CC *The Civilization of Christendom and other Studies.*
EA *Essays and Addresses.*
EASP *Essays on Aspects of the Social Problem.*
L *Logic or the Morphology of Knowledge.*
PIV *The Principle of Individuality.*
PMS *Psychology of the Moral Self.*
PTS *The Philosophical Theory of the State.*
SE *Selected Essays.*
SII *Social and International Ideals.*
SP *Science and Philosophy and other essays.*
SSE *Some Suggestions in Ethics.*
VDI *The Value and Destiny of the Individual.*

2. 引用文中、（ ）内は原註である。
3. 引用文中、（中略）は、引用者の中略である。
4. 引用文中、必要に応じて〔 〕の中に補註を加えた。

目次

凡例

はじめに	1
1. 「イギリス理想主義」	1
2. 問題の所在	4
3. 研究史の整理	6
4. 本論の構成	10
第1章 ボザンケの生涯	18
1. 生誕～オックスフォード時代（1848～1881年）	18
2. ロンドン時代（1881～1897年）－実践活動の開始－	19
3. ケイターム・オークショット時代（1897～1903年）－学校設立－	24
4. セント・アンドルーズ～ロンドン時代（1903～1923年）	26
5. ボザンケの生涯	29
第2章 ボザンケの「一般意志」論	39
1. 哲学	39
2. 政治哲学	43
3. 「実在意志」と「現実意志」	46
4. 「一般意志」	50
5. 「法」「立法者」	53
6. 「国家」	57
7. ボザンケの「一般意志」論	60
第3章 ボザンケのイギリス政治思想批判	70
1. ホブズ・ロック批判	70
2. ベンサム批判（1）－ボザンケの「自由」論－	71
3. ベンサム批判（2）－「自由」を巡って－	74
4. ミル批判（1）－ボザンケのミル評価－	77
5. ミル批判（2）－「個性」を巡って－	80
6. スペンサー批判	84
7. ボザンケのイギリス政治思想批判	85
第4章 ボザンケの国家論	95
1. 「国家」「社会」「ネーション」	95
2. 「国家」の活動（1）－「国家」と道徳－	99
3. 「国家」の活動（2）－国家干渉の限界－	101
4. ボザンケの国家論	105
第5章 ボザンケ権利・刑罰論	113
1. 「権利」（1）－国家干渉と「権利」－	113

2. 「権利」(2) — 「国家」と「社会」 —	116
3. 「刑罰」	118
4. ボザンケの権利・刑罰論	124
第6章 ボザンケの制度論	129
1. 「制度」	129
2. 「家族」	130
3. 「私有財産」	133
4. 「近隣」	134
5. 「階級」	137
6. 「貧民」	139
7. 「慈善」	142
8. ボザンケの制度論	144
第7章 ボザンケの社会政策論	152
1. 「社会政策」(1) — 社会政策批判 —	152
2. 「社会政策」(2) — 「救世軍」ブース批判 —	156
3. 「社会政策」(3) — 正当な国家干渉 —	159
4. ボザンケの社会政策論	163
第8章 ボザンケと「フェビアン協会」	169
1. 社会主義批判	169
2. 「フェビアン協会」批判	172
3. 「王立救貧法委員会」	175
4. ウェップ夫妻の主張	177
5. ボザンケの主張	180
6. ボザンケと「フェビアン協会」	183
第9章 ボザンケの国際関係論	192
1. 「国際社会」	192
2. 戦争と平和 — 「愛国心」 —	197
3. 外交政策批判と「国際連盟」	202
4. ボザンケの国際関係論	205
結び	212
1. これまでのまとめ	212
2. ボザンケの政治思想に対する評価	214
3. ボザンケの政治思想における欠点と現代的意義	218
参考文献一覧	223
付録 ボザンケ年譜	239
索引	243

はじめに

1. 「イギリス理想主義」

本論文は、「イギリス理想主義」(British Idealism)の哲学者であるバーナード・ボザンケ(Bernard Bosanquet: 1848-1923)の政治思想を明らかにするものである。

一般に、イギリスの思想史において知的伝統となっているものは経験論であると言われ¹、実際、思弁的かつ体系的な哲学はホブズ(Thomas Hobbes: 1588-1679)からスペンサー(Herbert Spencer: 1820-1903)に至るまでほとんど見られず、個々人の特性を重視した経験主義的、功利主義的な哲学がその歴史において王座を占めている²。しかし、こうした思想的な流れに挑戦する思想が、イギリス思想史上皆無だったわけではなかった。たとえば、近代に時代を限定しても、19世紀前半には、認識に関して分析的な思考よりも直覚を優位に捉え、実在は直覚によってのみ捉えられとする直覚主義(intuitionism)が登場し、1840年代からの一時期、イギリス思想史の本流に抵抗した。その後、J・S・ミル(J. S. Mill: 1806-1873)の登場によって³直覚主義は衰微しはじめるものの⁴、しかしミル自身の死去を契機として再びイギリスの思想的本流に抗おうとする新たな思想集団が現出した。それが、「イギリス理想主義」の哲学であり、その礎はトーマス・ヒル・グリーン(Thomas Hill Green: 1836-1882)によって築かれることになった。

グリーンは当初からミルのような経験論を批判し、1874年には『ヒューム哲学全集』の編集の際に付した「序論」の中で、25歳以下の青年はミルやスペンサーを閉じ、カント(Immanuel Kant: 1724-1804)やヘーゲル(Georg Wilhelm Friedrich Hegel: 1770-1831)をひもとくべきことを訴えた⁵。そしてこのグリーンの訴えは、「かつてイギリスが経験しなかった様な哲学の全面開花」⁶とも言われるイギリスの純哲学的・思弁的な思想運動の幕開けを告げるものであり、ソーレー(W. R. Sorley)によっては、19世紀のイギリス思想において一つの時代を画したとさえ指摘されるほどのものであった⁷。

ところで、このようなグリーンの唱える理想主義の思想は、やがてイギリスで受容されることになったが、その背景には、当時のイギリスにおける学的・思想的な状況があった。すなわち、コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge: 1772-1834)やワーズワース(William Wordsworth: 1770-1850)、サウジー(Robert Southey: 1774-1843)といったイギリス・ロマン主義を代表する人物の文学の領域における活躍や、科学の発展によるキリスト教への信仰の希薄化、そしてオックスフォード・ケンブリッジにおけるギリシャ古典教育は、イギリス理想主義を受け容れるいわば思想的な器を供するものであった⁸。しかし、こうした思想的背景よりも一層強く、かつ直接的に理想主義の受容を促したものは、当時一大転換期にあったイギリスの政治・社会状況そのものであった。その頃、イギリスでは、1867年の第二次選挙法改正、1884年の第三次選挙法改正、そして1883年の腐敗および不正行為防止法などを通じて政治の民主化が急激に進められた。特に、2つの選挙法改革によって、イギリスでは有権者数が約300万から500万へと膨れ上がり、労働者階級の選挙人が初めて過半数を越えることになった⁹。しかし、その一方で、経済面では、1873年以降、イギリスは深

刻な不況＝「大不況期」(Great Depression)を迎え、「世界の工場」としての優位を誇ってきたイギリスの経済の凋落がこの時期より顕著になってきた。また、こうした経済の動向は、労働運動と社会主義運動の発展を促す結果となり、チャーチスト運動(1838-1858)以来鳴りを潜めていた社会主義運動が、イギリスで1880年前後より復活することになった。そしてこのような流れの中で、イギリス政府も立法面での転換を迫られ、社会問題の表面化に伴う労働立法や教育政策、すなわち「社会立法」が進展することになった。例えば、労働面では、1872年の炭坑業法(Coal Metalliferous Mines Act)や、1880年の雇主責任法(Employer's Liability Act)等の成立に見られるように、従来のように婦人および未成年者のみを対象とするものではなく、成年労働者をも立法の対象とする法律がこの時期に制定されることになった。他方、教育面でも、1870年に初等教育法(Education Act)が制定され、国費による義務教育制度の基礎が確立されることになった。つまり、これらの諸立法を通じて、イギリスは、労働条件、および初等教育に対する国家干渉の原理を導入しようとしたのである¹⁰。

さらに、こうした民主化の進展、経済の不況、社会主義運動の激化、「社会立法」の進展といった動きは、それまでイギリスが依拠してきた思想的な根拠、すなわち経験論や功利主義、原子論的个人主義や「レッセ・フェール」主義に対する肯定的な見方を大きく揺り動かし、その見直しを人々に促すこととなった¹¹。つまり、この時期、国家干渉が排除されれば経済的利害の自然的調和が達成される、という功利主義者の楽観主義的な主張、あるいはかつては改革と自由の学説であった個人主義的な教義は、当時実施されつつあった経済的利害関係・利害衝突の意図的・人為的調整に反対する一種の抵抗思想として、反動と特権の擁護者(bulwark)になってしまっていたのである¹²。むしろ、この時期、思想的に生まれたものは、資本主義の発展、急速な都市化、貧困の増大などによって失われた、血縁、教区、そして田園(land)といった伝統的コミュニティ・連帯への「ノスタルジア」であり¹³、また人間の倫理意識を喚起しつつ、個人を今一度公的なものと結びつけ、その共同性を回復せしめようとする意欲であった¹⁴。それゆえ、多くの予期せぬ新たな問題に直面したイギリスでは、成功裡にこうした諸問題を解決するために、国家干渉を受け容れる「個人」と、国家干渉を行う「国家」との間の新たな合理的関係が模索されなければならなくなった。それは同時に、個人主義と、国家に押しつけられつつあった新しい諸機能とを和解させる何らかの方法を見出すこと、あるいは自由主義のための新たな哲学的な基礎を見出すことでもあった¹⁵。そしてイギリス理想主義の政治思想は、まさしくこのような文脈で「個人」と「国家」の関係を巡るアポリアを再検討し、国家による個人への干渉の合理的根拠を新たに見出すという、時代の理論的要請に応え得るものであった。かくして、イギリス理想主義の政治思想はイギリスの思想界および現実社会で受け容れられ、やがてウラム(Adam B. Ulam)によっては「第一次世界大戦前の二十年の間にあらゆる社会的知的活動領域に浸透した」と指摘されるほど¹⁶、一時期イギリスにおいてその優位を誇るものとなった。そしてその端緒は、前述のように、グリーンによって開かれることになったのである¹⁷。

しかし、グリーンは自らの思想を完全には開陳しないまま、1882年にこの世を去った。このことは、19世紀後半から20世紀初頭にかけての社会・経済領域における国家活動の拡大に関するグリーンの見解が、彼の立法に関する断片的な言及から唯一想像あるいは推定され得ることを意味していた¹⁸。それゆえ、グリーンを思想を解釈し、それを明確なものにする作業が必要となり、この作業はグリーンを思想を受け継ぐ直弟子や同僚のものたちによって担われた。ここに、グリーンを鼻祖とする「イギリス理想主義学派」、一名「オックスフォード学派」¹⁹ (Oxford School) が形成されることになり²⁰、E・ケアード (Edward Caird: 1835-1908) や W・ウォーラス (William Wallace: 1843-1897)、また F・H・ブラッドレー (Francis Herbert Bradley: 1846-1924)²¹、D・G・リーチー (David George Ritchie: 1853-1903)、J・バーネット (John Burnet: 1863-1928)、J・H・ミアヘッド (John Henry Muirhead: 1855-1940) らがそのメンバーとなった。しかし、彼らの間では、グリーンを思想を継受する点では一致が見られたものの、その解釈をめぐる意見が様々に分かれ、コリニ (Stefan Collini) がそれを「多くの棲家 (mansions) からなる一つの家」²²とたとえるように、その学派からはメンバー各々の独自の私見に裏打ちされた様々なグリーン解釈が提示された。特に、グリーンを解釈するうえで焦点となった、その国家と個人に関する見解を巡っては、その後弟子・継承者たちの間に対立が生じ、それは後にグリーンを思想の社会主義的な側面を強調した「グリーン左派」(left Greenian) と、グリーンを思想の人格主義的な側面を中心に据えた「グリーン右派」(right Greenian) との分裂につながった。そして前者には、「フェビアン協会」(Fabian Society) のメンバーであるシドニー・ボール (Sidney Ball: 1859-1947) らが、そして後者にはミアヘッドやブラッドレーなどが含まれた。しかし、こうしたグリーンを弟子筋の中であって、グリーンによって「彼の世代では必要なものを最もよく身につけた男」と高く評価され²³、かつ「グリーン右派」および後期の「オックスフォード学派」を代表する思想家と見られるのが²⁴、本論文でとり上げるバーナード・ボザンケにはほかならない。

ボザンケは、グリーンを理論的な骨格に実際の血肉を与えた人物といわれ²⁵、当時の彼およびその思想に対する評価は高いものであった。たとえば、当時、ボザンケはレイトン (J. A. Leighton) によって「イギリス理想主義者達の中で最も偉大な哲学者」であり、「ヨーロッパ大陸においても彼と比肩しうる人物は近時見受けられない」²⁶と絶賛され、またフランソワ・ウアン (François Houang) も後にボザンケを「19世紀後半の中で影響力があり最も独創的な思想家」と位置づけた²⁷。また、近時でも、ランドル (J. H. Randall) は、ボザンケを「イギリスの理想主義者の中で最もポピュラーでありかつ最も影響力をもった」人物と評し²⁸、またジョーンズ (H. S. Jones) も、グリーンより後の世代の理想主義者の中で最も有能なのはボザンケだとしている²⁹。さらに、この点は、「偉大なイギリスの哲学者ボザンケ氏死去」という大きな見出しを掲げ、ボザンケが1923年2月8日にこの世を去ったことを報じたイギリスの新聞『ザ・タイムズ』(The Times) (1923年2月10日付) が、ボザンケを「前世紀から今世紀初頭までの最近の10年間におけるイギリスの哲学者の中で中心的な人物」であり、かつ「彼と同時代の中で最も代表的なイギリスの哲学者」と位置づけて報

じたことから理解できよう³⁰。

しかし、ボザンケへのこうした賛辞に象徴される「イギリス理想主義」優位の時代、すなわち「オックスフォードの時代」も、やがて終焉を迎えることになった³¹。それは、「グリーン学派」「オックスフォード学派」が、哲学・形而上学の方面において 1903 年以後のケンブリッジを中心とした「新実在論」(new realism)、すなわちラッセル (Bertrand Russell: 1872-1970) やムーア (G. E. Moore: 1873-1958) らによる思想的挑戦を受け、次第にこの思想が理想主義に対する優勢を確立していったこと、またそれと軌を一にするかのように、ボザンケをはじめとする理想主義者が 1920 年代に次々とこの世を去ったことなどに起因している。しかし、「イギリス理想主義」の凋落の決定的な要因となったものは、ポール (Leslie Paul) が記すように、第一次世界大戦の勃発によってイギリスの「ドイツ学派」ともいわれた理想主義学派に「厳しいまなざし」が注がれたことであった³²。そしてこうした批判は、一般に「ヘーゲリアン」と称されるボザンケの政治思想に対して集中的に為されたのであった。

2. 問題の所在

ボザンケの政治思想が具体的かつ全面的に示された『哲学的国家理論』(*The Philosophical Theory of the State*) は、当時、賛否両面において大変な評判を呼んだ。たとえば、賞賛としては、ラスキ (Harold J. Laski: 1893-1950) は、後にボザンケに対して種々の批判を展開したもの、当時、同書を「唯一グリーンンの『政治的義務の諸原理』を除いて、イギリス人によって為された政治哲学への貢献の中ではミル以来最も偉大なもの」と評価した³³。また、「グリーン左派」の思想家として「フェビアン社会主義」の思想を展開し、後にラスキ同様にボザンケと鋭く対立することになったポールも、『哲学的国家理論』を以下のように「政治哲学の古典」と位置づけた。

「イギリスの政治哲学の生きた諸概念 (working conceptions) に付随する欠点をボザンケ氏が修正する方法、そしてルソーの一般意志論の中の優れた諸原理を用いて“自治”の観念における政治的義務の真の根拠かつ本性をボザンケ氏が証明する方法は、それ自身、哲学的国家理論を、哲学的な古典にするのに充分である。」³⁴

また、ラスキやポールと同様に、後にボザンケを批判することになるリンゼイ (A. D. Lindsay: 1879-1952) も、ボザンケの『哲学的国家理論』を、グリーンンの『政治的義務の原理』を除く「イギリス理想主義」の政治理論書の中で最も重要な政治理論への貢献と評価した³⁵。さらに、ボザンケらの理想主義の思想から深い影響を受け³⁶、いわば理想主義の「長老」(doyen)³⁷であり続けたオークショット (Michael Oakeshott: 1901-1990) も、ボザンケの『哲学的国家理論』を、「国家理論によって熟考されねばならない諸問題すべてに徹底的な注意を払った」、「唯一の理論」かつ「最も包括的な説明」と絶賛した³⁸。この点は、わが国の戦前期日本のリベラリスト河合栄治郎が「そのテーマの取扱いの規模の大きいこと、その論法の堂々とした落着きのあることとに於て、巧智な才人の作ではなくて、確かに古

典の重々しさがある」と指摘したことからも理解されよう³⁹。

しかし、その一方で、ボザンケの政治思想、特にその『哲学的国家理論』は当時から多くの批判的ともなり、その批判は個人主義、多元主義、心理学・社会学、そして社会主義など多岐にわたる方面から寄せられた⁴⁰。とりわけ、ボザンケ批判の中で最も強力であり、かつ現在でも妥当視されている批判は、彼の「国家」を重視する議論からドイツ流の「ヘーゲル主義」の側面を導き出し、その思想をヘーゲル流の「国家主義」「全体主義」、あるいは「ファシズム」の思想的温床と位置づける批判であった⁴¹。例えば、ボザンケのいわば思想上の天敵といってもよいL・T・ホブハウス (L. T. Hobhouse: 1864-1929) は、ボザンケの政治思想を「ライン川とアイシス川〔オックスフォードにおけるテムズ川の愛称〕との合流」の産物であると評して、それを「ヘーゲル的国家主義」と断じた⁴²。また、前出のウアンも、ボザンケを「新ヘーゲル主義の代表的な哲学者」と位置づけ⁴³、ロビンズ (Peter Robbins) もボザンケを「ブリティッシュ・ヘーゲリアン」と評した⁴⁴。そしてコリニによれば、当時、ボザンケらのヘーゲル流の政治思想には大々的かつ徹底的な批判が行われ、「新ヘーゲル主義の国家理論への攻撃は、若芽の社会科学者にとってほとんど通過儀礼 (rite de passage) となっていた」とさえいわれている⁴⁵。

ところが、ボザンケに対してはもう一つ大きな批判があった。それは社会福祉学・社会政策学の方面からの批判であり、そこでの批判の基調は、ボザンケの思想を古典的な「個人主義」、「レッセ・フェール」主義、あるいは近時のベラミ (Richard Bellamy) の表現では「反集団主義」⁴⁶と断ずるものであった。つまり、奇妙なことに、ボザンケの政治思想には、片方 (政治思想史の分野) では個人の自由や価値を認めず、個人よりも国家に高い価値を付与し、個人を国家に一元的に吸収するというヘーゲル流「国家主義」「全体主義」という批判がなされ、もう片方 (社会政策学の分野) では国家干渉を徹底的に排し、個人の放埒な自由を至上のものと捉え、自由放任主義を頑ななまでに信ずる「個人主義」「レッセ・フェール」主義という批判が為されているのである。そしてこの両方の極端な見方が、お互い「共存」することなく単に「放置」されたまま、今日までボザンケの政治思想の教科書的説明として流布されている現状こそ、コリニおよびシモニー (Avital Simhony) の指摘のように、まさしく彼の政治思想におけるプロブレマティックな側面－問題の所在－である⁴⁷。

したがって、本論文の目的は、こうした問題を認識したうえでボザンケの政治思想を検討し、その全体像を浮き彫りにすることにある。そのためには、いわば「国家主義」と「反国家主義」との両極端の批判が噴出しているボザンケの政治思想のそれぞれの側面、すなわち彼の政治思想と社会 (政策) 思想・現実政策観を、彼の論理に従って忠実に再現し、その内容を明らかにする必要がある。そのうえで、これまで下されてきた両極端の評価の妥当性を検証し、かつその各々の評価が導き出され得る原因を彼の思想の中に突きとめて、改めてボザンケの政治思想を再評価しなければならない。しかし、従来のように、断片的にボザンケのそれぞれの思想を検討するだけでは彼の政治思想の全体像は見えてはこず、ボザンケの政治思想における前述のような問題もまた解決することができない。むしろ、

ボザンケの一見アンビバレントとも見える思想全体を「分裂」としてではなくボザンケの思想に内在する中核的原理の二面的な「反射」、つまりコインの両面と捉えて検討することがボザンケの本来像の構築に必要な作業である。したがって、本論文の最終目標は、ボザンケの政治思想に対する真の評価を改めて提示しつつ、それに統一的な見方を与え、かつ彼の政治思想における脆弱点やその現代的意義をも指摘することにある。

3. 研究史の整理

なお、ここで、これまでのボザンケの政治思想に関する研究の足跡を、管見の限りにおいて瞥見しておきたい。まず、ボザンケが生きた当時の同時代の政治学者によるボザンケ研究は、彼の思想をさまざまな角度から批判し、「国家主義」「全体主義」といったその後の通説的なボザンケ評価を決定づけた点で研究史上重要な意味をもつ。たとえば、ホブハウスや、政治的多元論者であるラスキ、リンゼイ、そのほかマッキューヴァー (R. M. MacIver: 1882-1970) らは、前述のようにボザンケの政治思想をヘーゲル流「国家主義」「全体主義」と位置づけた。こうした批判には、当時、ボザンケの親友ホアンレ (R. F. A. Hoernlé: 1880-1943) らがボザンケを擁護するための論陣を張ったものの奏功せず⁴⁸、結局その後、マルクーゼ (H. Marcuse: 1898-1979) やポPPER (K. R. Popper: 1902-1994) らによってその批判的視座は受け継がれることになった。ただ、当時のこうしたボザンケの政治思想に対する批判的研究は、それが論争的であったがゆえに一面的に過ぎる憾みがあり、ボザンケの政治思想の客観的・体系的な研究とはいいいがたい。また、この後、イギリスではボザンケそれ自体のみを扱った研究は近時におけるまで全く示されなくなり、ウラムによる 1951 年発表の研究『イギリス社会主義の哲学的基礎』(*Philosophical foundations of English socialism*)⁴⁹や、「イギリス理想主義」研究のイギリス本国での再開と指摘される⁵⁰ミルン (A. J. M. Milne) の 1962 年発表の『イギリス理想主義の社会哲学』(*The Social Philosophy of English Idealism*)⁵¹も、部分的なボザンケ研究に留まることになった。その意味で、ボザンケに対する批判的研究は、その後のイギリスにおけるボザンケ研究の停滞を招来したものと思われる。

むしろ、ボザンケに関する本格的な研究は、イギリス以外の国で進展することになった。たとえば、フランスでは、1954 年に前出のフランソワ・ウアンが『イギリスにおける新ヘーゲル主義：バーナード・ボザンケ (1848-1923) の哲学』(*Le Néo-Hégélianisme en Angleterre: La Philosophie de Bernard Bosanquet 1848-1923*) と『ヒューマニズムから絶対主義へ：イギリスの新ヘーゲル主義者バーナード・ボザンケの宗教思想の進化』(*De L'Humanisme à L'Absolutisme: L'Évolution de la Pensée Religieuse du Neo-Hégélien Anglais Bernard Bosanquet*) を上梓し、ボザンケの政治思想や国家論そのものを扱うことはなかったものの、その形而上学や宗教思想にメスを入れてボザンケ研究を進展させた⁵²。また、アメリカでも、ハリス (Frederick Phillip Harris) が『新理想主義の政治理論—そのイギリス的伝統との連続性—』(*The Neo-Idealist Political Theory: Its Continuity with the British Tradition*) を 1944 年に発表し、

断片的ながらも、ボザンケとイギリスの政治思想史における伝統＝「個人主義」との関係を一いち早く指摘した⁵³。そしてこうした動きに足並みをそろえるかのように、ボザンケの政治思想そのものを包括的かつ客観的に検討した研究もイギリス以外の研究者によってものされることになった。それは、2000年にボザンケ論を発表したジェフリー・トマス (Geoffrey Thomas) も指摘するように⁵⁴、(やや時代は前後するが) 1936年発表のバーティル・ファネンスティル (Bertil Pfannenstill) 著の『バーナード・ボザンケの国家論：その歴史的・体系的的研究』(Bernard Bosanquet's Philosophy of the State: A historical and Systematical Study) と⁵⁵、その後約50年の年月を経た1987年発表のマクブライア (A. M. McBriar) (モナーシュ大学：オーストラリア) の『エドワード時代のミックスダブルス：ボザンケ夫妻対ウェッブ夫妻ー1890～1929年のイギリス社会政策研究ー』(An Edwardian Mixed Doubles: the Bosanquets versus the Webbs-A Study in Britain Social Policy 1890-1929) ⁵⁶、そして1997年発表のウィリアム・スイート (William Sweet) (聖フランシスコザビエル大学：カナダ) による『理想主義と権利：バーナード・ボザンケの政治思想における社会存在論と人権』(Idealism and Rights: The Social Ontology of Human Rights in the Political Thought of Bernard Bosanquet) ⁵⁷の3つである。

北欧スウェーデンで上梓されたファネンスティルの研究はボザンケの政治思想に関する初の体系的研究であり、その最大の特徴はボザンケの形而上学的側面から彼の政治思想に接近した点にある。ただし、当時はまだボザンケの政治思想の研究自体が全体として初歩的な段階にあったためにその研究もなお不完全なものといえ、特にボザンケの国家論と形而上学との関係の解明に偏りすぎているため、彼の社会政策論やその思想の個人主義的側面にまったく触れられていない点が難点である。他方、オーストラリアの研究者であるマクブライアの研究は、ボザンケの政治思想ではなく社会政策論・現実政策観に焦点を当てた注目すべき研究であり、当時のイギリスの歴史的背景が考慮されながら、ウェッブ夫妻を代表とする種々の思想家とボザンケとの対決・論争が克明に再現され、有益な資料を提供している。ただし、そこで示されるボザンケの国家論の解釈は、ミドウクロフト (James Meadowcroft) が「誤解」と断じているようにやや短絡的・折衷的な感が否めず⁵⁸、またボザンケの権利論などへの言及がほとんどないために、ボザンケの政治思想の体系的研究とはいえない。そのような中、1999年に『バーナード・ボザンケ著作集』(The Collected Works of Bernard Bosanquet) ⁵⁹を編むなど、現在のボザンケ研究を世界レベルで牽引しているカナダの研究者、スイートの研究は、従来の研究の蓄積を踏まえつつ「ボザンケ＝国家主義者・全体主義者」という位置づけを全面的に否定した、まさに現在におけるボザンケ研究の第一線をゆくものである⁶⁰。ただし、ファネンスティルと同様、やはりボザンケの社会政策論や現実政策観をやや軽視している憾みがあり、また2000年に入ってからのもロウ (John Morrow) ⁶¹やモアフィールド (Jeannie Morefield) ⁶²などによるボザンケ研究の動向、すなわちボザンケの制度論、近隣論、「コミュニティ」論などへの配慮が欠落しているなどの側面が見受けられる。

むしろ、ボザンケの政治思想と社会政策論・現実政策観をバランスよく扱い、かつ両者を整合的に解釈した研究は、1980年代以降に登場した“イギリスの”「イギリス理想主義」の研究者アンドルー・ヴィンセント（Andrew Vincent）（カーディフ大学：イギリス）によって示されている。ヴィンセントは、1984年発表の『哲学、政治学、そして市民性』（*Philosophy, Politics and Citizenship*）⁶³やその後の研究で⁶⁴、ボザンケの政治思想をその形而上学、「市民性」（citizenship）、あるいは現実政策論の観点から追跡し、彼の政治思想に対して妥当な判断を下している。本論文での視点は、基本的にこのヴィンセントのものと同一であるが、しかし彼の研究はボザンケのみを綿密に扱ったものでない点でなお不十分である。また、このほかにも、ボザンケの現実政策観や政治思想を当時の時代思潮・背景などを含ませつつクリアなものにした、1996年発表のオッター（Sandra den Otter）（クイーンズ大学：カナダ）による研究『イギリス理想主義と社会説明－後期ヴィクトリア朝思想の研究－』（*British Idealism and Social Explanation: A Study in Late Victorian Thought*）や⁶⁵、「デモクラット」としてのボザンケ像を彫出したニコルソン（Peter P. Nicholson）（ヨーク大学：イギリス）の研究⁶⁶、またボザンケに国際的な平和組織を承認する余地があったことを証明したブーシェ（David Boucher）（カーディフ大学：イギリス）の研究や⁶⁷、思想的に対立していたとされているホブハウスとボザンケの、相違点よりもむしろ共通点を強調したミドウクロフト（シェフィールド大学：イギリス）の研究⁶⁸、さらに前述のように2000年以降の新たなボザンケ研究の切り口ともいえる彼の近隣論、「コミュニティ」論の検討を通じて、これまで以上に彼の政治思想を整合的に解明して見せた前出のモロウ（ヴィクトリア大学：ニュージーランド）⁶⁹、およびモアフィールド（ホイットマン大学：アメリカ）などの研究があり、いずれも示唆に富むものであるが、しかしそれらは皆、単発論文であったり、あるいはボザンケのみを扱ったものではない点が「珠に瑕」である。ただ、ここ20年のボザンケ研究の進捗に目を見張るものがあるのは確かである。

そしてこうしたボザンケ再発見の動きは、イギリスを代表する政治学会、すなわち「イギリス政治学会」（Political Studies Association of the UK: PSA）内に、現在、前出のボザンケ研究者、イギリス理想主義研究者が一堂に会してその政治思想や哲学などを組織的に研究する「イギリス理想主義研究者グループ」（British Idealism Specialist Group）が組織されていることから理解できる⁷⁰。たとえば、同グループは、2002年には、日本からも行安茂が報告を行った「T.H.グリーンと同時代の哲学」に関するシンポジウムや、「哲学的理想主義と政治哲学」についてのシンポジウムを開催しており⁷¹、また2003年にはボザンケに関する報告を含んだ⁷²「英米理想主義国際会議」をギリシャで行うことになっている⁷³。つまり、西欧では、ボザンケ没後80年を経て、彼をはじめとする「グリーン学派」研究の気運が高まってきているのである。

しかし、欧米のこうした動向と対照的なのが、日本におけるボザンケ研究の現状である。現在、日本では、ボザンケの政治思想は無論のこと、ボザンケ自身に対する関心が薄く、彼に関する研究はあまり多くは存在しない。また、日本におけるボザンケ研究史も厚みが

なく、その研究史も、彼の政治思想の分野からではなく、ボザンケのもうひとつの業績たる美学に関するものから始まっている。ただ、その研究も、鷺尾雨工や井上政次、鍋島能弘らがボザンケの美学に関する著書や論文を翻訳しただけのものであるため、厳密な意味での研究とはいいがたい⁷⁴。しかし、そうした中で、ボザンケの美学を研究し、それについていくつかのノートを後世に残した人物として、文豪夏目漱石が挙げられるのは興味深い事実である⁷⁵。

他方、ボザンケの政治思想に関するわが国の研究史は、ボザンケの『哲学的国家理論』の抄訳が『国家哲学』（1903年）の題名の下、浮田和民の手によって為されたことを出発点としている⁷⁶。しかし、これは翻訳という形での研究である。その後、戦後の行政学をリードした東京帝国大学の蠟山政道がボザンケ研究に着手しているが⁷⁷、これもボザンケ論に入る前に途中で終わっている。さらに、グリーン、ブラッドレーと並んでボザンケの哲学を簡明に紹介した大島正徳の研究書『近代英國哲学』（1926年）、並びに『哲学講座』『イギリス新理想主義哲学』（1931年）が公刊されるが、こちらもボザンケの政治思想の本格的な研究とは言えない⁷⁸。加えて、長谷川如是閑や岩崎卯一、今中次麿、堀豊彦なども⁷⁹、ボザンケに多少言及してはいるものの、いわゆる教科書的な解説の域を出ていない⁸⁰。

こうしたなかで、ボザンケの政治思想を正面から取り上げ、同時にボザンケを世に広く知らしめたのが、東京帝国大学の「戦闘的自由主義者」である河合栄治郎であった⁸¹。特に、河合の代表作である『トーマス・ヒル・グリーン の思想体系』（1930年）では、ボザンケの国家論が多く扱われ、そこではボザンケの政治思想が「国家主義」でありながらも「ヘーゲル主義」ではなく、それは自由主義的側面を多く持った「イギリスの国家主義」であるとされた⁸²。しかし、河合が剔出したボザンケ像は完全なものではなく、その研究もなお不十分なものであった。この点を、河合の弟子であった木村健康は、河合の『トーマス・ヒル・グリーン の思想体系』の中でのボザンケの扱いを「余りに簡単である憾みがないわけではない」として、以下のように指摘している。

「グリーン以後の思想家達、例えばF・H・ブラッドレー、エドワード・ケヤード、バーナド・ボウザンクウェット〔原典ママ〕などは『トーマス・ヒル・グリーン の思想体系』に扱われている程簡単には取り扱い得ない程の重要性を持っているし、これらを取り扱うには別の浩瀚な一書を必要としたであろう。」⁸³

このように、木村はグリーンと同様のボザンケに関する研究書が必要であることを訴えた。そして河合の研究の不備を補うべく、戦後、北岡勲の手によってボザンケ研究が再開された。前出の「オックスフォード学派」のリーチーについては、今なお日本で唯一であるといわれる北岡の研究では、ボザンケの著作が「共通善」の概念等を切り口にして全般にわたって分析され、ボザンケがグリーンの流れを汲む思想家であること、そして河合の指摘を継受してボザンケがヘーゲルとは一線を画す思想を展開していたことが指摘された⁸⁴。ただし、北岡の研究では、最近までの欧米でのボザンケ研究と同様、ボザンケの社会政策論などがほとんど触れられていない。その後、日下喜一がボザンケ論を発表し、河合が

指摘したようなボザンケの反ヘーゲルの側面がより明確にされると同時に、ボザンケとグリーンとの乖離点も指摘された⁸⁵。また、萬田悦生はグリーン研究の一環としてボザンケに言及し、ボザンケの「絶対者」や「實在」といった形而上学的概念をその政治思想に連結させながらボザンケの政治思想の一端を明らかにした⁸⁶。さらに、その後、歴史学を専門としてグリーンと並んでボザンケの研究にも着手した若松繁信は、日下の論文を受けつつ「市民性」を切り口にしてボザンケを分析した⁸⁷。加えて、最近では、大塚桂や石井健司がボザンケをラスキ及びホブハウスの観点から追求して、ボザンケのヘーゲル的側面を改めて強調し⁸⁸、また田村浩志は、ボザンケの「慈善」「近隣」概念の検討を通じて、彼の政治思想に内在する多元主義的要素を明らかにした⁸⁹。このように、より客観的なボザンケ研究は数としては決して多くはないが、しかし現在まで着実に進められてきた。だが、こうした論考はいわば「小出し」のものばかりで、河合を乗り越えようとして活発に行われてきたグリーン研究に比してボザンケ研究は遅滞の感が禁じ得ず、かつて木村が要請したボザンケの政治思想を正面から扱った体系的研究は今のところ皆無である。実際、近時、池村正法、重森臣広などもボザンケ研究に着手することを宣言あるいは示唆しているものの、いまなおその研究成果は明確な形では世に問われていない⁹⁰。

それゆえ、本論文の試みは、日本の西欧政治思想史研究における「ボザンケ」という空域を埋め、わが国の本格的なボザンケ研究の出発点を目指すものとして位置づけられ、かつ正当化されるものであろう。

4. 本論の構成

本論の構成は以下のようになっている。第1章では、わが国では無論のこと、欧米でも統合的には整理されていないボザンケの生涯を追跡し、彼の政治思想そのものをいわば根底で規定するものを明らかにする。ここでは、彼が実践する哲学者であったことに加え、彼の生涯そのものにも彼の政治思想の特徴が見出され、いわばボザンケが生涯を通じて「知行合一」を目指していた思想家であったことが明らかにされよう。第2章では、ボザンケの「一般意志」論を、彼の基本的な哲学的スタンスとともに明らかにする。ボザンケの「一般意志」論は、それが人間社会に実在するものであることを証明しながら、なおかつそれが「法」や「国家」に具体化され、「国家」は人間の意志に基礎づけられる、ということを論ずるものである。その意味で、ここではいわば彼の国家論の前提的・土台的議論が明らかにされるであろう。第3章では、すでに示された「一般意志」や「国家」に関する見解を武器にして、ボザンケがホブズやロック (John Locke: 1632-1704) の原子論的個人主義、またベンサム (Jeremy Bentham: 1748-1832)、J・S・ミル、そしてスペンサーの功利主義的・進化論的政治思想を果敢に批判した様子を明らかにする。イギリスの政治思想史において、ボザンケが異端視される理由がここで示されている。第4章では、ボザンケの国家論を正面から取り上げ、彼の「社会」観、国家干渉の原理を明らかにする。ボザンケが「一般意志」に基礎づけられた「国家」を称揚しつつも、その活動に関しては多くの制限を付し、

いかに彼が個人の道徳意志や内面的意志作用を重視していたか、かついかに「国家」と「社会」とを実質的に区分していたかがここで示され、従来の「国家主義」との評価が妥当でないことが示されるであろう。第 5 章では、ボザンケの権利論、そして刑罰論を明らかにする。ボザンケが「国家」をいかに「個人」および「社会」の動向によって左右されるものとしていたかがここで示され、改めて彼の政治思想が「国家主義」のそれではないことが示されるであろう。第 6 章では、すでに示されたボザンケによる「国家」と「社会」との区分をより明確なものにするために、彼の制度論を検討する。ここでは、2000 年以降のボザンケ研究の動向に従いながら、ボザンケが「社会」の自生的な「制度」をいかに重視していたか、また現代風に言えば「コミュニティ」における人間相互のつながりをいかに尊重していたかが示されている。第 7 章では、ボザンケの社会政策論の検討を通じて、彼の国家干渉の原理のいわば応用的議論を明らかにする。そこでは、個人各人の内面的な意志の領域には踏み込みえない彼の「国家」の現実像が明らかになるとともに、ボザンケが積極的に承認していた社会政策＝国家活動の内実も同時に示され、彼が決して「レッセ・フェール」主義の思想を唱えていたのではないことが明示されるであろう。第 8 章では、以上の議論の総括として、ボザンケと、当時勢力を増進しつつあった「フェビアン協会」との関係を追跡する。そこでは、ボザンケの社会主義観が明らかにされるとともに、すでに示されている彼の社会政策論が、当時のイギリス政府下の政策論議にさらに応用された場合にどのような現実的内容をもつのかが明らかにされ、当時のイギリスにおける理想主義と社会主義との知的錯綜の一端が垣間見られることになる。そして第 9 章では、ボザンケの国際関係論を明らかにする。ここでは、ボザンケが「国家」を尊重しつつも、同時に「国家」を超越する政治組織、すなわち当時では「国際連盟」などを承認する用意が彼にはあったことが明らかにされ、ボザンケに対する「対外的」な意味での「国家主義」との判断が誤りであることが示されるであろう。

ところで、従来、多くの研究者がボザンケをはじめとする理想主義の政治思想に関心を示すのは、シモニーの指摘のように、一般に、イギリス理想主義が「集団主義」(collectivism)の政治を背後で支える主要な力であったという信念⁹¹、すなわちダイシー (A. V. Dicey: 1835-1922) による「個人主義」(individualism) から「集団主義」への旋回点という位置づけによるところが大きい⁹²。事実、その後メルヴィン・リヒター (Melvin Richter) は、それまでの「集団主義」的グリーン像よりも「個人主義」的グリーン像を剔出することでダイシーの位置づけを修正し、イギリス理想主義の政治思想の研究を深化させている⁹³。このように、ダイシーの「個人主義」か「集団主義」かという枠組みの中でイギリス理想主義の政治思想を位置づける論争は確かに有益であった。しかしながら、ボザンケらのイギリス理想主義の政治思想は、前述のように当時の時代の要請に「結果として」応え得るものではあったものの、しかしこのような「ダイシー・シェーマ」で示された「個人主義」から「集団主義」への旋回点たることを「目的として」唱えられた思想ではなく、ましてやそのような現実の政治運動を推進するために唱えられたものでもない。ジョーンズの指摘の

ように、イギリス理想主義の政治思想は、種々の政治運動のための「道具」ではなく、それ自体政治的な論争が繰り広げられる「アリーナ」であったのである⁹⁴。それゆえ、本論文では、ボザンケの政治思想を「ダイシー・シェーマ」との関連で捉え直すという作業は、そのための材料は供されはするものの、直接に扱わないことをあらかじめ述べておく。

また、以下の考察においては、ボザンケの政治思想には生涯を通じて決定的な転向や変化は見られないがゆえに、彼の文献を時系列的に追跡するのではなく、彼の多くの著作や論文をいわば横断的に見る形で検討が進められている。確かに、ファネンステイルの指摘のように、例えばボザンケの『論理学』などについては、「絶対者」(Absolute)の認識が初版と比べより楽観的な側面があったり⁹⁵、またウアンの指摘のように、宗教思想に関しては初期と後期とに相違があるともいえる⁹⁶。しかしながら、少なくとも彼の政治思想に関しては、注目すべき変化はほとんど見当たらず、彼の主著である『哲学的国家理論』も1899年に発刊されて以来、彼の生前に4回の版を重ねたものの、それぞれに序文が付されたに留まり、本論の変更は全く為されてはいない。事実、前述の欧米でのボザンケ研究のほとんどは、多少の但し書きはあるものの、彼の初期から後期にいたる文献すべてを横断的に扱って為されている。したがって、本論文も、こうした立場からボザンケの文献を読み解き、彼の政治思想を、彼の生涯を通じて保持されたその思想的「水脈」を剔出する観点から考察を進めることにしたい。

最後に、筆者の研究は、多くの欧米におけるボザンケ研究、特にスイート、ヴィンセント、ニコルソン、モロウ、ブーシェ、オッター、ミドウクロフトの研究、並びに国内の数少ない研究すべてに多くを負っていることを特記し、謝意に代えたい。

はじめに 註

¹ Harald Höffding, *Einleitung in die Englische Philosophie unserer Zeit* (Leipzig: Theodor Thomas, 1889), S.7. ちなみに、ヘフディングの政治思想に関しては、尾崎和彦『北欧思想の水脈』(世界書院, 1994年) 63-132頁参照。

² W. R. Sorley, *A History of English Philosophy* (Cambridge: University Press, 1920), p. 301.

³ 実際、ミルは直覚主義への対決を意図していた。Alan Ryan, "John Stuart Mill", in David Miller (ed.), *The Blackwell Encyclopaedia of Political Thought* (Oxford: Blackwell Reference, 1987), p.340. 例えば、ミルは『自伝』(*Autobiography*)の中で、1843年に出版した『論理学体系』(*A System of Logic*)及びそれが出版された1840年代当時の様子に言及しつつ、直覚主義的な議論を次のように述べている。「人間の認識および認識能力については、まだ当分はドイツ的あるいは先験的な考え方が、この国においても大陸においても、そのような探究に従事する人たちの間で支配的であるだろう……。けれども私の『論理学体系』は、あらゆる認識は経験から出発し、あらゆる道徳的知的諸性質は、主として観念連合に与えられる方向から発するとする、ドイツ派[直覚主義]とは正反対の考え方の教科書を提供する。」J. S. Mill, *Autobiography*, Vol. I of *Collected Works of John Stuart Mill*, ed. by John Robson et al. (Toronto: University of Toronto Press, 1981), p.233, J・S・ミル、朱牟田夏雄訳『ミル自伝』(岩波書店, 1960年) 196頁。

- ⁴ Sandra. den Otter, *British Idealism and Social Explanation: A Study in Late Victorian Thought* (Oxford: Clarendon Press, 1996), p.55.
- ⁵ グリーンの経験論批判については、北岡勲『イギリス政治哲学の生成と展開』（御茶の水書房、1987年）252-259頁、及び行安茂「T・H・グリーンの生涯とその思想」、行安茂、藤原保信責任編集『T・H・グリーン研究』（御茶の水書房、1982年）3-26頁参照。
- ⁶ G. P. Gooch, "Introductory: The Victorian Age, 1837-1901", in F. J. C. Hearnshaw (ed.), *The Social and Political Ideas of Some Representative Thinkers of the Victorian Age* (London, Bombay and Sydney: George G. Harpar, 1930), p.26.
- ⁷ Sorley, *op.cit.*, 1920, p.288.
- ⁸ Rudolf Metz, *Die Philosophischen Strömungen in Grossbritannien* (Leipzig: Felix Meiner, 1935), pp.227-229. 行安茂「イギリス理想主義運動とグリーン学派」（岡山大学教育学部『研究報告』第44号、1976年）35頁。
- ⁹ 村岡健次・川北稔編著『イギリス近代史—宗教改革から現代まで—』（ミネルヴァ書房、1986年）189-198頁参照。
- ¹⁰ 山下重一「イギリス理想主義哲学」、飯坂良明・小松春雄・山下重一・関嘉彦『イギリス政治思想史』（木鐸社、1974年）269-271頁。
- ¹¹ 行安茂、前掲論文、1976年、35-36頁。
- ¹² A. D. Lindsay, "T. H. Green and the Idealists", in F. J. C. Hearnshaw (ed.), *op.cit.*, 1930, p.151.
- ¹³ Otter, *op.cit.*, 1996, p.149.
- ¹⁴ 藤原保信『増補版・政治哲学の復権』（新評論、1988年）72頁。
- ¹⁵ Lindsay, *op.cit.*, 1930, pp.151-152.
- ¹⁶ アダム・B・ウラム、谷田部文吉訳『イギリス社会主義の哲学的基礎』（未来社、1968年）71頁。
- ¹⁷ 日下喜一『現代政治思想史』（勁草書房、1967年）15-18頁。
- ¹⁸ E. H. H. Green, *Ideologies of Conservatism* (Oxford: Oxford University Press, 2002), p.42.
- ¹⁹ なお、本稿で採り上げる「オックスフォード学派」は、かつて市井三郎が提示した「オックスフォード学派」と全くの別ものであり、後者は論理実証主義の「止揚」を目論みつつ、形式論理学と相関的な関係に立つ「非形式論理学」(informal logic)を積極的に展開し、弁証法論理学の部分的明晰化を行った「戦後」の「オックスフォード学派」のことであるので、混同を避けなくてはならない。「戦後」の「オックスフォード学派」については、市井三郎「オックスフォード学派の非形式論理学」（『思想』、岩波書店、第387号、1956年）29-41頁参照。
- ²⁰ ただし、イギリス理想主義はオックスフォードを支配したことはなかったというコリングウッドの証言もある。R・G・コリングウッド、玉井治訳『思索への旅—自伝』（未来社、1981年）25頁。
- ²¹ ブラッドレーは、ボザンケと共に後期オックスフォード学派を代表する人物である。ブラッドレーの哲学については、奥村家造「F・H・ブラッドレイとその周辺」（『立命館文学』第111号、1954年）490-503頁参照。またオックスフォード学派の前期と後期についての詳細については、北岡勲、前掲書、1987年、65-108頁参照。
- ²² Stefan Collini, "Hobhouse, Bosanquet and the State: Philosophical Idealism and Political Argument in England 1880-1918", *Past and Present*, No.72, 1976, p.110.
- ²³ Helen Bosanquet, *Bernard Bosanquet: A Short Account of his Life* (London: Macmillan, 1924), p.28.
- ²⁴ Collini, *op.cit.*, 1976, p.107. また、河合栄治郎はボザンケを後期オックスフォード学派の代表者としての位置づけている。河合栄治郎『在欧通信』、『河合栄治郎全集』第17巻（社会思想社、1968年）258頁。
- ²⁵ Robert Pearson and Geraint Williams, *Political Thought and Public Policy in the Nineteenth Century* (London and New York: Longman, 1984), p. 153.
- ²⁶ Joseph A. Leighton, "An Estimate of Bosanquet's Philosophy", *Philosophical Review*, Vol.32,

No.6, 1923, p.626.

²⁷ François Houang, *Le Néo-Hégélianisme en Angleterre: La Philosophie de Bernard Bosanquet 1848-1923* (Paris: Librairie Philosophique J. Vrin, 1954), p.7.

²⁸ J. H. Randall, "Idealistic Social Philosophy and Bernard Bosanquet", *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol.26, 1966, p.488.

²⁹ H. S. Jones, *Victorian Political Thought* (London: Macmillan, 2000), p.92.

³⁰ *The Times*, Saturday, February 10, 1923.

³¹ A. M. Quinton, "Absolute Idealism", *Proceedings of the British Academy*, Vol.57, 1971, pp.303-305.

³² Leslie Paul, *The English Philosophers* (London: Faber and Faber, 1953), p.267.

³³ Harold J. Laski, *Authority in Modern State* (New Heaven: Yale University Press, 1919), p.66n.

³⁴ Sidney Ball, "Review of B. Bosanquet, *Philosophical Theory of the State*", *Mind*, n.s., Vol.10, 1901, p.155.

³⁵ Lindsay, *op.cit.*, 1930, p.151.

³⁶ Thomas W. Smith, "Michael Oakeshott on History, Practice and Political Theory", *History of Political Thought*, Vol.17, No.4, 1996, p.593.

³⁷ David Boucher, "The Creation of the Past: British Idealism and Michael Oakeshott's Philosophy of History", *History and Theory*, Vol.23, No.2, 1984, p.193.

³⁸ Michael Oakeshott, "Review of Bertil Pfannensteil, *Bernard Bosanquet's Philosophy of the State: A Historical and Systematical Study*", *Philosophy*, Vol.11, 1936, p.482.

³⁹ 河合栄治郎「読書漫筆」、『河合栄治郎全集』第20巻（社会思想社、1969年）49頁。

⁴⁰ Peter P. Nicholson, *The Political Philosophy of the British Idealists* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990), p.198.

⁴¹ 藤原保信「英米のヘーゲル研究」、加藤尚武・久保陽一他編『ヘーゲル事典』（弘文堂、1992年）38頁。

⁴² L. T. Hobhouse, *Democracy and Reaction* (London: T. Fisher Unwin, 1904), p.77, pp.80-83, L. T. Hobhouse, *The Metaphysical Theory of the State* (London: George Allen & Unwin, 1918).

⁴³ Houang, *op.cit.*, 1954, p.7.

⁴⁴ Peter Robins, *The British Hegelians 1875-1925* (New York and London: Garland Publishing, 1982).

⁴⁵ Stefan Collini, "Sociology and Idealism in Britain 1880-1920", *Archives Européennes de Sociologie*, Vol.19, No.1, 1978, p.27n27.

⁴⁶ Richard Bellamy, "Bernard Bosanquet", in David Miller, Janet Coleman, William Connolly, Alan Ryan (eds.), *The Blackwell Encyclopaedia of Political Thought* (Oxford and New York: Basil Blackwell, 1987, reprint, 1993), p.47.

⁴⁷ Collini, *op.cit.*, 1976, p.88, Avital Simhony, "Idealist Organicism: Beyond Holism and Individualism", *History of Political Thought*, Vol.12, No.3, 1991, p. 517.

⁴⁸ R. F. A. Hoernlé, "Bernard Bosanquet's Philosophy of the State", *Political Science Quarterly*, Vol.34, 1919, pp.609-631.

⁴⁹ ウラム、前掲書、1968年。

⁵⁰ 筆者は、日本のイギリス理想主義研究の第一人者である行安茂氏による、「1998年度河合栄治郎研究会秋季研究発表会」（1998年11月1日、於国立教育会館）での「最近の欧米のトーマス・ヒル・グリーン研究の現状と課題」と題する報告でこの点を確認している。

⁵¹ A. J. M. Milne, *The Social Philosophy of English Idealism* (London: George Allen & Unwin, 1962).

⁵² François Houang, *Le Néo-Hégélianisme en Angleterre: La Philosophie de Bernard Bosanquet 1848-1923* (Paris: Librairie Philosophique J. Vrin, 1954), François Houang, *De L'Humanisme à L'Absolutisme: L'Évolution de la Pensée Religieuse du Neo-Hégélien Anglais Bernard Bosanquet* (Paris: Librairie Philosophique J. Vrin, 1954).

⁵³ Frederick Phillip Harris, *The Neo-Idealist Political Theory: Its Continuity with the British Tradition* (New York: King's Crown Press, 1944).

⁵⁴ Geoffrey Thomas, "Philosophy and Ideology in Bernard Bosanquet's Political Theory", in W. J.

Mander (ed.), *Anglo-American Idealism, 1865-1927* (London: Greenwood Press, 2000), p.106.

⁵⁵ Bertil Pfannenstill, *Bernard Bosanquet's Philosophy of the State: A historical and Systematical Study* (Lund: Håkan Ohlsson, 1936).

⁵⁶ A. M. McBriar, *An Edwardian Mixed Doubles: the Bosanquets versus the Webbs-A Study in British Social Policy 1890-1929* (Oxford: Clarendon Press, 1987).

⁵⁷ William Sweet, *Idealism and Rights: The Social Ontology of Human Rights in the Political Thought of Bernard Bosanquet* (Lanham, New York and London: University Press of America, 1997).

⁵⁸ James Meadowcroft, *Conceptualizing the State: Innovation and Dispute in British Political Thought 1880-1914* (Oxford: Clarendon Press, 1995).

⁵⁹ William Sweet (ed.), *The Collected Works of Bernard Bosanquet* (Bristol: Thoemmes Press, 1999).

⁶⁰ また、スイートは、ボザンケに関するホームページを立ち上げている。アドレスは以下の通りである。http://iago.stfx.ca/people/wsweet/Bernard_Bosanquet.html (2003年1月12日現在)

⁶¹ John Morrow, "Community, Class and Bosanquet's 'New State'", *History of Political Thought*, Vol.21, No.3, 2000, pp.485-499.

⁶² Jeannie Morefield, "Hegelian Organicism, British New Liberalism and the Return of the Family State", *History of Political Thought*, Vol.23, No.1, 2002, pp.141-170.

⁶³ Andrew Vincent and Raymond Plant, *Philosophy, Politics and Citizenship* (Oxford: Basil Blackwell, 1984).

⁶⁴ Andrew Vincent, "The Poor Law Reports of 1909 and the Social Theory of the Charity Organization Society", *Victorian Studies*, Vol.27, No.3, 1984, pp.343-363, Andrew Vincent, "Citizenship, Poverty and the Real Will", *The Sociological Review*, Vol.40, No.4, 1992, pp.702-725.

⁶⁵ Otter, *op.cit.*, 1996.

⁶⁶ Nicholson, *op.cit.*, 1990.

⁶⁷ David Boucher, "British Idealism, the State, and International Relations", *Journal of the History of Ideas*, Vol.55, No.4, 1994, pp.671-694, David Boucher (ed.), *Cambridge Texts in the History of Political Thought: The British Idealists* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), David Boucher and Andrew Vincent, *British Idealism and Political Theory* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2000).

⁶⁸ Meadowcroft, *op.cit.*, 1995.

⁶⁹ Morrow, *op.cit.*, 2000, pp.485-499. なお、モロウのほかの研究としては、John Morrow, "British Idealism, 'German Philosophy' and the First World War", *The Australian Journal of Politics and History*, Vol.28, No.3, 1982, pp.380-390, John Morrow, "Liberalism and British Idealist Political Philosophy: A Reassessment", *History of Political Thought*, Vol.5, No.1, 1984, pp.91-108. なお、モロウは、かつてと異なり、現在ではボザンケに対して好意的な評価を与えている。

⁷⁰ PSA 内部の「イギリス理想主義研究者グループ」は独自のホームページを作っている。アドレスは以下のようになっている。<http://www.psa.ac.uk/spgrp/idealism/idealism.htm> (2003年1月12日現在)。

⁷¹ Conference on T H Green and Contemporary Philosophy, Harris Manchester College, Oxford, September 2-4, 2002, Conference on Philosophical Idealism and Political Philosophy, Aberystwyth, Wales, 22 - 27 July, 2002. なお、前者の会合では、岡山大学名誉教授行安茂氏も報告を行っている。Shigeru Yukiyasu (Okayama), "The Development of the Idea of Self-Realisation in Japan and T. H. Green".

⁷² 詳しくは、前掲の PSA 内の「イギリス理想主義研究者グループ」のホームページを参照。

⁷³ International Conference on Anglo-American Idealism, Olympia, Greece, August 20-25, 2003.

⁷⁴ ボザンケ、鷺尾雨工譯『羅馬美學』(『世界大思想全集』101、春秋社、1936年)、バアニアド・ボザンケ、井上政次・鍋島能弘共譯『美學通史』(雄山閣、1944年)。なお、美学ではないが論理学に関しても翻訳書が出版されている。ボーサンケット、佐藤賢順譯『論理

學の本質』(泰文社、1927年)。さらに、ボザンケの夫人であるヘレン・ボザンケの著作も、大隈重信を会長とする「大日本文明協会」から戦前に出版されている。ヘレン・ボザンケ一、田中達訳『家族論』(大日本文明協会、1909年)。なお、この本は、近時刊行された、水田珠枝監修『世界女性学基礎文献集成【明治大正編】』(ゆまに書房、2001年)の第7巻に収録されている。

⁷⁵ 夏目漱石は、第一高等学校専任講師および東京帝国大学兼任講師就任(1903年)、また明治大学兼任講師就任(1904年)の直前の1900年から1902年にかけてイギリス留学を果たしているが、そのさい漱石はボザンケに直接会うことはなかったものの、彼の『美学通史』に目を通し、いくつかのノートを残している。実際、漱石の1901年10月16日付の日記には「Bosanquetヲ読始ム」と記されており、また漱石が所有するボザンケの『美学通史』には漱石による書き込みが為されている。日記に関しては、夏目漱石「日記・断片・上」、『漱石全集』第19巻(岩波書店、1995年)102頁、また『美学通史』への漱石による書き込みに関しては、夏目漱石「別冊・下」、『漱石全集』第27巻(岩波書店、1997年)45-47頁。なお、夏目漱石が留学中にボザンケの美学に関してつけたノートは、現在、東北大学附属図書館の「漱石文庫」に保存されており、パソコン上でも「夏目漱石」自筆資料画像データベース」でみるができる。が、2003年に入ってからサーバが移行中であるため、しばらくは直接現地で見るとは方法はないが、いずれは以前のようにパソコン上で公開されるはずである。

⁷⁶ 浮田和民『ボザンケ氏国家哲学』(東京専門学校出版部蔵版、1903年)。

⁷⁷ 蜷山政道「英国理想哲学の発達(上)」(『国家学会雑誌』第35巻第2号、1921年)107-141頁。

⁷⁸ 大島正徳『近代英国哲学』(三共出版社、1926年)、『哲学講座』第13巻(誠文堂、1931年)。

⁷⁹ 長谷川如是閑『現代国家批判』(弘文堂書房、1912年)461頁、478頁、岩崎卯一『社会学の人と文献』(刀江書院、1926年)398頁、今中次麿『政治学説史』(日本評論社、1931年)94-95頁、堀豊彦「国家目的論の考察」(臺北帝國大學文政學部『政學科学研究年報』第3輯第1部法律政治篇、1936年)64-66頁。

⁸⁰ 長谷川如是閑、今中次麿、堀豊彦、および蜷山政道の政治学に関しては、大塚桂『近代日本の政治学者群像』(勁草書房、2001年)参照。

⁸¹ 河合栄治郎の多くの著作については、『河合栄治郎全集』(社会思想社、1967-1970年)を参照。

⁸² 河合栄治郎によるボザンケ研究に関しては、拙稿「河合栄治郎とB・ボザンケ」、河合栄治郎研究会編『教養の思想—その再評価から新たなアプローチへ—』(社会思想社、2002年)209-234頁参照。

⁸³ 河合栄治郎『トーマス・ヒル・グリーン思想体系』、『河合栄治郎全集』第2巻(社会思想社、1968年)428-429頁。ちなみに、木村健康はここでBosanquetの呼び方にも言及しており、彼の家系がフランスのユグノー系であることから“ボザンケ”ではなく“ボザンケー”が妥当ではないかと指摘している。

⁸⁴ 北岡、前掲書、1987年。なお、本書は、1954年に柏林書房から出版されたものの重版である。また、北岡勲『政治的理想主義—イギリス政治思想の一研究—』(御茶の水書房、1986年)。さらに、北岡氏はこのほかにも、ボザンケのみを総括的に取り上げた論文も発表している。北岡勲「ボースンキット研究(1)」(『法と政治—関西学院大学法政学会—』第9巻第2号、1958年)15-54頁、「ボースンキット研究(2)」(『法と政治—関西学院大学法政学会—』第9巻第3号、1958年)59-100頁。

⁸⁵ 日下喜一「B・ボザンケの国家理論」(『拓殖大学論集』第32・33号合併号、1963年)495-504頁。

- ⁸⁶ 萬田悦生「イギリス理想主義における政治価値の問題」(慶應義塾大学法学部『法学研究』第43巻第10号、1970年)358-378頁、萬田悦生『近代イギリス政治思想研究—T・H・グリーンを中心にして—』(慶應通信、1986年)83-87頁。
- ⁸⁷ 若松繁信「バーナード・ボウズンキットの市民論」(『北九州大学外国語学部紀要』第48号、1983年)257-288頁。
- ⁸⁸ 大塚桂『ラスキとホブハウス』(勁草書房、1997年)第4章。石井健司「ホブハウスによる「ヘーゲル＝ボザンケ的国家論」批判」(近畿大学法学会『近畿大学法学』第49巻、2002年)315-369頁。
- ⁸⁹ 田村浩志『集いと語りのデモクラシー—リンゼイとダールの多元主義論—』(勁草書房、2002年)第4章補論。
- ⁹⁰ 池村正法氏(大東文化大学大学院生)は、かつて「第20回日本イギリス哲学会」(1996年3月31日、於岡山大学)にて「B・ボウズンキットの政治思想—自由論を中心として—」と題する報告を行ったが、翌1997年刊の同学会の機関紙『イギリス哲学研究』(第20号、1997年)には、それに関する論文どころか報告要旨すらも掲載されておらず、氏の報告があったことのみが記されている(120頁)。なお、それから7年近く経過したものの、氏のボザンケ研究の成果は一本も発表されてはいない。また、重森臣広氏(立命館大学教授)は、1998年の段階でボザンケ研究を宣言して英国留学を果たしているが、管見の限りではその研究成果も未発表である。
- ⁹¹ Avital Simhoni, "British Idealism: Its Political and Social Thought", *The Bulletin of the Hegel Society of Great Britain*, No.3, 1981, p.17.
- ⁹² A・V・ダイシー、清水金二郎訳『法律と世論』(法律文化社、1972年)参照。
- ⁹³ Melvin Richter, *The Politics of Conscience: T. H. Green and His Age* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1964, reprint, Lanham, New York and London: University Press of America, 1983).なおリヒターの見解についての日本語での紹介・研究は、若松繁信『ブルジョア人民国家論の成立』(亜紀書房、1969年)第二部参照。
- ⁹⁴ Jones, *op.cit.*, 2000, p.93.
- ⁹⁵ Pfannenstill, *op.cit.*, 1936, p.146, 164, 182.
- ⁹⁶ François Houang, *De L'Humanisme a L'Absolutisme: L'Évolution de la Pensée Religieuse du Neo-Hegélien Anglais Bernard Bosanquet* (Paris: Librairie Philosophique J.Vrin, 1954).

第1章 ボザンケの生涯

1. 生誕〜オックスフォード時代 (1848〜1881 年) ¹

ボザンケの家系は、彼のそのボザンケという氏名からも理解されるように、もともとは1685 年の「ナントの勅令」の廃止を契機にイギリスに移住したフランスのユグノー系であり、時が経つにつれてイングランドとスコットランドの血とが混ぜ合わさった家系である²。1848 年 6 月 14 日、ボザンケは、今なお彼の家系がその地域に居住するイギリス北東部のノーサンバーランド州 (Northumberland) のアルンウィック (Alnwick) にある小村ロック (Rock) で生を受けた。ロックはボザンケ家が古くから開拓してきた地で、約 2000 エーカーの広さを持ち³、ボザンケはそこの「ロック・ホール」(Rock Hall) と呼ばれるボザンケ一族の持ち家で、5 人兄弟の末子として生まれた。ボザンケの父親は R・W・ボザンケ師 (the Rev. R. W. Bosanquet) であり⁴、兄弟には、長男として、バーナードとは異母兄弟であり後にボザンケ自身も活躍する「慈善組織協会」(the Charity Organisation Society) の創設者チャールズ・B・P・ボザンケ (Charles B. P. Bosanquet) がいた。次男には、数学者であり物理学者であり、また後に王立協会フェロウ、リンカーンズイン法学院 (Lincoln's Inn) の法廷弁護士 (barrister) を務め、さらに音楽家、オルガン製造者でもあったロバート・ホルフォード・ボザンケ (Robert Holford Bosanquet) が、三男には、後に海軍総督、および南オーストラリア総督 (1907.2-1914.3) を務めたデイ・ボザンケ (Day Bosanquet) が、そして四男には、イギリス第 85 連隊 (the 85th Regiment) に所属していたものの過労のために早逝したジョージ・ボザンケ (George Bosanquet) がいた⁵。

五人兄弟の末っ子として生を受けたバーナード・ボザンケは、生を受けて間もない 1848 年 8 月 6 日に洗礼を受け、数多くの雇い人を所有して構える「ロック・ホール」で幼少期を過ごした。そこでボザンケは多くの雇われ人と接することを通じて、彼らに対する階級的差別感ではなく、人間の尊厳や人間の間の連帯感を体得するに至った。後に、ボザンケは、妻であるヘレン・ボザンケ (Helen Bosanquet: 1860-1925) に対して、「私はいつも、人が田舎の労働者を‘かっぺ’ (Hodge) と揶揄しかつそのように描写するやり方というものに、底知れぬ腹立ちを禁じ得なかった」⁶と述懐している。

1856 年、ボザンケ 8 歳のとき、母親が病弱なこと、また兄弟が不在なことから、彼はヨーク州のシャーバーン (Sherburn) の全寮制の進学準備校 (preparatory school) に進学し、その後 1860 年にはエルストリー校 (Elstree) へ、さらに 1862 年にはロンドン近郊に位置する 1571 年創立のパブリック・スクール、ハロー校 (Harrow) へと進学した。その頃のボザンケは「全く内気な少年」であったといわれ、学校の授業には内心退屈し、また先輩の横暴ぶりにはうんざりしていたといわれている⁷。

その後、1867 年に、ボザンケは中世以来の伝統をもつオックスフォード・ベイリオル・コレッジ (Balliol College) に進学することになった。そもそもボザンケは、両親の意向に沿って、教会職に就くことを希望していたが、しかしオックスフォードでの二人の教師、すなわち T・H・グリーンと、グリーンの子に当たる実践的哲学者 B・ジョウエット

(Benjamin Jowett: 1817-1893) 学長との出会いによって学者への進路変更を決意し、大学では古典哲学を中心に勉学を進めた⁸。他方、ボザンケは大学で多くの新しい友人ともめぐり合い、とりわけ後に「慈善組織協会」の第二代事務局長ともなる終生の友人、チャールズ・S・ロック (Charles S. Loch) との出会い、彼にとって決定的な意味をもつことになった。

やがて、1870年、22歳であったボザンケは、B.A (Bachelor of Arts) 学位取得のための公式第一次試験 (Moderations: Mods.) および本試験 (Greats) において最優秀成績を収め、また人文学 (Lit. Hum. : literae humaniores) の学位を取得した。そしてこうした好成績が重視されて、ボザンケは人文学学位取得と同時に、F・H・ブラッドレーら他の強豪を差し置いて、オックスフォード・ユニバーシティー・コレッジ (University College) のフェロウ (Fellow) に選定された⁹ (また翌年の1871年からは個人指導チューターも兼任した)。そしてそこで、ボザンケはギリシャ哲学や古代史、また論理学の歴史やロックからカントに至るまでの道徳哲学の歴史などを教示した。当時、ボザンケの授業は、その頃のユニバーシティー・コレッジが勉学よりも運動重視の傾向があったためにあまり人気はなかったが、しかし彼の厳格さや良き寡黙さはその受講生を魅了するものであった¹⁰。また、研究面では、この間にボザンケは、シェマン (G. F. Schömann) の『アテネの立憲制史』(Constitutional History of Athens) の翻訳を行い、彼にとって初の出版物を世に送っている (1878年)。

しかし、ボザンケは、翻訳書を刊行した頃から、拡大の一途を辿る自己の知的関心によってオックスフォードでの狭い大学生活が一つの障害であることに気がつきはじめていた。加えて、オックスフォードには若干の人物を除いて彼と気の合う人間がおらず、また大学での雑務も、独立した執筆時間を確保したい彼にとっては大きな妨げであった。こうした理由から、やがてボザンケは、遺産相続で金銭的余裕ができたのを契機に、オックスフォードのフェロウを辞してロンドンへと向かうことを決意するのであった¹¹。

2. ロンドン時代 (1881~1897年) - 実践活動の開始 -

1881年、33歳のボザンケはオックスフォードのフェロウを辞してロンドンに移住した。ロンドンでは、いわばボザンケのロンドン時代の前期に相当する1889年までの8年間はエバリー・ストリート (Ebury Street) 131で、そして後期に相当する1897年までの8年間はチェルシーのチェイン・ガーデンズ7 (Cheyne Gardens) で生活を送った。生活自体は遺産とオックスフォードでの仕事の貯金のおかげで、それほど貧しいものではなかった。実際、ボザンケは、私生活では、時折、国立美術館 (National Gallery)、大英博物館 (British Museum)、またセント・ジェームズ・ホール (St. James' Hall) でのコンサートに出向いており、またロンドン、およびその近傍に出て来ていたボザンケの甥や姪、従兄弟らとも教育など様々な面で交流を深めていた。

ところで、ロンドンにおいて最初にボザンケが着手した研究は、論理学に関するものであった¹²。この頃、ボザンケは、1882年に死去した恩師グリーンの遺り残した仕事であった、ドイツの哲学者であり医学者であったロッツェ (Hermann Lotze: 1817-1881) の『哲学』(Logik)

『形而上学』(*Metaphysik*) の翻訳・編集を代行する傍らで(1884年)、論文「知識の学問としての論理学」(*Logic as the Science of Knowledge*)を『哲学批評論集』(*Essays in Philosophical Criticism*)に発表し(1883年)、また1885年には彼の論理学研究の延長線上に位置づけられる処女作『知識と実在性』(*Knowledge and Reality*)¹³を37歳で出版した。そしてボザンケのこうした論理学に関する関心は、やがて1888年刊行の二巻本の大著、『論理学：知識の形態論』(*Logic or the Morphology of Knowledge*, 1888; *Second Edition*, 1911)へと結実した。当時、ボザンケによるこうした研究がイギリスの論理学界に果たした貢献は大きく、実際、当時カルカッタ大学の哲学教授であったホールダー(Hiralal Haldar)は、ボザンケを「論理学者として彼に匹敵する者はほとんどいない」と評している¹⁴。

他方、ボザンケは、ロンドンに移ってから実践活動にも従事し始めた。そのひとつが、ボザンケの最も上の兄や親友ロックも関与していた「慈善組織協会」への参加を通じての慈善活動であった。

①「慈善組織協会」

「慈善組織協会」¹⁵とは、先述のようにボザンケの異母兄弟チャールズ・B・P・ボザンケによって創設されたボザンケ一族の「家族事業体」的な団体であり、現在も「家族福祉協会」(*The Family Welfare Association*: 1946～)という名前に変わって存続している慈善団体である¹⁶。現在、この協会にはイギリスにおけるソーシャル・ケースワークの先駆者としての役割を担った点¹⁷、また「慈善」という領域に科学的な調査のメスを入れたという点で高い評価が与えられているが¹⁸、当時は、その頃のロンドンでの犯罪者、乱暴者、乞食、そして慢性の「ポーパリズム」(*pauperism*)の増大という異常事態に対処すべく、次のことを目的として設立された団体であった¹⁹。第一に、当時一種の「カオス」となっていたロンドンの慈善に秩序と体系をもたらし、その慈善の「重複」(*overlapping*)を避けること²⁰、そして第二に、困窮した人の状況を審査の上、援助を与えて自立させることである。

ボザンケも、ロンドンに到着した早々からこの協会に参加し、まずチェルシー(Chelsea)とショードイッチ(Shoreditch)の「地区委員会」(*District Committee*)に合流した。その後、ボザンケは、1886～1887年の間は「執行委員会」(*the Administrative Committee*)の委員長に、また1897年からは「評議会」特別評議員(終身)になり、さらに1901～1915年には「評議会」副議長に就任した。加えて、彼は1902～1912年までは後述の「慈善組織協会」の系列学校「社会学・社会経済学学校」(*School of Sociology and Social Economics*)理事長に就任し、そして1916～1917年の間は当協会の「評議会」の議長にまで上り詰め、生涯の閉じる1923年までその協会とともに人生を送った²¹。実際、ボザンケは、一般に「C・S・ロック、ヘレン・ボザンケらとともに慈善組織協会の政策を定式化し」²²、かつ「最も理論的に明瞭に、その協会の目的の最も完全な像を定式化した」²³と評されており²⁴、ボザンケにとっても「この慈善組織協会ほどすばらしい目的、そして信頼できる友情で確実に統一しているところは他にはない」ものであった²⁵。ボザンケが、「たとえ協会の真の実践が意味するものについての観念をほとんどの部外者が持たない」としても「私は完全に慈善組織協会と

共に進む」²⁶と断言し、またボザンケの主著である『哲学的国家理論』が、「慈善組織協会」の親友ロックに捧げられているのは、こうした背景による²⁷。

②「アリストテレス協会」

他方、ボザンケはロンドンにおいて、いわば学会活動として「アリストテレス協会」(the Aristotelian Society)に参加している²⁸。ボザンケが「アリストテレス協会」に果たした貢献は、「慈善組織協会」の場合と同様に大きく、1888年に彼は40歳にして副会長に、さらに1894年から1898年までは会長に就任にして、当学会の発展に尽力している。

そもそも、「アリストテレス」協会とは、科学や文学の領域に従事する若手研究者が中心となって1880年に設立された団体で、現在でもイギリス最大の哲学学会として存続する研究者団体である。当初は哲学のプロパーを擁さない学会であったが、開かれた議論のもとで古典的な哲学書を研究するというその活動が評価されるにつれ、当時のイギリス哲学界で卓越していた人々が次々と参加するようになった。たとえば、R・B・ホールデン(Richard Burdon Haldane: 1856-1928)や、理想主義の哲学者D・G・リーチーらが途中から参加し、また後年にはバートランド・ラッセルやG・E・ムーアらもこの学会に参加している。そしてボザンケもまた、1886年にこの会に魅了されて参加している²⁹。

ボザンケは、参加当初から数多くの論文を学会誌に発表し、また学会のシンポジウムにも積極的に出席していた³⁰。特に、ボザンケがこの学会で積極的に活躍したのは、彼がこの会の副会長および会長を務めていた1886年から1900年までの時期であった。その頃のボザンケの学会での様子を、同じく会員であったカー(H. W. Carr)は以下のように記している。

「ボザンケ氏は協会に単に異なった哲学的見地だけではなく、全体として異なった精神をもたらした。彼は貧弱な議論をぬかるみから引き上げ、その議論に対する我々の関心と呼び覚ました。」³¹

ボザンケのロンドンでの旺盛な実践活動は、慈善活動と並んで、この積極的な学会活動によっても証明されている。

③「ロンドン倫理協会」

さらに、「アリストテレス協会」に参加した翌年の1887年、ボザンケは、その前年に設立された「ロンドン倫理協会」(London Ethical Society)にも参加している。「ロンドン倫理協会」とは、ボザンケと同じくオックスフォード・ベイリオル・コレッジ出身の理想主義者ミアヘッドが中心となって設立された協会である³²。そもそも、この協会が目指す「倫理運動」とは、アメリカでF・アドラー(Felix Adler: 1851-1933)によって提唱されたもので、当時、このアドラーの「倫理運動」はアメリカのみならずヨーロッパにおいても影響力を行使し、欧米の主要都市ではその運動団体が結成されていた。その本部でもある「ニューヨーク倫理教化協会」(Society for Ethical Culture)は1876年にはじめて結成され、やがて1882年には「シカゴ倫理協会」が設立された。さらに、1885年にはフィラデルフィアに、その翌年にはセントルイスにそれぞれ「倫理教化協会」が設立され、また1888年にはケン

ブリッジに、また 1892 年から 94 年にかけてはベルリン、フライブルク、ケーニヒスベルク、ミュンヘン等にそれぞれ「倫理協会」が設立された³³。

ロンドンにこの協会がミアヘッドによって設立されたのは 1886 年のことであったが、それは、アメリカの「倫理運動」の中心人物であった S・コイト (Stanton Coit: 1857-1944) が 1886 年 1 月に、ベルリンからアメリカへ帰る途中にロンドンの多くの慈善家が集う「トインビー・ホール」(Toynbee Hall) に立ち寄ったさい、彼がミアヘッドやボザンケらと接見したことを契機としていた³⁴。ミアヘッドはそこでのコイトとの対談から、ニューヨークの「倫理運動」に倣ってロンドンにも同じような協会を設立することが必要なことを痛感して当協会の設立をこのとき決意した。他方、ボザンケも、コイトとの対談から「倫理運動」の重要性やそこに含まれる「近隣」(neighbourhood) の意味などを認識して³⁵、当時「非常に著名」³⁶といわれたその協会の参加者とともに「倫理運動」に参画していった³⁷。

ところで、この「協会」は、「宗教的知識における相互的改善および宗教的意見の促進」を目的とし、そのために種々の講義を行い、「大衆の道徳的高揚を促進し」、「自由という、測り知れない恩恵を享受させるために青年を訓練し」、「人間の道徳性の偉大な真理を生活の本質的安全装置として承認する」ことを目指すものであった³⁸。それゆえ、この協会の事業は主として哲学、倫理学、政治哲学、社会哲学などの講義と社会事業とであり、ボザンケも参加当初からこの協会において、成人教育としての「大学公開講座計画」(University Extension Scheme) のコース配置に則りながら「トインビー・ホール」で講演を行った。開催日時は日曜日の夕刻であり、公開講座の大概は一般人向けであった。ただ、ボザンケは、聴講者に応じて話す内容のレベルを下げるようなことをしなかったために、軽い気持ちで参加していた流行気取りの女性たちややる気のないものは彼の授業について行けず、教室では退席者が続出して最後には部屋はガラガラになってしまったという有様であった³⁹。

その後、1888 年頃から「エセックス・ホール」(Essex Hall) とよばれる新しい建物で講義がなされることになり⁴⁰、ボザンケも 1891 年から次の 5 年間は、当協会が中枢を担うようになったそのホールでレギュラーとして講義を行った。特に、後に『イギリス人読者のためのプラトン『国家』必携』(*A Companion to Plato's Republic for English Readers. Being a Commentary adapted to Davies and Vaughan's Translation*)⁴¹ (1895 年) に結実したボザンケのプラトン (Plato: 427-347B.C.) に関する講義は、聴講者、特に上流社会の知的女性に大変な人気を博した。実際、その講義は、開講当初使用する予定であった教室が、受講者が多いために大教室に変更となったほどの人気ぶりである⁴²、その講義を聴講したブラッドレーの姉、マリアン・ド・グレン夫人 (Marian de Glehn) もその講義の様子を以下のように記している。

「ボザンケ氏の諸講義はわたしに新たな魅力を与えてくれました。そしてそれらは単に一時の刺激ではありません。わたしは、わたしのプラトンがわたしのすぐかたわらに生きており、そしてわたしの内部ですっとそのメドレーに合わさっているのを知っております。」⁴³

やがて、こうした人気も手伝って、ボザンケはその協会の中心人物へとなっていった。

ヘレン・ボザンケはこの点を以下のように記している。

「こうしたコースにおいては、ハイレベルな仕事が教師、学生の両者によって維持されたし、またそれらはよく出席された。そしてそれらの多くはバーナードによって与えられた。夫は協会の指導的精神をもつ人物になった。」⁴⁴

とはいえ、こうした「倫理協会」での講義や活動は、その名前とは裏腹に、各人の良心の領域に踏み込み、各人に教条的に道徳や倫理を教化するようなものではなかった。ボザンケは、同協会に提出した文書で、「道徳哲学は道徳的教化への一定の傾向をほとんどもたず」、「そして道義的勧告ですら、第一に必要なことではない」と断言している。ボザンケはいう。

「要求されるものは、ほとんどの事例において、道義的勧告ではなく—それは医薬と比較される—、生活、知、そして感覚における新たな機略—それは健全な食物と比較される—であるように思われる。一人の人間は、彼がそこから造られるものである。そして彼は週に一度聞くものから造られるのではなく、習慣的に彼の中に入ってゆくものから造られる。このことが、わたしの判断では、高貴なる生活の材料を組織することである。」⁴⁵

かくして、ボザンケは、「ロンドン倫理協会」への参加を通じて、高等教育を労働者や一般市民に開放する役目を担うのであった。そしてこうした実践活動、学会活動、教育活動を通じて為された講演の数々は専属の協会誌や学術雑誌などにリライトされて再録され、さらにそれがひとつの著書としてまとめられた。1889年に出版された『評論・講演集』(*Essays and Addresses*)や、1893年刊行の『キリスト教国の文明』(*The Civilisation of Christendom*)、さらに前出の1895年刊の『プラトン「国家」必携』(*A Companion to Plato's Republic*)や『論理学の本質』(*The Essentials of Logic*)⁴⁶、そして『社会問題の諸相』(*Aspects of the Social Problem*)などはそうであった。また、この他にも書き下ろし作品として『道徳的自己の心理学』(*Psychology of the Moral Self*)も(公刊はロンドンを離れてからであるが)(1897年)、ボザンケはこのロンドン時代に完成させている⁴⁷。

なお、ボザンケ自身の編著による前記の『社会問題の諸相』には、ヘレン・デンディ(Helen Dendy)の名前で発表された論文「子供の保護」(*The Protection of Children*)および「産業における女性の位置」(*The Position of Women in Industry*)が収録されているが、これを著した女性こそ、ボザンケの人生の伴侶である後のヘレン・ボザンケである⁴⁸。ボザンケは、実践活動、特に「慈善組織協会」での活動を通じて、かつてケンブリッジ・ニューナム・コレッジ(Newnham College)において道徳学を専攻していたヘレンと1891年ころから頻繁に接するようになり、そのうちにお互いの興味関心が全く同じであることから1895年12月13日に彼女と結婚した。ボザンケ47歳のときであった。そして以後二人は、約27年間にわたって多方面で行動を常に共にしてゆくのであった⁴⁹。

ところで、いわばボザンケのロンドン時代の後期に当たるこの時期、彼の関心は美学、そして政治学へと拡大していった。この頃、ボザンケは、1886年に「ヘーゲルの『美学』への序論」(*The Introduction to Hegel's Philosophy of Fine Art*)を翻訳し、さらにそこに序文

「来世に関する真の概念について」(On the True Conception of Another World)を付して出版した。また、1888年には、彼が1885年以来参加していたもう一つの団体である「家内工芸・産業協会」(the Home Arts and Industries Association)において「教育における芸術的手工」(Artistic Handwork in Education)と題する講演を行い、その協会の目的と成果に触れながら「美」と関連した教育論を披露した⁵⁰。そして1892年にボザンケは、彼の美学に関する代表的な業績たる『美学通史』(*A History of Aesthetic*)⁵¹を発表した。こうしたボザンケの美学に関する研究は、彼の論理学同様、当時のイギリスにおける美学の進展に大きな貢献を果たすことになり、実際、ブラッドレー(A. C. Bradley)は、当時、ボザンケがイギリスにおける美学の分野では誰よりも卓抜していたと評している⁵²。

他方、ボザンケの政治学に関する本格的な研究もこの時期に開始されているが、その研究が『哲学的国家理論』として結実するのは、彼がロンドンを離れてからのことであつた。

3. ケイターム・オークショット時代(1897～1903年)ー学校設立ー

ボザンケは、ヘレンと結婚した後、しばらくはロンドンで生活を送っていたが、健康上の理由などから1897年にケイタームに移り住むことになった⁵³。そして大都市ロンドンからケイタームへの移住は、同時にボザンケによる政治学に関する本格的な研究、すなわち『哲学的国家理論』の執筆をスタートさせる契機となった。ボザンケは、ケイタームに移住したその年から同書の執筆に着手し、「ロンドン倫理協会」等で得られた知見を補充しながらそれを2年ほどかけて1889年6月に書き上げた⁵⁴。また、これと並行して、ボザンケはプラトンの『国家』の教育論のみを抄訳する作業にも着手し、後にそれは、綿密な註と詳細な緒論を付した『プラトン「国家」における青年教育』(*The Education of the Young in Plato's Republic*)として公刊された。

しかし、こうした中であっても、ボザンケは実践活動を中断させることはなかった。ケイタームに居を移した1897年ごろから、ボザンケは、ミアヘッドとともに、前述の「エセックス・ホール」での講義の好調を背景にして、「ロンドン倫理協会」を専門的な哲学の学校へと改組する計画を立てはじめた。そして同協会が、従来の「倫理運動」や「大学公開講座計画」から独立した新たな哲学教育の実施、およびそれに伴う同協会の解散を決定したのを受けて⁵⁵、ボザンケは本格的に学校建設に向けて様々な活動を開始した。そして1897年3月に著名な出版人ウィリアム・スワン・ソネンシャイン(William Swan Sonnenschein)の家をボザンケらが訪れたさいに、250ポンドの前資金と旧協会の繰り越し金150ポンドをもって「ロンドン倫理学・社会哲学学校」(London School of Ethics and Social Philosophy)のオープンが決定され、その後、予定通り、アーウィック(E. J. Urwick: 1867-1945)を学校長として同年秋に同学校は開学することになった。

さらに、ボザンケは、ロンドン大学(1826年創立)の再編成計画が打ち出されたのを受けて、ロンドンには哲学を専門的に教授する機関が「ロンドン倫理学・社会哲学学校」以外にないことを根拠に、同校のロンドン大学の一学部への「格上げ」を主張して、1899年

に「ロンドン大学委員会」(the London University Commission) にその認可を求めた。しかし、「ロンドン倫理学・社会哲学学校」は教師や労働者を学生とするために講習料は安く、基本的にボランティアの寄付金に依拠したものであったために経営が厳しく、大学への格上げの際も、政治家 R・B・ホールデンによる助力も及ばず資金が極めて小額しか集まらなかったために、ボザンケの同学校の大学学部格上げへの希望は実現しなかった⁵⁶。むしろ、ロンドン大学は、後述のように、思想的にボザンケと対立していたウェッブ夫妻の手による学校「ロンドン経済学学校」、いわゆる LSE (London School of Economics: 以下 LSE) を受け入れることを決定した。ボザンケは、応募が拒絶されたとき、以下のようなコメントを発表している。

「もし授業 (teaching) が必要とされれば、たとえば、倫理学ないしプラトンの『国家』を扱いながら、あるいはカントおよびその継承者の倫理的ないし社会的な哲学を扱いながら、(中略) 学校 [ロンドン倫理学・社会哲学学校] は、恐らく、確実に必要とされる様々なコースのうちのひとつ、あるいはそれ以上のものを供することができたであろう。」⁵⁷

加えて、「ロンドン倫理・社会哲学学校」のこうした資金繰りの悪化は、結局この学校を閉鎖へと追い込むことになり、1900 年に同学校は開学後 5 年と持たずに閉鎖されることになった。そしてさらに皮肉なことに、受け入れを拒否されたロンドン大学の、ウェッブ夫妻によって創設された LSE に同学校は吸収されることになった。そして「ロンドン倫理学・社会哲学学校」の学校長であったアーウィックは LSE の初代の「社会哲学」(Social Philosophy) 担当の専任教授に迎えられたものの、ボザンケは専任として迎えられないことなく終わったのである⁵⁸。

しかし、ボザンケの学校建設の夢は、彼のもう一つの実践活動の根拠地である「慈善組織協会」において実現した。ボザンケは「慈善組織協会」の系列学校の建設に以前から意欲を燃やしており、1901 年に「慈善組織協会」の「評議会」副議長に就任した彼は、「慈善組織協会」がソーシャル・ワーカーの育成を目的とした学校「社会学・社会経済学学校」(School of Sociology and Social Economics) の設立に成功し (1902 年)、同時に彼がその学校の理事長 (chairman) を務めることになったのである⁵⁹。

なお、この間、ボザンケは、親友ロックがオークショット (Oxshott) に家を新築したのを契機にケイタームを離れ、オークショットへと居を移している (1899 年)。ボザンケは、新築のロックの家に隣接する形で自分の持ち家「ヒース・コテージ」(The Heath Cottage) を建築し、そこで研究、実践活動のみならず、家事にも積極的に従事した⁶⁰。他方、この時期から、ボザンケは海外旅行にも数多く出かけ、40 歳以降、彼はイタリアを 5 回 (1889、1890、1900、1901、1905 年)、スイスを 2 回 (1881、1896 年)、ノルウェーを 2 回 (1893、1904 年)、アメリカ (1892 年)⁶¹、ドイツ (1894 年)⁶²、ギリシャ (1898 年)⁶³ をそれぞれ 1 回ずつ旅行している。なかでも多いのがイタリア旅行であり、彼の訪れる場所は主にフィレンツェとボローニャ、そしてローマであった。そしてボザンケは、オークショット時代のイタリア旅行からイタリア語を現地で積極的に学習し始め、同時にイタリア哲学にも大

きな関心を寄せはじめた⁶⁴。特に、ボザンケは、クローチェ (Benedetto Croce: 1866-1952) に深い関心を寄せ、後年、彼はその研究成果をイタリア語で発表するのであった。

4. セント・アンドルーズ～ロンドン時代 (1903～1923 年)

ボザンケは、その生涯のほとんどを大学に籍を置かない「自活」の研究者として過ごしたが、一時期のみ、大学の専任教授として教育に携わっていた。1903 年、ボザンケと同じくグリーンの影響を強く受け、「オックスフォード学派」の一員として活躍していた D・G・リーチーが急逝したのに伴い、彼はセント・アンドルーズ大学 (the University of St. Andrews) の「道徳哲学」担当の後任教授として招聘された。ボザンケは、一応「道徳哲学」を受け継ぐ形で講義を行ったが、しかしその内容は「道徳哲学」にのみ限定せず、それまでのセント・アンドルーズ大学の伝統を継受する形で、プラトンといったギリシャ古典哲学の内容を絡ませながら講義を行った。また、ボザンケはセント・アンドルーズ大学前教授であり「慈善組織協会」の思想的な先駆者であるチャームズ (Thomas Chalmers: 1780-1847) の方法を継受して、「道徳哲学」に経済学 (Political Economy) の側面を導入しながら授業を展開した。そしてその講義は、それまで騒々しかった学生もボザンケの講義開始とともに静かで真摯な態度になり、教室はまるで教会のようになったといわれるほど、厳格なものであった⁶⁵。その一方で、ボザンケは校務も着実にこなし、また種々の事柄に関して教員が議論する「ディスカッション・イブニング」 (discussion evenings) や、当地で初めて知ったゴルフをほぼ毎週行うことで教員間の親交も深めた⁶⁶。また、この時期から、ボザンケは、セント・アンドルーズ、ハワード・プレイス (Howard Place) 4 に移り住み、4 月と夏期休暇の時のみオークショットの自宅に戻るといった生活をはじめている⁶⁷。

ところで、セント・アンドルーズ大学において、ボザンケはホアンレと知り合っている。当時、ホアンレは、ボザンケの研究・教育面でのいわば助手であったが、それ以降、ボザンケにとって終生の友人となった⁶⁸。他方、ホアンレも、ボザンケを「オリンピアン」 (Olympian) と絶賛して、次のように回顧している。

「カントの言葉を用いれば、私はボザンケ氏から哲学ではなく哲学すること (*nicht Philosophie, sondern philosophieren*) を学んだのだ。」⁶⁹

また、ボザンケがホアンレと知り合った 1905 年は、ボザンケの妻であるヘレン・ボザンケが、保守党バルフォア内閣により設置された「王立救貧法委員会」に「慈善組織協会」のメンバーとして委員に任命された年でもあった。後述のように、この委員会は意見がまとまらず途中内部分裂を来し、結局、1909 年の当委員会の終結と同時に出了された最終答申も、妻ヘレンの見解でもある「多数派報告」 (Majority Report) とウェッブ夫妻が唱導する「少数派報告」 (Minority Report) の二つが出される形となった。ボザンケ自身はこの委員会の直接のメンバーではなかったが、しかし彼は妻ヘレンと連携して「多数派報告」作成に従事し、またその答申を巡って種々の思想家、特にウェッブ夫妻と議論を戦わせることになった。このように、ボザンケの実践活動は、イギリスの現実社会の政策論争へのコミ

ットにまで及ぶものであった。

さて、セント・アンドルーズ大学の専任教授を務めていたボザンケであったが、定期的な講義への重責感や著作活動へ意欲、また妻ヘレンの衰弱等の理由から⁷⁰、1908年に同大学の教授職を辞してオークショットに戻るようになった⁷¹。そして自宅のあるオークショットにて、ボザンケは、それから数年間、すでに講義開催が決定していたエジンバラ大学 (the University of Edinburgh) 主催の「ギフォード・レクチャー」(Gifford Lectures) の準備に取り掛かるのであった⁷²。「ギフォード・レクチャー」とは、エジンバラ大学が宗教、形而上学等の権威者を一人えりすぐり、秋と翌春の2回、あわせて2ヶ月の連続講演を依頼するというもので、当時(そして現在も)これに招かれることは大変な名誉であった⁷³。

そして1911年、ボザンケの形而上学が見事に展開され、ボザンケ自身も最も重要な仕事と考えていた⁷⁴「ギフォード・レクチャー」の第一課程が、5週間のプログラムでエジンバラ大学にて開始された。この間、ボザンケはエジンバラ、メルヴィル・ストリート (Melville Street) 60の寄宿舎に移り、講義の合間や予習の合間に近傍に住む従兄弟などを訪問したり、また時には民族学の先駆的著作『金枝篇』(The Golden Bough)の著者フレイザー (Sir James Frazer: 1854-1941) と議論を行うなどしていた⁷⁵。

ボザンケによる「ギフォード・レクチャー」は好評で、聴衆は100人から200人前後で、出席者は連日ほぼ同一であった。聴講者の中にはエジンバラ大学のいわゆる“優等”の学生 (Honours students) や哲学専攻の卒業生たちのほかに、聖職者なども多くいた。その講義の様子を、プリングル・パチスン (Pringle Pattison) は、以下のように描写している。

「その講義の最も大きな魅力は、実際、以下のような感覚であった。すなわち、我々は深遠な思想家が、節度ある情熱とともに彼が見出し得る最も誠実かつ直接の言葉で我々に、彼が生活の指針としていところの信念を説明してくれている、という感覚であった。(中略) これは、そこで為された講義に温情と迫真を与え、思うにそれはまたプリントされた諸ページにおいて認知できるものである。私にとって、その講義は、強烈かつ感激に満ちた思い出である。」⁷⁶

そして翌1912年、「ギフォード・レクチャー」の第二課程がはじまるとともに、前年の講義内容が『個性と価値の原理』(The Principle of Individuality and Value) としてまとめられ公刊された。さらに、この間、ボザンケは、エジンバラで講義を行うかたわら、仏語の論文「ルソーの政治的諸観念」(Les Idées Politiques de Rousseau) を書き上げ、それを『形而上学・道徳学雑誌』(Revue de Métaphysique et de Morale) に1912年に発表した。だが、こうした活発な研究活動は、年齢60を越えたボザンケの健康を徐々に蝕んでゆき、この年、彼はアメリカのハーバード大学からの講義の依頼を断って病院に入院することになった。

また、ボザンケが理事長を務めていた、「慈善組織協会」の系列学校「社会学・社会経済学学校」が財政上の問題から閉鎖となったのもこの1912年のことであった。実は、ボザンケが主催するこの学校は、当の「慈善組織協会」自体が、後述のようなボザンケの唱える「慈善」の方法やその考え方などから当時人気がなくなりつつあったことも手伝って⁷⁷、す

でに協会内部でも「お荷物」的存在になっていた⁷⁸。結局その後、ボザンケが主催するこの学校は、インドの大富豪ラタン・タータ (Ratan Tata) の財政的な援助を受け⁷⁹、「ロンドン倫理・社会哲学学校」の場合と同じく、皮肉なことに再びロンドン大学の中のウェッブ夫妻が主導して作られた LSE に、「社会科学・社会福祉行政学部」(Department of Social Science and Administration) 新設の折に吸収されることになった⁸⁰。すでに示されたように、また後に詳しく述べるように、ボザンケはウェッブ夫妻と思想的に鋭く対立し、幾重もの論争を戦わせてきたことから、彼にとってこうした接收劇は辛い結果であった。ボザンケはこのとき、元「ロンドン倫理・社会哲学学校」学校長でロンドン大学に専任として移り、また当の「社会学・社会経済学学校」にも全面的に協力していたアーウィックが、LSE 新学部＝「社会科学・社会福祉行政学部」スタートから最低 2 年間はその学部長に就任することになった、という事実で自らを慰めていたと言われている⁸¹。

しかし、このように学校経営に失敗した中にあっても、ボザンケは、1913 年には「ギフォード・レクチャー」第二課程の内容を収録した『個人の価値と運命』(*The Value and Destiny of the Individual*) を、またマンチェスターでの「アダムソン・レクチャー」(the Adamson Lecture) での講義をまとめた『精神とその対象との区別』(*The Distinction between Mind and its Objects*)⁸²をそれぞれ意欲的に出版した。ほかにもボザンケは、彼の美学研究への回帰とも言い得る、ロンドン大学・ユニバーシティ・コレッジでの講義内容をまとめた⁸³『美学三講』(*Three Lectures on Aesthetic*)⁸⁴を 1915 年に、また第一次世界大戦および国際連盟等に関する「同時代的考察」としての論文を集成した⁸⁵『社会的国際的理念』(*Social and International Ideals*) を 1917 年に、さらにヘレンによってその論考が「最も美しく実践的なもの」⁸⁶と評されたボザンケの道徳哲学書『倫理学連想』(*Some Suggestions on Ethics*) を 1918 年に発表した⁸⁷。

さらに、1917 年頃から、ボザンケの研究の関心はイタリア哲学に向けられ、以後、彼は主としてクローチェの研究に没頭していった⁸⁸。クローチェは、20 世紀最大のイタリア最大の観念論哲学者といわれ、1925 年には「反ファシスト宣言」などを発表し、当時のムッソリーニ政権のファシスト独裁に公然と反対を唱えていた思想家であるが⁸⁹、ボザンケの彼に関する研究成果は、第一次世界大戦直後の 1919 年に『クオーターリー・レビュー』(*Quarterly Review*)に掲載された論文「ベネデット・クローチェの哲学」(*The Philosophy of Benedetto Croce*)、また『英国学士院会報』(*Proceedings of the British Academy*)に掲載された論文「クローチェの美学」(*Croce's Aesthetic*)として発表された。また、この 1917 年、研究書ではないが、ボザンケ自身が好んだ様々な詩(ギリシャ語、ラテン語、ドイツ語)を、若き日を回想しながらヘレンとともに翻訳した『ゾアル』(*Zoar*)も出版された⁹⁰。また、同年、ボザンケはオックスフォードを再訪し、かつての親友らとともに久しぶりに歓談を交わした。しかし、これが、ボザンケにとって最後のオックスフォードの学友たちとの最後の歓談となった。

齢 72 を数える 1920 年に、ボザンケは、前出の『倫理学』の発展であり、ブラッドレー・

の『論理学原理』第2版と刊行時期が重ならないよう発表を遅らせていた作品⁹¹『含意と線形的推論』(*Implication and Linear Inference*)⁹²と、「ギフォード・レクチャー」の補足書でありかつ大戦後の人々の荒廃した精神状況に鑑みて執筆した⁹³『宗教とは何か』(*What Religion is*)⁹⁴をそれぞれ発表した。また、その翌年の1921年には『現代哲学における諸極の遭遇』(*The Meeting of Extremes in Contemporary Philosophy*)⁹⁵を発表し、さらに1922年から1923年にかけてイタリア語で論文を2本発表した⁹⁶。しかし、こうした旺盛な執筆・研究活動は彼の体調を悪化させた。ボザンケは1922年、それまで住んでいたオークショットを離れ、かつての実践活動の地であるロンドンに再び戻った。ロンドンでは、近くにヘレンの兄弟やその家族、またボザンケの友人等が居住し、また徒歩10分以内に「ハムステッドヒース」(*Hampstead Heath*)公園もあったゴールダーズ・グリーン(*Golders Green*)に移住した。ボザンケは、ロンドンに移るためにそれまであった家具をオークションに供し、また1.5トンにも及ぶ本を売却し、かつ約200冊の本をボザンケ自身の哲学蔵書として選別した⁹⁷。この蔵書の一部は、今も「ボザンケ・コレクション」(*Bosanquet Collection*)としてロンドンの「王立哲学研究所」(*Royal Institute of Philosophy*)に残っている⁹⁸。

しかし、人間の恒久性や多様性における精神活動を立証しようとした『精神の本性に関する三章』(*Three Chapters on the Nature of Mind*)⁹⁹の執筆途中でボザンケは健康を害し、それを未完のままにして¹⁰⁰、1923年2月8日にロンドンでこの世を去った。ボザンケとの最後の別れは、ゴールダーズ・グリーン火葬場にて、晩年特に彼のお気に入りであった「ハレルヤ・コーラス」(*Hallelujah Chorus*)がオルガンで演奏され、また友人に見守られながら行われた。そして妻ヘレンは、その葬式において、夫ボザンケへの惜別の辞を次のように述べた。

「彼は長い間、世界のすべての部分において多くの人々の心の中に人生の意味の解釈者かつ啓示者として独特の地位を保ってきました。彼は真理への情熱を有し、彼の影響を受けた人々を、彼に対する尊敬と真理に対するより大きな情熱でもって満たしました。彼の思想は理解するのに必ずしも容易なものではありませんでしたが、これは人間の経験とは別の外界の事柄に関係していることによるのではなく、彼が無限かつ永遠の真理を扱っているからでした。(中略)彼の生涯は、偉大な誠実さ、高い勇気、そして深い愛によって特徴づけられました。彼は常に他人の中に良いものを見ようと努めました。彼は常に平和を支持しました。彼は常に自らの宗教的信仰に照らして生きてきました。」¹⁰¹

そしてボザンケの遺骨は、生前の希望からロンドンの自宅の庭園にまかれ、名前と日づけのみが刻まれた簡素な墓碑が回廊(*cloister*)にたてられることになった¹⁰²。

5. ボザンケの生涯

こうしてボザンケは74歳でその生涯を閉じるのであった。ボザンケは確かに自己のすべての仕事を成し遂げて世を去った訳ではないが、しかしオックスフォード学派の創始者であるグリーンに比べ長寿に恵まれた彼の生涯は、彼自身の思想を公表するのに十分な時間

であったといつてよく、その間に生まれた多くの著作は彼をグリーンと並ぶオックスフォード学派の代表的思想家と理解するのに十分な根拠を提供するものである。

ところで、ボザンケの生涯の特徴としては、彼が思想家の多くがそうであるような大学の専任教員としてのそれではなかったことが挙げられよう。すでに見たように、ボザンケがフェロウおよびテューターの時期を除いて正式に大学の専任職にあったのは1902年から1907年にかけてのセント・アンドルーズ大学の教授時代のみであった。つまり、ボザンケは、ややもすれば「安穩」としたアカデミズムに身を置かずに、厳しい現実社会の中で鍛えられた、まさに「在野」ないし「自活」の「思想家」だったのである。

無論、大学に身を置かない研究者であっても、現実社会と積極的に関わり持たないのであれば「在野の思想家」とはいえない。しかし、ボザンケは前述のように活発に実践活動を展開し、現実社会との接点を常に模索していた。特に、彼の「慈善組織協会」での慈善活動、「アリストテレス協会」での学会活動、さらに「ロンドン倫理協会」「大学公開講座」での講義や「社会学・社会経済学学校」の設立に見られる教育活動は、当時のイギリスにおける貧困問題への対処や、学会レヴェルの向上、そして教育環境の改善といった面で決して小さくない社会貢献を果たしている。また、こうした活動は彼の思想形成において大きな影響を与えることになり、ボザンケは実践活動を通じて自らの思想・理論の妥当性を検証し、さらに実践を通じて得られた知見を再びフィードバックさせて自らの思想に取り込んでいっている。この点に関して、ボザンケは自らを「社会改良者」と見なしながら次のように言及している。

「社会改良者の仕事は、医者の仕事が生理学の単なる補遺と見做されないのと同様、社会理論の単なる補遺と見做されるべきではない。」¹⁰³

また、ヘレン・ボザンケも、夫ボザンケのこうした姿勢を次のように述べている。

「知識の実践的慈善の領域への適用は、彼に訴えるものが確実にあった。そして彼はここで再び、英知と思想の深遠さがいかに実践において自らを正当化するかを示すことに喜びを見いだしていた。」¹⁰⁴

以上から、ボザンケの実践活動およびそこで鍛えられた様々な思想が彼自身の政治思想と結びついて、いわば「理論」と「実践」を融合する「知行合一」的なスタンスが彼の支柱となっていたことは明らかである。こうした「在野」であることの特性を活かし、多彩な実践活動を展開した点こそ、ボザンケの生涯の第二の特徴であろう。

しかし、ボザンケの思想と彼の実践とが連絡しあうものであったというだけでは、真の「知行合一」とはいえない。だが、ボザンケの生涯から得られる特徴と、彼の政治思想そのものの特徴とをつき合わせた場合、両者の間には次のような共通点が見出され、彼が「知」と「行」を統一させていたことが理解できる。第一に、ボザンケの実践活動からは、「現実」から逃避せずにそれを直視して、その中であるべき姿を模索しようとする姿が看取される。これは、後述のように、こうした「現実」への積極的なスタンス、すなわちあるがままの「現実」を前提にしながらその中に胚胎する「理想」を見出し、剔出してゆこうとするボ

ザンケの理論上での認識視座と同一であり、彼の理想主義的政治思想そのものの特徴を示すものである。第二に、ボザンケは「ロンドン倫理協会」での実践活動において、「要求されるものは道義的勧告ではない」として、「倫理運動」が道徳喚起運動であったとしても、その喚起は人間の内面に直接干渉するような方法ではなくあくまで間接的な方法によって為されるべきだと主張していた。これは、後述のように、ボザンケが政治思想において各人の道徳的意志への国家干渉や周囲の干渉を排除して、人間の自発的な意志に期待を寄せる彼のスタンスと完全に一致する。そして第三に、ボザンケは、「慈善組織協会」や「ロンドン倫理協会」などの「社会」における様々な私的な中間団体や組織を重視し、いわばその自生性を尊重していた。これは、後述のように、ボザンケが「社会」におけるさまざまな「制度」を重視することで「社会」の自生性を尊重し、「近隣」といった「制度」やそこで活躍が期待される慈善団体を「国家」と並んで重視していた点と符合する。このようなボザンケの生涯の特徴と彼の政治思想の特徴との共通点は、彼が「在野の思想家」であること、「実践活動家」であることに加え、彼にあつては思想上の論理と実践上の論理が統一され、いわば真の意味での「理論」と「実践」とが統合されていたことを示すものである。ボザンケの生涯がまさしく「知行合一」のそれとして、彼の理論的なスタンスをも示唆するものであったこと、これが彼の生涯の特徴の第三のものである。

ところで、こうしたボザンケの生涯に見られる種々の実践活動の展開は、彼自身の性格によるところもあるが、しかし彼が生涯を通じて影響を受けてきた思想家・活動家の影響も大きい。ボザンケは、個人的な交流を通じて影響を受けた同時代の人物として、「慈善組織協会」のロック、自らの学問上の師匠であるグリーン、そして大学セツルメント運動の精神的支柱でもあったアーノルド・トインビー（Arnold Toynbee: 1852-1883）の三人の名を挙げ、彼らから「生涯を通じて示唆を受けてきた」と明言している¹⁰⁵。これら三者は、いずれも実践活動を重視している点で同一であり、彼らからのボザンケに対する影響とは、何よりも実践活動の重要性ということに求められ得る。この三者の影響こそ、これまでのボザンケの生涯における三つの特徴をいわば背後で支えるものとして、第四の特徴に位置付けることができよう。

さて、ボザンケの死後、前出の彼の未完の大作『精神の本性に関する三章』は、同年彼の死後直後に妻ヘレンによる編集のもとで出版され、また彼の生前発表された多くの論文やパンフレットなどもミアヘッド等の編集による論文集『科学と哲学』（*Science and Philosophy*）に収められた（1924年）。また、ボザンケの異色作である自叙伝的な論文「生活と哲学」（*Life and Philosophy*）も、同じくミアヘッド編による『現代英国哲学』（*Contemporary British Philosophy*）に収められて1924年に出版され、さらにボザンケの伝記『バーナード・ボザンケーその生涯に関する簡略な解説』（*Bernard Bosanquet: A Short Account of his Life*）も、ヘレンの手によって書き上げられ、1924年に公刊されている。加えて、書簡集としても『バーナード・ボザンケとその友人』（*Bernard Bosanquet and his Friends*）がミアヘッドの

編集で1935年に出版されている。

また、ボザンケの政治思想が明瞭に示された『哲学的国家理論』は、生前及び彼の死去以後から今日に至るまで幾度となくリプリントされた。生前には、1899年に初版が出された後、長大な「第2版への緒論」を付した第2版が1910年に、簡単な序文が付された第3版が1923年に、同じく簡単な序文が付された第4版が1923年にそれぞれ刊行されている。また、ボザンケの死後も、1925年、1930年、1951年、1958年、1965年、1993年と6回版が重ねられ、とりわけ1993年の再版時には「哲学モダンリバイバルシリーズ」(Modern Revivals in Philosophy)の一環として出版されている¹⁰⁶。『哲学的国家理論』が強靱な生命力をもち、政治学の古典としての地位を獲得している証である。

そして、1996年にルートレッジ社(Routledge)より『国家哲学と福祉の実践—ボザンケ夫妻著作集—』(*The Philosophy of the State and the Practice of Welfare. The Writings of Bernard Bosanquet and Helen Bosanquet. With new Introduction. by D. Gladstone*)として、全8巻本が刊行されたのに続き、1999年には、思想史の領域ではイギリスを代表する出版社であるテムズ社(Thoemmes Press)より待望の『バーナード・ボザンケ著作集』(*The Collected Works of Bernard Bosanquet. 20 vols., Edited and Introduced, by W Sweet.*)が刊行される運びとなった。かつて、ボザンケの主要作品は、1968年にニューヨーク、クラウス・リプリント社(Kraus Reprint Co.)によって再版されていたが、このスイートの編集によるボザンケ著作集は、『哲学的国家理論』や『論理学』、『個性と価値の原理』などの代表作に加え、雑誌に掲載されつつも論文集としてはまとめられなかった論考、さらに現在ではほとんど入手困難と考えられていたパンフレットの類なども網羅した、完成度の極めて高い著作集であり、『全集』と称しても構わないものである。1990年代に入ってからこうした出版業界での動きは、忘れ去られていたボザンケが再び現在、脚光を浴び始めていることを示すものであろう。

第1章 註

¹ なお、ボザンケの生涯を素描するのにさいしてきわめて有益な手掛りを供してくれている資料が、ボザンケの夫人であるヘレン・ボザンケ(Helen Bosanquet)によってのものである。ボザンケの死後に出版された伝記『バーナード・ボザンケ』(*Bernard Bosanquet: A Short Account of his Life*)である。この書は、ボザンケの私生活でのエピソードや種々の実践活動の内実を今に伝える数少ない書であり、ボザンケに最も近い関係にある夫人の書であるが故にやや好意的過ぎる描写もないではないが、しかしその後の欧米の研究者がボザンケの横顔を紹介するさいに常に依拠してきたものとして重要である。そこで、本章では、このヘレン・ボザンケの書を主要資料として採用し、これに依拠しながら彼の人生を追跡することにする。無論、その他にもボザンケの死去直後に種々の小伝が発表されていること、またヘレンのその伝記が各章ごとに年代別に整理はされているものの内容が随想的であり、かつ形式も編年体的では必ずしもなく時系列的に把握するには少々厄介であることから、本章では、ヘレンの著述内容を外科手術的にいったん解体し、その後他の多くの資料から得られた情報をそこに挿入し、最終的にそれらを統合・整理するという作業を行った。また、

参考までに、本論文の付録として、ボザンケの生涯を編年体、つまり年譜形式で追跡したボザンケに関する年譜を付与した。本章での叙述とあわせて参照していただければボザンケの生涯がよりクリアに判明することであろう。なお、ボザンケの年譜は、管見の限りでは、近年ボザンケ研究が再開されている欧米においてすらいまだ作成されたことがないことを付言しておきたい。ちなみに、ボザンケの著作に関する目録については、P・ニコルソンの労作がある。Peter P. Nicholson, "A Bibliography of the Writings of Bernard Bosanquet (1848-1923)", *Idealistic Studies*, Vol.8, 1978, pp.261-280. また、ニコルソンのこの研究成果をさらに充実させたビブリオグラフィが、現在ニコルソン、スイートの手によってものされ、ボザンケ著作集の第一巻の最後に掲載されている。Peter Nicholson and William Sweet, "Bibliography of the Writings of Bernard Bosanquet" in *SE*, I, pp.553-589.

² A. C. Bradley, "Bernard Bosanquet 1848-1923", *Proceedings of the British Academy*, 1921-23, p.563, J. H. Muirhead, "Bernard Bosanquet as I Know", *The Journal of Philosophy*, Vol.20, No.25, 1923, p. 673.

³ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.3.

⁴ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.7.

⁵ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, pp.12-14.

⁶ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.5.

⁷ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.18.

⁸ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.24. ジョウエットは根っからの「ベイリオル・マン」(Balliol Man)であり、閉鎖的なベイリオルにあつて様々な大学開放政策をとった。詳しくは、宮本葉子「ベイリオル・コレジートインビー・ホール設立の歴史的背景に関する一考察」(『奈良女子大学教育学科年報』第12号、1994年)171-172頁参照。

⁹ McBriar, *op.cit.*, 1987, p.153.

¹⁰ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, pp.29-30.

¹¹ J. H. Muirhead, "Bernard Bosanquet", *Mind*, Vol.32, 1923, p.399; François Houang, *De L'Humanisme a L'Absolutisme: L'Évolution de la Pensée Religieuse du Neo-Hegélien Anglais Bernard Bosanquet* (Paris: Librairie Philosophique J. Vrin, 1954), p.43; Bradley, *op.cit.*, 1921-23, p.565.

¹² 一般にボザンケの執筆活動は初期の論理学への傾倒、そして中期の倫理学、美学、国家哲学への興味の拡大、そして後期の形而上学もしくは宗教論における絶対主義への傾倒という三つの時期に大まかに分けられているが、それに従えばこの時期は、初期の論理学への傾斜期に相当する。J. H. Muirhead, "Bernard Bosanquet", *Mind*, Vol.32, No.128, 1923, p.399. またこのボザンケの著作時期に関する同様の指摘は、Metz, *op.cit.*, 1935, pp.332-333.においても見られる。

¹³ 前出『バーナード・ボザンケ著作集』第9巻所収。

¹⁴ Hiralal Haldar, *Neo-Hegelianism* (London: Heath Cranton, 1927), p.257.

¹⁵ 厳密に言えば「慈善組織協会」は俗称で、「慈善救済組織化・乞食撲滅協会」(The Society for the Organising Charitable Relief and Repressing Mendicity)が正式名称である。その後名称は、1910年に「慈善活動組織化・貧民状態改善協会」(The Society for the Organisation of Charitable Effort and the Improvement of the Condition of the Poor)へと変更し(通称は変わらず)、1946年に「家族福祉協会」となる。Charles Loch Mowat, *The Charity Organisation Society* (London: Methuen and Co Ltd, 1961), p.17, pp.168-169, p.175. なお著者モワットの母親は、ボザンケの生涯の親友である当協会2代目事務局長、C・S・ロックの娘にあたる。高野史郎、『イギリス近代社会事業の形成過程—ロンドン慈善組織協会の活動を中心に—』(1985年、勁草書房)6頁。

¹⁶ 高野史郎、前掲書、1985年、2頁。また、詳しくはMadeline Roof, *A Hundred Years of Family Welfare* (London: Michael Joseph, 1972).参照。また、Richter, *op.cit.*, 1964, p.332.

¹⁷ Kathleen Woodroffe, "The Charity Organisation and the Origins of Social Casework", *Historical Studies: Australia and New Zealand*, Vol.9, 1959, p.19.

¹⁸ Otter, *op.cit.*, 1996, pp.186-187.

¹⁹ Helen Bosanquet, *Social Work in London 1869-1912* (London: John Murray, 1914, reprint, Brighton: The Harvester Press, 1973), pp.2-5.

²⁰ Mowat, *op. cit.*, 1972, p.21.

²¹ *Ibid.*, pp.180-181. または G.T. Pilcher, "Dr. Bernard Bosanquet", *Charity Organisation Quarterly*, No.5, 1923, pp.75-76. 参照。ただし、ボザンケ自身は、現場の「慈善家」として、実際に貧民を前にして具体的な慈善を行うことは苦手であったようであり、ボザンケ自身もそうした仕事が「性に合わない」ことを悟っていた。Heleh Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.54.

²² Otter, *op.cit.*, 1996, p.181.

²³ Vincent, *op.cit.*, 1984, p.346.

²⁴ ただし、ボザンケは、協会内部では、「パリサイ人的な形式主義者」になることをひどく嫌い、いわゆる「保守派」(old guard) に属していたと評されている。McBriar, *op. cit.*, 1987, p.59, pp.85-86, *BBF*, XX, p.312.

²⁵ *SH*, XV, p.178.

²⁶ *EASP*, XIV, p.128.

²⁷ ただし、ボザンケとロックは、例えば当時のブーア戦争といった時事的な事柄に関してはあまり意見が一致しなかったといわれている。Heleh Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.93.

²⁸ 「アリストテレス協会」での具体的なボザンケの経歴については、H. W. Carr, "In Memoriam: Bernard Bosanquet", *Proceedings of the Aristotelian Society*, n. s., Vol. 23, 1922-1923, pp.263 -272. 参照。

²⁹ Carr, *op. cit.*, 1922-1923, p.266.

³⁰ ちなみに、ボザンケが当協会で行った講演等を表にまとめると、以下のようになる。

講演月日	演題	形態	収録雑誌
1887/12/5	「精神は意識と同義であるか」	シンポジウム	『会報』, O.S., Vol.1, No.1.
1888/1/23	「同一性に関する真の理論の 哲学的な重要性」	講演	『マインド』, 1888, 7.
1889/3/11	「自発的行為において何が起ころか」	シンポジウム	『会報』, O.S., Vol.1, No.2.
1889/3/25	「近代哲学の成長において、 美学によって演ぜられる役割」	講演	『会報』, O.S., Vol.1, No.2.
1889/12/2	「醜悪に関する美学理論」	講演	『会報』, O.S., Vol.1, No.3.
1890/3/17	「芸術の相互関係」	シンポジウム	『会報』, O.S., Vol.1, No.3.
1890/12/1	「美に関する古代ギリシャ理論の 主要特徴」	講演	
1891/5/25	「知識における一要因としての遺伝」	シンポジウム	
1891/11/16	「外界の知覚の源泉」	シンポジウム	『会報』, O.S., Vol.2, No.1.
1892/1/11	「デザインからの議論の永続的意味内容」	講演	『会報』, O.S., Vol.2, No.1.
1893/1/23	「ジェームズの心理学における空間と、 第3次元についての覚書」	講演	
1894/2/19	「プラトンとアリストテレス における魂の概念」	講演	

1894/11/5	「経験理論における本質的相違」	会長講演	『会報』, O.S.,Vol.3,No.1.
1895/11/4	「時間と絶対者」	会長講演	『会報』, O.S.,Vol.3,No.2.
1896/4/27	「性格と環境は人間の生活において 等位要因か、一方が他方に従属か」	シンポ ジウム	『会報』, O.S.,Vol.3,No.2.
1896/11/2	「社会学と哲学との関係」	会長講演	『マインド』, N.S., Vol.3, No.2.
1897/1/11	「もしあるのなら、どのような意味で 過去と未来の時間が存在するのか」	シンポ ジウム	『マインド』, Vol.6,p.228.
1897/11/1	「ヘーゲルの政治的義務の理論」	会長講演	『マインド』, N.S.,Vol.7,p.1.
1899/2/13	「社会の自動性と模倣理論」	講演	『マインド』, N.S.,Vol.8,p.167.
1901/12/2	「グリーン倫理学に関する最近の批判」	講演	『会報』, N.S.,Vol.2.
1906/4/18	「論理学は思考の心理学的条件から 抽出できるか」	シンポ ジウム	『会報』, N.S.,Vol.6.
1909/2/1	「民主政治における専門家の場所」	シンポ ジウム	『会報』, N.S.,Vol.9.
1910/12/5	「帰納法的理由付けの、 通例の論理的定式化の欠陥について」	講演	『会報』, N.S.,Vol.11.
1912/6/1	「目的と機械」	シンポ ジウム	『会報』, N.S.,Vol.12.
1914/11/30	「科学と哲学」	就任講演	『会報』, N.S.,Vol.15.
1915/5/5	「命題の意味」	シンポ ジウム	『会報』, N.S.,Vol.15.
1916/12/4	「人類の統一を促進することにおける 国家の役割」		『会報』, N.S.,Vol.15.
1918/7/7	「有限の個人は存在の本質的様式をもつ のか、あるいは付随的様式をもつのか」	シンポ ジウム	『会報』, N.S.,Vol.18.

表は Carr, *op.cit.*, 1922-1923, pp.263-272. より作成。

³¹ Carr, *op. cit.*, 1922-1923, p.269.

³² ただし、ミアヘッドはエドワード・ケアードの直弟子であった。

³³ 行安茂『デューイ倫理学の形成と展開』（以文社、1988年）260-261頁。

³⁴ Peter Gordon and John White, *Philosophers as Educational Reformers* (London: Routledge and Kegan Paul, 1979), p.114.なお、「トインビー・ホール」とは、ボザンケと同じくベイリオル出身で、貧困解決の問題意識から産業革命史研究を行い社会改良の必要をより具体的に展開した歴史学派の経済学者アーノルド・トインビー（Arnold Toynbee: 1852-1883）の早逝を記念して1884年に建てられたもので、当時そこは「セツルメント」（settlement）運動、すなわち貧しい人が多く住む区域に上流階級の間が定住して住民との触れ合いを通じてその生活の向上に努める社会運動の中心地でもあった。高島進『社会福祉の歴史－慈善事業・救貧法から現代まで』（ミネルヴァ書房、1995年）60-63頁。ちなみに、わが国で歴史学者として著名なアーノルド・ジョセフ・トインビー（Arnold Joseph Toynbee: 1889-1975）は、このトインビーの甥である。

³⁵ ボザンケは、『哲学的国家理論』で示された「近隣」の重要性を、ニューヨークからやってきたコイトとのロンドンでの接触を通じて認識したと告白している。PTS, V, p.xvii.

- ³⁶ G. Spiller, *The Ethical Movement in Great Britain: A Documentary History* (London: The Farleigh Press, 1934), p.21.
- ³⁷ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.44.
- ³⁸ Horace L. Friess, *Felix Adler and Ethical Culture* (New York: Columbia University Press, 1981), pp.54-55.
- ³⁹ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.49.
- ⁴⁰ I. D. MacKillop, *The British Societies* (New York: Cambridge University, 1986), p.97, Spiller, *op.cit.*, 1934, p.22.
- ⁴¹ 前出『バーナード・ボザンケ著作集』第11巻所収
- ⁴² Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.62.
- ⁴³ I. D. MacKillop, "The London School of Ethics and Social Philosophy: an adult education movement of the 1890s", *History of Education*, Vol.7, No.2, 1978, p.121.
- ⁴⁴ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p. 46.
- ⁴⁵ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.45.
- ⁴⁶ 前出『バーナード・ボザンケ著作集』第10巻所収。
- ⁴⁷ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p. 75.
- ⁴⁸ Helen Dendy, "The Protection of Children", "The Position of Women in Industry", in Bernard Bosanquet ed., *Aspects of the Social Problem* (London: Macmillan, 1895, reprint, New York: Kraus Reprint, 1968), pp. 46-62, 63-74.
- ⁴⁹ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, pp.70-71.
- ⁵⁰ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p. 43.
- ⁵¹ 前出『バーナード・ボザンケ著作集』第4巻所収。
- ⁵² Bradley, *op.cit.*, 1921-23, p.570.
- ⁵³ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p. 72.
- ⁵⁴ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p. 48.
- ⁵⁵ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p. 47.
- ⁵⁶ MacKillop, *op.cit.*, 1986, p.97.
- ⁵⁷ Memorandum by Bosanquet dated 'London, 1899', pp.5-6. Bosanquet Papers, Trunk I, Packet N, quoted by MacKillop, *op.cit.*, 1986, p.120.
- ⁵⁸ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p. 47; Peter Gordon and John White, *op.cit.*, 1979, p.120.
- ⁵⁹ McBriar, *op.cit.*, 1987, pp.153-154.
- ⁶⁰ なお、この時期から、ボザンケは、メレディス (George Meredith), ハーディ (Thomas Hardy), ディケンズ (Charles Dickens), ド・モルガン (De Morgan), ボズウェル (James Boswell)、ファブル (Henri Fabre) 等の作品、及び『オデュッセイア』、ダンテの『神曲』(*Divina Commedia*) を特に好んで読みはじめている。その一方で、彼は朝昼にはいくつかの意見の異なった新聞を読み、現実の政治にも常に関心を払っていた。Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, pp.79-88.
- ⁶¹ アメリカ・マサチューセッツ州プリマス (Plymouth) の「応用倫理学学校」(the School of Applied Ethics) の「サマースクール」の講義を、病気の W・ウォーレスに代わってボザンケが担当。6週間アメリカに滞在し、ケンブリッジ、ハーバード、シカゴ、ソルトレイクシティ、イエローストーン国立公園等を視察した。Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, pp.68-69.
- ⁶² ドイツでは、ボザンケはワイマールのゲーテの生家を訪れている。
- ⁶³ ギリシャ旅行での体験から、ボザンケは考古学 (archaeology) に関心を覚えその研究にも着手している。この研究成果は、『インターナショナル・ジャーナル・オブ・エシックス』(*International Journal of Ethics*) 第9号に「アテネの歴史からの教訓」(A Moral from Athenian History) として発表された。Bernard Bosanquet, "A Moral from Athenian History", *International Journal of Ethics*, Vol.9, 1898-99, pp. 13-28. Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p. 76.
- ⁶⁴ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, pp. 103-104.
- ⁶⁵ ボザンケは、普段は学生に対して静かな態度で接していたが、イジメなどが発生した場合には厳格に対処した。また、学生との親交も、授業のほかに学期に少なくとも1回以上の昼食会や、研究室での議論を通じて深められた。議論では、ボザンケは自己の主張に反

駁するものがいたとしても、その人物に一定の苦痛や嫌悪感すらも決して与えなかったといわれている。Bradley, *op.cit.*, 1921-23, p.569.

⁶⁶ なお、ボザンケはすべての人が平等に扱われるゴルフ場での「デモクラシー」に好感をもっている。

⁶⁷ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, pp. 105-121.

⁶⁸ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.112.

⁶⁹ R. F. A. Hoernlé, "In Memoriam: Bernard Bosanquet", *The Journal of Philosophy*, Vol.20, No.19, 1923, p.508, 505.

⁷⁰ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p. 120.

⁷¹ なお、セント・アンドルーズ時代およびその直後の時期の間に、ボザンケは種々の榮譽を授かった。彼は、1907年には英国学士院（British Academy）のメンバーに選出され、また1909年には、バーミンガム（Birmingham）大学から名誉学位、法学博士（the LL. D. degree）の学位を、さらに1910年にはセント・アンドルーズ大学創立500周年記念祝典に参加したおりに名誉学位をそれぞれ受けた。これは、ボザンケにとってはグラスゴウ大学、ダラム大学、バーミンガム大学に続く4回目の名誉学位の授与であった。Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, pp. 129-130.

⁷² この間、ボザンケは病院に3週間ほど入院し、手術を受けている。

⁷³ 山本新『人類の知的遺産 74 トインビー』（講談社、1978年）241-242頁。

⁷⁴ Sorley, *op.cit.*, 1920, p.292, R. B. Haldane, "Bernard Bosanquet 1848-1923", *Proceedings of the British Academy*, 1921-23, p.575, Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.124.

⁷⁵ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.130.

⁷⁶ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, pp.126-127.

⁷⁷ M・ブルース、秋田成就訳『福祉国家への歩み—イギリスが辿った途—』（法政大学出版局、1984年）182頁。また、ヴィンセントは、「慈善組織協会」が不人気に陥った理由を次のように解説している。「徹底的な調査を確保することで、彼ら〔協会関係者〕はおせっかいな調査官と結びつけて考えられた。最後の手段としてのみ唯一時的な救済を承認することで、彼らは無礼で無神経な輩だと解された。最終的には、物乞いに反対する活発な働きによって、彼らは抑圧的と解された。」Andrew Vincent and Raymond Plant, *op.cit.*, 1984, pp.95-96.

⁷⁸ José Harris, "The Webbs, The Charity Organisation Society and the Ratan Tata Foundation: Social Policy from the Perspective of 1912", in Martin Bulmer, Jane Lewis, David Piachaud (eds.), *The Goals of Social Policy* (London: Unwin Hyman Ltd, 1989), p.39.

⁷⁹ *Ibid.*, p.28. また、R・M・ティトマス、谷昌恒訳『福祉国家の理想と現実』（東京大学出版会、1967年）4頁。

⁸⁰ 詳しくは、金子光一『ピアトリス・ウェブの福祉思想』（ドメス出版、1997年）116-123頁参照。

⁸¹ 保坂哲哉「イギリスのソーシャル・ポリシー論」、『社会政策叢書』編集委員会編『戦後社会政策の軌跡・社会政策叢書第14集』（啓文堂、1990年）27-28頁。

⁸² 前出『バーナード・ボザンケ著作集』第8巻所収。

⁸³ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.130.

⁸⁴ 前出『バーナード・ボザンケ著作集』第17巻所収。

⁸⁵ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.130.

⁸⁶ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.139.

⁸⁷ なお、ボザンケは、前出の「ギフォード・レクチャー」が開始された1911年にボローニャで開催された第4回「哲学国際会議」（International Congress of Philosophy）で次回の大会の議長に選出されていたが、1914年に第一次世界大戦が勃発したために、当学会の開催は中止され、彼が議長を務める「哲学国際会議」は実現しなかった。また、「慈善組織協会」においても、ボザンケは1915年に「評議会」の副議長を辞して翌年に「評議会」議長に就

任したものの、1917年にはその職を早々に辞することになった。ボザンケの心臓疾患が悪化したのも、ちょうどこの頃からであった。

⁸⁸ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.139.

⁸⁹ 村上信一郎「知識人と政治」、馬場康雄・岡沢憲芙編『イタリアの政治』（早稲田大学出版部、1999年）220-221頁。

⁹⁰ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, pp.140-141.

⁹¹ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, pp.140-141.

⁹² 前出『バーナード・ボザンケ著作集』第10巻所収

⁹³ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.141.

⁹⁴ 前出『バーナード・ボザンケ著作集』第17巻所収。

⁹⁵ 前出『バーナード・ボザンケ著作集』第18巻所収。

⁹⁶ “La distinzione di natura e spirito”, *Giornale Critico della Filosofia Italiana*, Vol.3, 1922, pp.59-66, “Il naturalismo e la filosofia del Tusso”, *Giornale Critico della Filosofia Italiana*, Vol.4, 1923, pp.62-68.

⁹⁷ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, pp.145-148.ちなみに、彼の本の一部は地中に埋められたとされている。

⁹⁸ Nicholson, *op. cit.*, 1978, pp. 261-262.

⁹⁹ 前出『バーナード・ボザンケ著作集』第8巻所収

¹⁰⁰ J.H.Muirhead, “Bernard Bosanquet”, *Mind*, Vol.32, No.128, 1923, p.393.

¹⁰¹ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, pp.151-152.

¹⁰² Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, pp.150-151.

¹⁰³ *PTS*, V, p.viii.

¹⁰⁴ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.52.

¹⁰⁵ *SE*, I, p.xl.

¹⁰⁶ なお、美学の分野でも、1963年に『美学3講』が、ザ・ライブラリー・オブ・リベラル・アーツ社（The Library of Liberal Arts）から再版されている。

第2章 ボザンケの「一般意志」論

1. 哲学

ボザンケの哲学、形而上学、そして政治思想は難解であるといわれる。その原因は、ファネンステイルが言及するように、ボザンケの場合言葉遣いがややこしく、さまざまな言葉が通常の意味で用いられる一方で非常にテクニカルな意味でも用いられていることに求められる¹。また、ワーノック (G. J. Warnock) の指摘のように、ボザンケの手法がより文学的かつ大袈裟であり、その文章も時に曖昧で時に真面目に書かれていること²、またカリット (E. F. Carritt) の指摘のように、ボザンケの哲学や政治思想において「それ自体」(as such) や「限りにおける」(in so far as) といった表現が多用されていることなどが、彼の思想をヘーゲル以上に内容を曖昧なものにしている³。事実、レットウィン (S. R. Letwin) は、ボザンケの理論をグリーンよりも「クリアーカット」なものとしつつも、しかしそれは「簡単な理論」ではなく、「抽象概念の中を気楽に揺れ動き得る人々だけに感銘を与えるものであった」と断じており⁴、こうした点は、戦前の日本の思想家である河合栄治郎をしてもボザンケの政治思想を「難渋」と評していたことから理解される⁵。しかし、ボザンケの議論、特にその政治思想は、以下のような基本的な視点を考慮すれば、決して扱いが困難な思想であるとは思われない。そこで、ボザンケの政治思想をよりスムーズに解明するために、彼によって立つ理想主義の立場の特徴、つまり彼の政治思想を根本において規定するものを最初に検討する必要がある。

第一の特徴は、ボザンケによれば、哲学とは現実を解釈することを目的とする点である。ボザンケは哲学の目的を次のように説明する。

「哲学は、ただ、目下の経験 (existing experience) を解釈しなければならない。(中略) 哲学は、現実のもの (the actual) を解釈するだけであり、そこから真実なるもの (reality) の一般的性格を、より完成度の高い形で抽出するように努めるのである。」⁶

つまり、ボザンケにとって、哲学とは現実から乖離した完全な理想を追求することではなく、逆に現実を解釈すること、すなわち「事柄そのものための研究」⁷を主眼とするものである。しかし、このことは、ボザンケが哲学を、現実を単に分析・描写したり、あるいは現実の諸制度を現象的にのみ把握するもの、言い換えれば一般に「科学的」と称される手法で現実を解釈することと位置づけていることを意味しない。ボザンケによれば、そうした科学が抽出するものは「一般性」(generality) であり、「抽出物もしくは抽象物」である。一方、哲学はこうした「一般性」を抽出することを主眼とはせず、むしろ、「一般性」を包括した「全体性」や「具体性」を描き出すことを使命とする。ボザンケは、哲学と科学の相違を次のように言及している。

「なぜなら、科学は本質的に抽象的かつ部分的であるが、哲学は本質的に具体的で全体的であるからである。」⁸

つまり、ボザンケによれば、科学的な説明では、その抽象による捨象行為のために、異同点を含んだ「全体」が把握され得ず、それゆえ科学が剔出する「一般性」は、哲学が剔

出しようとする真の「同一性」や「普遍性」とは性質を異にするものである。ボザンケはいう。

「究極的な原理は、異 (other) の中の同一性 (sameness) である。一般性とは異を無視した同一性であり、普遍性とは異を用いた同一性である。」⁹

「全体からの誤った抽象によって、我々は社会的かつ知的存在にとって唯一可能な道筋で誤りを犯すのである。」¹⁰

こうして、ボザンケは全体的視座を欠いた科学的手法＝「一般化」では真の「普遍」は把握できず、反対に抽象の過程で捨象された諸々のものをも視野に入れたアプローチによって「具体性」を帯びた真の「普遍」は見出されると論ずる。さらに、ボザンケは、「我々は思考において抽象性の原理よりも具体性の原理を理解する」¹¹として、真の「普遍」が「具体」と異なるものではなく、逆に同一物における二つの側面であると論ずる。ボザンケは言う。

「思考の究極的傾向は、一般化 (generalise) を為すことではなく、一つの世界を構成することである。思考が“それ” (that) の限界を越えて“何” (what) を理解することで、所与のものを越えてゆくのは事実である。しかしまた、“何”を理解することで、より充実した“それ”に常に帰着する傾向をもつのも事実である。」¹²

つまり、ボザンケは、人間の思考過程・認識過程に「何」という「一般化」を越えて「それ」という「具体性」へと回帰する思考の自己運動を見出し、いわば「普遍」と「具体」の原理を統合させるのである。そしてこの「普遍」こそ、ボザンケの形而上学の中核的概念であり、かつイギリス理想主義全体を貫く概念でもある¹³「具体的普遍」(concrete universal) である。つまり、「一般」の剔出という「抽象」作用によりスポイルされた「異」を排せず、すべての事物を包摂する「普遍」が彼のいう「具体的普遍」であり、それは「一般性」を内包しつつも「それ」や「これ」といった「具体的」形態を同時にとる「普遍」である。そしてボザンケによれば、この「具体的普遍」を理解することこそ哲学の任務である。ボザンケはいう。

「真に健全な哲学を解く鍵は、具体的普遍を普遍性の真の型式として理解することに存する。」¹⁴

以上から、ボザンケのいう哲学とは、「一般性」を帯びた「部分」的「抽象性」ではなく、「普遍性」を帯びた「全体」的「具体性」を抉ることが目的となるものである。

そしてこうしたボザンケの視点は、そのまま彼の哲学の第二の特徴である、いわゆる「現実」と「理想」とを一元論的に把握するという視座に結びつく。ボザンケにとっては、哲学とはあらゆる物を包摂した「全体」を把握するものであることから、彼の場合、ヘーゲルと同じく「真理は全体である」ことになり¹⁵、「全体」を考察することが真理の探究につながる。そしてこの場合、「全体」とは、我々が生きているこの世界そのもののことであり、それは「現世」としての「全体」を意味するものである。それゆえ、「全体」の把握は、そのまま「現世」そのものを哲学的に把握することであり、「現世」とは切り離された「来世」

を探究することは、ボザンケの場合哲学の仕事ではない。したがって、ボザンケの思想的な立場は、現実根ざしつつも同時に現実に胚胎する理想を描くものとして、いわば現実と理想の二つをまたぐ思想であるといつてよい。つまり、マレイ (R. H. Murray) の指摘のように「現実生活の中の理想」を示すことがボザンケにとっての課題である¹⁶。ボザンケが「現実」と「真実＝理想」の両方の意味を含む“reality”を解明する哲学者と言われ¹⁷、また日本においても北岡勲および浅沼和典によって「現実主義的理想主義」(the realistic Idealism)と指摘されるゆえんである¹⁸。

ところで、このように「現世」と「来世」とを一元的に把握しようとするボザンケの思想的なスタンスは、彼自身によって語られたボザンケの思想的背景から明らかになる¹⁹。ボザンケは、自らの思想形成に影響を及ぼしたものとして、自分の故郷であるノーサンバーランド州の広大な農場での生活と、新約聖書についての主教の説教を、そして思想的な響きとしてプラトンとヘーゲルの哲学、ラスキン (John Ruskin: 1819-1900) やモリス (William Morris: 1834-1896) の美的経験についての学説、そしてグリーンとブラッドレーの哲学をそれぞれ挙げている。しかし、このなかで、とりわけ彼の根本思想にとって重要であるのは、ミアヘッドが指摘するように²⁰、プラトンとヘーゲルの影響である。ボザンケは「理論面での衝撃は、プラトンとヘーゲルの理論であった」と述べて、プラトンの哲学を以下のように解釈する。

「特に、プラトンは、啓示のごとく驚くべきもの (revelation) として現れた。しかしそれは、“現世” (this world) と“来世” (another world) との二元論を立証するものとして現れたのではない。そうではなく、ある人間のぼんやりとした予想とは反対に、また最近プラトンの趣旨として多かれ少なかれ流布されている伝承とは反対に、彼の真の情熱は万物の統一に対してのものであったこと、またそれが、その統一の本質への手掛り (guide) としての知 (science) や善 (goodness) に対するものであったこと、これらのことが明白かつ明瞭であったから、驚くべきものとして現れたのである。(中略) プラトンの知への渴望、そして彼の善への情熱は、明らかに以下のことを意味していたのである。すなわち、“現世”はその本性において隔離されたものではないこと、そしてもし諸君がそれを理解しそれを実践するならば、それは諸君に対して今ここにあるものとなる、ということである。」²¹

そしてプラトンのこうした一元論的な視座を受け継いだのがヘーゲルである。ボザンケはヘーゲルに関しても以下のように述べている。

「以下のこと、すなわち哲学の対象とするもの (object-matter) は、決して難解かつ隔絶したものではなく、常に具体的なものであり、その最も高度な意味において現存する (present) ものである、ということをヘーゲルが非常に多くの言葉で我々に対して述べるとき、来世の幻影は、プラトンにおいて来世は原理的に現世に据えられたように、最終的には現世に据えられたのである。」²²

こうして、ボザンケはプラトンとヘーゲルの学説に二元的な視座を拒絶するスタンスを認識し、そこから思想的に大きな影響を受けたと述べるのである²³。ボザンケが、プラトン

の概念の具体化しない政治哲学は健全なものではないと記し²⁴、またボザンケが自己の思想を計画するさいのいわば開始点にカントおよびヘーゲルという「偉大な師匠」がいたとしながらも、自分の最も偉大な先生はプラトンであると記すのはこうした背景による²⁵。

そしてこのようなプラトンやヘーゲルからの思想的影響のもとでボザンケが獲得した一元論的視座は、以下のような彼の「絶対者」をめぐる議論から端的に把握される。ボザンケによれば、「絶対者」は「来世」に存在するのではなく、この世である「現世」に胚胎するものであり、我々の現実の「経験」において認識されるものである。「我々は他のいずれのものを経験するよりも、よりよく絶対者を経験する。これは、我々有限な存在がある程度絶対者を所有し享受することができるのであろうか、という問題に対しての解答でもある。」それゆえ、ボザンケの「絶対者」観は、いわば汎神論的なものといってよく、我々現実の中で生きる人間が「絶対者」を自らの経験において体験し、実感することを旨としている。ボザンケはいう。

「我々はすべて皆、絶対者を経験する。なぜなら絶対者とはすべてのものの中に存するからである。」²⁶

「絶対者の一般的形態は、(中略) 日常的な確認 (verification) の問題である。」²⁷

こうした「絶対者」を彼岸ではなく我々自身の精神的経験の中、つまり此岸に置く議論から、ボザンケの哲学における第二の特徴、すなわち、ブラッドレー (James Bradley) も指摘するように、彼の認識視座がいわゆる二元論ではなく「厳格な一元論」のものであることが明確に示されている²⁸。

さて、ボザンケの哲学の第三の特徴は、哲学が間接的に現実社会に対して発言するという点である。ボザンケは、最初に哲学の性質を以下のように述べる。

「哲学は理解しなければならないのであって、命令する必要はない。」²⁹

「私は以下のことに同意する。すなわち、哲学それ自体は我々にたいして社会改革の詳細に関して何ら建設的に話すべきものをもたない、ということにである。哲学は我々に、実際に提起された方策が社会の紐帯 (social bonds) を堅めるのか緩めるのかどうか、あるいは現状においてどんな方策を為すのが好ましいのか、に関して何ら語りかけない。(中略) 私は、哲学はそれ自体によって、財産や家族に関して為されるべき最善の事柄に関して決定的なことは何一つ言い得ない、ということに同意する。」³⁰

ボザンケはこうして哲学が直ちに現実の政治にコミットすることを拒否する。しかし、ボザンケの哲学は、それが現実を「全体」との関係の中で捉え、その中に胚胎する理想を剔出するものであることから、現実の社会と全く関わりをもたないものではない。むしろ、ボザンケによれば、「あらゆる所与の生活の体系はそれ自体不完全」であることから³¹、哲学は前述のような営為を通じて、我々人間にたいしていかに生きるべきか、いかに経験すべきかに関して間接的に語りかけるものである。ボザンケはこうした哲学における実践的側面を以下のように指摘する。

「仮に、我々の行動の直接的な根拠が“経験的”であるならば、哲学は我々にいかに経

験すべきかを教える。というのも、経験とは、ある人が意味深長に言ったように、我々が経験するものだからである。少なくとも、哲学は我々を迷信や狭隘から保護する。思うに、哲学はそれ以上のことをなしうるが、しかし私はこのことを進んで強く主張する。(中略)たとえば、悪しき哲学から、あるいは悪しき哲学に等しい精神の歪み (a mental twist) から、諸条件が不適であるという根拠で種々の方策が提起されるのであれば、哲学はその推定を無効にし、事実への真のアピールのための根拠を明らかにすることができる。」³²

かくして、ボザンケは、哲学が直接的に具体的方策を指示するものではないことを明言しながらも、それが一種の規範性を帯び、人間の生きる指針として、また生きた現実に対する批判原理として、間接的に現実生活に作用し得ることを示すのである。そしてその限りにおいて、トマスの指摘のように、ボザンケは政治的な処方箋を提示することにほとんど躊躇することはない³³、後述のように、彼は自己の現実政策観や現実社会への処方箋を具体的に示すのである。無論、そのことは、シモニーの指摘のように、ボザンケがあるひとつの政策のラインに沿ってそれだけのために排他的に思想を展開し、大々的に政治的なプログラムを処方したことを意味しない³⁴。要は、ボザンケがある政策を積極的に唱導するのではなく、前述のように「悪しき哲学」を告発しかつそれに基づく政策を論難する、という消極的な形で自らの現実政策観を展開している、ということである。

2. 政治哲学

では、このような哲学を背景として、ボザンケの政治学・政治哲学はどのようなことを目的とするのであろうか。第一に、それは前述のような「全体」との関係の中で政治現象を分析するということであり、科学的に政治現象を分析するという現代政治学的な視座は放棄されるということである。この点を、ボザンケは、前述の「具体的普遍」に至る認識過程に言及しながら解説している。ボザンケはいう。

「諸君が最初大都会を訪れるなら、それは諸君にとって珍しく見えるに違いない。街路、大きな建物、人をうろたえさせる群衆と、すべてそれらは珍奇である。そのうちに諸君は事物の外観に見慣れてくるようになり、そして意味のある諸々の細部に注意するようになる。諸君は、外観から観察を始めて市街の事物が諸君の注意をひく。そして徐々に諸君は市街の事物がどのように関係しあっているか、また様々な人々が自分の生計を立てる方法、したがって近隣の様々な人々に付与された性格というものを知るようになる。諸君は、より深く調べて人々そのものを研究するようになる。そして諸君は、眼前に接する事物の来歴由来について、つまり経済、社会改革、住宅、救貧法などについて熱心な研究者が書いたり教授したあらゆるものを調べようとする。これは諸君の経験の第二段階である。多くの人々、そして多くのロンドン人はこの段階には決して到達していない。それからさらに諸君が自己の興味を持続けるならば、経験の第三段階が諸君の前に開かれてくる。諸君は市街や商店の生活、そして夜、路面電車の周りに群がる群衆の生活、さらに人々の家庭に与える影響に回帰する。そしてこの大都会の顔貌が何事かを語るように見えてくる。(中

略)一言にして言うならば、それらが象徴的になってくる。すなわち、その背後に偉大な生命 (a great life) が通っていることを諸君に対し言い表すようになってくるのである。」(強調-ボザンケ)³⁵

この場合、第一段階、第二段階の都会の観察は、我々の常識や科学と名付けられるものを意味し、第三段階によって獲得されるものが「哲学的知識」である³⁶。つまり、「大都会」の中でさまざまな人間や人間模様、その生活や社会における制度や現象を、それ自体のまままで分析するのではなく、「大都会」という「全体」、あるいはそれらの「背後」にあるものをも視野に入れながら観察・分析・検討し、それらの役割や目的、性格などを描き出すという作業が、ボザンケのいう政治哲学の課題である。コウカー (Francis W. Coker) の指摘に従えば、ボザンケの政治思想とは、人間及び人間の諸制度を、現実の現象からというよりはむしろその本来の性質や目的に従って判断、定義するものである³⁷。それゆえ、社会やさまざまな現実の社会制度を、社会全体の枠組みの中で、その本来の性質や目的にまでさかのぼってその「あるべき姿」を示すこと、ボザンケの言葉では「真実なるもの」としての reality を剔出することこそ理想主義的政治哲学の立場である。

ところで、ボザンケのこうした現実社会への視座は、哲学が分析の対象をあくまで今眼前にある世界とし、「来世」やユートピアといった別世界を対象としないのと同様、政治哲学における一元論的視座を示している。そしてこの場合、ボザンケにとって、政治における今眼前にある現実そのものとは「国家」であり、政治哲学における最も重要な分析対象も「国家」に絞られる。したがって、ボザンケの場合、政治哲学はそのまま「国家論」の体裁をとり、またそれは、現実中存在する「国家」を、前述のような一元論的視座、つまり「現実」に胚胎する「あるべき姿」＝「理想」を剔出しようとする観点から分析する「哲学的国家理論」である。ボザンケはこの点を、「政治哲学の目的」に関連して以下のように述べている。

「多くの人が“理想的な国家”と呼ぶものを描くことが、政治哲学の目的対象ではない。(中略)政治哲学の目的は、国家とは何か、を理解することであり、そしてこの目的にとって必要なことは、分析される国家が“理想的”である、ということではなく、ただ、それが国家である、ということだけである。」³⁸

つまり、ボザンケの政治哲学＝国家論は、現実にはない完全に理想的なユートピアとしての国家や、反対にイギリスやドイツといった完全に現実的な特定国家を扱うものではない。それは、現実にある国家それ自体を対象とし、国家の一般的な属性を叙述しながら³⁹、その「あるべき姿」を描くことを目的とするものである。ミドウクロフトの指摘を用いれば、それは「一般的な国家概念」(the State)を論ずるものである⁴⁰。

ただ、ボザンケの政治哲学が哲学と同様に一元論的な視座をもつとしても、それは哲学におけるように「絶対者」について議論するものではない。むしろ、ボザンケは、スイートが指摘するように、自己の政治哲学では「絶対者」への言及を避けながら⁴¹、それを政治哲学の領域で独自に言い換えて自己の議論を展開している。すなわち、それは「最善の生

活」(the best life)⁴²であり、「共通善」(common good)⁴³である。「共通善」とは、元来、トマス・アクィナス(Thomas Aquinas: 1225-1274)によって定礎された概念(「共通善」=bonum commune)であり、それは政治社会を構成する人々の個々の善の総和ではなく、むしろ政治社会の質的な意味での「善き生活」に関わるものである⁴⁴。アクィナスは、「共通善」の実現に理性的・社会的動物としての人間の特性を求めたが⁴⁵、この点はボザンケも全く同様であり、後述のように、彼は「共通善」の概念を通じて、道徳と政治を結びつけながら「自己実現」の内容を表し⁴⁶、同時に個人と個人の生存の場としての社会との結びつきを表現している⁴⁷。いずれにせよ、ボザンケの政治哲学が、前提的に「共通善」あるいは「最善の生活」が実現した状態を最高のものと位置づけ、それとの関係の中で「あるべき」国家の像を描くものであることが、ここから理解される。

ところで、このような手法で彫出されるボザンケの国家像が、前述の哲学と同様に、現実の生きた社会や人間と何ら関係を持たないはずがない。ボザンケは、前述のように哲学は「いかに経験すべきか」を人間に教示することで一種の規範性を帯びると論じていたが、彼はこの「経験」に関して以下のように説明している。

「そして我々が経験するものは、我々がそうであるところのもの、つまり精神を身につけているという我々の状態、そして諸観念を受け入れる我々の能力にかかっているのである。」⁴⁸

このように、ボザンケにあつては、経験の問題はそのまま意志や精神の問題となる。つまり、前述の「絶対者」にしても、それはガウス(Gerald F. Gaus)の指摘のように、人間の「精神」の完成した状態、つまり完全な「精神」を意味するものであり⁴⁹、また政治哲学における「共通善」や「最善の生活」も、結局は人間の精神レベルにおいて達成されるものである。それゆえ、ボザンケは「共通善」や「最善の生活」の実現を精神のレベルから言い直して、それを「人間の魂の卓越」(the excellence of human souls)⁵⁰、あるいは「人間の人格の完成」(the perfection of human personality)⁵¹とも呼んでいる。

しかし、人間の経験の問題がそのまま意志の問題であるならば、前述のような哲学の規範性の問題、すなわちボザンケのいう「いかに経験すべきか」の問題は、結局「いかに意志すべきか」という問題に帰着することになる。そしてこの点の検討こそ、ボザンケの政治哲学において支柱をなすものである。ボザンケは、政治哲学および社会哲学の性質を次のように論ずる⁵²。

「他方、哲学は、社会を論じる際、個人と普遍的なるものとの関係を扱わねばならない。(中略) こうした点すべてにおいて、社会を論ずる哲学の見解は目的論的(teleological)である。換言すれば、社会を論ずる哲学は、生活の完成ないし真実なるもの(reality)におけるレベルの相違あるいは程度の相違を承認する。また社会を論ずる哲学は、社会的な援助(aid)によっていつ、どのようにして、そしてどのくらいまで人間の精神が、自らにおいて成り得る最善のものを達成するか、に関して指摘するように努めるのである。」⁵³

つまり、人間の意志がどのような過程を経て「最善のもの」になりうるかを「目的論」

的に示すこと、あるいは人間の「意志」の不完全性、相対性、誤謬性を視野に入れ、それを前提にしながら、それと「共通善」「魂の卓越」や国家との関係を明らかにすることが彼の政治哲学の主要な課題である。それを個人の面から言い直せば、いかにして不完全な人間が国家という現実の中で、またその影響を通じて「魂の卓越」に達しうるかということ、また国家の面から言い換えれば、いかにして国家や社会は人間の意志の成長・発達への道徳的貢献を通じて、その意志の完成＝「共通善」を実現させ得るか、ということを検討するものである⁵⁴。その意味で、ボザンケの政治哲学は、人間の条件それ自体に関するより広範なヴィジョンのなかに政治を位置づける試みであり⁵⁵、かつその人間それ自体が不完全であることから一面で規範的な性格を帯びたものである⁵⁶。ゲッテル (Raymond G. Gettell) が、ボザンケの政治思想を「倫理」と「政治 (学)」の統一・統合を目論んだものと指摘するのは、このためである⁵⁷。

そして社会や国家、社会制度を、「全体」という枠組みの中で、その背後にあるものや本来的目的にも目を配りながら分析し、それを「共通善」や人間の意志の発展という文脈の中であるべき姿として提示する、つまり現実の中に胚胎する理想を探求しながら、人間の意志がいかにこの理想に達し得るかを示そうとするこのスタンスこそ、ボザンケの政治思想を見るにあたって看過されてはならない決定的に重要な点である。以下、この点を銘記して、ボザンケの政治思想の中身を解きほぐしてゆきたい。

3. 「実在意志」と「現実意志」

ボザンケは、人間の意志の内容、そして発展に関する議論から論を起こしている。ボザンケによれば、我々が通常、意志するものは我々の真の意志ではない。ボザンケはそうした意志を「現実意志」(actual will) と呼んで次のように述べる。

「ある瞬間の、ある個人のその時々々の現実意志を考えてみよ。特に、その意志が、もしも文明生活 (civilised life) の文脈の中で我々が通例誤っていると断言する性質のものである場合を考えてみよ。例えば、それが感覚的な情欲 (sensual passion) の衝動であるとせよ。こうした衝動において、自己が永続的な充足を何ら見出しえないことは当然のことである。そうした衝動は彼をして空虚な存在へと変えさせ、そしてそのままにする。その衝動は、精神に対して新たな可能性の開拓も、偉大な安定ももたらしはしない。」⁵⁸

そしてボザンケによれば、我々が真に意志する事柄を得るためには、以下のようなプロセスが必要である。

「我々が意志する事柄に関しての完全なる陳述を得るためには、我々がある瞬間に欲する事柄が、少なくとも我々が別の瞬間に欲するものによって修正され、矯正されねばならない。そしてまた、こうしたことは、他者の欲するものとそれが調和するように修正かつ矯正しなければ為され得ない。そしてこれは他者に対しても同様のプロセスが適用される。しかし、相当の程度のこうした修正や矯正が経験されたのなら、我々自身の意志は、最初の状態では分からないであろう形で我々の下に戻ってくる。(中略) そしてそれが、全体と

して我々がどうにか成し遂げている生活だけではなくて、観念的に矛盾のない生活を表すように補足調整されるのならば、我々の意志は、我々が知っているものとは掛け離れたものとして表れてくるであろう。それらを理性的な形に至らせるために、多くの既存の心的事実(data)を理性的な形に至らせるためにそれらを調和させ、再調整するこうした過程は、批判(criticism)により意味されるものである。」⁵⁹

そのうえで、ボザンケは、人間の真の意志を「実在意志」(real will)と呼び、「批判」との関係を下のように論ずる。ボザンケはいう。

「批判が我々の現実意志に適用されたとき、その意志が我々の実在意志でないことを批判は示す。あるいは最もわかりやすく言えば、我々が真に欲するものは、ある瞬間において我々が意志すると我々が知覚するものとは別のものであり、それ以上のものである。(中略)そして、実在意志に近いものを得ることは、自然的、あるいは知的である批判および解釈のプロセスを含んでいる。言い換えれば、試行錯誤(trial and error)を通じての“自然淘汰”(natural selection)によってそれは進められ得るか、あるいはそれは偉大な精神の洞察によって好都合な瞬間に敏速に進められ得る。」⁶⁰

さらに、ボザンケは「実在意志」を「実在自己」と呼び変え(ボザンケは「意志」の概念を「自己」の概念と同等に扱っている⁶¹)、それを「現実意志」ないし通常の人間の意志と対置させて次のように論ずる。

「平均的個人、すなわち、我々各々が自分をいつものトリビアルなムードの中にあると理解するような者—そのとき、彼は自分自身の私的な利害と娯楽を除いては何も理解していないか、もしくは理解しているとは考えてはいない—は、もはや実在的な自己として受容されえない。」⁶²

しかし、ボザンケによれば、この「現実自己」も、前述のように「批判」を経た結果、より「実在的」な「自己」へと変貌を遂げることが可能である。ボザンケはいう。

「それゆえ、我々は、より一般的に、我々の平均的な私的存在を超えて広がる自己ないし生活に関して、次のことを理解する。すなわち、それは、我々が今そうであるところのものよりも実在的であり、そして我々がそれと我々自身を同一化させるに比例して、我々は我々自身が実在的であると唯一感じるのだ、ということである。」⁶³

こうして、ボザンケは、人間は意志の内部における「批判」、あるいは「修正」「矯正」を経ないかぎり、真に意志する事柄を意志し得ないと論じ、「批判」を、一時の感情に駆られた非合理かつ不完全な「現実意志」を「合理的な形」へと至らしめる契機として把握するのである。

しかし、このように示された「実在意志」と「現実意志」は、ボザンケの場合、全くの別物ではなく、コインの裏表のように人間の意志の両側面として理解される。つまり「実在意志」とは、ニコルソンの指摘のように、いわば不完全である意志＝「現実意志」に対して、その意志の完全な形のものである⁶⁴。ボザンケはいう。

「我々の意志は、狭隘で、恣意的で、自己矛盾に満ちている。〔しかし〕それは“真の”、

あるいは“実在的な”、あるいはまた“合理的な”意志である。」⁶⁵

このようにして、ボザンケは人間の意志の二側面を「実在意志」と「現実意志」として描写して、人間の「合理」と「非合理」、「真実」と「虚妄」といった対立、及び人間の意志における「実在」と「現実」の緊張状態を指摘しながら⁶⁶、各人にとっての「目的」を各人の「真の意志」に達することとするのである。それゆえ、ボザンケの示す「現実意志」と「実在意志」は、個人の意志の二つの段階・程度であり⁶⁷、またそこでの意志作用は、ガウスの指摘のように、いわば「自己完成」のための「陶冶」(cultivation)である⁶⁸。

ところで、ボザンケの以上のような「実在意志」の規定には、ファネンスティルの指摘のように、いわゆる「命令的義務」や「良心」を彷彿させるものがある⁶⁹。つまり、ボザンケの言う「実在意志」とは、ヴィンセントの言うように、多かれ少なかれカントの「定言的命法」(the categorical imperative)に符合するものと言える⁷⁰。事実、ボザンケも以下のように述べている。

「理性的存在としての我々の本性は、したがって実在意志もしくは合理的意志の、我々に対する命令的要求(imperative claim)を暗に意味する。」⁷¹

「我々の実在的自己は、(中略)ある意味で我々が今そうであるところのものではなく、我々が我々に対し命令的(imperative)であると承認するものでありうる」⁷²

だが、そうであるならば、それが「私」という「個人」の意志に関する事柄であることから、その内実がカント的な「当為」(Ought)の領域に留まり、それゆえ彼の議論は単に無内容で空疎な「義務論」に終始するものだとの批判を招きかねない。しかし、ボザンケによれば、「より偉大な存在」は、「より十全な内容を持たねばならない」⁷³ものであり、実際、彼はこうした空虚な「義務論」との批判を、前出の「批判」の中身を検討することで回避している。ボザンケは「批判」を以下のように定義する。

「“批判”をするということは、部分(part)を全体(the whole)との正当な関係に、そして全体と調和した関係に調節することである。」⁷⁴

「部分的の要素(a partial element)を全体(the whole)との統一へと調整することが、批判の本質である。」⁷⁵

それゆえ、「全体」との関係を視野に入れない、純粹の「自己」ないし「意志」はボザンケによって否定される。ボザンケはいう。

「抽象的な『私』(I)もしくは想定された純粹自我(pure ego)は、我々の助けとはならない。」⁷⁶

つまり、「批判」とは、各人の意志の内部で自己完結し、外界との関係を遮断した内的な「批判」ではなく、「他者」や「全体」を視野に入れた上での内的な「批判」である。それゆえ、各人が真に意志するものを獲得するためには、「他者」や「全体」も考慮されねばならない。そしてその限りで、ボザンケの場合、「個人の意志は全体に依拠」し、「全体とは個人の意志の真の性質」を表すものである⁷⁷。ボザンケはいう。

「人間の精神、もしくは自己は、自らの世界意識(world-consciousness)との関係の力で、

そしてその関係が全体としての世界 (the world as a whole) に関する理解を通じて実現化される限りにおいて、永遠なものであると語られるようになる。」⁷⁸

「精神が全体として物事を意志しているとは語られ得ず、精神を充足し得ない諸目的に心を奪われる場合に、精神が、自ら意志する事柄を為しているとは決して言われえず、そして精神は自らが強制の下にあり、奴隷となっていることを感ずるのである。」(強調・ボザンケ)⁷⁹

かくして、ボザンケは、「批判」を「全体」を視野に入れたもの、そして「全体」を各人と相反するのではなくむしろ各人の真の意志を顕現させる場として理解するのである。それゆえ、「実在意志」とは「全体」と符合した我々の真の意志であり⁸⁰、かつボザンケにあつては「論理とは単に全体への衝動と同一物である」⁸¹ことから「論理的」な合理的・普遍的意志である⁸²。ボザンケは「全体」との調和へと向かう人間の意志を以下のように説明する。

「我々にとって精神の特性とは、調和と完全性の達成に向かって苦心している経験の世界であることである。」⁸³

さらに、ボザンケによれば、「批判」は各人に「他者」の意志や欲求を顧慮するように強いることから、各人にとっての「善」(good) もまた「批判」を通じて「他者」の「善」と調和され、社会の他のメンバーとの共同生活も可能になる。ボザンケは、「善であることを欲することと、善き人々の社会と一緒にあろうと欲することは、我々の生活の核心である」⁸⁴として、次のように述べている。

「我々は、私自身を超えて広がる善が、一般的な善、あるいはある人自身および他者と共通の善として適切に描かれるのかという問題にあまり関与する必要はない。(中略) 我々は以下のことを肝に命ずるべきである。すなわち、思考と言語は私と私自身を結び付けるが、そのことは、それらがまさに私と他者とを結び付けるのと同じであること、また、思考と言語は、私の仲間と私自身との間の交際を可能にするのと同じように、私自身の生活を全体に結び付けることで私の存在を拡張している、ということである。したがって、私が目的とする善は、種々の点で私の平凡な自己、一時的な自己を越えて広がるものであり、言い換えれば、その善は特殊 (particular) としての自己に対立する普遍的な善である。」

⁸⁵

こうして、ボザンケは、「批判」を通じて、各人にとっての善であり、かつ「全体」にとっての善である「共通善」を実現することが可能であると論ずる。そしてこのことは、前述のように、「最善の生活」「魂の卓越」という目的が達成されることも意味している⁸⁶。

以上、ボザンケの「実在意志」、「現実意志」、そして「批判」の概念を検討してきたが、これをプリモラツ (Igor Primoratz) の「私の意志作用」という観点からの説明を用いてまとめるならば、次のようになろう。すなわち、私の「現実意志」は自己中心的かつ利己的であり、それは「他者」から私を引き離し、ときには「他者」との衝突さえもたらすものである一方で、私の「実在意志」は社会的であり、それは私を「他者」と協同せしめ、「協

同」を可能ならしめる諸規則に従うものである⁸⁷。つまり、ウアンの指摘のように、ボザンケは、人間の意志は「批判」を通じて自らの「現実的」な欲求や衝動を「全体」との関係で体系化するとき「実在的」そして「合理的」になる、と論じて⁸⁸、単に人間の欲望等を抑圧するという狭隘な主張のみならず、「全体」を顧慮したいわば広範な見地からの人間の意志作用＝「批判」論を展開するのである。ここにボザンケのいう「実在意志」が、純粹自己の空虚で無内容な「義務論」に留まるものではないことは明白である。

4. 「一般意志」

次に、ボザンケは「一般意志」(general will)に関して論究する。ボザンケは、人間の意志の原理と、社会の意志の原理とを同一に扱い、人間の「精神」と「社会」とは、「実際には異なった視点から観察された、同じ組織」であると論ずる⁸⁹。ボザンケはいう。

「従って我々は、あらゆる社会集団は、(中略)個人の精神に付随している一連の精神体系の、空間と時間における相(aspect)であるとはっきり言い得る。我々はこうした概念から、個人の意志あるいは活動的な意志の本性に関して、そして社会全体あるいは政治的統一の本性に関して、その両者に関してコロラリー(推論)を抽出することができるのである。」⁹⁰

それゆえ、ボザンケは、社会的観点から捉えられた合理的意志、つまり「社会」における「実在意志」が存在すると論じ、その意志を「一般意志」と呼ぶ。そしてボザンケは、この「一般意志」が人間社会において現実に存在することを、人間の心理および社会の組織形態とを比較検討することで論証している。ボザンケは、集団形成(group-formation)の一形態として「組織」(organisation)と「結社」(association)を挙げ、「結社」を以下のように解説する。

「「結社」という言葉は、それまでバラバラで再びバラバラになる可能性をもつ種々の人間単位(units)の意図的な集合を暗に意味する。」⁹¹

同時に、ボザンケは、「結社」である association という言葉が、人間の心理における「連想」をも意味するものであることから、集団形成と人間の心理を同一線上に考えて次のように述べる。

「友人たち(companions)の結社、そして観念の連想の両者は、種々の特性のある一般的な連関(connection)がそこにおいて作用しているところの諸傾向であり、そして自らを現実の環境の詳細を通じて表すところの諸傾向である。」⁹²

しかし、ボザンケは、こうした「結社」および「連想」はある種の「偶然性」に支配されたものであると主張する。ボザンケは言う。

「より完全な類いの連関と比較すると、こうした結社・連想は、偶然的なもの、そして単なる並置(juxtaposition)の機会によって決定され则认为られる。」⁹³

つまり、ボザンケによれば、その連関の形態に鑑みるならば、「結社」は組織としての、また「連想」は心理としての偶然性、脆弱性を内在させているものである。他方、ボザン

ケは、「結社」とは異なる「組織」を、「軍隊」と関連づけながら次のように論ずる。

「軍隊は一つの機械、あるいは一つの組織である。そしてそれは一方において将校（officers）に具体化される生きた観念（operative ideas）によって団結させられ、また他方において、すべての人間を自発的にしかつ隣人の刺激によってではなく将校の命令によって確定させられるようにする、訓練済みの能力（the trained capacity）と服従の習慣とに具体化される生きた観念によって団結させられている。軍隊が行うことは、将官（General）の計画により決定されるのであり、群衆（crowd）におけるような、人間から人間への彼ら自身で伝達する影響によってではない。換言すれば、すべての人間単位は、偉大なる全体（a great whole）の諸動向に鑑みて動くのである。」⁹⁴

さらに、ボザンケは、この集団形成としての「組織」の議論を人間の心理に応用し、「組織」における「生きた観念」を、心理学での「スキーム」（scheme）と呼び換えて、次のように述べる。

「そして連想と対立する組織化によって、我々は、個々の要素（particulars）が所属する体系的集団のスキーム、もしくは一般的性質によってそれらが決定されることを意味する。」⁹⁵

そしてボザンケによれば、「生きた観念」で統御された人間集団、あるいは「スキーム」で統御された人間の心理こそ、前出の「結社」よりも高く評価される人間集団であり、「連想」よりも高く評価される心理状態である。ボザンケはいう。

「精神において、そして同じく外的世界において、連想および結社のより高位の段階が組織化であり組織である。組織化および組織の特徴は、種々の構成単位の並置による影響力とは反対の、一般的なスキームによる支配にある。」⁹⁶

そしてこの「結社」「連想」と「組織」「組織化」とのボザンケによる二分法こそ、彼の「現実意志」と「実在意志」との関係にほかならない。ファネンステイルの整理に従えば、ボザンケの議論では、人間の「連想」的な意志は「現実意志」が意味され、人間の「組織化」的な意志は「実在意志」が意味されることになる⁹⁷。つまり、ボザンケが「組織」「組織化」を高く評価するのは、それが「部分」が「偉大なる全体の諸動向」に鑑みて動く「実在意志」的な人間心理であり、また「実在意志」的な集団形成であるからである。

さらに、ボザンケは「組織」および「組織化」に見られる「スキーム」による支配を、心理学の用語である「統覚」（apperception）の概念を用いて説明する。「統覚」とは、心理学では、新しく意識に入ってくる内容が、既存の表象によって統一化されることであるが、ボザンケは、この概念を用いながら人間の精神について次のように述べている。

「精神の内容を形造る心理学的なエレメントは、統覚量（apperipient masses）もしくは統覚体系（apperipient system）として知られるものを構成するほど、非常に深遠でかつ相互に連結される。」⁹⁸

そしてこのように理解される人間の精神を、ボザンケは「スキーム」と結び付けて次のように述べる。

「あらゆる体系、あるいはこの種の集団は、心理学において“統覚量”と呼ばれる。その理由は、それは共通の法則ないしスキームによって結び付けられた諸観念の一团であり、そしてそれは、問題となっている体系が活動的である限り、知覚（perception）がそこから起こるであろう視点を指図するからである。そして“統覚作用”なしでは、つまり新たに帰着する事柄（the new comer）が分類されるのを可能にする精神におけるある視点なしでは、知覚は全く存在し得ないのである。」⁹⁹

「あらゆる個人の精神は、それが一定のスキームないしコンテクストにおいて思考し、かつ行動する限りにおいて、統覚量もしくは組織された気質（dispositions）の構造である。」

100

かくして、ボザンケは意識に明瞭に出現する表象群の量としての「統覚量」が、「スキーム」によって連結された諸観念であり、その関係はあらゆる個人に充当され得ると論ずるのである。

さらに、ボザンケは、前述のように、人間の意志の原理と社会の意志の原理とを同一に扱って、こうした人間の心理に関する議論をそのまま「社会」の「精神」ないし「意志」の議論に応用する。ボザンケは、個人的心理の「統覚量」を支配する「スキーム」の代わりに、「社会」における「スキーム」として「支配的観念」（dominant ideas）という概念を提示し、以下のように述べる。

「諸観念は、外界を形造る現実の諸状況及び肉体的な諸活動を反省する内なる世界（the inside）である。その結果、あるコミュニティの成員によって分け持たれた共通の生活は、彼らの観念において共通の諸要素を含んでおり、それも単に彼らの周囲の事柄に関する意見のみならず、ここが非常に重要な点だが、特に彼らの精神を支配する支配的観念、もしくは組織的観念（organizing ideas）において共通の諸要素を含んでいるのである。」¹⁰¹

そしてこの「社会」におけるこの「支配的観念」こそ、ボザンケのいう「一般意志」である。ボザンケは「一般意志」を次のように規定する。

「我々は、コミュニティの一般意志と、その成員の位置や役割を決定する、支配的観念の生きた全体的体系（the whole working system of dominant ideas）とを同一視することができる。」¹⁰²

こうして、ボザンケは心理学的、組織論的観点から「一般意志」を捉え、それを「組織化」という個人の心理作用における「スキーム」に相当するもの、あるいは「組織」という人間集団における「支配的観念」に相当するものとして、それが現実存在することを強く主張するのである。

しかしながら、ボザンケのいう「一般意志」は、それが個人ではなく社会における真正な意志であるとしても、個人の意志に基礎づけを持たない意志、つまり個人の意志の領域を超越したいわば「超個人的な意志」（super-individual will）ではない。ボザンケはいう。

「誰の意志でもない意志がどうしてありえるであろうか？ また私が全く認知していない意志、あるいは私がそれとは逆のものである意志、そうしたものがどうしてありえるであ

ろうか？」¹⁰³

それゆえ、「一般意志」もまた「個人」において意志され、知覚されるものである。ボザンケはいう。

「一般意志は、コミュニティを形成する個々の人間の精神においてのみ、一つの精神として存在する。」¹⁰⁴

「しかし、一般意志それ自体は、生きた体系として考えられる諸個人の精神の全体的な集合であり、それは相互に対応している諸部分をもち、またこうしたすべての諸部分それ自体のために、結果としてある種の生命を生み出している。」¹⁰⁵

こうして、ボザンケは「一般意志」を心理学的・組織論的に考察しながら、そうした社会的な意志が実在することを論証し、またそれは決して個人の意志を離れたいわば実体的な意志ではないことを示すのである。

ところで、こうした「一般意志」の議論、および集団形成の議論は、ボザンケの場合、そのまま「社会」や「国家」の議論に発展する。ボザンケは、人間集団としての「結社」は真の「社会」、つまり「社会それ自体」に相応しい名辞とはいえず¹⁰⁶、「組織」こそが真の「社会」、そして真の「国家」を表現する術語であると論ずる。ボザンケはいう。

「したがって、我々は以下のことを理解する。すなわち、精神と社会、あるいは国家は、組織であることの特徴において全く同一である。(中略) 単なる結社の原理で説明しうるような、生きた組織としての精神やコミュニティは存在しない。」¹⁰⁷

つまり、ボザンケによれば、「国家」や「社会」は「組織」として「一般意志」をもつものである。では、「国家」や「社会」において「一般意志」はどのように具体化されるのだろうか。その点をボザンケは、最初に「法」と「一般意志」との関係を論ずることで検討している。

5. 「法」「立法者」

ボザンケは、「一般意志」ないし「実在意志」は「法」(law) に具体化され、「一般意志」=「実在意志」の手掛りは「法に組み込まれた社会精神」の中に探求されると論ずる¹⁰⁸。そしてボザンケは、この「一般意志」の「法」との関係をルソー (J. J. Rousseau: 1712-1778) の「一般意志」(volonté générale) の概念を検討することで明らかにしている¹⁰⁹。ボザンケは、政治思想史上、あるいは哲学史上において、「真の政治哲学の復興は全体として 18 世紀の業績であった」として、ルソーをその代表者として挙げている。そしてそれは、ボザンケが、ルソーの著作、特にその「一般意志」の議論に「人間の本性に関する十全な概念の実際の復興」を見ていることに起因している¹¹⁰。ボザンケによれば、前述のような「一般意志」の概念をはじめて提示したのはルソーである。ボザンケはルソーの「一般意志」を次のように説明する。

「ルソーのいう一般意志は、社会全体の“それ自体”の意志であるか、あるいはすべての諸個人が共通善を目指す“限りにおける”彼らの意志である。(中略) したがって、ルソ

ーが一般意志の概念をもって真に目指していたものは、意志“それ自体”、あるいはもし意志の本性が暗示し、要求するものを実行するのなら、そうなるであろうところの意志である。」¹¹¹

「善であり、また必然的に共通善であり、また本質的な統一でもあるものへのこうした不滅の衝動は、(中略)ルソーが一般意志に関する彼の説明の中で、彼の眼前で明白に示されるものである。」¹¹²

「ルソーのいう一般意志は、最終的には、その善が共通善の形態をとる限りにおいて、知的存在の自身を越えて広がる善への根深い衝動であるように思われる。」¹¹³

こうして、ボザンケは、ルソーの示した「一般意志」を「共通善」を目ざすものと捉えて、それが、ボザンケ自身が示した「実在意志」や「一般意志」と基本的にほぼ同一であることを示す。ボザンケはいう。

「ルソーが彼の一般意志の概念の中で彼の眼前に持したものは、“意志それ自体”ないし実在意志として描かれるものである。こうした概念はすべて実在意志と現実意志とのコントラストを内に含んでいる。」¹¹⁴

「ルソーの見解の違う側面を考えた場合、彼が、人間のある瞬間の意識において全体として示されうるものと、実在意志との間の著しいコントラストを非常に明確に心に抱いていたことは、極めて注目に値する。」¹¹⁵

かくして、ボザンケは、「共通善」を目的とする意志の原型をルソーの「一般意志」に見出して、その議論を高く評価する。ボザンケが、トゥツァー (H. J. Tôzer) の手による『社会契約論』の英訳版への序文の中で、「“権力ではなく意志が国家の土台である”という原理が、プラトンとアリストテレスを除いてという括弧付ではあるが、ルソーによって以上に効果的に発表されたことはない」¹¹⁶と述べて、ルソーを高く評価しているのも、こうした背景による。

しかしながら、ボザンケはルソーの「一般意志」の議論を全面的に礼賛しているわけではない。ボザンケはいう。

「しかしながら、ルソーが一般意志の用語を用いて表明した政治体系には絶対的不可能性が存することを認めなければならない。」¹¹⁷

では、ボザンケにとって、ルソーの議論はどの点が不足していたのであろうか。この点こそ、実はボザンケの「一般意志」の概念をルソーのそれから区別するものであり、かつボザンケにおける「一般意志」と「法」との関係が明確に示されるものである。ボザンケによれば、ルソーは「一般意志」の概念を提示し、「公共善 (le bien public) という目的に実際に向かっていない法はいかなるものでも有効ではない」¹¹⁸と論じてはいるものの、ルソーの議論では「一般意志」の「法」への真の具体化が実現されていない。つまり、ボザンケとルソーは、「一般意志」は「法」に具体化されるとする点では一致しているが、しかしその具体化に関して、ボザンケはルソーの議論を不完全かつ誤謬と断ずるのである。ボザンケはいう。

「ルソーの理論は、ルソーがそれを示した形態ではものにならない。ベンサムが軽蔑して言ったように、彼の学説は、おそらく、サン・マリノ共和国の法を除いたすべての法を無効なものにするであろう。」¹¹⁹

そしてボザンケによれば、こうしたルソーの誤謬は、彼の『社会契約論』(*Le Contrat Social*)での議論の特徴でもある¹²⁰、その直接民主制の唱導・代議制批判に求められる。ボザンケはいう。

「この問題について、ルソーの主張の中で決定的に重要な点は、彼の代議政府(representative government)への敵意、そしてその結果として、共通善に向けられた意志の真の表現を唯一保障する小さなコミュニティと直接集会(primary assembly)の要求である。彼のよく知られた言葉に従えば、“イギリス人は総選挙の間のみ自由である”というものである。」¹²¹

しかし、ボザンケによれば、こうした直接民主制という制度のみを経て生まれた意志は、実際にはルソー自身が批判していたはずの「全体意志」の類のものであり、「一般意志」の表出ではありえない。ボザンケはいう。

「こうしたルソーの主張すべては、以下のこと、すなわち、ルソーは一般意志の諸兆候を指摘しようと努力するとき、実際には、全体意志を王位につかせている、ということを明白なものにしている。彼は、市民団体を構成するすべてのメンバー各々から、外的な影響や利害によって汚染されない直接の意見を抽出することに目標を置いている。この目標において、彼の精神に現れているものは、もちろん古代都市国家に関する一般的な観念である。しかし、ローマ、そしてアテネにおいてすら、現実の諸制度の機構はこれよりもはるかに巧妙かつ複雑なものであった。特に、近代国民国家の生活によって表現される共通善の核心であるところのものは、その深遠で複雑な組織である。(中略)共通善を表現するための装置を、市民団体全体の諸メンバーの孤独かつ単独でなされた判断というものにしてしまうことで、ルソーは、彼が目指すと公言するものとはまさに反対のものを確保してしまうのである。彼は、ある国民全体(nation)の組織された生活、諸制度、そして上質の能力から、孤立した諸個人の集合体と見なされる民族へと訴えを変えつつある。それゆえ、ルソーは国民全体の精神(national mind)ではなく、彼が自ら全体意志として叙述した私的利益または私的観念の集合体を、主権者として王位に付けているのである。」¹²²

つまり、ボザンケは、ルソーの「一般意志」論を高く評価するものの、『社会契約論』で展開されたような「一般意志」の「法」への具体化、すなわち全人民が参集して「法」を決定するというプロセスでは、結局「一般意志」がバラバラな個人、つまり完全に孤立した「市民」(citoyen)の単なる集合意志に帰着してしまい、ルソーが提示した「一般意志」と「全体意志」との区別も無効化されて、真の「一般意志」の表現は得られないと論ずるのである。「ルソーは、彼が鋭く指摘した誤謬から彼自身を解放するのに失敗している。」¹²³では、いかにしてボザンケは、ルソーの真の「一般意志」の表出における失敗を克服し、この点に関する謬見を克服するのであろうか。

ボザンケは、そこでルソーの「立法者」(législateur) 概念を手掛かりにしてその謬見の解決を模索する。周知のように、ルソーの『社会契約論』の中における「立法者」の概念は曖昧なものといわれ¹²⁴、その解釈もさまざまであるが、ボザンケはそれを前出の「批判」と結び付けて解釈し直す。ボザンケはいう。

「諸矛盾の除去および永遠的形態への具現化 (embodiment) によって一般意志ないし現実の社会精神を顕在化させる批判そして解釈は、本質的にルソーが立法者にあてがう仕事と同一である。そして彼の矛盾は、立法者は単に社会精神それ自体のさまざまな機関のうちのひとつであると我々が理解するとき取り除かれる。」¹²⁵

こうして、ボザンケは「部分」を「全体」へと調節する前出の「批判」の機能を、ルソーの「立法者」にあてがうのである。ただし、ここでボザンケが想定する「立法者」とは、『社会契約論』で示されているような、ある政体を生み出すために突如として現れる幻の「立法者」、ボザンケの言葉では「奇跡を実現する神的人物」ではなく、まさに現実の「立法者」、つまり近代の議会における「立法者」、すなわち代議士・政治家のことである。ボザンケはいう。

「これ〔一般意志を見出し、それを表現すること〕こそ、まさしく近代の代議制および立憲制 (un gouvernement moderne représentatif et constitutionnel) における立法者の仕事である。立法院 (le corps législatif) は、一般的な意向や見解を形成し、表現し、詳細な部分にそれを適用するための、人民により選ばれた委員会である。そしてこの目的は、選挙民の代表議会 (assemblée représentatif) であるために、彼らに、ほかならぬこの特殊な委員会を選ぶように決心をさせたものである。立法院の義務は、公共善〔共通善〕に適った意志を認定し、そしてそれを法の中に受け込ませることである。(中略) 私は、ルソーの一般意志の、理論の本当の精神、本当の意味というのはこれであると確信している。しかし、私は以下のことも認める。すなわち、もしルソーにこうした形での理論を提示して判断を仰ぐとしたら、おそらく彼は認めないであろうことをである。」¹²⁶

かくして、ボザンケは真の「立法者」の役目を、「立法者は人民のために本当の意志というものを発見し、そして彼らにそれを教える」ことに求め、ルソーの「立法者」の概念を大胆に読み替えるのである。それゆえ、ボザンケによれば、ルソーが「一般意志」の概念を提示しておきながら、その具体化に失敗する理由は、ルソーが議会制を唱導していないことに求められる。ボザンケはいう。

「一言でいえば、彼が考えたこととは、採るべきもっとも確実な方法は代議政府なしに、諸集団の統合なしに、宣伝の組織なしに、骨が折れかつ長時間にわたる議論なしに、個々の市民各々 (chaque citoyen individuel) の分離しかつ自立した判断を得ることであった。しかし、情報や信念が交わされる組織や議論というものは、まとめられ、ひとつの形とされるときは一般意志であるところの世論の生命そのものである。ルソーの精神はスパルタ、ジュネーブ、そしてローマ共和国で一杯である。巨大な近代国家において、一般意志を形成し、応用するのに必要なまさにその方法は、彼がカットし、そして放棄しているもので

ある。そうしたものは一般意志を根本まで墮落させる、と彼は考えているのである。」¹²⁷

このようにして、ボザンケは、ルソーの「一般意志」の概念を高く評価し、「一般意志」が「法」に具体化されるとする彼の議論に共鳴しながらも、その具体化の方法に関して不満を表明し、その真の具体化を近代の議会制、およびその「立法者」の任務と規定するのである。

ところで、代議制を全面肯定し、ルソーの表明した直接民主制を批判するボザンケの議論には、「一般意志」が国民投票のようなものでは見出しえないとの視座が内在している。事実、ボザンケは、次のように述べている。

「一般意志は、なにか一つの争点 (issue) についての投票によるコミュニティの決定と同一視され得ない。こうした決定はすべて一般意志の表現または結果であるが、しかしそれが真にどのような運動方針を表しているのか、を言明するには解釈を必要とする。端的に言えば、一般意志は運動している体系 (a system in motion) であり、一つの命題では表現され得ない。また投票という仕組みが一般意志の表現を獲得し得るものではないのは、一般意志は投票に具体化することのできる形では存在しないためである。」¹²⁸

また、ボザンケは世論 (public opinion) に関しても、「一般意志」は、「広く浸透した様々な意見」を含み得る「世論」よりも「はるかに多くのものを含む」として、「一般意志」は「世論とも同一視され得ない」と断じている¹²⁹。さらに、ボザンケはコミュニティ内にいて生ずるいわば意見の方向性や傾向に関しても、「しかし一般意志は、単にそうした事実上の (de facto) 傾向ではない」¹³⁰として、「一般意志」がいわば「時流」のようなものでもないことを示すのである。

以上から、ボザンケが「一般意志」が「法」に具体化されると論ずるだけでなく、積極的に代議政治、間接民主制を肯定していること、しかし国民投票のような直接民主制には批判的であったことが明らかになる。ボザンケがルソーの議論に追随しながらも、「一般意志」の具体化に関してルソーから大きく離れ、ボザンケのいう「一般意志」がルソーのそれに依拠しつつもかなりの修正が施されたものであることがここから理解される。

6. 「国家」

さらに、ボザンケによれば、「法」が「一般意志」および「実在意志」の具体化であったことから予想されるように、「国家」もまた「一般意志」および「実在意志」の具体化である。そもそも、ボザンケによれば、「国家」とは人間の「実在意志」「一般意志」、すなわち「共通善」や「最善の生活」を目指す意志によって形成されたものである。ボザンケは「国家」の形成に関して以下のように述べる。

「我々が示す必要のあるすべてのことは、以下のようなことである。すなわち、種々の国家を種々の国家として作り、かつ維持するものは意志 (will) であって力 (force) ではなく、また共通善の観念であって貪欲や野心ではない、ということである。そしてこの原理は、普通の市民の利己心、あるいは国民の運命を形作る人々の利己心によっては覆されな

いのである。」¹³¹

さらに、ボザンケは、「国家」が単に人間の野心や利己心といった「現実意志」によって生まれたものではないことを、ナポレオン（Napoléon Bonaparte: 1769-1821）を例に挙げて説明している。ボザンケはいう。

「ナポレオンの生涯によって提示された偉大な観念と目的は、彼の利己的野心に、それらの性質や存在を負うものではなかった。といて、何か非人間的原因にそれらを負うものでもなかった。すなわち、彼の観念および目的は、人間の精神以外の観念の作用に負うのでは決してなかった。それらは、種々の程度の道徳的洞察を伴いながら、社会の成長という固有の論理によって客観的目的へと向かった無数の〔人間の〕精神の作用を通じて生まれたのである。そうした観念や目的は、ナポレオンの目的と、その時代の観念の力によって形成された運動とを結びつける共通の性格に基づいて、ナポレオンの生涯によって促進されたのである。」¹³²

しかし、「国家」生成に関する意志の作用は過去のものだけではなく、現実の今ある「国家」およびその活動もまた「実在意志」「一般意志」の具体化である。ボザンケは、「実在意志」は「国家によって表現され」¹³³、また「国家」が「一般意志」の具体化であるとして、「国家」の本質、および「国家」と「個人」の関係に言及しながら、以下のように述べる。

「個人は国家において生活の形態、そしてそれ以上のもの、すなわち感情と意志作用の特殊な形態を見ると措定される。そしてその感情と意志作用の特殊な形態の中に、私的な人間たる個人は自らの精神の本質、及び自らと他者とを結び付けるなにもものかを見いだすのである。（中略）そして特に、国家は法や政治的憲法において表現される一般意志と同一視される。」¹³⁴

さらに、ボザンケは「国家」の「主権」（sovereignty）の行使に関しても、ルソーの議論に触れながら、それが「一般意志」「実在意志」の行使であると論ずる。ボザンケはいう。

「結論として、我々は国家の活動に関する理論全体を、次のようなルソーから受け継いだ文句でまとめうる。すなわち、主権は、一般意志の行使である、と。（中略）すべての国家の活動は根源的には意志の行使である。すなわち、実在意志、あるいは論理的に知性それ自体において意味されるような意志、そして多かれ少なかれ、知性に対し命令的であると承認されるような意志の行使である。」¹³⁵

かくして、ボザンケのいう「一般意志」や「実在意志」は、「国家」およびその「主権」によっても表現されることになる。

ところで、ボザンケの論理に従えば、「法」が人間の「実在意志」および「一般意志」の具体化であり、かつ「国家」や「主権」もまた人間のそれらの具体化であることから、各人がそれらに従うことは自らの真の理性的意志に従うことになり、いわば「自らが自らに従う」ことになる。言い換えれば、「法」や「国家」は、個別的な「自己」を貫流する「共通の自己」（a common self）としてもはや各人にとって無関係の「他者」ではなく、より高

位で理性的な「自分自身」である。ボザンケはプラトンに言及しつつ、このことを指摘する。

「国家は、プラトンが述べたように、拡大した個人精神 (the individual mind writ large) である。もしくは、すでに述べたように、我々の精神自身の本性に由来しつつも、しかしその欠陥を補うところの諸能力によって補強された我々の精神である。」¹³⁶

この点は、「自己」と「一般意志」の具体化である「法」との関係においても同様であり、「法」は「我々の真実の、あるいは普遍的な諸自己を示す可能性を開くもの」¹³⁷である。したがって、ボザンケによれば、こうした「法」を内包する「国家」という政治組織そのものが、我々を成長させ、発展させるものである。ボザンケは「国家」と各人の意志作用との関係を次のように述べている。

「国家は我々の生活の弾み車 (fly-wheel) である。その体系は常に我々に諸義務を想起させる。(中略) 我々は、諸義務を怠るような欲求をほとんど持たない。しかし、我々は指図 (instruction) や権威的な示唆を離れて諸義務を遂行するにはあまりに無知であり、怠惰である。我々は、最善の精神によって作られた制度、規則、伝統、探究により至る所で恩恵をこうむっている。そしてそれらは、国家活動を通じて、今や我々の我々自身の精神の発展として作用するような一形態となっている。」¹³⁸

つまり、ボザンケにあっては、前述の各人の内的な「批判」は「実在意志」と「現実意志」との間で生ずるものであったことから、「実在意志」「一般意志」の具体化である「国家」という政治組織はこうした「批判」を喚起するものであり、かつ各人も「国家」の中で「真の意志」「真の自己」に至り、精神的・道徳的発展を遂げることが可能となる。「国家の目的は、道徳的目的であり、国家の成員に対して命令的 (imperative) である。」¹³⁹そしてここから、ボザンケにとって、個人の精神の「拡大版」でもある「国家」の目的が、各人の「実在意志」が目的とする「共通善」「魂の卓越」「最善の生活」「人格の完成」と同じであることもまた明らかになる。ボザンケはいう。

「したがって、我々にとって、(中略) 国家の究極的な目的は、個人のそれと同じく、最善の生活の実現化である。」¹⁴⁰

「したがって、国家の目的は“個人”の目的であり、(中略) 意志の根源的な論理によって決定される最善の生活である。」¹⁴¹

さらに、ボザンケの議論に従えば、「国家」が「実在意志」「一般意志」の具体化であり、かつ「個人」と目的と同じくするものであることから、通常想起される「個人」「自己」と「法」「政府」あるいは「国家」との消極的・敵対的關係はここにおいて解消される。ボザンケはいう。

「(a) 自己と他の諸自己との消極的關係は、共通の自己の概念を前に融解し始める。そして (b) 自己と法や政府との消極的關係は、我々の陳腐で手に負えない気分と対峙する我々の実在意志を表現する法の観念において消失し始める。」¹⁴²

そしてここから、ボザンケは、「国家」と「個人」を巡るアポリア、すなわち個人はなぜ

国家に従わねばならないのか、という問題、ボザンケの言葉では「自治の逆説」(paradox of self-government) もまた解決されると論ずる。ボザンケによれば、通常言われる「自治」とは理論的に矛盾するものである。なぜならば、「統治 (government) は、実際 “一者” (the one) に対し “他者” (the others) により行使される強制として自らを現す」ものであり¹⁴³、「社会に関する見かけの観念 (the prima facie idea of society) において具体化される、自己と他者との間の絶対的な対立に依拠する」限り、「自己」と、「他者」としての「統治」との衝突・矛盾は避けられないからである¹⁴⁴。しかし、こうした矛盾・逆説は、ボザンケが示したような人間の意志＝「自己」と「法」「国家」の関係にあつてはじめて解決可能となり、同時に真の「自治」もまた実現しうる。ボザンケは「国家」という政治組織を、その「秩序」に触れながらを次のように論ずる。

「こうした〔国家における〕秩序は、われわれがあるべきものとして、つまり、われわれが、われわれの偶然的で私的な自己の怠惰、無知、あるいは反抗に対立するものとして承認する意志の体系ないし自己のある点までの具体化であるので、われわれは正しくそれを自治の体系、あるいは自由統治と呼び得る。換言すれば、その体系において、ある意味での我々が、別の意味での我々自身を支配する。それは我々のお互いが、あらゆる “他者” に従うのではなく、偶然的私的単位としての我々すべてが、合理的自己ないし合理的意志のある点まで表現する秩序に従うことによってそうなるのである。」¹⁴⁵

こうして、ボザンケは各人の遵法行為や「国家」の秩序への服従に人間の理性的命令への服従を見だし、そこに真の「自治」を理解するのである。

7. ボザンケの「一般意志」論

以上、ボザンケの「一般意志」の概念を、彼の「実在意志」論、ルソー解釈、「法」論、「国家」論などを検討することで究明してきた。そこでは、ボザンケのいう「一般意志」が「実在意志」と同一であること、また組織論・心理学の検討を通じて「一般意志」が実在すること、さらにその「一般意志」や「実在意志」は「法」や「国家」に具体化されることが明らかになった。加えて、こうした議論から、彼にあつては「最善の生活」や「共通善」という「個人」の目的が「国家」の目的と同一であること、そしていわゆる「自治」の矛盾、すなわち「国家」と「個人」の矛盾、あるいは「自己」と「統治」の矛盾が「一般意志」を通じて理論的に解決されること、さらに「国家」は各人自らの「実在意志」の具体化として「他者」ではなく自分自身であること、などが明らかになった。

こうしたボザンケの「一般意志」論は、モリス (Christopher W. Morris) の近時における指摘を待つまでもなく、ルソーらと並んで、政治的権威 (political authority) を意志に発するものと見なす「政治的ボランタリズム」(political voluntarism) の議論といえ¹⁴⁶、ボザンケは「国家活動」を各人にとっての「他者」ではなく「自分自身」の行為、つまり「実在意志」「一般意志」の行為とすることで、国家干渉の理論的な根拠を獲得することに成功しているといえる。要は、ボザンケは、いわば「法」「国家」「主権」を「実在意志」「一般意志」

に根拠付けることによって「個人」→「国家」の方向性を示し、他方、「法」「国家」「主権」を「大なる自己」とすることで、「国家」→「個人」の方向性を同時に示し、「国家」と「個人」の相互依存・相即不離の状態を「実在意志」「一般意志」の概念で説明しているのである。

無論、こうしたボザンケの議論には、これまで様々な批判が浴びせられてきた。例えば、ボザンケのいう「実在意志」に関して、ラスキは、各人の意志に「いかに不備や欠陥があろうとも、私の意志は取りも直さず私なので」あり、ボザンケのように「私が私の属する構成された社会が意志することを意志するときのみ、私は全体的に私自身たり得ると説くのは、全く人格の本質を見損なうものだ」として、ボザンケの議論を「単に修辞上の手品」と呼んで批判した¹⁴⁷。また、ホブハウスは、こうした「実在意志」の議論は、人間が“意志すべき”事柄に関する議論であるがゆえに、むしろ「実在意志」は「理想的な意志」と呼ばれるべきだと主張した¹⁴⁸。さらに、「実在意志」の延長線上に位置づけられるボザンケの「一般意志」の議論に関しても、ボザンケのいう「一般意志」は、個人の意志や選択から算定されたものではないがゆえに人間の集団の意志を「ミステリアスな実体」に仕立て上げるものだ、という批判が寄せられた¹⁴⁹。例えば、ホブハウスは、「一般意志」に見られる個人の意志と社会の意志との同一視を「ある人と他のある人の区別が失われ、従って社会関係に関する全ての問題が誤って論ぜられる」元凶として攻撃した¹⁵⁰。また、ラスキは「現実に意志される事柄は、必ずしも統合されてはおらず」、必ずしも「社会」に意志の「一つの必然的な統一」が「存在する訳ではない」¹⁵¹と批判した。また、プラムナッツ (J. P. Plamenatz) も同様に、個々人の様々な意志の「差異」における、「一般意志」のような「同一性」¹⁵²を指定すること自体が誤謬であると批判し¹⁵³、最近でもプリモラッツが「実在意志」的意志作用の存在は認めるにしても、そこにおいてボザンケが「一般意志」において描くような永続性や調和を前提にすることはないと批判している¹⁵⁴。

しかし、こうした批判にはいくつかの弱点もある。例えば、ラスキの先述のような批判は、そもそも理想主義の立場を考慮しない類の批判である。つまり、ボザンケがよって立つ理想主義の立場とは、現実の世界に胚胎する理想、すなわち現実の中におけるあるべき理想を求めるところにその思想的特徴があり、現実のあるがままの人間およびその人間の意志を扱いつつも、それが理想とするもの、その完全なるものを、前者との緊張の中で描くことがボザンケの政治思想の基本的立場である。しかし、それは、ホブハウスが示唆するような完全に「理想」の意志でもない。何となれば、理想主義の立場を具体化するように、ボザンケ自身、「実在意志」と「現実意志」とのコントラストを描いて見せ、いわば現実的な人間の意志論を展開しているからである。実際、ボザンケは、「一般意志」を、個人の意志に基礎づけを持たない意志、あるいは個人の意志の領域を超越したいわば「超個人的な意志」ではない、と指摘していた。つまり、ニコルソンの指摘のように、「一般意志」の実現とは「実在意志」の実現であり、個人の「実在意志」とは彼の内において表出する「一般意志」のことである¹⁵⁵。それゆえ、ボザンケの「実在意志」とは、現実的でありか

つ理想的な意志をいうものであり、彼の「一般意志」もまた、スイートの指摘のように、個人の意志を無視した超越的な実体ではなく、個々人の理性的な意志を通じてのみ存在し得るものである¹⁵⁶。むしろ、ボザンケは、パーカー（Christopher Parker）の指摘のように、「コミュニティ」などの「組織」は意志や精神を持つとしながらも、その諸観念の顕示、特に形を与える「起工観念」（ground-breaking ideas）は個々の人間によってでなければならない、と論じているのである¹⁵⁷。

しかし、「一般意志」を、批判者がこのように個人を離れた実体の意志と誤解するのもゆえなきことではない。何となれば、ボザンケは、こうした意志が「法」はもちろんのこと、「国家」や「主権」に具体化されると論じていたからである。たとえば、ホブハウスやブロード（C. D. Broad）は、ボザンケのいう「国家」と人間の「精神」および「意志」との関係そのものに着目し、「国家」は「精神」ではなく、また「精神」に基礎づけられるものでもないと批判した¹⁵⁸。また、ギンズバーグ（Morris Ginsberg）は、「国家」に「実在意志」あるいは「一般意志」が宿るとするボザンケに議論に疑問を呈し¹⁵⁹、プラムナツも、ボザンケを批判しながら、「法」は「文明が暴露した人間の最も不愉快な性質のいくつかを発現させ恒久化させた、少なからざる原因となっている」と論じた¹⁶⁰。また、ラスキも、ボザンケのいう「一般意志」が「国家」の「意志」であるならば、本来「国家」が必要としない権威、あるいは「国家」にふさわしくない権威を「国家」に持たせることになってしまふと論じている¹⁶¹。

しかし、言われたような批判もまた、理想主義の決定的に重要な点を看過している点でなお脆弱なものである。前述のように、そもそも、ボザンケの政治思想は、人間の精神がそれ自身において達成し得る最善のものを、現に存在する「国家」を見据えつつ、それらが人間の意志に及ぼす影響を考慮しながら、その理想形態を追求するものであった。それゆえ、人間の精神や意志と切り離して「国家」を見ることは、ボザンケ自身が定義した政治哲学の目的から逸脱することになり、そもそも彼の唱える理想主義的政治思想の立場ではない。また、現実の法や国家は、ボザンケのいうような「実在意志」「一般意志」の具体化ではないという批判に関しても、ボザンケからすれば、現に存在し、かつ機能している「国家」を、その最善の状態から考察し、同時に人間の意志作用との関係からもそれにメスを入れることが政治哲学の課題であったことから、彼の理想主義的な立場を無視している点で、有効な批判にはなっていない¹⁶²。

ただ、ボザンケが、「国家」を「実在意志」「一般意志」の具体化とし、また「国家」や「法」への服従を各人の「実在意志」「一般意志」の達成と理解して「国家」を高く位置づけているのは確かである。しかしだからといって、このことから、直ちに人間の意志を無視する議論であるとか、「国家主義」「全体主義」であると断ずるのは早計である。何となれば、ボザンケは以上の議論を通じて、各人の意志作用を解消して「全体」や「国家」そして「法」に従うことを訴えているのではなく、各人の意志作用にいわば「全体」＝「国家」という見地を含ませ、「実在意志」のひとつに「国家」や「法」があるということを主

張しているに過ぎないからである。つまり、ボザンケが最も重視するのは、前述のような、なお各人の内的な「批判」作用＝道徳的意志作用であり、「国家」が「実在意志」や「一般意志」の具体化として活動するとしても、それは人間の内的領域には踏み込み得ないと彼は考えているのである。この点は、後の国家論で明らかになるはずである。

むしろ、ボザンケの「一般意志」論を政治思想史的観点から評価するに当たって、看過されてはならない点は次の二点であるように思われる。第一に、ボザンケが、それまでルソーやその思想的な継承者によって展開された「一般意志」の議論に、心理学的な側面を導入したことである。事実、新自由主義者で後にボザンケと論争することにもなるホブソン (J. A. Hobson: 1858-1940) は、『哲学的国家理論』を「今世紀現れた、国家の心理学的かつ倫理学的基礎に関する問題の最も見事な言明」と絶賛し¹⁶³、また、ボザンケと後に社会主義を巡って衝突するボールもボザンケのこうしたルソー解釈に一定の評価を与えている¹⁶⁴。無論、こうしたボザンケによる「一般意志」の心理学的考察に対しても、例えばギンズバーグによって、それは精神状態の内容と、こうした精神状態を持ち得るものの存在とを混同するものだ、との批判も寄せられており¹⁶⁵、ボザンケのこの心理学的考察も今日の心理学、社会心理学のレヴェルからするとやや粗雑な感は否めない。しかし、政治思想史という枠組みの中で検討した場合、ボザンケの議論で重要なのは、ミアヘッドおよびバーカー (Ernest Barker: 1874-1960) の指摘のように、こうしたボザンケの心理学的な「一般意志」の解明が、グリーンによつては多くは論じられなかった側面へのボザンケの思想的貢献であり¹⁶⁶、かつそれがボザンケの政治思想をグリーンのそれと区別しているという側面である¹⁶⁷。その意味で、ボザンケの「一般意志」論は、彼の独自性が表現された議論と位置づけることができよう。

第二に、前述の側面と関連して、ボザンケ自身が、過去思想家の主張はそれぞれの時代の言葉で語られねばならず、現在の言葉で過去の思想家の議論は再解釈される必要があると訴えているように¹⁶⁸、彼がルソーの議論を、いわば 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのイギリスで復活せしめた点も看過し得ない。事実、ボール (Terence Ball) がボザンケの名著である『哲学的国家理論』をルソーの理論の「完全な理想主義的解釈」と呼んでおり¹⁶⁹、コリニもまた、ボザンケの中心的関心は「一般意志」の観念の近代的言辞での再叙述にあったと論じている¹⁷⁰。それゆえ、ボザンケの「一般意志」論は、イギリスでのルソーの復興という面だけでなく、それを 20 世紀に復活させたという点で、西欧政治思想史全体に大きな貢献を果たしたものと見る事ができよう。

しかし、以上の思想史的観点からの評価以上に特筆すべき点は、ボザンケの政治思想そのものの特徴のひとつをなす、彼の議会政治を巡る議論である。ボザンケは「一般意志」論、特にそこでのルソーのいう「立法者」の解釈において、「立法者」を議会における代議士に読み替え、同時に「一般意志」の生成におけるコミュニティでの議論を重視していた。この点は、ボザンケ批判を展開したリンゼイによつても高く評価されており¹⁷¹、ボザンケの政治思想における民主政治擁護の部分と見なすことができる。確かに、ボザンケは、国

民投票や世論のようなものには「一般意志」は見出され得ず、ある種の解釈が必要であると論じたものの、しかしそのことが直ちにボザンケの民主政治的側面を否定することにはならない。むしろ、ボザンケは、デモクラシーの根幹でもある討論および議会制度の必要を訴え、「自らが自らを支配する」というデモクラシーのいわば「擬制」をより詳細に解明したものといえる。そしてこうしたボザンケの議会政治肯定論は、同時に、少なくとも「国家主義」や「全体主義」といった彼の政治思想に対する従来の評価とは異なるイメージを我々に与えている。この点は、ボザンケの政治思想の全体像を検討する際に、彼の政治思想の本質を読み解く重大なカギとして決して見逃されてはならない点である。

ところで、ボザンケのこのような議論、すなわち人間の意志を快樂主義ではなく「実在意志」と「現実意志」の二つの相で捉えて前者による道徳的自己反省を強調する議論や、「国家」を社会契約ではなく人間の理性的な意志に基礎づける議論、そして「自治」を国民自らの公共事務の処理と理解せずに「自律」のような人間の道徳的意志作用として捉え直す議論には、イギリスの伝統的な功利主義、個人主義、経験主義とは明らかに一線を画するボザンケの思想的特徴が表れている。実際、ボザンケはこうした思想を武器にホブズ、ロックの原子論的個人主義や、ベンサム、J.S.ミルの功利主義的政治思想を果敢に批判した。そこで次章では、ボザンケの以上の議論をより明快にするためにも、ボザンケのイギリス政治思想批判を検討しなければならない。

第2章 註

¹ Pfannenstill, *op.cit.*, 1936, p.117.

² G・J・ワーノック、坂本百大・宮下治子訳『現代のイギリス哲学』（勁草書房、1983年）7頁。

³ E. F. Carr, *Morals and Politics: Theories of their Relation from Hobbes and Spinoza to Marx and Bosanquet* (Oxford: Clarendon, 1935), pp.154-155.

⁴ Shirley Robin Letwin, *The Pursuit of Certainty: David Hume, Jeremy Bentham, John Stuart Mill, Beatrice Webb* (Cambridge: Cambridge University Press, 1965), p.339.

⁵ 河合栄治郎『日記Ⅰ』、『河合栄治郎全集』第22巻（社会思想社、1969年）105頁。

⁶ *EASP*, XIV, pp.227-228.

⁷ *PTS*, V, p.1.

⁸ *PIV*, VI, p.33.

⁹ *PIV*, VI, p.37.

¹⁰ *PTS*, V, p.137.

¹¹ *PIV*, VI, pp.56-57.

¹² *PIV*, VI, p.55.

¹³ Milne, *op.cit.*, 1962, p.15.

¹⁴ *PIV*, VI, p.40.

¹⁵ *L*, II, p.264.

¹⁶ Robert H. Murray, *Studies in the English Social and Political Thinkers of the Nineteenth Century*, Vol.II (Cambridge: W. Heffer & Sons, 1929), p.311.

- ¹⁷ たとえば、ボザンケの死去を大々的に報じた 1923 年 2 月 10 日付のイギリスの新聞『ザ・タイムズ』(*The Times*) は、その追悼記事においてボザンケの哲学を「reality としての絶対者」を探究する哲学として報じている。*The Times*, Saturday, February 10, 1923. また、実際、ボザンケは、reality という言葉を、「事実全体」(a whole of facts)、「世界」(world)、「コスモス」(cosmos) などとほぼ同じ意味で用いている。Pfannenstill, *op.cit.*, 1936, p.149.
- ¹⁸ 北岡、前掲書、1987 年、546 頁、北岡、前掲書、1986 年、249 頁。浅沼和典「イギリス理想主義の国家論—T・H・グリーンを中心に—」(明治大学政治経済研究所『政経論叢』第 46 巻第 1 号、1977 年) 58-65 頁。
- ¹⁹ Bernard Bosanquet, "Life and Philosophy", in J. H. Muirhead (ed.), *Contemporary British Philosophy: Personal Statements*, 1st ser. (London: George Allen and Unwin, 1924), pp.51-74, *SE*, I, pp.xxxix-lx.
- ²⁰ ミアヘッドは「ボザンケが、もしどの哲学者に最も恩を負っているかと尋ねられれば、彼はプラトンとヘーゲルの名を挙げたであろう」と指摘している。J. H. Muirhead, "Bernard Bosanquet as I Knew him", *The Journal of Philosophy*, Vol.20, No.25, 1923, pp.637-638.
- ²¹ *SE*, I, p.xlii.
- ²² *SE*, I, p.xlii.
- ²³ また、ボザンケは、ラスキンやモリスの美的経験に関する諸説から、「来世」への直観を理解したと述べている。
- ²⁴ *PTS*, V, p.xxvii.
- ²⁵ *BBF*, XX, p.21. また、ボザンケは、ヘーゲルの『法哲学』(*Grundlinien der Philosophie des Rechts*) とプラトンの『国家』がひどく誤読されていることを憂いている。*PTS*, V, pp.229-230.
- ²⁶ *PIV*, VI, p.27.
- ²⁷ *PIV*, VI, p.373.
- ²⁸ James Bradley, "Hegel in Britain: A brief History of British Commentary and Attitudes (2)", *The Heythrop Journal*, Vol.20, 1979, p.166.
- ²⁹ *SSE*, XVI, p.161.
- ³⁰ *SE*, I, pp.228-229.
- ³¹ *PTS*, V, p.115.
- ³² *SE*, I, pp.228-229.
- ³³ Thomas, *op.cit.*, 2000, p.114.
- ³⁴ Simhoni, *op.cit.*, 1981, p.17.
- ³⁵ *SI*, XV, pp.162-163.
- ³⁶ G. Watts Cunningham, "Bosanquet on Philosophic Method", *The Philosophical Review*, Vol.35, No.4, 1926, p.322.
- ³⁷ Francis W. Coker, *Recent Political Thought* (New York and London: D. Appleton- Century, 1934), p.416.
- ³⁸ *PTS*, V, p.232.
- ³⁹ Cf., Sweet, *op.cit.*, 1997, p.162.
- ⁴⁰ Meadowcroft, *op.cit.*, 1995, p.116.
- ⁴¹ Sweet, *op.cit.*, p.97n.
- ⁴² *PTS*, V, p.169.
- ⁴³ *PTS*, V, p.103.
- ⁴⁴ 千葉真「アキナス—徳の政治と共通善—」、藤原保信・飯島昇三編『西洋政治思想史 I』(新評論、1995 年) 80 頁。
- ⁴⁵ 福田歓一『政治学史』(東京大学出版会、1985 年) 140 頁、また藤原保信『西洋政治理論史 [新装版]』(早稲田大学出版部、1998 年) 162 頁。
- ⁴⁶ 多田真鋤『ヨーロッパ近代政治社会思想史』(慶應義塾大学出版会、1996 年) 163 頁。
- ⁴⁷ 北岡、前掲書、1986 年、247 頁。
- ⁴⁸ *SE*, I, pp.228-229.
- ⁴⁹ Gerald F. Gaus, "Green, Bosanquet and the Philosophy of Coherence", in C. L. Ten (ed.),

- Routledge History of Philosophy Volume VII: The Nineteenth Century (London and New York: Routledge, 1994), p.413.
- ⁵⁰ *EASP*, XIV, p.217, 227.
- ⁵¹ *PTS*, V, p.189.
- ⁵² ボザンケにとって、「政治哲学」と「社会哲学」は同義である。Sweet, *op.cit.*, 1997, p.60n.
- ⁵³ *PTS*, V, pp.48-49.
- ⁵⁴ Cf., Peter Nicholson, "Thomas Hill Green: Lectures on the Principles of Political Obligation", in Murray Forsyth and Maurice Keens-soper (eds.), *The Political Classics: Green to Dworkin* (Oxford: Oxford University Press, 1996), p.17.
- ⁵⁵ Noël O'Sullivan, "Vision of Freedom: The Response to Totalitarianism", in Jack Hayward, Brian Barry and Archie Brown (ed.), *The British Study of Politics in the Twentieth Century* (Oxford: Oxford University Press, 1999), p.64.
- ⁵⁶ ボザンケはある意味で政治思想が「規範的」であることを認めており、それによって政治思想、政治哲学は「社会学」と一線を画すると論じている。*PTS*, V, ch2.また、Sweet, *op.cit.*, 1997, p.60n1.
- ⁵⁷ Raymond G. Gettell, *History of Political Thought* (New York & London: Century, 1924), p.322.
- ⁵⁸ *PTS*, V, p.138.
- ⁵⁹ *PTS*, V, p.111.
- ⁶⁰ *PTS*, V, pp.111-112.
- ⁶¹ Darrell Dexter Lacock, "The Political Philosophy of Bernard Bosanquet", Diss.Yale University, Ph.D, 1967, p.53.なお筆者はこの学位論文を U・M・I (University Microfilms Inc.) Dissertation Information Service を通じて 1995 年に入手している。
- ⁶² *PTS*, V, p.117.
- ⁶³ *PTS*, V, p.118.
- ⁶⁴ Nicholson, *op.cit.*, 1990, p.206.
- ⁶⁵ *PTS*, V, p.100.
- ⁶⁶ Lacock, *op.cit.*, 1967, p.56.
- ⁶⁷ Nicholson, *op.cit.*, 1990, p.207.
- ⁶⁸ Gaus, *op.cit.*, 1994, p.417.
- ⁶⁹ Pfannenstill, *op.cit.*, 1936, p.211.
- ⁷⁰ Andrew Vincent and Raymond Plant, *op.cit.*, 1984, p.107.
- ⁷¹ *PTS*, V, p.139.
- ⁷² *PTS*, V, p.118.
- ⁷³ *PIV*, VI, p.146.
- ⁷⁴ *SP*, XIX, p.280.
- ⁷⁵ *PTS*, V, p.137.
- ⁷⁶ *PMS*, VIII, p.56.
- ⁷⁷ *PTS*, V, p.165.
- ⁷⁸ *SP*, XIX, p.155.
- ⁷⁹ *PTS*, V, pp.132-133.
- ⁸⁰ Pfannenstill, *op.cit.*, 1936, p.211.
- ⁸¹ *VDI*, VII, p.7.
- ⁸² Lacock, *op.cit.*, 1967, p.53.
- ⁸³ *PIV*, VI, p.193.
- ⁸⁴ *SP*, XIX, p.334.
- ⁸⁵ *PTS*, V, p.103.
- ⁸⁶ *SSE*, XVI, p.58, 148, 159.
- ⁸⁷ Igor Primoratz, "The Word 'Liberty' on the Chains of Galley-Slaves: Bosanquet's Theory of the General Will", *History of Political Thought*, Vol.15, No.2, 1994, pp.255-256.
- ⁸⁸ François Houang, *Le Néo-Hégélianisme en Angleterre: La Philosophie de Bernard Bosanquet 1848-1923* (Paris: Librairie Philosophique, 1954), p.160.
- ⁸⁹ *PTS*, V, p.158.

- ⁹⁰ PTS, V, p.161.
⁹¹ PTS, V, pp.146-147.
⁹² PTS, V, p.148.
⁹³ PTS, V, p.148.
⁹⁴ PTS, V, pp.150-151.
⁹⁵ PTS, V, p.151.
⁹⁶ PTS, V, p.152.
⁹⁷ Pfannenstill, *op.cit.*, 1936, p.215.
⁹⁸ PMS, VIII, pp.41-42.
⁹⁹ PTS, V, pp.154-155.
¹⁰⁰ PTS, V, p.161.
¹⁰¹ SP, XIX, p.260.
¹⁰² SP, XIX, p.261.
¹⁰³ PTS, V, p.110.
¹⁰⁴ SP, XIX, p.257.
¹⁰⁵ SP, XIX, pp.261-262.
¹⁰⁶ PTS, V, p.147.
¹⁰⁷ PTS, V, p.158.
¹⁰⁸ PTS, V, p.174.
¹⁰⁹ ボザンケは、ルソーの議論を『哲学的国家理論』のほかに、「ルソーの政治的観念」というフランス語で執筆した論文においても考察している。Bernard Bosanquet, “Les Idées Politiques de Rousseau”, *Revue de Metaphysique et de Morale*, Vol.20, 1912, pp.321-340, SE, I, pp.231-252.
¹¹⁰ PTS, V, p.12.
¹¹¹ PTS, V, p.99.
¹¹² PTS, V, p.103.
¹¹³ PTS, V, p.102.
¹¹⁴ PTS, V, p.110.
¹¹⁵ PTS, V, p.112.
¹¹⁶ Bernard Bosanquet, “Preface” to J. J. Rousseau, *The Social Contract or Principles of Political Right*. Translated with an Historical and Critical Introduction by Henry J. Tozer (London: Swan Sonnenschein, 1895), p. iv.
¹¹⁷ SE, I, p.242.
¹¹⁸ SE, I, p.242.
¹¹⁹ PTS, V, p.99.
¹²⁰ 小林浩『ルソーと国家』（世界書院、1999年）128頁。
¹²¹ PTS, V, p.108.
¹²² PTS, V, pp.108-109.
¹²³ PTS, V, p.104.
¹²⁴ 例えば、白石正樹『ルソーの政治哲学（上巻）』（早稲田大学出版部、1983年）248-261頁参照。
¹²⁵ PTS, V, p.114.
¹²⁶ SE, I, pp.243-244.
¹²⁷ SE, I, p.243.
¹²⁸ SP, XIX, p.262.
¹²⁹ SP, XIX, p.262.
¹³⁰ SP, XIX, p.262.
¹³¹ PTS, V, p.274.
¹³² PTS, V, p.274.
¹³³ PTS, V, p.141.
¹³⁴ SE, I, p.272.
¹³⁵ PTS, V, pp.216-217.

- ¹³⁶ PTS, V, p.143.
- ¹³⁷ PTS, V, p.119.
- ¹³⁸ PTS, V, p.142.
- ¹³⁹ PTS, V, p.188.
- ¹⁴⁰ PTS, V, p.169.
- ¹⁴¹ PTS, V, p.173.
- ¹⁴² PTS, V, p.95.
- ¹⁴³ PTS, V, p.71.
- ¹⁴⁴ PTS, V, p.116.
- ¹⁴⁵ PTS, V, p.119.
- ¹⁴⁶ Christopher W. Morris, "The Very Idea of Popular Sovereignty: 'We the People Reconsidered'", *Social Philosophy and Policy*, Vol.17, No.1, 2000, p.19.
- ¹⁴⁷ H・J・ラスキ, 石上良平訳『国家—理論と実践—』(岩波書店, 1952年) 36頁。
- ¹⁴⁸ Hobhouse, *op.cit.*, 1918, p.49.
- ¹⁴⁹ Gerald Gaus, "Does Democracy Reveal the Voice of the People? : Four Takes on Rousseau", *Australasian Journal of Philosophy*, Vol.75, No.2, 1997, p.144.
- ¹⁵⁰ Hobhouse, *op.cit.*, 1918, p.71.
- ¹⁵¹ H. J. Laski, "Bosanquet's Theory of the General Will", *Proceedings of the Aristotelian Society*, n.s., Supplement, Vol.8, 1928, p.58.
- ¹⁵² PTS, V, p.44.
- ¹⁵³ J・P・プラムナッツ, 森本哲夫・萬田悦生訳『政治理論とことば』(昭和堂, 1988年) 85頁。
- ¹⁵⁴ Primoratz, *op.cit.*, 1994, p.257.
- ¹⁵⁵ Nicholson, *op.cit.*, 1990, p.209.
- ¹⁵⁶ Sweet, *op.cit.*, 1997, p.144.
- ¹⁵⁷ Christopher Parker, "Bernard Bosanquet, Historical Knowledge, and the History of Ideas", *Philosophy of the Social Sciences*, Vol.18, No.2, 1988, p.221.
- ¹⁵⁸ Hobhouse, *op.cit.*, 1918, pp.83-84, C. D. Broad, The Notion of General Will, *Mind*, n.s., Vol.28, 1919, pp.501-504.
- ¹⁵⁹ Morris Ginsberg, "Is There a General Will?", *Proceedings of the Aristotelian Society*, Vol.20, 1919-1920, p.92, 99.
- ¹⁶⁰ プラムナッツ, 前掲書, 1988年, 87頁。
- ¹⁶¹ Laski, *op.cit.*, 1928, pp.54-56.
- ¹⁶² 無論、「国家」をボザンケのように意味付けること自体が妥当であるかどうかに関しては、検討の余地がある。しかしそのためには、真の国家のあり方を問う別の国家論を必要とするがゆえに、その作業はボザンケの政治思想をそれに内在する論理に従って捉えようとする本論文での作業を逸脱するものと言わなければならない。
- ¹⁶³ J. A. Hobson, "Philosophy of the State", *Ethical World*, Vol.3, 1900, p.547, quoted by Otter, *op.cit.*, 1996, p.153. ただし、ホブソンは後に『哲学的国家理論』に対するその好意的態度を変更している。J. A. Hobson, *Democracy after the War* (London: George Allen and Unwin, 1917), pp.116-118.
- ¹⁶⁴ Ball, *op.cit.*, 1901, p.155.
- ¹⁶⁵ Ginsberg, *op.cit.*, 1919-1920, p.108.
- ¹⁶⁶ J. H. Muirhead, "Recent Criticism of the Idealist Theory of the General Will (I)", *Mind*, Vol.33, 1924, p.172.
- ¹⁶⁷ E・バーカー, 堀豊彦・柚正夫訳『イギリス政治思想IV』(岩波書店, 1954年), 58-59頁。また、このようなグリーンとの相違点は、ボザンケ自身によっても自覚されている。PTS, V, p.8.
- ¹⁶⁸ PTS, V, p.viii.
- ¹⁶⁹ Terence Ball, "On Re-reading Rousseau and His Critics", *The Midwest Quarterly*, Vol.21, No.3, 1980, p.337.

¹⁷⁰ Collini, *op.cit.*, 1978, p.13.

¹⁷¹ A. D. Lindsay, "Bosanquet's Theory of the General Will", *Proceedings of the Aristotelian Society*, n.s., Supplement, Vol.8, 1928, pp.39-42. また、田村浩志、前掲書、2002 年、102-103 頁参照。

第3章 ボザンケのイギリス政治思想批判

1. ホッブズ・ロック批判

ボザンケは、原子論的個人主義の唱導者であるホッブズとロックを批判する。ボザンケは、近代政治哲学の祖であるホッブズの議論に関して、批判的に以下のように述べている。

「例えば、ホッブズは主権は意志に存しなければならず、この意志は実在的 (real) であり、かつコミュニティの意志を表現ないし表明するものとして捉えられねばならない、と主張した。(中略) ただし、かれは“実在的なもの”を実体的で確固たる諸個人に含まれるものと解釈することで、実際には、ある特定の個人ないし諸個人の意志を、コミュニティないし道徳的人格それ自体の意志の代わりに用いたのである。」(強調-ボザンケ)¹

つまり、ボザンケによれば、ホッブズの議論ではコミュニティや社会的な意志が描かれているように見えるが、しかし実際には、原子論的個人主義の観念のもとで描かれるバラバラな個人の意志のみが主張されており、その結果、社会全体の意志は描かれていない。この点を、ボザンケは、ルソーの議論を援用しつつ、次のように論及する。

「ホッブズの議論の性質は、“道徳的人格” (moral person) を一つのフィクションとして、扱ったルソーの描くものと完全に同一であった。だが、ホッブズは、そうした理由から現実の効果的な統一に関するあらゆる観念を放棄するどころか、抽象的あるいはフィクションである“人格” (person) の統一を、コモモンウェルスそれ自体の統一として捉えられる、あるひとりの生身の (actual) 人間、ないしはある一定の人間集団の“実在的統一”とすげ替えているのである。例えば、彼は、彼の根本原理に基づく否応もない論理を用いて、既に主権 (sovereign power) が存在するところでの人々の代表に関する他の可能性をすべて否定する。というのは、彼にとって人々を代表する唯一無比のものは主権であり、コミュニティの“人格”は、主権者の主権というまさにその事実により、その主権に付与されると仮定されているからである。」(強調-ボザンケ)²

そしてボザンケは、ホッブズの議論を真の政治哲学になり得ていないものと理解する。ボザンケはいう。

「われわれが言い得ることを端的にまとめれば、次のようなことである。すなわち、ホッブズは、政治社会の統一を意志に、そして彼の意味における実在意志ないしは現実意志に据えてはいるが、しかし、一般意志には全く据えてはいない、ということである。彼は、国家の属性を統一や人格として説明しうる言語を受け継いでいる。しかし、彼の語り口では、その言葉は政治的な真の意味内容を蘇生させることはなかったのである。」³

こうして、ボザンケは、ホッブズの議論では「政治社会の統一」が「意志に基礎づけられ」つつも、真の意味での「一般意志」が描かれず、逆に原子論的な個々人の私的意志の集合のみが描出されると論ずるのである。

他方、ボザンケは、ホッブズと同じくイギリスの代表的な政治思想家であるロックに関しても批判的に言及する。ボザンケはロックの主張を、以下のように解説する。

「ロックは、現実の政府が信託 (trust) であり、究極的な最高権力 (the ultimate supreme

power) は全体としてのコミュニティに存することを感知している。(中略) 概して、コミュニティの意志あるいは利害は、統治組織 (the governing body) の意志と同じものとして捉えられる。そしてその統治組織への信託において、統治作業は憲法に従って為される。しかし、信託は条件的なものであり、理論的には取り消しができるものである。つまり、究極的な最高権力は、その信託の条件が犯されればその信託を撤回することが可能なコミュニティ全体にあるのである。もちろん、合法的な手段でこれを行う明確な方法は示唆されないし、また示唆され得ない。それゆえ、ロックにあっては、人々の意志は実在意志ないし現実意志として表現されない。」⁴

つまり、ボザンケは、ロックの議論では「社会」の意志と「政府」の意志との関係のみが強調される結果、ホッブズとは反対に個々人の意志が「決定的な表現」を得ることができず、各個人の意志が等閑視されていると論ずるのである。そしてボザンケは、ホッブズとロックを総括して次のように論究する。

「われわれは、ホッブズに対しては、政治的統一は現実意志に存してはいるがしかし一般意志に存してはいない、と、またロックに対しては、政治的統一是一般意志に存してはいるが、しかし現実意志に存してはいない、と言い得る。」⁵

そしてボザンケによれば、前述のようにルソーが高く評価されるのは、ホッブズおよびロックにおける欠点をルソーのいう「一般意志」論が補っているからである。ボザンケはいう。

「しかし、もしホッブズと同様の整合的な論理に、ロックに生氣を与えているのと同量の政治的内容を持たせることが可能であるのなら、新たな根拠が獲得されるであろう。そしてこれは、ルソーが、彼の現実的かつ直ちに一般的な意志の概念の中で企図したものである。」⁶

ボザンケは、こうしてホッブズの「個人」的な意志とロックの「社会」的な意志の統合としてルソーの「一般意志」概念を理解して、その業績を高く評価する。ボザンケからすると、ミアヘッドの指摘のように、ホッブズの議論では、個々人の「意志」の観念は保持されるものの、その「一般性」は犠牲にされ、他方ロックの議論では「一般性」の観念は保持されつつも個々人の「意志」の観念が犠牲に供されるものであったといえよう⁷。

2. ベンサム批判 (1) - ボザンケの「自由」論 -

さらに、ボザンケは、ベンサム、J・S・ミル、そしてスペンサーの政治思想を批判する。ボザンケによれば、彼らの理論は、「究極的には、物理的個人の“絶対的でありかつ本来的に独立した存在”を受容」して、ある事象を感覚的に外観からのみ把握しようとするものであり、それらは「第一印象の理論」(theories of the first look/ theories of first appearance) あるいは「見かけの理論」(“prima facie” theories) と呼ばれるべきものである⁸。しかし、彼らによって唱導されるこうした理論では、「自己」と「他者」、すなわち「自己」と「統治」、「自己」と「法」、「自己」と「社会」とが融解不可能な関係になっており、それらは「真

の社会哲学の根源的概念」を示すものに成り得てない。それゆえ、ボザンケは、真の政治哲学を構築することは、この三者がよって立つ「仮定」を「破壊的に批判することを通じて唯一」可能であると論じ⁹、その「見かけの理論」を創始したベンサム政治思想への批判から自己の議論を開始する。ただし、そこでのボザンケによる批判は、ベンサムの考える自由、およびそれに基づく国家と個人の関係を焦点としたものであるため、まずボザンケの考える「自由」概念を明らかにしなければならない。

ボザンケは、「自由」を「人間の真の本性」と位置づける¹⁰。そしてボザンケによれば、通常思われる自由、すなわち「～からの自由」は、いわば「初歩的な自由」であるものの、しかしその意味は否定されるべきではなく、むしろまず第一に守られねばならないものである。ボザンケはいう。

「統治の不在と同意義である自由の単純な理念には、我々の尊敬の念を起こさせる主張が明瞭に具体化されている。」¹¹

そしてこうした初歩的な「自由」が大事である理由は、人間が自由に意志することをその自由が各人に対して保障する、という点に求められる。ボザンケはいう。

「私の精神が、他の精神の監督下にある実際の、あるいはその前兆を示しつつある物理的暴力によって、私の体の統御に関して干渉を受けるとき、それは強制である。実質的に私が他の精神の手段になるこうした強制の永続的かつ確固たる条件は、奴隷状態 (slavery) である。」¹²

つまり、ボザンケによれば、「物理的な暴力ないしその脅威を通じて別人の意志の手段にされないときに私は自由である」¹³。かくして、ボザンケはいわゆる「強制の不在」(absence of restraint) としての「消極的自由」、彼の言葉では「法律的自由」を真の「自由」に含まれるものとして尊重する。

しかし、こうした自由は、ボザンケによればなお不完全な「自由」である。ボザンケにとって「完全な自由」とは、いわゆる「～への自由」を意味する「積極的自由」、ボザンケの言葉では「政治的自由」ないし「市民たることの権利」(rights of citizenship) を含むものである。ボザンケは「法律的自由」と政治的な問題との関係を、以下のように説明する。

「人 (person) と財産の単なる保護は、まさにささやかな良心でその輪郭を定め、かつ維持するのに容易な事柄であるよう思われる。しかし、いつ、いかにして、そしてどのような意味で、それが維持されるのであるかという問いは、政治体制 (political system) の積極的性格を含んでいる。」¹⁴

つまり、ボザンケは「法律的自由」(消極的自由)の問題は、必然的に「政治的自由」の問題を伴うと論ずるのである。それゆえ、ボザンケは「社会全体の福祉に影響を及ぼす諸活動の、積極的な実践に対するある決定的な保障」は、「常に政治的自由に関する見解の中に含まれる」¹⁵として、「積極的自由」「政治的自由」を以下のように解説する。

「自由に関する積極的ないし政治的な概念は、我々が国家においてその具体化に見出そうとしているより完全な自由の事例である。(中略) そしてもちろん、政治的自由の諸現象

は、次のような視点から論ぜられる。すなわち、我々が、国家をより完全な自由の主要機関かつ主要条件として示すさいに立つであろう視点からである。」¹⁶

かくして、ボザンケは「政治的自由」としての「完全な自由」は「国家」の中に見出され、「国家」が存在して初めて「自由」も成立し得ると論ずるのである。

しかし、ボザンケはここで議論を止めない。ボザンケはさらに「自由」を哲学的に考察して、「哲学的自由」について論究する。ボザンケいう。

「ルソーが我々に言ったように、(中略)自由が人間の生活の本質的な性質であることは疑う余地がない。それは、我々の理解によれば、我々が我々自身であるための条件であるからである。」¹⁷

「そして、自由とは完全に我々自身であるということであり、自由に関する最も完全な条件とは、我々が最も完全に我々自身である、というものである。」¹⁸

つまり、ボザンケによれば「我々自身」であることが真の「自由」である。しかし、この場合の「我々自身である」ということは、単に人間が自分の欲望の赴くままに行動することではない。ボザンケはいう。

「私は、私が私の精神の傾向 (inclination) に従う限り自由に行動していると仮定される。(中略) しかし、倫理的熟考の最も早い時代から、“自由” という術語にはさらなる意味が帰されてきている。以下のことが、モラリストないし哲学者たちによって一恐らく最初はソクラテスとプラトンによって一指摘されている。すなわち、自分自身であることに關する人間の条件は、根源的に、強制がない状態で彼が好むことを行う力によってだけではなく、彼が行いたい事柄の性質によっても影響を及ぼされるということがである。」(強調引用者)¹⁹

それゆえ、「我々自身」であるためには、ある行動を動機づける意志が問題となる。そしてこの点をボザンケは、以下のように述べる。

「我々自身であるためには、我々は常に我々でないものになっていかねばならない。換言すれば、我々自身であるために我々が常に認めなければならないことは、それが我々がこれまでになってきた以上のものである、ということだ。(中略) 我々が我々自身であるための条件である自由は、単に我々がもっている何ものかではあり得ないし、ましてや、我々が常にこれまでもってきたものでもあり得ない。つまり、維持されるべき現状 (status quo) ではないのだ。それは、我々において以下のものの支配を示すための継続的な苦闘にとって妥当な条件でなければならない。すなわち、我々が我々に対して命令的であるものとして、あるいは実在的な自己として承認するものの支配である。」²⁰

つまり、「実在的な自己」、すなわち「実在意志」が自らを支配するとき、人間は本来の自分、ボザンケの言葉では「我々自身」である。それゆえ、我々の精神の内部における「我々自身」でない要素、すなわち「現実意志」による精神内部の支配は「不自由」な状態である。ボザンケはいう。

「自由のより高度な意味は、より低度のそれと同じく、他者への自由と同じく、ある事

柄からの自由を含む。そしてこの場合、我々が自由になるのは、我々が通常他者と見なす人々の強制から自由になるのではなく、我々が我々自身の一部と見なすものの強制から自由になる。(中略) そして一見したところではある人間の他者による強制の不在に当てはまる“自由”という術語は、ある個人の精神内の、その内にある別の何ものかによる強制の不在に應用されるのである。」(強調—ボザンケ)²¹

「それ自体を意志する意志は、意志するさいに、眼前にその全体の欲求を充足させる目的、そうした欲求以外には何も満たさない目的をもつような意志である。その欲求は狭隘で部分的な欲求ではない。そのような狭隘で部分的な欲求を満たすさいに人間は、抑えられ、抑圧されるのを感じず。それはまるで、ますます狭隘になってゆく袋小路で人が迷っているかのような状態である。」²²

そしてボザンケは、「現実意志」のような一時的な欲望に「我々がもし屈服するのであれば我々自身、自由人と比較される奴隷であるかのように感じ」、「もしそれを征服すれば我々自身、奴隷と比較される自由人であるかのように感ずる」と論じて²³、「自由」の概念に「積極的自由」「政治的自由」と前述の外的な強制からの自由＝「消極的自由」「法律的自由」に加えて、人間の意志の内部における自分自身のあるものからの自由を含ませるのである。

そして前述のように、「実在意志」は「国家」および「法」に具体化されることから、それらによる支配、およびその体系は、哲学的な意味での「自由」である。ボザンケはいう。

「そして我々の自由 (liberty)、あるいは古き良き表現を用いれば、我々の特権 (liberties) は、我々が最善の状態になること、(中略) つまり我々自身になることの条件かつ保障として考えられるこうした〔法や秩序の〕体系と同一視されうる。」²⁴

かくして、ボザンケは、物理的な抑圧や強制からの「自由」、および政治への参加など「国家」において初めて可能となる「自由」を認めながら、完全な意味での「自由」を、「我々自身」であることに求め、そのためには理性的・合理的な「実在意志」に従うことが必要であり、一時的な感覚や欲求などの「現実意志」に従うことは一種の「奴隷状態」とであると論ずるのである。そして同時に、「法」や「国家」およびその秩序が「実在意志」「一般意志」の具体化でもあったことから、それらに従うことによっても人間の「自由」は成立すると論じ、すべての国家干渉を排する完全自由主義、「反国家干渉」主義、「レッセフェール」主義を謬見とするのである²⁵。

3. ベンサム批判 (2) — 「自由」を巡って —

そしてこうした「自由」観念のもとでボザンケによって排撃されたのがベンサムの自由観であり、かつそこにおける国家と個人、あるいは法と個人との関係である。ベンサムは、周知のように、ボザンケと同じくホブズらの原子論的個人主義を「虚構」として自然権的発想を放棄し、生きた現実の人間から議論を開始した。このようなベンサムの政治思想の根本原理を、ボザンケは「苦痛は究極的な悪である」という功利主義、快楽主義に求め、そしてベンサムの政治思想の要点を、「すべての法は自由に逆らうもの」であり、かつ「悪

である」という主張に見出す。つまり、ボザンケによれば「ベンサムが導いた運動とは、法の既存の体系やその擁護者の論法に敵対するもの」であり、彼の主張は「法を必要悪として、そして政府を諸悪の中からの選択として描く」ものである²⁶。ボザンケはいう。

「ベンサムの原理では、苦痛は究極的な悪であるので、なぜあらゆる法が悪であるのかの理由は明らかである。というのは、彼にとってあらゆる法は自由と正反対のものだからだ。あらゆる自由の侵害は苦痛という自然的な感情によって伴われる。あらゆる法は自由と正反対のものであるという命題を否定する人々に対して、彼は言葉の曲解という批難を浴びせる。」²⁷

そしてボザンケは、こうしたベンサムの議論を自由の観点から以下のように定義する。

「そして、我々がここで想定しなければならないことは、ベンサムにとって、自由は最も単純で外見的には最も広範な意味内容をもつものであり、それは悪を為す自由をも含み、そして純粹に拘束の不在 (absence of restraint) として定義される、ということである。」²⁸

つまり、ベンサムのいう自由とは何らの拘束が存在しない状態のことである。しかし、ボザンケによればこうした自由の観念は、やはりなお初歩的な自由であり、真の「自由」とはこうした消極的な自由それ自体のみを意味するものではない。ボザンケは、前述のような真の「自由」を「一般的自由」と呼んで以下のように定義する。

「一般的な自由の量は、控除によって増大されるもの、あるいは、自由の量のある境界部分 (a certain edge or border) を、いわば強制に転換させることでその最大限の量に唯一達せられうるものである。」²⁹

つまり、真の「自由」とは「控除」、つまり他者の「干渉」によって「減少」されるのではなく「増大」されるという側面をもち、単純な加減演算で計られるようなものではない。ボザンケはこの点を、「自由」を「土地」と「植物」にたとえて以下のように述べる。

「ある自由の犠牲が全体の量の増加にとっての手段であるならば、その全体は、例えば一片の土地のように所与の同質的な量ではまずありえない。というのは、こうした量は、その中のどんな部分の控除によっても減少させられねばならないのは確かだからである。自由は、生きている植物の性質のごとく、複雑な性質を有するに違はなく、そしてその性質とは、その繁栄にとって不可欠なある制限ないし否定が、その個々の諸特徴（それは積極的でなければならない）によって指令され、それらと同じ原理を表現し、それゆえ、耕される植物の積極的な型および状態と全く相関的であるような性質である。このような意味においてのみ、いかにして強制が、効果的な自己主張にとっての手段であるかが理解されうる。」³⁰

それゆえ、「強制」を具体的に課す「法」や「政府」は、もはや人間と敵対的な関係にあるものではなく、むしろ人間の自己発展にとって積極的な意味合いをもつものである。ボザンケはいう。

「しかし、もしそうであるなら、課される強制の基準である、法や政府の制限を及ぼす作用 (the restrictive influences) が、それによって制限される人間の本性と相容れないもので

はありえず、またそれらの本性において自由と敵対するものとして規定されるべきではない。」³¹

それゆえ、「自由」を他者による「強制」の「不在」としか見ない議論は、前述のように、ボザンケによればすべて謬見である。ボザンケは前述の「自治」の矛盾に言及しながら、この点を以下のように論ずる。

「困難の根源は、明らかに、社会における“他者”の諸要求の圧力が、“あるもの”の自由の単なる一般的な削減であると仮定することに存している。(中略) こうした仮定のうえでは、自治の矛盾は解消できなくなり、また政府すなわち統治は悪にされ、そしてそこで、政府がいかに善を表す自己に貢献するかを説明するのは不可能である。真の自己として捉えられる個人すべてと他者の衝撃によって強いられる拘束とは相容れないものであり、自己の縮小である限り、こうした結果は避けられないものである。」³²

つまり、ボザンケによれば、こうした誤った仮定に立つ限り、「法や統治に反抗することができる現実の自己」と「個々の自己を抑圧することのできる現実の統治」とは全く相容れないものとなり、その結果「自己」と「統治」の両者は矛盾したまま永遠に和解することができないのである。

そしてボザンケによれば、こうした誤った仮定に立つ思想家の代表格がベンサムにほかならない。ボザンケにとって、ベンサムの主張は、「ある人の自由の一部が犠牲にされる」ことで「ある人はまず自由の一定のある領域を持っていること、そしてその自由の一部分が残りの部分を守るために放棄される」というものである。しかし、このように「他者」の圧力が各人の自由の削減であること、また各人は加減演算で表現されうような一定量の自由を絶対的に保有することを前提にしては、真の「自由」の概念は把握されえない。ボザンケはいう。

「しかし、こうしたあらゆる前提的な自由 (antecedent liberty) の観念は、ベンサム自身がまさしく暴露するのを喜んでいた虚構である」³³

また、このことは同時に、ベンサムが人間と法や政府との積極的関係を見出すことに失敗していることを意味している。ボザンケは言う。

「それゆえ、あらゆる哲学的な法学者の理論に対するベンサムの非妥協的な敵意に注目することは有益である。ホッブズやグロチウスからモンテスキューやルソーにいたるまで、そしてカントやその後継者はいうまでもなく、彼らの全理論の共通点は、次のような事実に存している。すなわち、それらの著者は、他者にたいしてある人によって行使される力と命令という形の下で、積極的な人間の本性の本質的かつ一般的な要素を予測した、ということである。(中略) しかし、“社会契約”も、“一般意志”も、“自然権”も、ベンサムの目に叶うものではない。それらはみなベンサムにとって虚構でありかつ虚偽である。彼は、法において命令の性格以外の何ものも了解することができない。また、彼は、法と人間の本性との積極的関係を理解しない。」³⁴

こうして、ボザンケは、ベンサムが「法は必要悪であると主張」して「社会を構成する

諸自己の隅々にわたる積極的な統一を示そうとする企てすべてに輕蔑を注いでいる」³⁵と断じ、彼の思想を、人間と「法」ないし「統治」「国家」等を折衷的かつ表層的に接合するだけのものとして批判するのである。それは、同時に、「法」に従うことが自らの「実在意志」に従うことになるという前述の「一般意志」の議論、またボザンケの「自由」の定義に見られた、「現実意志」などの一時的な欲望からの解放こそ真の「自由」＝「我々自身」であるという議論の、いわば再説でもある。要は、ボザンケのいう「自由」とは、「他者」による干渉の排除のみをいうものではなく、効果的な自己の人格的發展の条件を意味するものである。

無論、ボザンケは、このように「自由」を捉えるものの、決して通常思われる自由の意義を否定するのではない。むしろ、そのような通常の謂としての「自由」、つまり「消極的自由」「法律的自由」は、ボザンケの場合、真の「自由」のためのいわば前提として位置づけられ得る。事実、ボザンケによれば、真の「自由」とは、「国家」などの他者による「強制」を視野に入れながらも、なお「個人において起こりうる最大限のイニシアティブを用意する (condition) こと」である³⁶。この点は、後の国家干渉論で詳しく検討するが、いずれにせよボザンケの主眼は、通常言われる「自由」の意味、すなわち「拘束の不在」の意味を解消させるのではなく、あくまで、従来の「自由」の意味に「強制」の契機を含ませることにあったといえよう。

4. ミル批判 (1) —ボザンケのミル評価—

ボザンケは、ホブズ、ロック、ベンサムに続き、功利主義者の第二世代の代表者³⁷J・S・ミルを批判する。しかし、そもそも、ボザンケは、ミルの思想、特にその経験論に対してはそれなりの評価を与えていた。ミルが死去した当時、オックスフォード・ユニヴァーシティ・コレッジのフェロウ及びチューターの立場にあったボザンケは、その後イギリス精神は経験論的諸見解を非常に受け入れやすいことを理解し³⁸、また「経験論と先験哲学との間の区別」や「知識の絶対性への信念と相対性への信念との間の区別」の設定自体を謬見としている³⁹。さらに、ボザンケはミルの『論理学体系』(*A System of Logic*)にも好意的であり、ボザンケはミルを「論理学に関する見解を正確な科学の観念というレベルに高めた」⁴⁰人物と捉えながら、「この国における論理学の改革はスチュアート・ミルの著作にさかのぼる」として、自分の論理学に関しても「索引を一瞥してもらえば、いかに私が常にミルの論文に触れているかが十分に示されるであろう」⁴¹と述べている。特に、『論理学体系』におけるミルの「性格」(character)と「環境」(circumstances)議論は、ボザンケにとって非常に示唆に富むものであった。

そもそも、「性格」と「環境」を巡る議論は、人間の「性格」はその人が成育してきた「環境」によってつくられ、かつ犯罪、悪徳、不道德なども人間社会のあらゆる制度などでつくられることから、個人はその「性格」について責任を負わない、とするオウエン (Robert Owen: 1771-1851) の「性格形成原理」のそれが有名であるが⁴²、ミルは、ベンサムの影響の

もと、人間の心理は快樂と苦痛（＝「環境」）によって決定されんとする功利主義的・經驗論的「観念連合」説から出発した。しかし、ミルは、人間の心理の原因、動機などを「環境」に分析・還元する「観念連合」説が、人間の「性格」を規定する決定論（determinism）であること、そしてその因果法則では各人による主体的な「性格」形成が不可能であることに不満を覚え「観念連合」説＝「環境」決定説に修正を加えた。すなわち、ミルは、「性格は環境によって作られるかもしれない」としつつも「われわれの意志はわれわれの環境に影響を与えることで、未来の習慣や意志能力を修正でき」⁴³、また個人は「意志すれば自分自身の性格を形成することができる」⁴⁴と論じたのである。

そしてミルのこうした「性格」を強調する議論こそ、ボザンケが高く評価するものであった。ボザンケは、前述のような「結社」＝「連想」＝「観念連合」説を否定した彼の議論からも理解されるように、ミルと同じく「観念連合」説や決定論の本質を予定（predetermination）と理解し、それを過去の力によってすべてが規定されるものと論ずる。そしてボザンケは、「決定論は宿命論（fatalism）に強化され」、「諸結果の連年の喧噪として叙述」されると述べて⁴⁵、ミルと同様、原因や事情によりすべてが決定される因果法則もこの種の決定論であると論ずる。しかし、ボザンケは、ミルのように「観念連合」説＝「環境」決定説における因果法則・宿命・決定」からの「自由」を提示するのに留まらない。ボザンケは、さらに、「確定性」（determinateness）という概念を用いながら、「決定」や宿命から解放された「性格」の向かうべき方向を示している。ボザンケによれば、「確定性」とは「論理」であり、そしてその「論理」とは、「あらゆる断片がそれが属する全体に思いを寄せる」ところの「統一と整合性への衝動（無矛盾の積極的精神）」⁴⁶である。つまり、ボザンケの「確定性」は、「部分が自己を超越して全体に吸収されようとする傾向」、あるいは「主導の生みの衝動（the birth-impulse）」としての「論理的精神」⁴⁷にしたがって「自己」が「他者」や「環境」に向かうという方向性を示唆するものである。それゆえ、ボザンケによれば、宿命から解放された「自己」の向かう方向は再び「環境」であり「全体」であり、そのために各人が「自らを再形成する」⁴⁸ことこそ、「確定性」の本質としての「自己決定」（self-determination）＝真の「自由」である⁴⁹。つまり、ボザンケの「確定性」概念は、「環境」から解放された「自己」の自由と、「全体」へと向かう「自己」の「論理」とを結び付けるものであり、いわば論理的決定（決定論）と創造的な力（非決定論）とを融合させるものである⁵⁰。

そして以上の議論を前提にすれば、ボザンケにあっては、「性格」は無目的かつ無方向のものではない⁵¹。むしろ、そのような、「環境」から完全に独立した「性格」、あるいは極端な自由意志は、ボザンケによれば真の「性格」ではなく「自己の制限」である⁵²。反対に、真の「性格」とは、絶対的な「決定」や宿命といった「環境」に支配されはしないが、しかし「思考する意志」（thinking will）として「全体」へと向かい、その意味において「環境」に影響を及ぼされるものである。ボザンケはいう。

「そして、環境はあらゆる意味で性格に影響を与える、ということを拒否することは原

理の思い違いであろう。しかし、真の視点は性格の視点であり、そして厳密に言えば、環境は、性格に、単なる環境としてではなく、性格の視点において考慮される全体との関係に含まれるものとして唯一、性格に影響を与えるのである。」(強調-ボザンケ)⁵³

つまり、ボザンケが正当化しようとする「性格」とは、「外なる」環境によって決定されない「内なる」自己としての純粋な「性格」ではなく、「全体」との脈絡の中でそれに「反応することのできる、より高貴な自己、あるいはより広大な自己」としての「性格」である⁵⁴。さらに、ボザンケの場合、「全体」との脈絡で「性格」の「反応」や「自己形成」が重視されることから、単なる外的事実としての「環境」への「性格」の盲従もまた否定され、「環境」も固定的なものではなく「性格」によって変革可能なものとして位置づけられる。ボザンケは「全体」との関係における「環境」の変革を、次のように述べる。

「そして環境は、〔全体との〕こうした相対性に含まれることで、形式的ではなく実際的な変形を経験し、そして完全にその性質及び反応に大変革を起こす(revolutionise)のである。」⁵⁵

そしてこの場合、単なる外的な「環境」を変えうるのは「性格」のみである。

「しかし、有能な観察者は、(中略)〔単なる外的事実としての〕環境を性格によって修正することができるということ、そして環境が人間の行動にとっての名辞であるかぎり性格のみによって修正することができるということを知覚するようになる。」⁵⁶

「我々が述べることはこうである。すなわち、いつ何時不運が環境を克服できないようにさせるとしても、しかし時間があれば、性格は一邪魔されなければ一自らを重ねて主張し、そして環境を自らの支援に変えるであろう、ということである。」⁵⁷

要は、「全体」を視野に入れながら自らを再形成し「環境」を変えてゆくことが、ボザンケのいう「性格」の本質である。そしてこうした「性格」の強調こそ、ボザンケと同じく自発的な「性格」を訴えたミルの視座にボザンケが共感を覚えるものである。マクブライアの指摘のように、ボザンケはミルの「性格」論を理想主義の立場から補い、ミルと同様に最終的には「性格」による「環境」の変更を主張することで、ミルが未完のまま終えた「性格」形成に関する因果法則の探究＝「性格形成学」(Ethology)⁵⁸を受け継いだのである⁵⁹。

しかしながら、その一方で、ボザンケはミルに関して、次のようにも述べている。

「わたしは、ミルを本当に正すためには、だれかが彼をはるか別の方向に、それもおよそ正しい方向に向かせねばならないと思う。」⁶⁰

つまり、ボザンケは、ミルの「性格」論に一定の評価を与えながらも、彼の思想全体にはなお批判されねばならない点があるというのである(実際、ボザンケの「性格」論もミルのその理想主義からの修正があった)。特に、その後にボザンケによってなされるミル批判は、「性格」論でのような「批判的継受」の類ものではなく、より「根本的」なミルの思想への「批判」であった。そしてそれは、ミルの政治思想への批判を中心とするものであった。

5. ミル批判 (2) - 「個性」を巡って -

ところで、ボザンケによるミルの政治思想批判は大きく二つに分けられる。一つは、ミルの提示する「個性」概念に対する批判、およびその敷衍としての「自己」と「他者」との「境界画定の原理」(principle of demarcation)に対する批判であり、もう一つは、以上の「個性」論をベースとしながらもやや性格を異にするミルの社会政策の主張に対する批判である。後者は、後述のボザンケの社会政策論において検討されるので、ここではミルの政治思想に対する批判に焦点を絞る。しかし、そのためには、バンド(D. C. Band)によっては、ボザンケの政治思想の中核的な概念と指摘される⁶¹、彼の「個性」概念を最初に明らかにしなければならない。

ボザンケによれば、「個別」、「個体」、「個人」、すなわち「個」(individual)とは、前述の「具体的普遍」を表すものである。ボザンケはいう。

「個とは、真に無限的な概念における存在であり、それは同一性と差異との両者を通じてはっきりと姿を現せる具体的普遍の体現でもある。」⁶²

「従って、我々の個性(individuality)の型式は、はじめから具体的普遍として描写されるものであったのである。」⁶³

それゆえ、ボザンケは、通常は完全に別物と理解される「個」と「普遍」とを同一のものと見なし、哲学が探求の対象とする前述のような真の「普遍」=「具体的普遍」は「個」に宿ると論ずるのである。

ところで、モナガン(P. A. Monaghan)の指摘のように、こうしたボザンケの形而上学における「個別」が、同時に社会における「個人」を意味し、「国家」や「個人」を巡る政治思想において具体的な形で論じられていることは明らかである⁶⁴。ボザンケは、形而上学的な「個性」を政治学的な観点から人間の「個性」と捉えなおして次のように説く。すなわち、「個人」とは、individualという綴りからも分かるように、通常の意味からすれば「分離する」(divide)の「否定」(in-)というその語源からしてあくまでその独自性、独特性といったものに強意が据えられている言葉である。しかし、その独自性という意味が、お互い分離した存在としての「個人」に付与されるのであれば誤りである。ボザンケはいう。

「個々人は多くの点で制限されており、かつ隔絶されている。しかし、真の個性は彼らの孤立性に存するのではなく、それによって彼らが普遍への独特の貢献となるその特徴ある行為もしくは尽力に存する。真の個性は、これ以上細分化を許さない極小化に存するのではなく、最大限の侵すことのできない統一状態を内包している極大化に存する。」⁶⁵

むしろ、ボザンケは「他者」や「全体」に貢献するという意味で「個性は本質的に積極的な概念である」と理解する。「我々は個性の原理を扱うことで、事実上の目的の観念の代わりに、完全もしくは全体に関する観念を用いる。」⁶⁶それゆえ、ボザンケによれば、その本質が単に「他者ではないこと」と理解される個性は、消極的あるいは形式的な個性であり⁶⁷、また個性をそのように理解することは、「我々自身を自らの排他性に吸収」させ、狭

隘な利己心の聖地を保持することである⁶⁸。ボザンケはいう。

「そして個人が他者をはねつけていると自らを感じるとき、彼は排他的自己において個性のマキシマムに達することはできない。」⁶⁹

したがって、ボザンケによれば、人間が生きてゆくうえで「他者」である「社会」や「国家」とのかかわりあい、真の「個性」の成長にとって必要条件である。つまり、「自己の極大化と主張、そして個性の極大化と主張は、社会において、そして社会を通じて初めて可能となりかつ真のもの（real）になる」⁷⁰のである。実際、ボザンケにあつては「国家は個性の一相である」⁷¹。

しかしながら、ボザンケによれば、このような真の「個性」ではなく、前述のような消極的な個性を唱導するのがミルにほかならない。ミルは、ボザンケと同じように「個性」概念を強調するものの、その概念は形而上学的に十分に考察が加えられたものではなく、むしろボザンケの考える「個性」とは正反対のものである。ボザンケは、ミルの『自由論』（*On Liberty*）で示される「個性」が、「個人の中心的生活を社会的勢力の衝撃にたいして注意深く囲いを巡らされるべきもの」として扱われていること⁷²、またそこでの個性の観念も真の「個性」に関する観念と「著しく対立している」ことを指摘する⁷³。ボザンケは言う。

「ミルの個性の観念は、明らかに、法が悪であるというベンサム主義的伝統に片寄っている。（中略）もし、[ミルが論ずるように]個性や独創性が法や義務の欠如を意味するか、もしくはそれに依拠するのなら、あるいはもし奇矯さが十分に発達した自己の型式であるのなら、そしてもし普遍的な関係の感覚によって浸透されたコミュニティが単調と一律の餌食となるなら、そのさい以下のことを示すのに更なる言葉を必要としない。すなわち、法は人間の本性の削減であり、法の必要性は依然として解釈できないままであり、その結果自治は言葉のうえでの矛盾である、ということ。」⁷⁴

こうして、ボザンケは、ミルの思想を「各人は一個として数えるべきで、決して一個以上と数えるべきではない」⁷⁵と唱えた前出のベンサムの個人主義思想を受け継ぐものと見なし、ミルの言う個性が社会の諸関係、諸義務によっては特徴付けられない「一種の内的自己」「傷つかない世界」（an impervious globe）であるとして、ミルの『自由論』での議論を非難する。かつて、デイヴィッドスン（W. L. Davidson）は、ミルは、独創性や奇矯さが時に奨励されるよりも抑圧される必要があることを失念していると批判したが⁷⁶、ボザンケはこの批判をさらに一歩進め、独創性や奇矯さの前提としての、各人の内なる純粋世界という仮定そのものを批判するのである。

ボザンケは、さらに、ミルの個性概念の敷衍としての、「自己」と「他者」との「境界画定の原理」に対して批判を行う。ミルは『自由論』で次のように言っている。

「人間の行為の中で、社会にしたがわなければならない部分は、他人に関係する部分だけである。自分自身にだけ関係する行為においては、彼の独立は、当然、絶対的である。彼自身に対しては、彼自身の身体と精神に対しては、個人は主権者である。」⁷⁷

また、ミルは『自由論』を貫く公理として、「第一に、個人は自己の行為について、それ

が自分以外の人の利益に関係しない限り、社会に対して責任をとる必要がないこと、(中略) 第二に、他人の利益に損害を与える行為について個人は責任があり、もしも社会が社会的あるいは法的刑罰の何れかを自己防衛のために必要とすると考えるならば、個人は、その刑罰のうちのどれかを受けても差し支えないこと」⁷⁸を挙げ、「自分自身にだけ関係する部分」と「他人に関係する部分」とに分類し⁷⁹、前者への干渉を排除している。

しかし、ボザンケは、「自己」と「他者」との措定のもとで両者の境界を画定することは、「重要な社会関係をもつ生活のあらゆる行為から個性を排除する」ものだとして、次のように述べる。

「他方、すべての行為の二側面的性質のために、それ〔ミルのいう境界画定〕がひとつの基準として実際に機能するときには、完全に恣意的なものとなる。というのは、わたしの行為はわたし自身と他者との両方に影響を与えるからである。(中略) 自己に関する行為と他人に関する (other-regarding) 行為との間の有効な境界画定はとうていありえない。このことは無難に主張されることである。」⁸⁰

こうして、ボザンケは現実の社会の様々な人間関係は「自己」と「他者」との線引きを不可能にするとして、その境界によっては特徴づけられない人間の本性に鑑みながら、ミルの境界設定を抽象的で恣意的なものとして批判するのである。さらに、ボザンケは、この「境界画定」がミルの主張する個性を逆に抑圧すると説く。ボザンケはいう。

「我々が観察しなければならないことは、単に個性の擁護において目論まれた個性と社会との境界画定が、その個性をほとんど全滅させているということである。」⁸¹

それでは、どのようにして「境界画定の原理」が「個性」の滅却を惹起するのであるのか。ボザンケによれば、ミルは、ロックやベンサムなどと同様に国家や社会よりも個人を優先した思想家であり、そこでは各個人が「目的」とされ社会や国家といった他者が「手段」と理解される。しかし、個人のみを「ベンサム的」に目的として捉えるだけでは、「各個人と全体の人間との間の関係」に関する事柄が何一つ決定されず、それゆえ「各」個人に対して、どの程度自分自身を“全体”〔や「他者」〕に犠牲にすることが、“個人”の福祉の名において要求されるか」が「偶然にゆだねられた事柄」になってしまう。ボザンケはいう。

「したがって、我々が、ベンサムが意味するもの、つまりすべての諸個人 (=個人) が目的であると述べるなら、そのさい、あらゆる個人のために、あらゆる個人それぞれから要求される犠牲に理論的限界はない。それゆえ社会は不可避的な目的となる。」⁸²

つまり、社会ないし国家と個人の関係が(「手段」と「目的」という位置づけ以外では)何ら規定されていないがゆえに、“個人の福祉の実現”という美名の下で社会や国家が個人に要求する犠牲には際限がなくなり、結局は社会や国家が「目的」となって個人に対する恣意的かつ不当な干渉・抑圧が生ずる恐れがあるとボザンケは指摘しているのである。実際、ボザンケは、「手段」と“目的”は場所を変更しがちであると論じている。ボザンケはいう。

「無批判の個人主義は常に無批判の集団主義に変換する危険がある。2つの基礎は実際同一である。」⁸³

そしてこうしたベンサム流の議論を展開するのがミルにはかならない。ボザンケは、ミルの「境界画定の原理」、すなわち「統治の目的と基礎は、他人の衝撃から自己を守ることであり、自己をその孤立した純粋性において保つこと」とするミルの原理では、「自己は残るが、しかし“統治”は余計なもの」となるか、あるいは「“統治”がすべてであり自己は絶滅」することになると論じ⁸⁴、それが「ベンサムの伝統にかたよっている」ものと位置づける。ボザンケはいう。

「我々は、それ〔ミルの見解〕が、むしろ行政の無政府主義から行政の絶対主義への移行への道を容易に開かせるということを予期すべきである。そしてこうした移行は、ミルの『自由論』の〕後半の見解において生じていると思われる。こうした完全な大混乱（bouleversement）への傾向は、分離できぬ全体のいくつかの要素に異なった範囲を割り当てることで進むすべての概念の特徴である。」⁸⁵

かくして、ボザンケはミルの議論の中に「陳腐な個人主義と集団主義」⁸⁶を招来する契機、すなわち社会や国家が「目的」となり、個人が不当な国家干渉を受けて「手段」へと墮する契機を見抜き、『自由論』に「個性の擁護は、すでにほとんど個性の全滅に一変している」⁸⁷側面を喝破するのである。つまり、ボザンケは、「国家」と「個人」の関係を、ミルやベンサムの説くような「手段」と「目的」の関係では正確に説明できないと論ずるだけでなく、その論理で推移すれば、「国家」の不当な干渉＝「全体主義」を招く危険があることをも指摘しているのである。以上の議論では、ボザンケの「国家干渉」の原則がまだ未検討であり、かつ彼の社会政策論およびそこでの再度のミル批判も検討されていないために、ボザンケの言わんとしているものがなお不明瞭であるが（この点は後述する）、いずれにせよ、ボザンケが「個性」の滅却をミルの議論に見出していることは確認できる。

ところで、ボザンケは「個性」に関して、以下のようにも述べている。

「人間が十分に個としての自己を享受し、そして主張するのは、感覚的な自己の片隅や奥底においてではない—このとき、彼はさまざまな物事、そしてさまざまな人々から最も孤立し、自己の感覚に夢中になっている—。こうした観念は、個性の真の経験のカリカチュアである。」⁸⁸

つまり、人間が「個性」を感じるのは、理性的かつ合理的な状態で「他者」に貢献している場合であり、己の感覚や感性とのみ交わっている状態では、真の「個性」の知覚は不可能である。この主張を、前出の「実在意志」論、および「一般意志」論と結びつければ、結局は、人間は「実在意志」ないし「一般意志」を意志している場合にのみ「個性」を感じ得ることになる。その意味で、ボザンケの「個性」論は、ベンサム批判で見られたボザンケの「自由」観念と同様に、彼の「一般意志」「実在意志」を巡る前出の議論のいわば形を変えての再説である。

6. スпенサー批判

さらに、ボザンケによれば、こうしたベンサムに見られる「法」と人間の敵対関係や、ミルに見られる「境界画定の原理」を極限にまで押し進めたものがハーバート・スペンサーの政治思想である。ボザンケはいう。

「明白なことは、ハーバート・スペンサー氏が単に“自己”と“統治”のアンチテーゼにおけるその正反対の両極を、ベンサムがお気に入りである以上に好んでいるということだ。」⁸⁹

「自己と法とがいかに矛盾しかつ敵対したもののように見えるかということは、ベンサムないしミルにおいてよりも、ハーバート・スペンサーにおいていっそう露骨に明言されている。」⁹⁰

そしてこうしたボザンケの批判は、スペンサーの代表作『人間対国家』(*Man versus State*)に向けられる。スペンサーはこの著書の中で次のように述べている。

「市民が享有する自由は、代議制であろうとそれ以外ものでであろうと、市民がそのもとで生活するところの統治機構 (the governmental machinery) の本性によってではなく、そうした機構が市民に課す拘束の相対的な僅少さによって測定されう。」⁹¹

これに対し、ボザンケは以下のような批判を行う。

「そして我々が驚愕するのは、それ〔スペンサーの議論〕が、自立した活動 (self-sustaining activities) を為す権利の積極的かつ能動的な (active) 要素は非社会的性格を帯びる、ということをも主張していることである。」⁹²

つまり、スペンサーの議論では、人間が「社会」とのかかわりが無くなることは決して消極的ではなく、むしろ積極的なものである。しかし、こうした主張がボザンケにとって不適であることは、彼のベンサム批判、ミル批判からもはや明らかである。ボザンケは、スペンサーの議論を以下のように総括する。

「ここ〔スペンサーの議論〕には、自己と統治との間の区分、あるいは個性と法との消極的な関係をこれ以上単純化できないものとして受け入れる究極的な結果が存在する。自由と自己は道徳的目的から分離させられる。この傾向は我々がミルにおいてすら注意したものである。社会における自己は、まるで自らの蜂巢を造っている蜜蜂のように考えられ、そして自己の倫理的性格は、侵害の不在 (the absence of encroachment) に匹敵する。(中略) 自己は、こうした見解を通じて目的に位置づけられ、自己の自由のためにはすべてのものが犠牲とされ、結局は、自己は生活の非倫理的な要素になるのである。」⁹³

かくして、ボザンケは、スペンサーの議論では、「自己」が社会的性格を帯びない結果、それが「非倫理的」なものになると断じて、その思想を批判するのである。スペンサーは、ベンサムやミルと違ってボザンケと同時代の思想家であり、両者は個人的には親しい仲にあった。実際、スペンサーが1896年に「総合哲学体系」(*A System of Synthetic Philosophy*)を完成させたさい、ボザンケは彼に手紙を書いてその完成を祝福している⁹⁴。しかし、ボザンケのスペンサー批判はそれとは裏腹に激しいものであった。ボザンケは、スペンサーの

前述のような個人観、国家観、社会観を総合して、彼の主張を以下のように激烈に批判している。

「思うに、〔真の政治思想にとって〕有害かつ悪しきもの (evil) は、大部分、ハーバート・スペンサー氏のせいである。そして彼の偉大な能力、そして不屈の勤勉さにもかかわらず、あるいはむしろそれらおよびそれらの誤用のために、私は、哲学者の中のダンテがスペンサー氏に地獄の中で最も低劣な集団の扱いを受けるのが適切であると思う。」⁹⁵

ダンテ (Dante Alighien: 1265-1321) は『神曲』(Divina Commedia) の中で「地獄」「煉獄」「天国」を描き、「地獄」を9つの圏谷に分類した。そしてその9つの「地獄」の中で、肉親を裏切り、祖国を裏切り、客人を裏切り、そして主を裏切った「裏切り者」(the treacherous) の生息地たる「第九の地獄」を「地獄」の中の「地獄」として描いた⁹⁶。スペンサーには「第九の地獄」での処遇が最適とするこうしたボザンケの主張は、彼のスペンサーに対する批判がいかに激しいものであったかを物語っている⁹⁷。

7. ボザンケのイギリス政治思想批判

以上、ボザンケのイギリス政治思想批判として、彼のホブズ・ロック批判、そしてベンサム・ミル・スペンサー批判を検討してきた。前者は、いわば「実在意志」ないし「一般意志」の表出がホブズ・ロックの両者には見られないという点での批判が中心であり、他方、後者のベンサム・ミル・スペンサー批判では、それらを「見かけの理論」として、「自己」と「統治」あるいは、「自己」と「社会」との積極的關係が解明されていないという点での批判が中心であった。いずれにせよ、ボザンケが、前述の「実在意志」論、「一般意志」論での議論を応用しながらイギリスの知的巨人を論難した様子が明らかとなり、それによって、イギリスの政治思想の主流とは一線を画すボザンケの観念論的側面もまた明確になった。そして言うまでも無く、こうしたボザンケの議論に対しては多くの批判が噴出したが、それが集中したのは、彼の「自由」概念と「個性」概念に対してであった。

前述のように、ボザンケは、ベンサム批判を通じて、真の「自由」は「実在意志」の具体化である「国家」や「法」と相反するものではなく、むしろそれらとの共存において真の「自由」は成り立つと論じていた。こうしたボザンケによる「自由」の主張こそ、グレイ (John Gray) の指摘のように、強化された政府の活動及び権威の擁護と、契約の自由を制限する政策の支持へと向かうものであり⁹⁸、ここに、彼の「一般意志」の議論と並んで、他のイギリス理想主義者と同様にボザンケが国家干渉を正当化する、その理論的根拠が見出される。無論、こうしたボザンケの自由論には、それが人間へのあらゆる強制を「実在意志」や「一般意志」の美名の下で正当化し、かつ人間の自由を抑圧するものだとして、多くの批判が寄せられた。たとえば、リンゼイは、「自由」は「法」への服従にあるという議論は信憑性が薄いとして、それを「神秘的」な学説と評した⁹⁹。また、「消極的自由」と「積極的自由」という「二つの自由概念」¹⁰⁰を提示したバーリン (Isaiah Berlin: 1909-1997) も、ボザンケの議論に全体主義に行き着いてしまうような危険を看取し¹⁰¹、クランストン

(Maurice Cranston) もボザンケのいう「自由」を「強制可能」な「理性的自由」(enforceable rational freedom) と位置づけて、それを「規律の中に見出される自由」と批判した¹⁰²。さらに、こうしたボザンケの「自由」概念に対する批判的視座は、その後、ボザンケを「功利主義の消極的自由の概念を拒否する点では、グリーンよりもはるかに強烈であった」と位置づけるベイ (Christian Bay) や¹⁰³、ボザンケの自由論を「非—自由主義的」であると断ずるモロウらによって受け継がれてきた¹⁰⁴。

しかし、ボザンケの自由論から、バーリンのように直ちにそれが「消極的自由」を否定し、国家干渉を全面的に認め、「全体主義」を招来するものだと結論づけるのは誤りである。何となれば、ボザンケは自由論のはじめにおいて「消極的自由」を重視していたはずであるし、またボザンケは「自由」に「国家」などの他者による「強制」を含ませつつも、なお「個人」の領域で起こりうる「イニシアティブ」を最大限用意することが、その真意であるとしていたからである。つまり、ボザンケの議論は、人間の「魂の卓越」や「最善の生活」の達成、「共通善」の実現のためには、各人の消極的な意味での「自由」に加えて「実在意志」や「一般意志」の具体化である「国家」や「法」といった「他者」が必要である、ということを論旨とするものである¹⁰⁵。無論、ウラムが指摘するように、「消極的自由」を主張する「レッセ・フェール」的な「自由」のみが唱えられた場合、それはボザンケにとって人間の本性の一部を否定することである¹⁰⁶。しかし、いわゆる消極的な意味での「自由」も、真の「自由」のための前提として、ボザンケにとっては重要なものであったのである。

また、ボザンケの自由論は、こうした「自由」そのものを純理論的に捉えることだけではその真相が見えてはこない。何となれば、ボザンケがいわゆる「積極的自由」を「自由」の概念に含ませたとしても、その内実としての彼が示す具体的な国家干渉論を見なければ、彼の考える「自由」の全体像は把握できないはずだからである。後述のように、ボザンケは国家干渉論において各人の意志作用＝「批判」を重視する観点から国家活動に慎重な態度をとり、前述のように、あくまで「強制」も各人のイニシアティブが発揮できるようにするための、いわば環境作りに制限している。それゆえ、ボザンケの「自由」概念が「全体主義」を示唆するものではないことは、以上のようなボザンケの「自由」概念そのものによっても示されるが、この点は後の国家論においてより強力にフォローされることになる。

ところで、ボザンケに対する批判は、ボザンケの「個性」概念にも向けられた。例えば、ホブハウスは、ボザンケのこうした「個性」や孤立人への見方は個人に単なる二次的な意義しか付与しておらず、各人の間の相違を消失させるものだと断じ¹⁰⁷、またホルダーは、ボザンケの議論は個人の価値を「全体」に比べて低く見積もっていると批判した¹⁰⁸。さらに、ラスキは、人間の孤立を真実でないものとするボザンケの「個性」論を批判し、「全体」との「一体性」は与えられたものではなく、むしろ各人が「孤立した状態で行われる行為」を通じて「発見」されるものだとし、ボザンケとは反対にあくまで各人の孤立性、原子

的側面を強調した¹⁰⁹。

しかしながら、こうした批判もまた一面的である。確かに、通常考えられる「個性」の観念から出発すれば、「全体」や「普遍」を「個別」ないし「個人」と接続させるボザンケの議論が通常用語法を越えた議論であり、一見ではそれが各人の相違に力点を置かない議論であるかのような印象を与えている。しかし、そのさい、看過されてはならないのは、ボザンケとミルとでは「個性」の捉え方自体が異なり、両者のいう「個性」が全く位相の異なるものに帰結している点である。すなわち、ミアヘッドの分類のように、ミルは個性をお互いバラバラな状態にある点に本質を見出す一方で、ボザンケはこうした分離を単に完全な「個性」概念における一要素と見なしており¹¹⁰、またガウスの指摘に従えば、ボザンケが「個性」とそこに内在する社会性を人間本性の同一原理の顕現であると見たのにたいして、ミルはボザンケのごとく両者を調和させるのではなく、それらをあくまで別物としたうえでそのバランスをとろうとしている¹¹¹。この点をより政治学的に言い直せば、セイバイン (G. H. Sabine) が指摘するように、ミルの個性は基本的に個人の外部からの自己防御として用いられ、かつ自由社会の諸条件において実際的に実現されるものとして考えられるのに対し、ボザンケの「個性」は個人が自己以外の外部社会に完全に順応するとき生まれるものと考えられている¹¹²。このように、ボザンケとミルとでは「個性」を巡る見方が根本的に異なっていることから、そしてまた通例の個性の謂がミルの主張に近いものであることから、ボザンケに対して批判が噴出するのは当然であり、その批判は噴出すべくして噴出したものといってよいものである。

しかし、前出の批判は、なおボザンケの理想主義の立場、すなわち政治哲学は現実のものを解釈し、そこから真実なるもの (reality) の一般的性格を「社会」や「国家」などの関係の中でより完成度の高い形で抽出する、という立場を無視した類のものである。つまり、ヒンチマン (Lewis P. Hinchman) の指摘のように、ボザンケとミルとの相違は、ミルが個性をより自然的に、あるがままに捉えたのにたいして、ボザンケは「個性」を別の角度から、すなわちそれをより自覚的、自己意識的に、あるいは理想主義的に捉えて、結合した個人間において人間は真に「個人」であり、「全体」の中で自己自身を痛感するときに人間は真の「個性」を体現すると考えたことに求められる¹¹³。その意味で、前出の批判はボザンケの理想主義の立場を考慮したものとはいえず、その批判もボザンケ批判としては有効なものとはいえない¹¹⁴。

さらに、ボザンケのいう「個性」がその用語法において通例と異なり、その概念が理想主義の立場に沿う形のものとなっているとしても、そのことから、彼の議論が個人の間の相違や各人の価値の消失を意図するものであったと断ずることはできない。というのも、ボザンケは、「個性」は各人が各人の独自の方法で「全体」に貢献することで達成される、と論じただけで、決して人間各々の差異を否定するようなことは述べていないからである。むしろ、ボザンケは「世の中にはいろんなひとがいるものだ」(It takes all sorts to make a world.) というアフォリズムを最も重要なものと位置づけ、各人の相違を強調している¹¹⁵。

また、ボザンケは「個性」を「同一性と差異との両者を通じてはつきりと姿を現す」¹¹⁶ものとして「差異」を前提にし、かつ「個性」と同義の前述の「具体的普遍」も、その内に「普遍」に対立する「特殊」を内包している。そしてその「具体的普遍」も、トロット (A. v. Trot) が指摘したように、それは現実社会に適用された場合には各人のさまざまな経験的な行為に宿るものである¹¹⁷。したがって、ボザンケの「個性」概念は各人の異別性、多様性を含みつつ「全体」や「普遍」へのダイナミズムをも内包したものといえ、各人の間の相違を解消させるものではない。

また、この点と関連して強調されねばならない点は、ボザンケがミル批判を通じて、人間の「個性」が抑圧される理論的根拠を逆にミル自身の主張の中に見出している点である。元来、ミルの『自由論』は、大衆社会下で非強制的、無意識的に個性と多様性の発展が妨げられていることに対して厳しい指摘と批判を加えることにその目的があった¹¹⁸。つまり、ミルの主眼は、ミルが当時往復書簡を交わしていたトクヴィル (Alexis de Tocqueville: 1805-1866) と同じく、「多数者の専制」を危惧し、ミルのいう個性の消失を恐れて一種の警告を世に発することにあつた¹¹⁹。事実、ミルは「今日、社会はかなりの程度まで個性に対して勝利を収めている」と理解し¹²⁰、民衆は「他のあらゆる権力の濫用に対してと同様、十分な警戒をはらう必要」があるとしている。さらに、ミルは「権力の掌握者が、社会すなわち社会の中のもっとも強力な党派に対して定期的に責任をとる場合でも、個々人に対する国家権力を制限することは、その重要性を少しも失わない」とも断じて、「政治の問題を考える際に、『多数者の専制』は、今では一般に、社会が警戒することが必要な害悪の一つに入れられている」¹²¹と警告している。しかし、スイートの指摘のとおり、こうした個性を擁護するための、「自己」と「他者」との「境界画定の原理」のミルによる提示は、ミルの「警世的」¹²²な目論みとは裏腹に、ボザンケにとっては、人間や社会に関する根本的誤解だけでなく、ミル自身が擁護しようとしていた個人の価値＝個性をも脅威にさらすものとして映ったのである¹²³。その意味で、ボザンケのミル批判、およびその「個性」論は、確かに「原子論的个人主義」や彼のいう「見かけの理論」を否定し、通常の言葉の定義を超えて「個性」論を展開するものであったものの、それは「個人」の価値や尊厳の解消どころか、むしろそれらの擁護を視野に入れたものといえる。ボザンケの議論が、人間性や各人の本性の抑圧を意図するものでなかったことは、ここから明らかである。

そしてこうしたボザンケの「個性」論はまた、ボザンケのイギリス政治思想批判の、いわば政治思想史上における諸特徴を具体化している。ボザンケは、それまでのイギリスの政治思想ないし哲学の流れにおいて「個性」という言葉が「積極的なコスモス」としてではなく「空虚で排他的なものとして理解」されてきていること¹²⁴、そしてイギリスの伝統的な「原子論的个人主義」は「個人」を「偉大な個性」(a great individuality)ではなく「原子」(atom)として理解していることを指摘する¹²⁵。しかし、ボザンケにあつては、前述のように、人間が真に「個」としてあることは「具体的普遍」としての「個性」を体現することであり、周囲との関係を遮断したうえでの排他的特異性を示すことではない¹²⁶。つま

り、ヴィンセントの言葉を用いれば、ボザンケのいう「個性」とは“ユニット”(単位)(unit)ではなく“ユニティ”(統一性)(unity)を意味するものである¹²⁷。その意味で、シモニーの指摘のように、ボザンケの考える「個人」とは、いわば「個別化されかつ社会化された個人」(socialized-cum-individualized individual)である¹²⁸。ここに、従来のイギリスの知的風土としての「原子論的個人主義」には見られないボザンケの政治思想上の独自性が見いだされる。

無論、ベンサムやミルは「原子論的個人主義」ではなく「功利主義」の思想家、ないしそれを再定義した思想家と目される。そしてこうした「功利主義」とは、元来、ホッブズやロックが提示した「原子論的個人主義」を放棄して生きた現実の人間から出発しながら、功利・効用を生活の究極基準とし、快楽と苦痛が人間の行為の原因であるばかりか、行為の正・不正の基準をも提供するという倫理学説と位置づけられる。しかし、ミルンの指摘のように、「功利主義」は政治思想においては、如上の快楽主義(hedonism)のほかにも原子論的な意味合いを帯びた個人主義や、「権力からの自由」を意味する「消極的自由」論をも内包するものである。それゆえ、ボザンケのイギリス政治思想批判は、「原子論的個人主義」批判に加えて、イギリスのもう一つの知的伝統でもある「功利主義」を批判したものと位置づけることができる¹²⁹。「原子論的個人主義」と「功利主義」を批判したボザンケが、イギリス政治思想史において異端視される理由がここにある。

ところで、ボザンケは以上のようなイギリス政治思想批判において、ホッブズ・ロックを批判していた。そのことは、前述のルソー批判とともに、ボザンケが「自然権」的な政治思想を放棄していることを示している。実際、ボザンケは、前述のように自然権思想に基づく「原子論的個人主義」を否定し、さらに後述のように、人間の権利を「社会」や「国家」とは無関係なもの、あるいはそれらが成立する以前に各人に付与されているものとする「自然権」的見解、あるいは「人権」的な発想をすべて「的外れの概念」、「幻想」、そして「誤った特殊化」としている¹³⁰。だが、ボザンケは「権利」そのものを否定する議論は展開しておらず、彼はむしろそれを積極的に意味づけている。では、ボザンケの考える真の「権利」とはどのようなものであろうか。

この点を解明するには、まずボザンケの国家論そのもの、および彼の考える「国家」と「社会」の関係、「国家」と「個人」の関係が明らかにされなければならない。何となれば、彼の「権利」概念は、まさしく「国家」と「社会」「個人」との微妙な関係の上に成り立つものだからである。

第3章 註

- ¹ PTS, V, p.97.
- ² PTS, V, p.97.
- ³ PTS, V, pp.97-98.
- ⁴ PTS, V, p.98.
- ⁵ PTS, V, p.98.
- ⁶ PTS, V, p.99.
- ⁷ J. H. Muirhead, *The Service of the State: Four Lectures on the Political Teaching of T.H.Green* (London: John Murray, 1908), p.59n.
- ⁸ PTS, V, p.90.
- ⁹ PTS, V, pp.68-69.
- ¹⁰ PTS, V, p.133.
- ¹¹ PTS, V, p.125.
- ¹² PTS, V, p.126.
- ¹³ PTS, V, p.129.
- ¹⁴ PTS, V, p.128.
- ¹⁵ PTS, V, p.127.
- ¹⁶ PTS, V, p.127.
- ¹⁷ PTS, V, p.118.
- ¹⁸ PTS, V, p.136.
- ¹⁹ PTS, V, p.129.
- ²⁰ PTS, V, p.118.
- ²¹ PTS, V, pp.128-129.
- ²² PTS, V, p.136.
- ²³ PTS, V, pp.131-132.
- ²⁴ PTS, V, p.119.
- ²⁵ CC, VIII, p.362.
- ²⁶ PTS, V, p.53.
- ²⁷ PTS, V, pp.53-54.
- ²⁸ PTS, V, p.54.
- ²⁹ PTS, V, p.54.
- ³⁰ PTS, V, pp.54-5.
- ³¹ PTS, V, p.55.
- ³² PTS, V, p.55.
- ³³ PTS, V, p.54.
- ³⁴ PTS, V, pp.55-56.
- ³⁵ PTS, V, p.72.
- ³⁶ PTS, V, p.54.
- ³⁷ Stefan Collini, *Public Moralists: Political Thought and Intellectual Life in Britain 1850-1930* (Oxford: Clarendon Press, 1993), pp.227-228.
- ³⁸ SE, I, p.137, Bernard Bosanquet, "The Essential Distinction in Theories of Experience", *Proceedings of the Aristotelian Society*, Vol.3, No.1, 1894, p.5.
- ³⁹ EA, XII, p.162.
- ⁴⁰ L, II, p.141.
- ⁴¹ L, II, p.vi.
- ⁴² ロバート・オウエン、楊井克巳訳『新社会観』(岩波書店、1954年)120-121頁。また丸山武志『オウエンのユートピアと共生社会』(ミネルヴァ書房、1999年)25頁、高島、前掲書、1995年、54-55頁参照。
- ⁴³ Mill, *op.cit.*, 1981, p.177, 訳150-151頁。
- ⁴⁴ J. S. Mill, *A System of Logic*, Vol.VIII of *Collected Works of John Stuart Mill*, ed. by John Robson

et al. (Toronto: University of Toronto Press, 1974), p.840. J・S・ミル、大関将一訳『論理学体系一論証と帰納VI』（春秋社、1959年）17-18頁。

⁴⁵ PIV, VI, p.327.

⁴⁶ PIV, VI, p.340.

⁴⁷ PIV, VI, p.24.

⁴⁸ PIV, VI, p.342.

⁴⁹ Gertrude Carman Bussey, "Dr. Bosanquet's Doctrine of Freedom", *The Philosophical Review*, Vol.25, No.5, 1916, p.718.

⁵⁰ Pfannenstill, *op.cit.*, 1936, p.207, Francois Houang, *Le Néo-Hegelianisme en Angleterre: La Philosophie de Bernard Bosanquet 1848-1923* (Paris: Librairie Philosophique J. Vrin, 1954), p.152.

⁵¹ ただし、ミルの提示する「性格」も何らの方向性を示さないものではない。ミルは「自由意志の学説は自己陶冶の非常に強固な精神を要請」（Mill, *op.cit.*, 1974, p.642, 訳21頁。）とするとして、性格の「自己陶冶」という方向を示している。つまり、ミルのいう性格とは、意志が快楽と苦痛の感情の変化の如何にかかわらず恒常的となったときにはじめてその意志によって形成され得るものである。バーガー（F.R. Berger）が指摘したように、ミルの場合、人間の自律的な性格形成は感情、願望、活動の性質の陶冶に存している。それゆえ、自己の内的陶冶が性格の発現には不可欠のものとなる。上杉健太郎「J.S.ミル政治思想の方法的基礎（I）—J.S.ミル『論理学体系』第6巻を巡って—」（『早稲田政治公法研究』第18号、1986年）160頁、また Fred R. Berger, *Happiness, Justice, and Freedom: The Moral and Political Philosophy of John Stuart Mill* (Berkeley: University of California Press, 1984), p.17.参照。

⁵² PIV, VI, pp.342-343.

⁵³ EASP, XIV, pp.121-122.

⁵⁴ EASP, XIV, p.121.

⁵⁵ EASP, XIV, p.122.

⁵⁶ EASP, XIV, p.73.

⁵⁷ EASP, XIV, p.144.

⁵⁸ 因果法則を内包するエソロジーの構想からも理解されるように、ミルは完全には決定論的要素を放棄する立場にはない。「いいかえると、人間は一つの普遍的な性格を持ってはいないが、性格の形成にかんする普遍的な法則は存在する。」（Mill, *op.cit.*, 1974, p.864, 訳57-58頁。）つまり、ミルは人間主体の内的経験を主体にとっての性格修正の直接の原因にすることで、宿命論（fatalism）という形で歪曲された決定論を批判しているのである。

⁵⁹ McBriar, *op.cit.*, 1987, p.122.

⁶⁰ 1889年10月2日の書簡。BBF, XX, p.70.

⁶¹ D. C. Band, "The Critical Reception of English Neo-Hegelianism in Britain and America, 1914-1960", *The Australian Journal of Politics and History*, Vol.26, No.2, 1980, p.231.

⁶² PIV, VI, p.72.

⁶³ PIV, VI, p.319.

⁶⁴ P. A. Monaghan, "Ball, Bosanquet and the Green Legacy: A Reply to Matt Carter", *History of Political Thought*, Vol.22, No.3, 2001, p.527.

⁶⁵ PTS, V, p.170.

⁶⁶ PIV, VI, p.127.

⁶⁷ PIV, VI, p.69.

⁶⁸ VDI, VII, p.36.

⁶⁹ PIV, VI, p.270.

⁷⁰ PIV, VI, p.68.

⁷¹ PIV, VI, p.312.

⁷² PTS, V, p.56.

⁷³ PTS, V, p.57.

⁷⁴ PTS, V, pp.56-58.

⁷⁵ Jeremy Bentham, *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation* (New York: Hafner

Publishing, 1948), pp.29-32.

⁷⁶ W・L・デイヴィッドソン、堀豊彦、半田輝雄訳『イギリス政治思想Ⅲーベンサムからミルに至る功利主義者』(岩波書店、1953年)、142-143頁。

⁷⁷ J. S. Mill, *On Liberty*, Vol.XVIII of *Collected Works of John Stuart Mill*, ed. by John Robson et al. (Toronto: University of Toronto Press, 1977), p.224, J・S・ミル、早川忠訳『自由論』(世界の名著、中央公論社、1967年) 225頁。

⁷⁸ Mill, *op.cit.*, 1977, p.292, 訳 323頁。

⁷⁹ Mill, *op.cit.*, 1977, p.280, 訳 307頁。

⁸⁰ PTS, V, p.60.

⁸¹ PTS, V, p.60.

⁸² PTS, V, p.76n.

⁸³ PTS, V, p.66.

⁸⁴ PTS, V, pp.70-71.

⁸⁵ PTS, V, p.59.

⁸⁶ PTS, V, p.169.

⁸⁷ PTS, V, p.59.

⁸⁸ PTS, V, p.117.

⁸⁹ PTS, V, p.66.

⁹⁰ PTS, V, p.67.

⁹¹ Herbert Spencer, *The Man Versus the State*, *Thinkers Library Edition, Second Edition* (London: Watts & Co., 1950), p.19, PTS, V, p.15.

⁹² PTS, V, p.67.

⁹³ PTS, V, p.68.

⁹⁴ John Offer, "Spencer's Future of Welfare: a Vision Eclipsed", *The Sociological Review*, Vol.47, No.1, 1999, p.157, John Offer, "Idealist Thought, Social Policy and the Rediscovery of Informal Care", *The British Journal of Sociology*, Vol.50, No.3, 1999, p.479. スペンサーの「総合哲学体系」とは、彼の『第一原理』『生物学原理』『心理学原理』『社会学原理』『倫理学原理』からなる。狭本佳代『社会システム論と自然』(法政大学出版局、2000年) 147頁。

⁹⁵ EASP, XIV, p.96.

⁹⁶ Boucher (ed.), *op.cit.*, 1997, p.57. また、ダンテ、平川祐弘訳「神曲」、『世界文学全集3 ダンテ』(講談社、1982年) 161-179頁(第三十二歌～第三十四歌)、および解説 546頁。

⁹⁷ なお、ボザンケは、ダンテの『神曲』を、生涯を通じて愛読していた。Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, pp.79-88.

⁹⁸ ジョン・グレイ、藤原保信、輪島達郎訳『自由主義』(昭和堂、1991年) 54頁。

⁹⁹ A・D・リンゼイ、紀藤信義訳『現代民主主義国家』(未来社、1969年) 340頁。

¹⁰⁰ I・バーリン、小川晃一他訳『自由論』(みすず書房、1970年) 304-318頁。

¹⁰¹ バーリン、前掲書、1970年、348、351、355-356、383頁。

¹⁰² M・クラムストン、小松茂夫訳『自由』(岩波書店、1976年) 31-32頁。

¹⁰³ クリスチャン・ペイ、横越英一訳『自由の構造』(法政大学出版局、1979年) 87頁。

¹⁰⁴ Morrow, *op.cit.*, 1984, p.108.

¹⁰⁵ Andrew Vincent, "Classical Liberalism and its Crisis of Liberty", *History of Political Thought*, Vol.11; No.1, 1990, p.159.

¹⁰⁶ ウラム、前掲書、1968年、85頁。

¹⁰⁷ Hobhouse, *op.cit.*, 1918, p.27, 53.

¹⁰⁸ Haldar, *op.cit.*, 1927, pp.280-281.

¹⁰⁹ ラスキ、前掲書、1952年、37頁。

¹¹⁰ Muirhead, *op.cit.*, 1924, p.174.

¹¹¹ Gerald F. Gaus, *The Modern Liberal Theory of Man* (Canberra: Croom Helm, 1983), p.107.

¹¹² George H. Sabine, *A History of Political Theory, Third Edition* (London: George G. Harrap, 1963, reprint, 1966), p.714, George H. Sabine, "Bosanquet's Theory of the Real Will", *The Philosophical*

Review, Vol.32, No.6, 1923, p.642.

¹¹³ Lewis P. Hinchman, "The Idea of Individuality: Origins, Meanings, and Political Significance", *The Journal of Politics*, 1990, Vol.53, No.3, p.765,770.

¹¹⁴ 無論、こうした議論を離れて「個性」そのものとは何かを客観的に問う作業は必要であろうが、しかしそれは本論文の目的には適わない類の議論である。

¹¹⁵ *PIV*, V, p.37.

¹¹⁶ *PIV*, VI, p.72.

¹¹⁷ Adam v. Trott, "B. Bosanquet und der Einfluss Hegels auf die englische Staatsphilosophie", *Zeitschrift für Deutsche Kulturphilosophie*, Band 4, Heft 2, 1938, S.198.

¹¹⁸ 山下重一『J・S・ミルの政治思想』（木鐸社、1976年）135頁。

¹¹⁹ トクヴィルが、こうした「多数者の専制」の原因を、個人主義を基盤としたデモクラシーそのものに求めたのに対し、ミルは「トクヴィル氏は、少なくとも表面的には、デモクラシーの影響を文明の影響と混同している」とし、「トクヴィル氏がアメリカについて指摘し、われわれが現代のイギリス人の精神の中に見出している欠陥は、商業階級の通常の欠陥である」として、専制の原因をイギリス商業階級に求めている。J. S. Mill, "De Tocqueville on Democracy in America [II]", Vol.XVIII of *Collected Works of John Stuart Mill*, ed. by John Robson et al. (Toronto: University of Toronto Press, 1977), p.191, 195, 山下重一訳『アメリカの民主主義』（未来社・社会科学ゼミナール28、1962年）79、88頁。なお、アメリカでの個人主義が多数者の専制を招来するというトクヴィルの議論に関しては、松本礼二『トクヴィル研究』（東京大学出版会、1991年）113-116頁参照。また、トクヴィルの詳細に関しては、シーモア・ドレッシャー、桜井陽二訳『デモクラシーのディレンマ』（荒地出版社、1970年）参照。さらに、ミルとトクヴィルとの関係については、柏経學「A.トクヴィルの政治思想のJ.S.ミルに及ぼした影響」（『折尾女子経済短期大学論集』第1号）111-138頁参照。

¹²⁰ Mill, *op.cit.*, 1977, p.264, 訳284頁。

¹²¹ Mill, *op.cit.*, 1977, p.219, 訳218-219頁。

¹²² ミルが世の中に警告を発することを目的として著述に従事していたことは、ミルが専門的な哲学雑誌ではなく民衆一般を視野に入れた一般的な雑誌『ウェストミンスター・レビュー』（Westminster Review）に数多く論文を投稿していることから理解される。Cf., N. MacMinn, J. R. Hains, and J. M. McCrimmon (eds.), *Bibliography of the Published Writings of John Stuart Mill* (Illinois: Northwestern University, 1945, reprint, Bristol: Thoemmes, 1990). 反対に、ボザンケは、ミルと異なり専ら「アリストテレス協会」の『会報』や『マインド』（*Mind*）といった専門的な哲学雑誌に寄稿している。つまり、ボザンケは、サンデー・スクールなどで一般民衆や労働者を対象にして講義を行ったとはいえ、その内容がリライトされて掲載された雑誌が一般誌というよりも学会誌の範疇に入るものであったことから、彼の思想は専門的議論を中心に協会の所属者に向かって語りかけるものとなっている。その結果、形而上学的な関心に裏打ちされた『哲学的国家理論』は民衆から離れて行く運命にあったといえ、マクブライアが指摘するように、ボザンケのそうしたスタンスには、哲学的厳格さやプロフェッショナルな判断の伸張が見られるものの、反面で、哲学的議論に関する社会一般の理解は損なわれ、哲学が他の分野からますます乖離してしまった側面が内包されているといえよう。McBriar, *op.cit.*, 1987, p.9.

¹²³ Sweet, *op.cit.*, 1996, p.40.

¹²⁴ *PIV*, VI, p.80.

¹²⁵ *PTS*, V, pp.74-75.

¹²⁶ Vincent, *op.cit.*, 1992, pp.707-708.

¹²⁷ Andrew Vincent, "Can Groups be Persons?", *The Review of Metaphysics*, Vol.42, No.4, 1989, p.695.

¹²⁸ Simphony, *op.cit.*, 1991, p.527.

¹²⁹ A. J. M. Milne, "The Idealist Criticism of Utilitarian Social Philosophy", *Archives Européennes*

de Sociologie, Vol.8, No.2, 1967, p.320.

¹³⁰ *PTS*, V, p.189.

第4章 ボザンケの国家論

1. 「国家」「社会」「ネーション」

ボザンケは、まず「国家」の歴史的な成立過程について論じている。ボザンケによれば、「国家」とは、「集団」を基礎として少しずつ歴史的に形成されてきたものである。ボザンケはいう。

「種々の国家は歴史の裁判や失敗を通じて領土的に決定された諸集団 (groups) における、人間精神のさまざまな具体化である。」¹

つまり、ボザンケによれば、「人間が生活していたあらゆるところ」では「家族よりも大きく、またそれ自体よりも優越した権力を認めない、結社ないし協団体 (corporation)」があった。しかし、そうした単なる人間組織での経験は「真の政治的経験と同一の広がりをもたず」、「コミュニティにおける本性と価値に関する好奇心を目覚めさせる」のには不十分であった²。むしろ、こうした組織＝社会を超越して、コミュニティに関する価値を各人に覚醒させ、真の「国家」を具体化したのが、ボザンケによれば古代ギリシャの「都市国家」にほかならない。ボザンケは「コミュニティにおける本性と価値に関する好奇心」は古代ギリシャの「都市国家」によって喚起されたと論じて、次のように述べる。

「そのコミュニティは、そのメンバーの言葉と関係において劇の中の配役と同じように認識される気風や精神を有しており、かつ人間の行動や忍耐の種々なる領域においてその精神を有していた。(中略) こうしたコミュニティが、近代世界に始まる前に、ギリシャの都市国家において、そしてそこにのみ存在していたのである。」³

さらに、ボザンケによれば、こうしたコミュニティに関する「好奇心」を人間に喚起させる契機は近代の「国民国家」(Nation-State) によっても供されることになった。ボザンケは言う。

「こうした好奇心は、主として、古代ギリシャの都市国家、そして近代世界の国民国家という二つの同種の連帯生活によって、独占的ではないにせよ、主として覚醒され、かつ経験されている。」⁴

かくして、ボザンケは、古代ギリシャの都市国家の重要性を復興させる試みは「近代国民国家によって供され」⁵、「国民国家の観念の場所」は「ギリシャの幸福の概念により説明され得る」⁶として、近代の「国民国家」を古代ギリシャの都市国家の崩壊以来失われていたコミュニティの「本性」と「価値」に対する各人の認識を再興するもの、つまり真の「政治的経験」として高く評価するのである。

しかしながら、古代ギリシャの都市国家は、なお完全な「国家」ではなかった。何となれば、ボザンケによれば、古代国家では、究極的には「個人を自由すること」(letting the individual go) ができず、各人において真の「自由」が実現していなかったからである⁷。それゆえ、個人の「自由」が実現され、同時にコミュニティの本性と価値が認識されるのは「国民国家」においてである。ボザンケは「国民国家」の概念が、「権力 (power) として資するところの生活の輪郭を含む」ものであり⁸、同時に「我々の倫理的生活の諸要素を

実現する諸領域間の最高で究極的な調節の概念」であるとして、総括的に次のように論ずる。

「国民国家は共同生活を創建するのに必要な共通の経験をもつ最も広範な組織である。このことが、国民国家が個人に対する権力において絶対的であると承認される理由であり、そして外的世界の事柄において個人の代表者であり、かつ擁護者として承認される理由である。」⁹

かくして、ボザンケは、歴史的に捉えた場合、各人の「自由」および「共通善」「最善の生活」を実現し得る「国家」とは近代の「国民国家」にはかならないと理解する。このことは、彼の展開する政治理論、国家理論の対象が理念的な国家でも、特定の国家でもなく、いわゆる近代の「国民国家」であったとことをも示唆している。

そしてボザンケが、「国家」を、「国家」が生まれる前の「結社」のような単なる人間組織＝社会の発展形態とするこうした議論から、彼のいう「国家」が歴史的経過を辿ったものであることは明らかである。ボザンケはいう。

「我々が理解したことは、社会の特徴は漸進的に国家のそれらに移行する、ということである。」¹⁰

「国民国家はクリアーカットな観念というよりも、むしろ歴史である。」¹¹

それゆえ、ボザンケのいう「国家」と「社会」の関係とは、「国家」が「結社」や「協同体」＝社会の延長線上に位置づけられることから、全く相反するものではなく、むしろその歴史的背景から相関的なものであることが理解される。

ところで、前述のように、ボザンケは「国民国家」を称揚していたが、それは「国民」ないし「民族」、つまり「ネーション」がいわばひとつの「家族」のようなものであると彼が考えていることに起因する。後述のように、ボザンケは「家族」を「倫理的観念」としての「制度」と考え、そこでの濃密な各人の間の相互作用や有機的関係を重視するが、彼によれば、その「家族」は「家族」の壁を超えて「家族」以外のものにも「家族」的なものを浸透させる作用をもつ。ボザンケはいう。

「そして最後に、この種〔家族〕の感覚と雰囲気は、さまざまな家族によって形作られる種々の家庭で実際に生活しているメンバーに限定されないということが記されるべきである。（中略）型式と精神が一度形成されると、それらは人から人へ移りやすく、また継続的である。それらは、それを理解する、あるいは認識する全ての人々に作用し、また血縁（kinship）によって結ばれた家庭の一部を一度も形成したことのない人々にすら作用する。」¹²

そしてボザンケは、その一例としてイギリス民族、すなわち「アングロサクソン族」（the Anglo-Saxon race）を挙げ、この民族ほど「家族」の雰囲気やその関係によって浸透された民族はいないと論ずる。それゆえ、ボザンケにとって、“race”と同じく「民族」をも意味する「ネーション」としての「国民」とは、「家族」的な内容をもつものである。ボザンケはネーションとしての「国民」と「家族」との関係を次のように述べる。

「近代のネーションにおいて、家族の雰囲気は現実の家族に限定されない。共通の居住地 (dwelling place)、歴史、そして伝統、また共通の言語や共通の文学は、毎日の市民意識—それは、ネーションにとっては家庭の輪の中に存する家族愛である—to 愛情の色彩を与える。」¹³

そして以上の議論から、ボザンケが「国民国家」をコミュニティに関する「好奇心」を人間に喚起させるものとし、それを最高の政治組織とする理由もまた明白である。すなわち、ボザンケが、「国家」は「ネーションとしての国民を別にしては理解され得ない」とし、前述のように近代の「国民国家」が最高の政治組織であるとするのは、それが「家族」的なものが浸透した「ネーション」をベースとしていることによる。つまり、ボザンケにとって、「国家」というコミュニティの統一は、唯一「民族性」「国民性」、(nationality) を通じて達成されうるものであり¹⁴、「家族」的なつながりが「家族」を超えて「ネーション」レベルにまで拡大し、それが独自の「国民性」を獲得するとき、「国家」というコミュニティの統一も可能となるのである。

では、こうした「ネーション」観、そして前述のような歴史観をもって、ボザンケは現状の「国家」と「社会」の関係をどのように規定するのであろうか。ボザンケはその点を、人間の意志作用に及ぼす影響力の面から説明している。前述のように、ボザンケにあっては、「実在意志」は各人に「批判」を喚起するものであり、それゆえ「実在意志」の具体化である「国家」という政治組織の中で各人は真の意志や精神に至ることができた。しかしながら、ホアンの指摘のように、こうした「国家」の定義によって、ボザンケは、通常は「政府」が意味される国家ではなく、人間の十全な生活を可能にする全体的関係としての「国家」を描いている¹⁵。ボザンケはいう。

「国家は単なる政治的建造物ではない。国家という用語は実に全体の政治的局面を強調しているのであり、無政府社会の観念に対立するものである。しかし、それは生活を決定する諸制度、つまり家庭から商業、商業から教会や大学までも含めた全体のヒエラルキーを包含するものである。国家は単なる地方の生長物の集合ではなく、政治的統一に生命と意味を与える構造物として相互調整をもたらし、その結果それらの伸張とより自由な香気をもたらす一方で、それらのものすべてを包括する。」¹⁶

「わたしは、“国家”という言葉で、それが“生きた全体”(a living whole)として意味されるものの完全な意味で用いており、それは単なる法的もしくは政治的構造ではなく、枠組みの本体として考えられる諸生活と諸行動の複合体のことである。」¹⁷

さらに、ボザンケは、ヘーゲルの「国家」観に賛同しながら以下のようにも述べている。

「ところで、我々にとってここで公平に把握すべき重要なポイントは、以下の事柄である。すなわち、ヘーゲルは国家によって、政府機関 (the machine of government) を意味するのではなく、実際のコミュニティにおいて個人の精神と意志とを満たすすべてのものを意味している、ということである。」¹⁸

こうして、ボザンケは「国家」というコミュニティの秩序、枠組みそのものを称揚する。

しかし、そうであれば、「国家」はコミュニティ全体の枠組みを指すものであるがゆえに、それは「社会」全体とはほぼ同義のはずである。実際、ボザンケは、両者を「ほとんど転用できる術語」として、次のように述べている。

「社会の影響力は国家の諸権力と程度においてのみ異なるということ、そして社会と国家の説明は究極的には同一であるということ、これらは我々の議論の一部である。」¹⁹

さらに、「国家」が「実在意志」「一般意志」の具体化であったことから、「国家」とほぼ同義である「社会」にもその意志が具体化されることになる。ボザンケはいう。

「我々がその下で生活を送る社会の体系は、(中略)一般意志および全体としてのより高位な自己をコミュニティ全体に表す。」²⁰

それゆえ、ボザンケは「国家」における「社会秩序」(social order)を以下のように説明する。

「諸個人すべては、秩序それ自体がその大部分を占める社会秩序の遺産 (inheritance) とともに、社会秩序において彼らを取り囲む知識、機略、エネルギーによって、彼らの平均的な直接的意識を超えて、継続的に補強されかつ処遇される。」²¹

「文明化されたコミュニティのメンバーは、自らの生活においてただ秩序のみを理解する。」²²

かくして、ボザンケは「実在意志」「一般意志」の表現を、「法」「国家」「主権」に加え、「社会」や「社会秩序」にも見出すのである。

ところで、ボザンケのいう「国家」の目的は、「個人」の目的と同じく「共通善」「最善の生活」、あるいは「魂の卓越」の実現であった。それゆえ、「国家」と「社会」がほぼ同義のものであるならば、「社会」の目的もまた「国家」の目的と同じであるはずである。さらに、ボザンケによれば、「社会」と「個人」は「対立する二組」ではなく、むしろ両者は「総体 (totality) においては社会であり、分化 (differentiations) においては個人であるような単一の内容の織地 (web)」²³の中にあることから、「社会」の目的と「個人」の目的も同一である。ボザンケはいう。

「したがって、国家の目的は“社会”の目的であり、“個人”の目的であり、それはつまり、意志の根源的な論理によって決定される最善の生活である。」²⁴

「したがって、我々にとって、社会の究極的な目的、および国家の究極的な目的は、個人のそれと同じように、最善の生活の実現化である。」²⁵

かくして、ボザンケは、「国家」「社会」および「個人」の三者はみな共通の目的＝「最善の生活」「共通善」の実現をもつと論じて、それらの密接な関係を示すのである。それゆえ、ボザンケにとって「国家」そのものは「個人」の目的ではなく、「個人」もまた「国家」にとっての手段ではない。実際、ボザンケは、「国家」を高く価値づけながらも、「国家」は生活の究極的な目的ではない²⁶と明確に断じている。むしろ、「国家」は「共通善」や「最善の生活」にとっての手段である。

2. 「国家」の活動 (1) - 「国家」と道徳 -

次に、ボザンケは、「国家」の無謬性に関して議論を展開している。ボザンケによれば、「国家」の活動＝「公的行動」は、前述のように「一般意志」「実在意志」の行為であり、人間の私的な意志、すなわち「現実意志」の行為ではなかった。つまり、「国家」の活動は、「私的な敵意あるいは私的な強欲によってはほとんど動機づけられえず」²⁷、かつ「利己主義、あるいは感覚主義」もそこにおいては現出しえないのである²⁸。したがって、例えば殺人や詐欺の罪は私的な罪・不道徳に属するがゆえに、ボザンケによれば「国家」の行動ではありえない。ボザンケはいう。

「しかし、国家は、ほとんど考えられない環境下を除いて、諸個人の個人的な悪事に対する道徳的責任を課され得ない。国家は、それ自体、公共的目的を除いた目的を持ち得ない。そして実際に、国家は、国家の機関が公的目的と考えるもの以外は決して持ち得ない。

(中略) 国家はそれ自体、個人的な不道徳に関して罪を犯し得ないのは確実であるし、また国家がどのようにして、殺人や窃盗を、それらが道徳的犯罪であるという意味において犯すことができるのかを理解するのは難しい。」²⁹

「例えば、盗むこと、人を殺すこと、ウソをつくこと、あるいは個人的な不道徳を犯すことは、すでに述べられたように、公的行動ではありえない。こうした行為は、公的な意志によって意志される一般的利益を具体化しえない。」³⁰

また、ボザンケは、「一般意志」は代議政体における「議会」および「法」に見出されるものの、「世論」の直接的な意見や直接民主制によって示された民衆の意見には見出しえないとしていたことから、以下のようにも述べる。

「我々が最も想像し得る公的な不道徳とは、国家の代理を務める諸機関それ自体が、自らの公的な活動において、判断され得る限りではときの世論が同意するところの、全体としての国家の利益に関する狭隘、利己的、あるいは野蛮な概念を、国家に代わって示すときである。こうしたケースにおいては、国家それ自体が真に不道徳に行動していると言われうる。」(強調－引用者)³¹

つまり、そもそも「国家」の活動は、それが「実在意志」「一般意志」に基づくゆえ、殺人や詐欺などの不道徳は「国家が決して意志しないもの」であり、「こういったものを行為として国家に帰することはできない」³²のである。それゆえ、ボザンケによれば「国家が、国家それ自体の意志作用に関わるのではなく、政治家や役人の行為に関係するかのごとく問題を論ずること」は単なる「混乱」である³³。ボザンケはいう。

「こうしたケースでは、国家、つまり公的善の機関は発言の機会が与えられず、単に国家の名のもとで発言した連中により詐取されたのである。」³⁴

したがって、国家公務員たる役人や政治家が不正を働いたり、あるいは不道徳の罪を犯した場合、こうした事態を処罰する義務を「国家」は負うものの、「国家」そのものにその責任はない。

「国家はその役人の性格に対し必要な処置を施し、そして彼らの不謹慎を処罰する義務

をもつ。しかし、“他人を代理として事をなすものは、彼自らこれをなすなり”(qui facit per alium facit per se) が真実であるという条件は、公的目標を具体化するような性質を帯びない役人の諸活動に関して公的団体に適用することはまずできない。」³⁵

「しかし、我々は、様々な国家が、私的な不道德—役人は、いわゆる国家の利益において、その機会をもつ—をなす行為者として扱われること、あるいはまた、こうした役人どもの私的な名誉そして良心によって縛られることを否定する。」³⁶

むしろ、公務員は「国家の諸義務と私的な名誉」との「混同」を避けながら、「自分の名誉や約束でもなく」(強調—ボザンケ)、「国家は本質的に何に義務をもつのか」を考え、「全体として国家の諸義務と諸目的を熟考し」、「そして全体としてそれらを最善に達成するために働かねばならない」³⁷。かくして、ボザンケは、真の「国家」の活動が利己主義や不道德の罪などで咎められるものではないとして、改めて「国家」が人間の真の理性的な意志＝「実在意志」「一般意志」の具体化であることを示すのである。

しかし、ボザンケがこのように「国家」が道徳的に罪を犯しえないものと位置づけるのは、彼が「国家」を、道徳のすべての側面を知り尽くし、道徳をいわば上からカヴァーし、かつ道徳を超越した存在と見なすからではない。むしろ、ボザンケの場合、道徳とは、各人の意志の領域における「実在意志」と「現実意志」との間で展開される「批判」作用において姿をあらわすものであり、「国家」も各人の「実在意志」ないし「一般意志」として各人の内的領域での「批判」作用を補うものでしかない。それゆえ、ボザンケによれば、「批判」によって生まれる道徳の具体的な内容には「国家」の認識は及ばず、また各人の道徳的自由意志の領域やコミュニティ内部で確立された道徳の領域にも「国家」は無関心であり、かつ干渉することはできない。ボザンケはいう。

「諸個人の特殊な諸行為において明示される道徳的な罪の諸程度に関しては、国家は、我々と同様、必然的に無知である。」³⁸

「国家の活動は、〔個人および社会に〕確立された道徳的秩序の侵害ではない。」³⁹

したがって、ボザンケのいう「国家」は道徳による批評を超越するものではない。「我々は、種々の国家の活動は道徳的批評を超越する、ということを示唆するものではない。」⁴⁰ むしろ、前述のように、「国家」は「共通善」や「最善の生活」に関する批判に従う存在である。ボザンケはいう。

「もちろん、全体としてのその種々の責務を果たすためにこうした最高権力によって採用される手段は、そうした手段が暗に示す善の概念に関する批判に服従する。」⁴¹

無論、「国家」は「最善の生活」や「共通善」という目的の手段として、それらの実現を目指すものであることから、完全に道徳的に無色ではありえない。要は、ボザンケの場合、「国家」が道徳の世界に関わりをもつのは、各人の「批判」を、「国家」としての「実在意志」として促進するという間接的な方法を通じてであり、各人の内面やコミュニティにおいて確立された道徳的な領域・諸関係に直接立ち入り、道徳を各人において直に生み出す作用を「国家」はもたないのである。この点を、ボザンケは、「国家」と道徳の関係を総括

しながら結論的に以下のように説明している。

「そして、国家はよき生活を促進するために存在し、そして国家が為すことは道徳的に中立ではあり得ない。しかし、国家の行動は、国家の代理人である役人のふるまいと同一視されえないし、あるいは道徳的にも、私的な意志作用が判断されるように判断されえない。国家の妥当な行為は常に公的行動であり、また国家は、国家として、組織された道徳性が存在する私的な生活関係の内部では行動し得ない。国家は、より巨大なコミュニティにおいて決定的な役割をもたず、それ自身最高のコミュニティである。国家は道徳的世界の守護者 (the guardian of a whole moral world) ではあるが、組織された道徳的世界の内部のファクターではない。」⁴²

かくして、ボザンケは、「国家」を、人間の道徳的な発展を直接的にではなくその外部に留まって間接的に促進する存在と位置づける。そして、こうした「国家」と道徳との、ある意味での無関係性は、「国家」が保有する「強制力」(force)と道徳とのパラドキシカルな関係に起因している。

3. 「国家」の活動 (2) —国家干渉の限界—

ボザンケによれば、「国家」は「強制力」ないし「絶対的権力」を保持する。ボザンケはいう。

「国家の資格でその目的を処理する手段は、常に強制力の性質に与かる。」⁴³

そしてその理由を、ボザンケは以下のように説明する。

「肉体的な活動の世界を包含する領域において究極的である権威は、強制力を用いる権威でなければならない。そして我々が見たように、強制力が国家特有の属性の中に含まれるのは、こうした理由からである。」⁴⁴

つまり、ボザンケにあっては、「国家」とは「究極的」な「権威」をもって「強制力」を用いる存在である。また、ボザンケは「国家」と「社会」をある意味で同一のものと見なしていることから、「国家」とは「強制力」を伴った「社会」である。ボザンケはいう。

「そして我々は、国家によって、絶対的物理的権力を通じてそのメンバーに支配を正当に行行使するものとして承認された単位としての社会を意味する。」⁴⁵

「合法的に強制力を行使する単位として習慣的に承認された“社会”が国家である。」⁴⁶

しかし、「国家」が所有する「強制力」の、その「強制」の作用は、精神や意志の「自発的」な発展・拡張と矛盾するものである⁴⁷。むしろ、それは、人間の内的な「批判」作用＝道徳的作用を解消させ、「魂の卓越」や「共通善」の実現とは程遠い、一種の奴隷状態を招来するものである。ボザンケはいう。

「強いられた行為 (act) はどんなものでも、強制力が作用する限り、より高位な生活から引き下ろされる。」⁴⁸

したがって、ボザンケは、「強制力」を包含する「国家」と人間の意志作用、さらには「最善の生活」との関係を以下のように論究する。

「[人間の内面における] 根拠ないし動機のみが活動に最善の生活における要素としての直接的価値ないし永続的確実性を与えるであろう。そして国家は、そうした根拠ないし動機から活動が為されるであろうことを、あらかじめ確実なものにする (determine) ことはできない。反対に、活動を起こすことが、国家に属する明白な作用様式に起因している限りにおいて、(中略) 最善の生活における要素としてのその価値は、その秘められた諸効果に関係する場合を除いて、まさにその事実によって (*ipso facto*) 破壊される。強制の下においてこの意味で遂行される活動は、意志の真の部分ではない。それは従順性ないし利己性から採られた意図であり、道徳的価値だけでなく、いくぶん同様のもの、つまり、生活の永遠的諸目的から生ずる活動において顕現される信頼すべき原理の恒久性を欠いている。」⁴⁹

こうして、ボザンケは、各人の自由意志の「批判」作用を最重視し、「国家」の各人の意志の領域への介入を否定する。つまり、ボザンケによれば、各人の意図がなければ「人間的活動の意味における活動は全く存在せず、単に、筋肉運動が存在するだけ」であって⁵⁰、「国家」による「不道徳の罪で罰する企ては、それ自身悪」であり⁵¹、かつ「国家」の「強制力による道徳の促進は絶対的な自己撞着」である⁵²。ボザンケはいう。

「道徳的義務の〔国家による〕強制は、それ自体言葉における矛盾であるだけでなく、ほとんど常に問題となっているケースにおいて、その強制を効果的にしようとする企図は、道徳的行為が依拠している諸源泉を破壊することで、その企図自身を挫折させる。」⁵³

したがって、「国家」は、各人の内面的な自由意志の領域には干渉し得ず、専ら外的な諸事項にのみかかわることになる。ボザンケは、「国家」の「直接権力は外的な諸活動の遂行を確保することに制限される」⁵⁴として、次のように述べる。

「したがって、国家それ自体は外的な諸活動を保証することができるだけである。(中略) その作用は、少しも最善の生活に参加する諸活動の遂行を促進するものではない。逆にその作用が効果的なところでは、そのある部分の点で、直接的に、より下位の動機を刺激することで、そうした諸活動の領域を狭隘にするに違いない。」⁵⁵

つまり、ボザンケによれば、「国家」の活動は「真の意志作用のための道を掃き清めること」、言い換えれば、各人の意志作用のための、いわば「環境造り」にその役割は限定される。ボザンケがこの点を説明するために、ルソーの有名な文句、すなわち「人間を自由であるように強いること」を用いるのは、ルソーのように「法」や「国家」への完全な服従に「自由」は見出される、ということを指摘するためではなく、「国家」は各人の道徳的な発展が可能となるような条件整備を行うもの、ということを示すためである⁵⁶。前述のように、ボザンケが「国家」の活動を各人の意志作用やすでに確立されたコミュニティにおける道徳的諸関係を侵害しないような領域に限定し、ある種の「国家」と道徳の無関係性を主張するのは、「国家」の保有する「強制力」が人間の自由意志と相反する性質を持ち合わせることによる。

そしてこうした国家活動の限界に関するボザンケの議論は、彼自身の造語である⁵⁷、「障

害物を妨害すること」(the hindrance of hindrances)の原理に結実する。ボザンケは、「国家」は人間の行為に影響を与えるのにあらゆる手段をもつ訳ではなく、あくまで「勧告」(injunction)ないし「禁止」(prohibition)によって、人間の行動の「外的方向」を生み出すような手段のみをもつと論究する。ボザンケはこの点を次のように論究する。

「〔国家が用いる〕手段は、目的を直接には促進し得ないものであり、そして目的の領域を狭くする傾向すらあるものである。それが遂げ得ることは、諸障害を除去すること (to remove obstacles)、目的の実現化に敵対する諸条件を破壊することである。」⁵⁸

この場合、「国家」にとっての「目的」とは「最善の生活」や「共通善」の実現であることから、ボザンケは以下のように「国家」の活動を定義する。

「国家が、共通善、もしくは最善の生活にとっての障害物を強制的に妨害するとき、それは正当なものである。」⁵⁹

したがって、ボザンケによれば、国家活動は「最善の生活」や「共通善」に対する「障害」を「除去」することでは「積極的」ではあるが、しかし各人の内面的領域に踏み込まないという意味で「消極的」である。ボザンケは言う。

「我々の原理に従えば、国家活動は、その実際の所作とその究極的目的の両者においては積極的ではあるが、その直接的関係において消極的である。」⁶⁰

さらに、ボザンケは、こうした国家活動の機能を独自に「障害物を妨害すること」と言い換えて、次のように論ずる。

「現実の諸事実として、それが維持するのに望ましいところの諸条件がどんなに積極的であっても、それらは常に、独特に国家の強制に起因している側面において、障害物を妨害することと見なされうる。」⁶¹

こうして、ボザンケは、グリーンが使用した「障害の除去」(the removal of obstacles)の概念を援用しつつ⁶²、それを独自に「障害物を妨害すること」と言い換えて、国家活動が一面で「積極的」ではあるものの実際の活動としては「消極的」なものであると論ずるのである。

ところで、こうした「国家」の活動は、「共通善」、「最善の生活」、そして「魂の卓越」の実現にとっての「障害物」が存在しなければ正当化され得ない。つまり、「国家」が活動するには「障害物」の存在が前提条件であり、「障害物」そのものが「個人」や「社会」に存在しない場合は、「国家」活動そのものがあり得ないことになる。それゆえ、「国家」が何らかの施策を実行する場合、それが「障害物を妨害すること」に限定されているか」が確認されねばならない。ボザンケはいう。

「我々は、概して、我々が強制を含む活動を提案するとき、成長への明確な傾向を示すか、あるいは、既知の障害により妨害されており (frustrated)、そしてその障害 (impediment) の除去が、自由にさせられるべき諸能力と比較して小さな事柄であるような、能力の明確な制限を示すことができないからである。」⁶³

したがって、ボザンケは、「国家」の活動は、「個人」の「精神と魂の成長を自由」にし⁶⁴、

「自発的諸精神の働きのためのアリーナを開放」⁶⁵し、「疑いもなく、より多くの性格及び知性の諸淵源を解放する場合にのみ、唯一正当化され得る」⁶⁶と論じて、「国家」の活動が人間の意志の状態に左右されることを明示する。

他方、「国家」の活動は、「個人」と同様、「社会」の状態によっても左右される。ボザンケはこの点を、教育装置を例に挙げて次のように論じている。

「もし一流の教育装置が、国家の基金（State endowment）によって成立するなら、その装置の一流たること（first-rateness）は、納税者に適用される強制に起因するのではない。その限りで、逆にそれは知的意志そのものの活動を無効にする。そうではなく、その一流たることは、〔社会における〕一流の能力が、装置を考案することでどこかにはけ口を強いて求めている、という事実起因しているに違いない。（中略）そしてそのはけ口を公的権力が、言わばつるはしの一撃によって、一流たる能力にたいして準備しうるのである。」⁶⁷

こうして、ボザンケは、国家活動がいわば最後の「つるはしの一撃」として、「個人」や「社会」において目的＝「共通善」への抑圧＝「障害物」が存在する限り正当化されると論ずるのである。さらに、ボザンケは、現状における「国家」の活動を以下のようにも述べている。

「公的な善に鑑みての立法および行政の内容は、（中略）国家のイニシアティブに起因しない社会活動の何らかの形態によってほとんど専ら供されている。国家の仕事は、事実上（*de facto*）、大部分が、「認可」（endorsement）あるいは“肩代わり”（taking over）である。つまり、国家の仕事とは、よりフレキシブルな諸活動ないし単なる生活の進歩が、大胆な実験、あるいは静かなる成長の中で長い時間をかけて達成したものに、是認（*imprimatur*）を与えること、国家の強制力の標章を与えることである。公的権力から独立した真の社会の仕事は、社会の発明の実験室である。」⁶⁸

つまり、ボザンケは、「社会」における「共通善」への「障害物」を「妨害」する「国家」の活動は、現状では「社会」の中で行われている措置にいわば「お墨付き」を与えることになっており、国家活動が「社会」によって大きく規定されていると論ずるのである。以上から、ボザンケが、「障害物を妨害すること」という原理を提唱して「国家」活動に一定の枠を設定し、かつその活動を「社会」や「個人」の、今現在における動向によって制限を受けるとすることで、いわば「国家」の活動に二重の制限を課し、「社会」や「個人」に対する恣意的な国家干渉を排除しようとしていることは明らかである。

ところで、以上の議論から、ボザンケが「国家」と「社会」をほぼ同義のものとしながらも、「国家」の活動は「社会」の状況に左右されとすることで、彼が実質的には両者を明確に区分していたことが理解される。実際、ボザンケは、「国家」と「社会」をほぼ同一のものと見なすことは「我々の議論の一面」⁶⁹に過ぎないと指摘して、「国家」と「社会」は一面で同一だが、他面で区別されることを明示している。ボザンケは、このことを以下のような比喩を用いて主張している。

「概して、その関係〔「国家」と「社会」の関係〕は、（中略）生きた身体がその骨格を

預かる、という関係のごとくである。」⁷⁰

この場合、ボザンケは「骨格」によって「国家」を、「身体」によって「社会」を意味している。つまり、ボザンケは、「骨格」＝「国家」は「身体」＝「社会」よりも先に存在するものではないこと、前者は後者とともに発展するものであること、しかし「身体」＝「社会」は「骨格」＝「国家」に依存するものであることを示し、両者が相即不離的な相互依存関係にあることを指摘しているのである。ボザンケが「国家は、強制を使用するものとして、単なる社会の一つの側面に過ぎず、その活動は、単に社会活動のひとつの側面に過ぎない」⁷¹とするのは、こうした文脈においてである。ボザンケが「国家」と「社会」の内的連関を示しつつも、なお彼が両者を完全に同一のものと見なしてはいなかったこと、さらには両者を融合・混同したり恣意的に区分してはいなかったことはここから明らかである。

4. ボザンケの国家論

以上、ボザンケの国家論を、特に「国家」と「個人」そして「国家」と「社会」との関係に焦点を当てて検討してきた。そこでは、彼のいう「国家」の活動が、人間の内的な「批判」を生み出す「実在意志」「一般意志」の具体化でありながらも、同時にそれが「批判」作用を解消させる「強制力」を内包するために「障害物を妨害すること」という機能に制限されること、さらにその場合、その国家活動は「社会」や「個人」に「障害物」が存しない限り正当化されないことから、それは人間の意志や社会の状況によって大きく左右されることが明らかになった。つまり、ボザンケのいう「国家」とは、「個人」「社会」に基礎づけられるがゆえに高く評価されつつも、同時に「個人」「社会」に基礎づけられるがゆえにその活動が制限される、というものであった。その意味で、ボザンケのいう「国家」とは、「社会」や「個人」を超越して高くそびえる「国家主義」的な国家像ではなく、むしろ、「社会」や「個人」を基調とした国家像を示すものであったといえよう。

ところで、言うまでもなく、こうしたボザンケの議論には多くの批判が寄せられてきた。まず、ホブハウスは⁷²、コール (G. D. H. Cole: 1889-1959)、コリニ、そしてラコック (D. D. Lacock) らと同じく、ボザンケがあるべき「理想の国家」と、実在する「現実の国家」とを混同しており、国家の二つの像を動揺していると批判した⁷³。確かに、ボザンケの議論は、前述の彼の根本思想の解明や、「一般意志」論で示されたように、現実の「国家」を見据えつつもその中に潜む理想を描くことを目的としていることから、前出の批判は一面で正しいとも言える。しかし、ボザンケの場合、彼らとは「現実」と「理想」を見る視点がそもそも異なっていること、したがってその国家論も彼らの考えるそれとは大きく異なるはずであることが考慮されねばならない。つまり、ボザンケの国家論は、その分析対象を国家そのものに設定しながらも、特定の「現実国家」を描くものでもなく、また反対にそうすることで現実離れした「理想国家」を描くものでもなかった。むしろ、ボザンケは「理想」と「現実」を混同せずに、両者の相関性や緊張関係を見極めながら、現実に存する国

家のあるべき姿、歴史的には近代国民国家のあるべき姿を描くことを企図している。それは、現実にある国家それ自体を対象とし、国家の一般的な属性を叙述するものであり⁷⁴、ミドウクロフトの指摘を用いれば、「一般的な国家概念」(the State)を描くものである⁷⁵。それゆえ、ボザンケの議論が、「理想」と「現実」を理想主義的観点から相補的に捉えていたのは事実としても、両者を「混同」していたとするのは妥当ではない。

他方、マッキーヴァーは、ボザンケの言う「国家」には「統一性」(unity)の意味と「政治社会」(political society)という「完全に異なった側面」が内包されていると指摘し⁷⁶、また、ハリスはボザンケの「国家」には四つの異なった概念、すなわち、「社会」、「観念」、「実在意志」、「生きた批判」が含まれていると指摘して、ボザンケの言う「国家」の多義性、曖昧性を批判した⁷⁷。さらに、バーカーは、ボザンケのいう「国家」を「全体的体制」としての「国家」と、「権力」「強制力」としての「国家」の二つの側面をもつものとして、その多義性を批判した⁷⁸。確かに、ボザンケの考える「国家」は、それが「社会」と相關的なものであること、またそれが「一般意志」や「実在意志」の具体化でもあることから、種々の側面をもつものであり、ある意味で言葉の厳密な定義を放棄したものとも言える。また、ボザンケの場合、「国家」が、いわばコミュニティとしての側面と「公的権力」としての側面、あるいは「精神の体系」としての側面と「強制力」としての側面の、いわば二面性を帯びた概念であることも事実である。しかし、ボザンケにあっては、それらすべての側面が彼の言う「国家」と関連するものであり、それらは完全に分けて考えられるものではなかった。つまり、ボザンケの「国家」における諸相は、ミドウクロフトの指摘のように、ボザンケが、それらの相違点を認識したうえでそれらを完全に異なるものではなく相互依存的なものと把握していることの表れであり、前述のような「国家」の「枠組み」という側面と、「国家」の「強制力」という側面も、「国家」というものの二つの側面として、単一の「国家」観念の相互関連的な特徴が彼によって示されているのに過ぎない⁷⁹。その意味で、ボザンケの国家論は、言葉のダイコトミー(二文法)を越えて現実社会の種々の側面に迫り、「国家」の内包する諸要素の相互依存性を強く主張するものであったといえる⁸⁰。ボザンケの政治思想の本質が、通常のダイコトミーを超えながらも、言葉の間の区別を廃棄することなくそれらの構成要素を関係づけるところにあった、と指摘されるのはこうした理由による⁸¹。

また、これまでの批判と連動して、ホブハウス、ラスキ、ベイ、そしてマッキーヴァーらは、ボザンケが「社会」と「国家」を混同していると批判した⁸²。この批判は、ボザンケの国家論に対する最も強力な批判として現出し、たとえば、ホブハウスは、ボザンケが国家と社会とを混同・誤解する結果、その国家には、個人や社会生活を犠牲にしなければ成り立ち得ない機能や価値が付与されていると批判し、ラスキも社会と国家の同一視を否定して、孤立した人間の集団たる社会と、具体的な政府である国家との区別を主張した。確かに、ボザンケは「社会」と「国家」をほぼ同等に扱い、「国家」を「社会」の歴史的発展物とし、また「国家」を「強制力」を保持する「社会」とも理解していた。しかしなが

ら、ボザンケは、「国家」活動は「社会」における「障害物」が存在しない限り正当化され得ないと論じ、また現状での「国家」の仕事も「社会」の仕事に対して「是認」を与えるか、あるいはその仕事を「肩代わり」するものと位置づけていた。つまり、ボザンケは「国家」の枠組みの側面を強調してそれを「社会」と同等であると一旦は認めながらも、「国家」の活動に関する議論において、改めて「国家」と「社会」を実質的に区別しているのである。実際、ボザンケは「社会と国家の区別は重要であることに私は同意する」として⁸³、両者の区別の重要性を明確に指摘している。その意味で、ボザンケにあっては、「国家」と「社会」は対概念としてあるのではなく、また「国家」が類概念、「社会」が種概念としてあるのでもない。スイートの指摘のように、ボザンケは前述のような議論を展開することで、「国家」と「社会」がお互いに不可欠な関係（an integral relation）にあること⁸⁴、言い換えれば両者は相互依存の関係にあることを示しているといえる。そしてこのように実質的にはボザンケが「国家」と「社会」とを区別していたことが理解されれば、前出の批判は妥当なものとはいえない。

さらに、こうした批判に加えて、コールやリンゼイらは、ボザンケの「国家」による「権威」の独占、つまり「国家」にのみ「権威」を認める彼の議論を批判し、実際には多くの重複した忠誠が国家の内外に存在すると論じて、ボザンケの権威的な国家像を批判した⁸⁵。確かに、ボザンケは、「国家」とりわけ近代「国民国家」を人間にとって最高のコミュニティとし、「国家」を「権威」を独占するものと位置づけた。しかし、ボザンケは、「国家」の「権威」に関して、以下のようにも述べている。

「国家を、我々のこの複雑な世の中を構成し続けている無数の集団や結社から区別する相違点は、国家の事実上の究極性（*ultimateness de facto*）に存している。」⁸⁶

つまり、ボザンケは、「国家」は「権威」をもつと論じながらも、それは「事実上」、すなわち現状においてはそうであるとして、無前提的かつアプリアリに「国家」に対して絶対的な権威を付与してはいないのである。この点は、前述のような「国家」と「社会」の関係においても同様であり、ボザンケは「国家」を「種々の団体（corporations）の中で単一の独立した団体として自らを示すものとして承認された社会」と位置づけつつも、しかしそれは「事実上の（*de facto*）国家」であると述べている⁸⁷。また、後述のように、ボザンケは自己の国際関係論の中で「国家」を超越した政治組織を承認することで、「国家」の「権威」が「事実上」のものであることを実際に論証している。それゆえ、前出のようなボザンケ批判は、彼が「権威」的な「国家」を描きながらも、実際には、同時に「国家」にアプリアリにではなくアポストエリオリに「権威」を付与して、「国家」の「権威」の相対性を認めているがゆえに、一面的なものといわざるを得ない。むしろ、スイートの指摘のように、「国家」の「権威」に関するこうした相対性の議論からは、ボザンケの描く「国家」が「全体主義」の国家でないことが示唆されていよう⁸⁸。

さらにまた、バーカーは、「国家」は不道德な活動を為しえず道德的世界の「守護者」であるとするボザンケの主張を、国民を不当に国家に熱狂させるものと批判した⁸⁹。また、

ジョード (C. E. M. Joad) は、ボザンケのいう「道徳的守護者」としての「国家」を人格を持った絶対的国家と理解し、ボザンケを、ムッソリーニ (Benito Mussolini: 1883-1945) やジェンティーレ (Giovanni Gentile: 1875-1944) ⁹⁰とともに、「個人」の価値の源泉を奪取し、かつ「個人」を手段に貶める「ファシズム」的な「絶対主義的国家主義」を唱える者と断じた⁹¹。さらに、こうした批判はその後ポPPER⁹²、そしてマルクーゼによって受け継がれ、ボザンケの国家論は、マルクーゼによって「個人を国家という実体化された普遍者の犠牲にする」、「ファシズムのイデオロギーの特徴」を示すものと断ぜられた⁹³。しかしながら、ボザンケは、前述のように、「国家は生活の究極的な目的ではなく」、「最善の生活」や「共通善」が究極の目的であること、したがって「国家」はむしろそのための手段であることを主張していた。また、道徳と「国家」の関係に関しても、ボザンケは「国家」が道徳を超えた絶対的存在ではなく、逆に「国家」と道徳は基本的には無関係であることを示し、「国家」は「道徳的世界」の「守護者」であり、そしてその活動は「障害物を妨害すること」に限定されると訴えていた。つまり、ニコルソンおよびレイバード (Cécil Laborde) の指摘のように、ボザンケは「国家」の道徳的概念を明確に表現しつつも「国家」に道徳理論を直接に結び付けるようなことはせず⁹⁴、「国家」を、道徳的領域を「守護」するだけのものとし、かつ国家活動を、個人が道徳的に発展するための方法を供給する限りで価値をもつものとしたのである⁹⁵。それゆえ、「国家」を「道徳的守護者」として位置づけることで、ボザンケのいう「国家」を、道徳を超越した至上のものと捉えるのは明らかに誤解であり、またその文脈でボザンケが「個人」を「国家」の手段と見なしている、と批判するのも同様に誤りである。また、ボザンケのいう「国家」を、道徳的意志をもった人格的国家、絶対的国家として批判するのも、彼の著作の中で実際にそのように描かれている箇所は皆無であることから、明らかに誤読である⁹⁶。むしろ、「障害物を妨害すること」の原理や「道徳的守護者」としての「国家」を提唱するボザンケの論理では、「国家」は各人の意志作用の領域に直接的にはタッチし得ないのと同様、「国家」の目的である「最善の生活」にも直接にもタッチし得ない存在であり、国家が道徳そのものを具体化したり、あるいは各人が国家に盲従することで道徳が実現するということは、彼の論理ではありえない。いわば、ボザンケのいう「国家」は、「最善の生活」ないし「共通善」と「個人の生活」ないし「人間の内的批判」の間に位置するもの、つまり両者の「媒介者」ないし「繋留点」である。その意味で、ホアンレの指摘のように、ボザンケは決して個々人を「国家」という怪獣モロクの胃の中に放り込む議論を展開しておらず⁹⁷、またジョーンズの最近の指摘のように、ボザンケは「国家崇拜者」(state-worshipper) でもない⁹⁸。

ボザンケに対する批判は、こうしたものに留まりはしない。たとえば、コールおよびラスキは、ボザンケをはじめとする理想主義的国家論があまりに「形而上学的」と批判し⁹⁹、またジョード、ホブハウスは、ボザンケの言う「国家」が「有機体」であり、その意味で「あまりにメタフォリカル」、つまり比喩的であると批判した¹⁰⁰。しかしながら、こうした批判は、ボザンケの政治思想の一面を言い当ててはいるものの、彼の思想をネガティブに

捉える根拠になるとは思われない。何となれば、こうした批判はボザンケの理想主義的国家理論の最も顕著な特質を言い当てるだけでなく、むしろそれは彼の政治思想史上における最も特筆すべき事柄を示唆するものだからである。すなわち、ボザンケの政治思想史上における最大の特徴とは、とりもなおさず、こうした形而上学的でメタフォリカルな彼の「国家」論そのものである。前述のように、イギリスの思想界では、個人主義や経験論、功利主義が知的風土であったことに加え、元来「主権」や「国家」といった観念があまり好まれず、「社会」に対して「ガバメント」という観念はあったものの、「国家」という観念は長い間ほとんど使われてはこなかった¹⁰¹。しかし、こうしたイギリスの政治思想史上における傾向に抗い、形而上学的で思弁的な国家論を展開したのがボザンケの政治思想である。それゆえ、「国家」という言葉自体が馴染みの薄いイギリスの中で、「国家」を現実の政治社会そのものと捉え、「国家」論こそ政治哲学の本質であると見なして、イギリスで未曾有の徹底した「国家」論を生み出した点は、ボザンケのイギリスのみならず、政治思想史全体への大きな貢献として特筆されるべきであろう。ボザンケが、イギリス理想主義最大の国家論者としてだけではなく¹⁰²、メッツ (R. Metz) の指摘のように「ボザンケ以上に国家の本性を把握しかつ解説したイギリスの哲学者はいない」と指摘されるのは、まさにボザンケの政治思想史上のこうした特徴を物語っているといえよう¹⁰³。

ところで、ボザンケは、国家活動が「障害物を妨害すること」に限定され、かつその活動自体が「社会」や「個人」の意志によって制限を受けるものであると主張した。この点は、「国家」と「個人」「社会」との微妙な関係や国家活動が発生するプロセス、さらにはその国家活動の具体的な内容をも示す、ボザンケ独自の「権利」概念、および「刑罰」概念によってさらにクリアなものになる。そこでは、同時に、ボザンケが、前述のように「自然権」思想ないし「原子論的個人主義」を批判しながらも、なおかつ人間の「権利」を承認してゆく彼の論理もまた明らかされている。

第4章 註

¹ PTS, V, p.xlviii.

² PTS, V, p.3.

³ PTS, V, p.4.

⁴ PTS, V, p.3.

⁵ PTS, V, p.10.

⁶ PTS, V, p.299.

⁷ PTS, V, p.255.

⁸ PTS, V, p.299.

⁹ PTS, V, p.298.

¹⁰ PTS, V, p.173.

¹¹ PTS, V, p.299.

¹² PTS, V, p.280.

-
- ¹³ *PTS*, V, p.273.
¹⁴ *SII*, XV, p.274.
¹⁵ Hoernlé, *op.cit.*, 1919, p.629.
¹⁶ *PTS*, V, p.140.
¹⁷ *PIV*, VI, p.311n.
¹⁸ *SE*, I, p.272.
¹⁹ *PTS*, V, p.172.
²⁰ *PTS*, V, p.186.
²¹ *PTS*, V, p.142.
²² *PTS*, V, pp.189-190.
²³ *PTS*, V, p.168.
²⁴ *PTS*, V, p.173.
²⁵ *PTS*, V, p.169.
²⁶ *SII*, XV, p.271.
²⁷ *PTS*, V, p.303.
²⁸ *PTS*, V, p.300.
²⁹ *PTS*, V, p.300.
³⁰ *PTS*, V, pp.302-303.
³¹ *PTS*, V, p.304.
³² *PTS*, V, p.301.
³³ *PTS*, V, pp.300-301.
³⁴ *PTS*, V, pp.304-305.
³⁵ *PTS*, V, p.301.
³⁶ *PTS*, V, p.305.
³⁷ *PTS*, V, pp.301-302.
³⁸ *PTS*, V, pp.213-214.
³⁹ *PTS*, V, pp.303-304.
⁴⁰ *PTS*, V, p.305.
⁴¹ *PTS*, V, p.304.
⁴² *PTS*, V, p.302.
⁴³ *PTS*, V, p.173.
⁴⁴ *PTS*, V, p.175.
⁴⁵ *PTS*, V, p.172.
⁴⁶ *PTS*, V, p.173.
⁴⁷ *PTS*, V, p.175.
⁴⁸ *PTS*, V, pp.178-179.
⁴⁹ *PTS*, V, p.176.
⁵⁰ *PTS*, V, pp.175-176.
⁵¹ *PTS*, V, p.212.
⁵² *PTS*, V, p.179.
⁵³ *PTS*, V, p.64.
⁵⁴ *PTS*, V, p.175.
⁵⁵ *PTS*, V, pp.176-177.
⁵⁶ *PTS*, V, p.217.
⁵⁷ Muirhead, *op.cit.*, 1908, p.89n.
⁵⁸ *PTS*, V, p.177.
⁵⁹ *PTS*, V, p.178.
⁶⁰ *PTS*, V, p.178.
⁶¹ *PTS*, V, p.182.
⁶² グリーンもまた、国家活動を「障害の除去」(removal of obstacles)に限定している。詳細は、日下喜一「T・H・グリーン of 政治思想」、行安茂・藤原保信責任編集、前掲書、1982年、83-107頁、特に95-103頁参照。

- ⁶³ PTS, V, p.179.
- ⁶⁴ PTS, V, p.186.
- ⁶⁵ PTS, V, pp.182-183.
- ⁶⁶ PTS, V, pp.179-180.
- ⁶⁷ PTS, V, pp.183-184.
- ⁶⁸ PTS, V, p.xxxviii.
- ⁶⁹ PTS, V, p.172.
- ⁷⁰ PTS, V, p.xxxviii.
- ⁷¹ PTS, V, p.183.
- ⁷² ボザンケ自身は、ホブハウスの批判を学問的に無視していた。Morrow, *op.cit.*, 1982, p.386. 事実、ボザンケは、1919年1月26日の書簡の中で次のように述べている。「わたしは彼〔ホブハウス〕の書物を読むつもりはありませんし、また彼から多くを学ぶとも思いません。戦争〔第一次世界大戦〕が始まって以来、本の値段は高くなっておりますし、時間もまた安くはありません。」BBF, XX, p.203.
- ⁷³ Hobhouse, *op.cit.*, 1918, pp.20-23, Collini, *op.cit.*, 1976, p.105. G. D. H. Cole, "Loyalties", *Proceedings of the Aristotelian Society*, Vol.26, 1925-6, p.153, 164, Lacock, *op.cit.*, 1967, p.80.
- ⁷⁴ Cf., Sweet, *op.cit.*, 1997, p.162.
- ⁷⁵ Meadowcroft, *op.cit.*, 1995, p.116.
- ⁷⁶ R. M. MacIver, "Society and State", *Philosophical Review*, Vol.20, 1911, p.35.
- ⁷⁷ Harris, *op.cit.*, 1944, p.65.
- ⁷⁸ バーカー, 前掲書, 1954年、57-58頁。
- ⁷⁹ Meadowcroft, *op.cit.*, 1995, p.116.
- ⁸⁰ *Ibid.*, p.127.
- ⁸¹ Simhony, *op.cit.*, 1991, p.521.
- ⁸² Hobhouse, *op.cit.*, 1918, pp.75-80, ベイ, 前掲書, 1979年、87頁。ラスキ, 前掲書, 1974年、67頁、R・M・マッキーヴァー, 中久郎・松本通晴訳『コミュニティ: 社会学的研究』(ミネルヴァ書房、1975年) 454-464頁、特に459-464頁。なお、マッキーヴァーは、「ボザンケト〔翻訳ママ〕教授はわれわれ二人の間で交わされた私信のなかで、社会と国家との区別は重要であるという見解を述べられ」た、として、ボザンケが両者の区別を重視していたことを短く付記している。マッキーヴァー, 前掲書, 1979年、464頁。また、ボザンケとマッキーヴァーとの往復書簡は以下に収録されている。SE, I, pp.261-290.
- ⁸³ SE, I, p.261.
- ⁸⁴ Sweet, *op.cit.*, 1997, p.177.
- ⁸⁵ Cole, *op.cit.*, 1925-6, pp.154-157, A. D. Lindsay, "The State Recent Political Theory", *The Political Quarterly*, Vol.1, 1914, p.133.
- ⁸⁶ PTS, V, p.175.
- ⁸⁷ PTS, V, p.172.
- ⁸⁸ Sweet, *op.cit.*, p.164.
- ⁸⁹ バーカー, 前掲書, 1954年、64-65頁。
- ⁹⁰ 村上信一郎「知識人と政治」、馬場康雄・岡沢憲英編『イタリアの政治』(早稲田大学出版部、1999年) 220-221頁。ジェンティーレは、ムッソリーニ内閣で文部大臣を務め、ファシスト国家のイデオロギー的な正当化を図った「御用学者」といわれている。
- ⁹¹ C. E. M. Joad, *Liberty Today* (London: Watts, 1938), p.182.
- ⁹² カール・ライマンド・ポッパ、武田弘道訳『自由社会の哲学とその論敵』(世界思想社 1973年) 243-244頁。
- ⁹³ H・マルクーゼ、梶田啓三郎他訳『理性と革命』(岩波書店、1961年) 440頁。
- ⁹⁴ Cécil Laborde, "The Concept of the State in Britain and French Political Thought", *Political Studies*, Vol.48, No.3, 2000, p.551.
- ⁹⁵ Nicholson, *op.cit.*, 1990, p.220.
- ⁹⁶ Thomas, *op.cit.*, 2000, p.110.

⁹⁷ Hoernlé, *op.cit.*, 1919, p.614.

⁹⁸ Jones, *op.cit.*, 2000, p.93.

⁹⁹ Cole, *op.cit.*, 1925-6, p.153, Hobhouse, *op.cit.*, 1918, p.20. H. J. Laski, "The Pluralistic State", *Philosophical Review*, Vol.28, 1919, p.562. ラスキ, 前掲書, 1952 年、35 頁、H・J・ラスキ、飯坂良明訳『近代国家における自由』(岩波書店、1974 年) 67 頁。

¹⁰⁰ C. E. M. Joad, *Guide to the Philosophy of Morals and Politics* (London: Victor Gollancz, 1947), pp.759-765, Hobhouse, *op.cit.*, 1918, pp.68-69.

¹⁰¹ 福田敏一「公私問題の政治哲学的基本問題」、佐々木毅・金泰昌編『公と私の社会科学・公共哲学 2』(岩波書店、2001 年) 9-11 頁。

¹⁰² 例えば、河合栄治郎はボザンケの本領をその「国家論」に求め、理想主義の「代表的な国家論」を供した、理想主義の最後の「代表者」としてボザンケを高く評価している。詳細は拙稿、前掲論文、2002 年、209-234 頁。

¹⁰³ Metz, *op.cit.*, 1935, p.339.

第5章 ボザンケの権利・刑罰論

1. 「権利」(1) — 国家干渉と「権利」 —

ボザンケは、前出のように「障害物を妨害すること」の原理を提示し、それに則りながら様々な国家活動を提唱しているが、なかでも彼にとってとりわけ重要なものは、「個人」が「最善の生活」や「共通善」の実現のために発する要求を「国家」が満たすという活動である。ボザンケによれば、「魂の卓越」や「共通善」が「現実のものであるのは諸自己の中においてである」¹ことから、「国家」は以下のような活動を展開しなければならない。

「国家の目的が現実のもの (real) となるのはこうした諸自己においてであり、また、国家が、それがそのために存在するところの目的を促進しうるのは、障害物の除去への彼ら諸自己の諸要求を維持し、かつ調整することによってである。」²

つまり、「個人」各人は「最善の生活」や「共通善」あるいは「魂の卓越」を実現するために、前述のような「批判」、すなわち「現実意志」と「実在意志」との間の内的な意志作用に留まらず、外的世界に向かって様々な要求を発する。それゆえ、このような要求に応え、その諸要求を「強制力」を行使して調節するのが、ボザンケのいう「国家」の「障害物を妨害すること」の原理に則った具体的な国家活動のひとつである。ボザンケはいう。

「国家の特徴的な属性は、諸要求の究極的裁定者 (ultimate arbiter) であること、少なくとも具体的世界 (the bodily world) において作用し得る体系としての生活の保護者であること、である。」³ (強調—ボザンケ)

しかし、このような調整はあるひとつの機関によって系統的・調和的・統合的に為されなければならない。言い換えれば、「最善の生活」の実現のために、一方ではあることが為され、他方では別のことが為されるのでは「相反する諸調整」が為され、種々の人間の「最善の生活」を実現するための要求は満たされ得ない。それゆえ、ボザンケによれば、「最善の生活」を実現するために行われる各人の諸要求の総合的調整は、各人が唯一の「国家」のみに所属することによってはじめて可能となる。ボザンケはいう。

「明白なことは、一人の人間との関係においてただ一つのこうした〔国家の保持する〕絶対的権力が存在している、ということ、そして世の中 (the world) が組織される限りにおいて、一つの絶対的権力が存在しなければならない、ということである。」⁴

ボザンケがただ単に「国家」に人間は属すべきとするのではなく、「我々各々は、国家、それも唯一の国家に属さねばならず」(強調—引用者)⁵、かつ「文明生活の中にあるあらゆる個人は一つの国家に、そしてそれのみに属すべき」(強調—引用者)⁶と論ずるのは、「国家」が「実在意志」「一般意志」の具体化であるという理由に加え、「最善の生活」実現のための各人の諸要求を調節するという作用が「唯一」の「国家」によって可能となる、という、より現実的な理由にもよっている。

ところで、各人の「共通善」を叶えることに国家活動の実質的作用を見出すこうしたボザンケの議論は、直ちに彼の「権利」論へとつながっている。なぜならば、ボザンケの考える「権利」とは、すでに示されたように「人権」や「自然権」の類のものではなく、む

しる社会的に承認された「共通善」の実現のための個人の要求を意味するものだからである。ボザンケによれば、「共通善」といった究極目標は「自己」において実現するが、それを具体化するための手段は「コミュニティを構成する明確な諸関係の中に存する諸自己に付着している“権利”」に求められる。ボザンケは、各人の「権利」が「最善の生活」という究極目標の手段であると論究し、「国家」により維持される「権利の体系」を、「合理的生活に必要な外的諸条件の有機的全体」ないし「人間の人格の存在及び完成に本質的な物質的条件の維持にとって、真に必要なもの」と規定して、国家活動と「権利」との関係を以下のように記している。

「もし、我々が一般に国家活動それ自体の限界について問われるなら、その答えは、国家活動は権利の維持 (maintenance of rights) に符合する、となる。」⁷

「すべての国家活動は、たとえその詳細において特殊的あるいはむしろ具体的だとしても、その趣旨 (bearing) 及び正当化において一般的である。それは権利の体系に具体化され、そこには公益との関係によっては決定されないような要素は存在しない。」⁸

しかし、前述のように、ここでボザンケによって論ぜられる「権利」は、「人権」あるいは「自然権」のような、生来的に各人に付着している権利ではない。ボザンケによれば、人間の権利を「社会」や「国家」とは無関係なもの、つまり「個人がその孤立の局面において、つまり目的との関係と無関係にある局面において賦与されるもの」と理解する自然権的見解は、「的外れの概念」、「幻想」、そして「誤った特殊化」である⁹。むしろ、真の「権利」とは、「外的諸条件」として「国家」により「維持」され、「承認」された各人の要求である。ボザンケは言う。

「そして権利は、国家によって承認された、すなわち、究極的権威として行動する社会によって承認された、最善の生活に好ましい諸条件の維持への諸要求である。」¹⁰

また、ボザンケは「法」と「権利」の関係を次のように述べる。

「すべての権利は、法によって強制され、かつそうされるべき要求として、よき生活に参画する目的とそれらとの関係から、それらの命令的な権威を抽出する。そしてすべての権利は人間の諸能力の最善をなすために裨益する権力であり、この根拠で承認され、かつ、行使されるのみである。」¹¹

つまり、ボザンケによれば、前出の「自然権」は、社会や国家の成立以前に人間に付着しているとされるもの、すなわち「社会的承認ないし調節」によって「変換されてはいない」ものであることから¹²、それは真の「権利」ではないのである。では、ボザンケにあって、「人権」や「自然権」ではない「権利」とは具体的にどのようなものであろうか。

この点について、ボザンケは、「権利」は各人の「立場」(position) に帰結すると論ずる。ボザンケは言う。

「この点から、権利は、まず第一に、法—言わば権威的な体裁である—によって維持される限り、彼のコミュニティの世界におけるある人の立場に関する外的な事柄である。」¹³

つまり、ボザンケによれば、「法によって決定される、秩序における場所 (place)、立場」

が「権利」を構成する要件である。この点をボザンケは以下のように述べる。

「そして私の場所ないし立場、及びその付随条件が、国家によって許可される限り、そして、私が要求するものとして考えられ、そして私の目的にとって手段となる力として見なされるとき、私の権利を構成する。」¹⁴

さらに、ボザンケは、こうした「立場」を「実在的な事実、すなわち職業 (vocation)、場所、ないし役割」¹⁵と理解し、それらを「共通善」や「最善の生活」の実現に各人が貢献する場と理解する。ボザンケはいう。

「まず最初に心に浮かぶことは、立場であり、場所であり、役割である、と言い得よう。これらはあるコミュニティにおいて顕示される最善の生活の本性、そしてその最善の生活への独特の貢献についての個人の自己の能力によって決定される。こうした場所や役割は命令的 (imperative) なものである。それらは特殊な人間における、より完全な自己であり、特殊な人間がより完全な自己へと移行するようにその人間を作り上げるのである。」¹⁶

したがって、ボザンケの場合、「権利」を構成するのは、人権の場合のように各人の生存そのものではなく、各人の「立場」ないし「職業」である。

さらに、ボザンケによれば、「権利」(「立場」「職業」)は、それが「最善の生活」という目的に資するものであることから「私にとって、そして他者にとって同様に命令的」¹⁷なものであり、したがって「権利」は「責務 (obligations) にかわる傾向がある」¹⁸。ボザンケは言う。

「確保された権力〔権利〕、あるいは強いられた条件〔責務〕は、異なって見られた一つのものであり、同一物である。大まかに言えば、それらは一人の人間からと他の人間から異なって見られた同一物である。」¹⁹

「わたしの立場の多くの権利は、わたしの立場ないし役割のために、わたしにのしかかる諸責務をもたらし、より一般的には諸責務を生じさせる。」²⁰

無論、この場合、「権利」が「社会」や「国家」(法)によって承認されるものであることから、「責務」もまた「法によって強いられ得る要求」²¹であり、かつ「国家」によって承認されるものである。それゆえ、ボザンケにあっては、「共通善」実現のための「権利」は、同時に「共通善」実現のための「責務」でもあり、「権利」と「責務」は表裏一体の関係にあることになる。

こうして、ボザンケは、国家活動の機能を「権利」の「維持」としたうえで、各人の「立場」や「職業」が「権利」「責務」を構成し、さらにそれらは「国家」によって「承認」されなければならないと論ずる。それゆえ、ボザンケの場合、前述の国家活動における「権利」の「維持」とは二つの意味を含んでいる。一つは、「国家」は、「国家」自身は無論のこと、別の人間、集団による各人の「権利」への侵害を許さない、という意味での「維持」であり、もう一つは、各人の「権利」は「国家」や「法」によって「承認」される必要がある、という意味での「維持」である。そしてこれは、各人の「権利」(「共通善」実現のための各人の要求)を守りつつ、それを「承認」(「共通善」実現のための外的な「国家」

による整備)することで、「国家」は人間の内面的な干渉は行いえず、専ら外的諸条件を維持するのに留まる、とされた彼の「障害物を妨害すること」の原理に即したものである。その意味で、ボザンケの「権利」論は、彼の国家論での「障害物を妨害すること」の原理の応用である。

2. 「権利」(2) - 「国家」と「社会」 -

ところで、国家活動は「障害物を妨害すること」の原理以外に、「個人」や「社会」によっても一定の制限を受けるものであった。そしてこの点、特に「社会」によって「国家」が制限を受ける点は、前出の「権利」の「承認」、特に「国家」ではなく「社会」による「承認」についてのボザンケの議論から明らかになる。ボザンケによれば、前述のような「承認」という国家活動も、「社会」における「承認」から発せられるものである。ボザンケは「承認」を「各々が他者に対する関係」と定義して、それを「立場」と結び付けながら、次のように論ずる。

「各々の精神は、他者のそれに向かう明確で積極的な態度をもつ。そしてそれは、彼らの“立場”とお互いとの関係に基礎づけられており、あるいはそうである限り単にそうした関係である。したがって、社会の立場、あるいは職業は、実際には、承認の媒介においてそれらの本性をもつ。それらはお互いへと向かう精神の態度である。そしてそれを通じて、それらの異なった諸特徴は、共通善にたいして手段となる。」(強調-ボザンケ)²²

そしてボザンケは、「承認」を「我々自身及び他者における無意識の諸活動 (automatic actions) への我々の習慣的態度」と論じて、「承認」そのものを各人の間に自然と生ずるもの、つまり「社会」自身の自動的な習慣活動に基礎づけられるものと理解する。それゆえ、ボザンケによれば、「経験が諸君の承認を例証する」²³ことになり、「承認」は各人および「社会」の経験に基礎づけられたものである。さらに、その自動的な習慣活動は、「社会」の「秩序」に具体化されていることから、ボザンケは「秩序」自体が「承認」を含むものであると論ずる。ボザンケは言う。

「我々は、我々とともに“立場”を共有する人々のそれを“承認”しつつ、そしてその目的である生活を重んじつつ、大部分それ〔習慣の体系〕を無意識に行う。(中略) 権利の社会的体系への我々の態度は、このようなものである。秩序全体が我々の習慣的承認をもつのである。」²⁴

それゆえ、「立場」そのものが「承認」と相関的な関係にある。ボザンケは言う。

「立場が存在するが、承認されないと論ずることは、不可能である。というのは、我々は諸精神の関係について話しているからであり、また、お互いに向かう諸精神の諸態度によってそれらが単一の結合されている限りにおいて、それらの立場やそれらの承認は、一つのもので、同じことだからである。」²⁵

こうして、ボザンケは「社会」の自動的な習慣活動、つまり「秩序」自体こそ「承認」であると論ずる。そしてボザンケによれば、「国家」による「権利」の承認は、この「社会」

の秩序における「承認」を前提とする。つまり、「権利」の「承認」は、まず第一に、個人間の習慣や経験に基礎づけられた「承認」が必要であり、その後で「国家」による「承認」が必要とされるのである。ボザンケは、国家活動は「単一のコミュニティを結び付けている習慣と経験の統一に依拠している」²⁶として、以下のように述べる。

「その諸要求の国家による強制は、単にそれらの社会による承認のクライマックスである。」²⁷

こうして、ボザンケは、国家活動としての「権利」の「承認」を最後のもの、言わば「お墨付き」的なものと理解し、社会内部における「習慣」や「経験」が権利の「承認」の究極的な根拠であると論究するのである。ここから、国家活動としての「承認」が「社会」における個人間の社会習慣、経験に基礎づけられ、かつ「国家」が「社会」から一定の制約を受けるものであることが明らかになる。

ところで、こうしたボザンケの議論においては、「最善の生活」に基礎づけられない要求は「社会」そして「国家」によって「権利」としては「承認」されない。ボザンケによれば、「社会」や「国家」によって「共通善」の手段と認められないような要求、すなわち「わたしがしたいことへの単なる欲望に基礎づけられうる権利」は本来権利ではない²⁸。しかし、ボザンケは、「それ自身と矛盾しない人間や社会は存在しない」²⁹として、どんな社会であれ現実にはその内に欠陥を擁し、したがって現体制の「権利の体系」も必ずしも万全なものではないことを示す。それゆえ、ボザンケは、現在では「権利」ではなく単なる気まぐれな要求と見なされるものも、将来においては「権利」になり得ることを認め、種々の未承認の要求が「権利」の立場を獲得するプロセスを解説している。ボザンケはいう。

「もしわたしが未承認の権利を主張することを欲するなら、わたしは、次のことを示さなければならない。すなわち、未承認の権利が含む“立場”がどのようなものであるのか、そしてその立場は社会精神である承認の体系において自らをいかに主張するのか、そしてそれは単に特殊な A ないし B としてわたし自身のために確立されるのではない、ということである。(中略) 別の言葉で言えば、わたしは、申し立てられた権利 (the alleged right) が善に対しての諸能力の実現化に関する必要条件であること、さらに、その申し立てられた権利がその自己主張を可能にするところの諸能力と釣り合いを失って、今実現化されつつある諸能力の犠牲を要求しない、ということを示さねばならない。端的に言えば、わたしは、問題となっている要求が国家によって保障されない限り、社会は自らと矛盾し、社会が明言するところのもの、すなわち、善き生活であることには遠く及ばない、ということを示さねばならない。」³⁰

こうして、ボザンケは未承認の要求が「権利」の地位を獲得する方法を提示することで、「社会」や「国家」によって新たな要求が「権利」として承認される可能性を示唆する。

さらに、ボザンケは、本来「権利」であるべき要求が「社会」や「国家」によって承認されない場合の各人の現体制への抵抗や反抗を認める。ただし、ボザンケの場合、そうした「抵抗」は、「抵抗権」ではありえない。なぜならば、ボザンケの論理では、「権利」は

最終的には「国家」によって承認されるものであることから、「抵抗権」とは「国家」自身による「国家」に対する抵抗を「承認」する、という自己撞着を意味するものだからである。それゆえ、ボザンケによれば、「抵抗」は「権利」ではなくむしろ「義務」である。ボザンケは、各人の自らの「立場」及び「責務」が、自らが従っている体系と「矛盾」する場合、「抵抗の義務」(the duty of rebellion)が生ずると論ずる³¹。ボザンケは言う。

「武力や不服従(disobedience)によって国家にあらがう権利を主張することは抵抗である。そして我々が抵抗の義務を考えるさいには、我々は、そのことで社会は欠陥状態にあると考えるところの事柄の重要性を、社会秩序の存在の価値全体と対応させて考えねばならない。」³²

確かに、ボザンケは、こうして「抵抗」の「義務」の存在を明示するものの、「法が憲法的過程により変更されうる国家では、抵抗の義務はほとんどあり得ない」³³と論じて、民主的なプロセスを採用する国家においては、そうした「義務」が生じる可能性は少ないとしている。しかしながら、ボザンケは「抵抗権」よりも強い響きをもつ「抵抗の義務」を主張することで、既存の秩序体系や「習慣」が人間にとって悪弊となる可能性があり、それらが完全なものではないことも示唆するのである。

さらに、ボザンケは、「権利の体系」そのものが脅かされる重大な事態が発生したときの「国家」の対処法に関しても言及している。ボザンケは、その一例として「大飢饉」のような緊急事態を挙げている。ボザンケは、「大飢饉」のさい、「国家」が採るべき方策を以下のように解説している。

「しかしもし、飢饉においてや公的感情のある興奮状態においてのような、異例の誘惑ないし挑発(provocation)が共通のものになるなら、そのさい、国家はある一つの権利だけではなく、権利の体系そのものを維持しなければならない、ということが想起されねばならない。もし、飢餓が共通であるなら、ある諸権利の再調節、あるいは少なくとも生存権(the right to live)の一時的な保護が、示唆される救済策(the remedy indicated)である。」(強調－引用者)³⁴

つまり、「権利の体系」それ自体が危機に瀕する場合、ボザンケは各人の「生存権」を保障することも「国家」は必要であると訴えるのである。これは、ボザンケによれば例外的な事例に限られるが、しかしボザンケが「生存権」にまで言及していることは注目に値する。

以上、ボザンケの「権利」論を概観してきたが、彼はさらに「権利」の侵害や法的・政治的秩序の攪乱に対処する「刑罰」について議論を行っている。そしてその議論を通じて、ボザンケは、再び道徳と「国家」との微妙な関係、あるいは「障害物を妨害すること」の原理を論じ、かつそれらをさらに明瞭なものにしている。

3. 「刑罰」

ボザンケによれば、「刑罰の真の本性及び諸目的」は、「最善の生活に資する権利の体系

を維持する」という「国家の目的」から生じるものであり³⁵、「刑罰」は「国家」が「権利」を保護するための最終手段として、その「強制力」を実際に適用するものである。しかし、ボザンケは、この場合でも、前述のように「国家」は「障害物を妨害すること」の原理に則り、人間の自由意志の領域には侵害し得ないことから、「刑罰」、およびその反対の「褒章」も人間の内面的な意志作用に影響を及ぼすものではないと論ずる。ボザンケはいう。

「両者〔褒章と刑罰〕に関する国家による強制力の行使は、一般に無意識の作用（automatism）の分野の範囲の内に含まれる。換言すれば、それは、ある目的を、その目的に関する観念が意志に及ぼす影響力とはまた別の手段によって促進させる事例であろう。

（中略）一見した所で、褒賞と刑罰が、社会生活の無意識の作用の要素に属するのは真実である。」³⁶

つまり、ボザンケは、「それら〔刑罰と褒章〕は、意志と目的との直接的関係においては生じない」³⁷ものであると断じて、賞罰を通じて国家権力が人間の内面的な意志に直接的に入り込み、各人に目的を直接に自覚させ、そこから人間にある行動を直接取らせる、ということ拒否するのである。逆に、ボザンケによれば、国家干渉としての賞罰が目的と意志との直接的関係に入り込んだ場合には、「最高の実践的価値ないしあらゆる道徳的価値を諸活動に付与するのに必要な、ある一定の動機で諸活動が為されること」がなくなり、代わって「道徳意志の領域がそのより高度な部分において、そして自己欺瞞への永続的傾向を伴って侵害される」ことになる³⁸。

しかし、賞罰のうちの「褒賞」という制度は、文明の進んだ国家ではあまり重要な役割を果たすものではなくなっていると言っているとボザンケはいう。ボザンケは、褒賞に各人の意志作用を消失させる危険、ボザンケの言葉では「標準的な生活の全体を墮落させる危険」³⁹を見抜きながらも、現在、その褒賞は「小さな役割、それも外見的には減少しつつある役割」しか演じていないと論ずる。ボザンケはいう。

「ヨーロッパ諸国において、叙勲（honours）は今なお相当の役割を演じているように見えるが、分析ではそれは思われるよりも少なく見いだされるであろう。（中略）私は、報酬（compensations）とは別の、国家によって調節された褒賞が、アメリカ合衆国に存在するのをほとんど知らない。」⁴⁰

むしろ、ボザンケによれば、現今における褒賞は「市民の行動を統制するのに用いられる手段というよりも、むしろ社会が生活のある諸型式にたいして感ずるところの尊敬の諸結果」である。こうして、ボザンケは過剰な国家干渉となりうる「褒賞」制度が、現在ではその役目を終えつつあることを示す。

しかし、「刑罰」に関してはそうではない。ボザンケは「褒賞は刑罰のそれと相関的な場所を満たしてはいない」と論じて、褒賞とは裏腹に刑罰はなお幅広い役割を演ずるものと理解する。では、ボザンケにとって、刑罰とはどのようなものであろうか。

ボザンケによれば、「刑罰」は前述のように、なお「障害物を妨害すること」の原理に則るものである。ボザンケはいう。

「刑罰は、権利の維持のために国家に開かれた、唯一の消極的方法に極めて符合する。」

41

それゆえ、その「刑罰」は、それが人間に直接与える恐怖感を通じて「犯罪」を「抑止」することを目的とはしない。なぜならば、刑罰への恐怖感が人間の意志作用に影響を与えるということは、明らかに「強制力」を帯びた「国家」による人間の意志の領域への不当な干渉だからである。ボザンケは、「刑罰の恐怖によって単純に不正行為(wrong-doing)が抑止される」のは「称賛に値しない」と断じて、刑罰への恐怖を次のように述べている。

「本来、苦痛による懲罰、及び恐怖や服従に訴えることは、我々のより低度の本性を通じて効果的であり、そしてそのように作用する限りにおいて、そうした懲罰などは善を意志する意志の代わりに利己的な諸動機を用いて、それゆえ善の領域を狭めることは疑いないことである。」⁴²

こうして、ボザンケは、刑罰の恐怖やそれへの服従を、善を意志する人間の意志作用に悪影響を及ぼし、人間の善を意志する領域を狭め、かつ人間が本来もっている善を指向する作用＝内的な「批判」作用そのものを解消してしまうものと理解する。しかし、その一方で、ボザンケは、刑罰を快楽の伴うものにすべきとの見解にも異論を唱える。ボザンケは「残虐な刑罰が、人々における犯罪的気質(criminal temper)を抑制するよりもむしろ刺激するということは真実であろう」としながらも、「刑罰」は「ある程度苦痛を伴うものであると言わねばならない」(強調－引用者)⁴³として、「刑罰」を極端な苦痛や恐怖ではなく「ある程度」の苦痛を伴うものでなければならぬと主張する。ただ、ボザンケによれば、これは「刑罰」に関する真の条件が備わっている場合に限られる。それでは、「刑罰」に関する真の条件とは何であろうか。

ボザンケによれば、それは、犯罪者を一人の人格を持ち合わせる存在として見なし、決して単なる野生動物のごとき欠陥者として見なさないことである。ボザンケは、犯罪者を動物のごとく見なす見解を、次のように批判する。

「そうした見解は、彼の犯罪が病気のように単に自然的な悪であり、そしてその諸原因を除去することに向けられた治療的処遇(therapeutic treatment)によってその犯罪は治療されうる、ということの意味している。しかし、これは彼を人間として扱うものではない。それは彼を“患者”として扱うものであり、行為者(agent)として扱うものではない。つまり、それは、我々を人間にするところの一般的承認から彼を排除することである。」⁴⁴

それゆえ、ボザンケによれば、たとえ犯罪者であっても、その人間は自発的な意志をもち、自らを律し、自らの意志作用、「批判」作用の中で真の目的＝「共通善」「最善の生活」を求める行為者である。ボザンケはいう。

「しかしながら、以下のことは真実である。すなわち、犯罪者は、人間として、そして恐らく共通善の能力をもつものとして、グリーンが示したように、人間性を“将来取り戻す権利”(“reversionary rights” of humanity)をもち、そしてこうした権利を、刑罰は出来る限り尊敬しなければならない、ということである。」⁴⁵

かくして、ボザンケは、犯罪者にも再び真の人間・市民として復活する権利があるとして、犯罪者を動物ないし子供のように扱う刑罰を「単に我々が彼を我々の目的に応じて成形しているだけ」の「非人間的」な刑罰として批判する⁴⁶。さらに、ボザンケは、犯罪者を一つの人格の持ち主と見ないそのような見解では、過剰な国家干渉を招来してしまう危険があることも指摘する。ボザンケはいう。

「しかし、こうした理論は、責任感のある人間に適用されるときは侮辱 (insult) である。(中略) それは、国家は、その生活やその諸観念が改良可能と考えられるあらゆる人間を掌握し、強制的処遇 (forcible treatment) によって彼らを改良する (ameliorate) ように作用し始めうる、という見解に通ずるものである。」⁴⁷

このようにして、ボザンケは、犯罪者を動物と見なす視座に宿る、「国家」による人間改造の発想を批判しながら、犯罪者＝人格の持ち主ということを「刑罰」の真の条件として挙げるのである。

ところで、こうした犯罪者は「国家」の中でどのように位置づけられるのであろうか。この点を、ボザンケは、前述の「権利の体系」と関連させて以下のように描写する。

「犯罪者は、自分が参加しており、かつ自分によって参加されていると承認するところの、ある秩序に所属している責任ある人格であり、そして彼はこの秩序に敵対する意図を現実のもの (actual) にしているのである。(中略) 換言すれば、彼は、権利の体系を破っているのである。」⁴⁸

そしてその場合、「刑罰」とは次のようなものである。ボザンケはいう。

「刑罰は、本質的に、単純に強力かつ明確な集团的感情の、それを侵害する行為に対する反作用 (reaction) である。」⁴⁹

「刑罰は、権利の体系に対する反抗的な態度の否認 (disapproval) を暗示し、かつそれに依拠しており、そしてその反抗的な態度とは、権利の侵害を構成している現実化した意図において示されるものである。」⁵⁰

つまり、ボザンケによれば、犯罪者とは「国家」が維持する「権利の体系」の破壊者であり、「刑罰」とは「権利の体系に参加する者によって破られたその体系の反作用」⁵¹である。そしてボザンケによれば、「国家」はここにおいて次のような役割を果たす。

「しかし、この権利の体系を維持するために国家は存在するのであり、またこの権利の体系によってのみ彼や他人は、善への能力すべてを行使することが保障されるのであり、またこの保障はその体系への彼ら相互の尊敬に存しているのである。彼の人格が誤りを具体化する現実のふるまい (tangible deed) を通じて主張される限りにおいて、彼の反抗的な意志 (hostile will) は頭角を現し、そして正義に反抗する。そのさいには、以下のことが必要である。すなわち、権利の体系を維持する権力は、できるものなら、単になされる外的損害を取り消すのではなく、そうした損傷をなすことによって正義を無視する反抗的な意志を取り除くべきだ、ということがである。」⁵²

しかし、こうした権力による犯罪者の反抗的な意志の除去という作業＝「刑罰」であっ

でも、前述のように、それは「褒賞」と同じく、国家干渉の原理から、人間の意志と目的との直接的関係に潜入する類いのものではない。ボザンケによれば「反抗的な意志がそれによって否定されうるところの手段は、無意識の作用の領域内に収まる」ものであり、「刑罰」は「国家活動の一般的原理にしたがって、その精神的な諸効果は正確には見積もられないところの外的活動を通じて唯一」為されるものである⁵³。つまり、ボザンケは、前述のように、「刑罰」をあくまで間接的に人間の意志に影響を及ぼすもの、すなわち犯罪者に自己の良心の存在に気づかせ、またそのそのささやきに耳を傾けさせるものと位置づけるのである。そしてボザンケによれば、犯罪者にこうした自覚を促す契機こそ、「刑罰」に伴う一定の「苦痛」にほかならない。ボザンケはいう。

「我々が“トゲを蹴る”、つまり無駄な抵抗をして傷つく (kick against the pricks)’とき、またそのことが我々に苦痛で跳ね返ってくるとき、この苦痛は、我々の存在全体の至る所において微妙な関連をもつ。それは、我々を正気づかせるのである (It brings us to our sense)。

(中略) もしある者がつまずいて自分の足を傷つけるとき、彼は色々調べて自分が道から外れていることを理解する。もしある人間が、自分の工場を経営する方法、あるいは自分のアパートを管理する方法が罰金ないし投獄 (fine or imprisonment) に処せられるべきと言われるなら、そのさい、彼が凡庸で、不注意ではあるが、しかし尊敬すべき市民であるならば、彼は一抹の衝撃を感じて自分が他人の権利というものにあまりに無頓着であったということを認め、そして逮捕されることで自分が我に返る (he is brought back to himself) ことを認めるであらう。」⁵⁴

つまり、犯罪者の自由意志や良心に間接的な影響を及ぼし、犯罪者を「正気づかせること」、「我に帰らせること」が可能な程度の「苦痛」であれば、それは各人に自らの罪を自覚させる作用があるものとして正当化されるのである。ボザンケはこの点を総括的に以下のように述べている。

「端的に言えば、刑罰を通じての強制や、刑罰への恐怖は主としてより低度の自己に作用するものであるが、しかし真の刑罰の諸条件が存在する場合、つまり刑罰が、権利の体系に参与する者によって破られたその体系の反作用である場合、刑罰を通じての強制や刑罰への恐怖は、罰せられる人間によって〔「共通善」などの〕目的が承認されることに結果的につながる。そしてその限りで、刑罰を通じての強制や刑罰への恐怖は、苦痛という形で我に立ち返らせる、彼自身の意志と見なされ得る。」⁵⁵

こうして、ボザンケは「刑罰」を通じて、犯罪者による「共通善」や「最善の生活」といった真の目的、あるいは自己が真に望むものの認識が可能になると論じ、「刑罰」に含まれる「苦痛」の要素を承認するのである。しかし、そうであれば、「刑罰」は、犯罪者にとっては犯罪者自身に潜む真なる自分、真なる意志、真なる目的（「共通善」）を認識する極めて重要な契機となる。ここから、ボザンケは、カントの学説を援用しながら、犯罪者の「刑罰を受ける権利」を提唱する。ボザンケはいう。

「〔上記のような「刑罰を受ける権利」に関する〕その理論の試験的な学説は、社会が合

意によって解散することになったとしても、その解散の前に牢獄につながれた最後の殺人犯は処刑されねばならない、というカントの言説に見出され得る。刑罰は、言わば殺人犯の権利であり、彼はその権利を詐取されてはならない。」⁵⁶

カントは、この主張を通じて、各人にその所業にふさわしいものが報いられるべきことを訴え、またこうした処刑を行わなかった民族はいわば正義の公的破壊の共犯者とみなされうことを訴えたが⁵⁷、ボザンケはこのカントの主張に同調して、刑罰を受けることを犯罪者の権利と見なすのである。

ところで、ボザンケによれば「刑罰」は「権利の体系」の「反作用」であった。それゆえ、ボザンケのいう「刑罰」とは、一種の「応報」(retaliation)ないし「同害報復」である。しかし、それはあくまで「権利の体系」の「反作用」であり、かつ国家の具体的な活動であったことから、被害者による個人的な復讐と同一視することはできない。ボザンケはいう。

「残酷な殺人が、その犯罪者は復讐される (serve out) べきとする一般的な欲望を喚起するとき、一般的ないし社会的憤慨は、復讐への利己的な欲望とは同一ではない。そうした憤慨は法や人間性に関する素朴な概念の産物であり、また法や人間性への著しい侵害が、著しく鎮められることを要求する感覚の産物である。こうした感情は、権利の体系を維持する意識の一部であり、その意識が強力なところではほとんど存在するものである。」⁵⁸

こうして、ボザンケは「刑罰」の「応報」の側面を示しながらも、同時にそれが「タリオの法」(「目には目を。歯には歯を」)という個人的復讐を意味するものではないことを示すのである。さらに、ボザンケは、その「刑罰」の「応報」の側面における、「苦痛」を巡る「均等性」(equivalence)に関して、以下のように説明している。

「刑罰は、道徳的有機体における不可避免的な関連によって、犯罪者の行為の彼自身への跳ね返りである。(中略)しかし、国家は、課せられる苦痛と犯罪によって惹起された苦痛との均等性、あるいは課せられる苦痛と罪を犯していることの苦痛との均等性に関しては何もわからず、またその均等を保障する手段をもたない。国家は、苦痛ないし道徳的な有罪を評価することはできない。」⁵⁹

つまり、ボザンケは、前述のように、「国家」が道徳に関しては基本的に無知であり無関係であったことから、「刑罰」の「苦痛」を巡る「均等性」に関しても「国家」は何ら見積もりえないと論ずるのである。しかしそうであるならば、「刑罰」の軽重は何を基準として決定されるのであろうか。この点を、ボザンケは重い刑罰を科する場合を例にして、以下のように述べる。

「もし、より軽い刑罰がより重い刑罰と同等に効果的に抑止するなら、より重い刑罰を科すことは誤りである。というのは、国家活動の正確な目標は権利の維持であるからだ。したがって、権利がより重い刑罰なしで効果的に維持されるのならば、国家の目的はそうした科刑 (imposition) を正当化しない。(中略)そして、経験によって学ばれるものとしてのその抑止力を除いては、それに基づいて刑罰が合理的に等級化されうところの原理

は存在しない。こうした見解は、国家活動の真の諸限界に符合している。」⁶⁰

こうして、ボザンケは、犯罪と「刑罰」との「苦痛」を巡る均等性、および犯罪の軽重、犯罪の等級化は、人間社会の経験によって決定されると論じながら、「国家」の本性、すなわち「国家」と道徳との（ある意味での）無関係性を再説するのである。さらに、ボザンケは、一見「国家」による道徳的な裁定とも思われる「情状酌量」という裁判所の判断に関しても、それは「例外的な緊急事態（exceptional emergency）」の下での犯罪において生ずるものであり、犯罪者にたいして憐憫のような心情的要素が働いたり、あるいは道徳的に正当と認められるという理由から生ずるものではないとして、改めて「国家」と道徳との無関係性を訴えるのである。

4. ボザンケの権利・刑罰論

以上、ボザンケの「権利」および「刑罰」に関する議論を検討してきた。ボザンケの「権利」論では、彼が国家活動を「権利」の「維持」および「承認」という作用に求めることで「障害物を妨害すること」の原理の議論を再説していたこと、またその「国家」の「承認」も「社会」の習慣や経験に基礎づけられるとすることで、彼が「国家」の「社会」への依存性を再説していたことが明らかになった。その意味で、ボザンケの国家論と同じく、権利論を通じて言えることは、「障害物を妨害すること」の原理によって人間の内的領域への国家干渉が排除されていること、そして外的諸条件の整備に国家活動が限定されていること、さらに「国家」という全体的枠組みの称揚とは裏腹に、その国家活動自体が「国家」のベースとなる「社会」や「個人」の状況に左右され、「国家」自身が両者を無視して活動を起こし得ないということである。一方、ボザンケの「刑罰」論では、彼が犯罪者を人格の持ち主と見据える観点から、「障害物を妨害すること」の原理に見合った「応報」的刑罰論を展開し、人間の意志の内面への国家干渉を頑ななまでに峻拒するスタンスをとっていたことが明らかになった。ここでも、ボザンケの「権利」論と同様に、「障害物を妨害すること」という国家干渉の原理が貫かれていることが明確に理解される。

無論、「人権」を否定するボザンケ「権利」論には多くの批判が寄せられた。たとえば、ホブハウスは、「権利」は「社会」の「承認」を前提にするというボザンケの議論に対して、そのような「承認」は歴史上一度も為されなかったし、むしろ「今まで社会はそれを承認することを拒否している」として、権利は社会的な承認を必要とするものではないことを訴えた⁶¹。さらに、それに関連して、マルクーゼは、「権利」は「共通善」といった目的に適合する場合にのみ国家によって各人に付与され、かつその目的は社会集団において共通である、とするボザンケの権利論を、諸個人及び諸個人の利害の重要性を無視し、ある人の権利を社会的な便益の下に位置づけるものだとして批判した⁶²。また、モロウも同様にボザンケを批判し、もしボザンケのいうように「権利」が「立場」であるならば、人間は「立場」をもつ限りで「権利」をもつことになり、「立場」のない人間の価値を全滅させられ、結局それは各人の存在価値を軽視するものだとして批判した⁶³。さらに、ジョードは、ボザン

ケの権利論では、「国家」が最高の「強制力」を行使するだけでなく、個々人の「権利」の基礎であり個々人の価値の源であるとされることから、ボザンケの「国家」は全能的国家であると批判した⁶⁴。確かに、ボザンケは「絶対的な権利は存在し得ず」⁶⁵、「社会」と何らの関係を持たない人間の権利は「権利」としてありえないと主張して、「権利」は「国家」や「社会」によって承認される必要があると論じた。しかし、こうしたボザンケによる「自然権」や人権思想の否認が、既存の社会秩序や「国家」の下で個人の存在価値を彼が軽視し、かつ否定していることには必ずしもつながらない。ボザンケによれば、「権利」は「承認」を必要としたが、その「承認」は歴史を通じて各人間で培われてきた社会習慣に根拠をおくものとして「社会」をベースにしており、また国家活動としての「承認」も「社会」における「承認」の後に、最後になされるものであった。つまり、ボザンケは「権利」を「国家」の「承認」が必要なものと位置づけてはいるが、しかし、スイートの指摘のように、そのことで「国家」は「個人」に対して「権利」を恣意的に剥奪し、かつ付与し得ることを主張しているのではない⁶⁶。むしろ、彼が言わんとしていることは、「障害物を妨害すること」の原理の「権利」論への応用や、「国家」の「社会」への依存性からも理解されるように、その反対である。その意味で、ボザンケの「権利」論から権利剥奪の議論を予想して、個人を掌握・抑圧する全能的、「全体主義」的、あるいは「国家主義」的国家像を想像することは適切ではない。むしろ、ボザンケが、大飢饉の局面において、「国家」は各人の「生存権」の保護を行うべきと述べていたことを想起すれば、彼が現在でいう「人権」が意味するものですら、決して無視してはいなかったことが理解されるはずである。

無論、こうしたボザンケの権利論にあっても、「権利」の根拠たる「社会」の「習慣」や「承認」それ自体が「個人」を抑圧する可能性は否定し得ない。しかし、その可能性も、ボザンケによっては、未承認の要求の「権利」への格上げのプロセスや各人の「抵抗の義務」が示されることで回避されている。実際、ボザンケは現実社会には何らかの欠陥があることを認めており、それを根拠として各人に「抵抗」を「義務」として付与していた。その意味で、ボザンケは、「社会」の「秩序」や「習慣」を重視してはいるものの、既存の体制のみを称揚するような「体制擁護者」ではない。むしろ、ボザンケの場合、「抵抗の義務」が唱導されることによって、権利剥奪や人間存在の否定などに行き着く論理は解消されている。ニコルソンの指摘を用いれば、ボザンケの「権利」論には、「抵抗の義務」を通じて、いわば「永続革命」論者としての側面すら内包されているのである⁶⁷。

そしてボザンケの議論が、このように「個人」を抑圧・圧殺する議論を展開するものでなかったことは、彼の刑罰論においても看取される。ボザンケの刑罰論は、ダイ (John Deigh) が指摘するように、ヘーゲルと並んで、「罰せられる権利」や「刑罰を受ける権利」を提示した古典的な刑罰理論として注目し⁶⁸、またアトキンソン (Max Atkinson) によっては、政治思想史の領域での評価と同じく、「反功利主義」の刑罰理論として高く評価されている⁶⁹。さらに、「刑罰」は害悪によって犯罪者に苦痛を与えることを主眼とするものではなく、犯罪者も人格を持った理性的な尊敬されるべき市民として扱われなければならないと

したボザンケの議論は、人々を心理的に強制して犯罪を抑止するという「心理強制説」を唱えた「近代刑法学の父」であるフョイエルバッハ（Paul Johann Anselm von Feuerbach: 1775-1833）の「心理強制説」とは著しく異なるものといえる。しかし、こうした評価や位置づけ以上に重要であるのは、ベダウ（Hugo Adam Bedau）の指摘のように、彼の議論では、刑罰における「応報」の要素が、犯罪の「予防」（prevention）、および有罪が宣告された犯罪者の「矯正」（reformation）に加えて、とりわけ刑罰の本性と実践において大きな役割を演じている点である⁷⁰。ボザンケ自身は、「刑罰」に含まれる「矯正」、「報復」、「予防」の「三つの諸側面は全く分離し得ない」⁷¹としているが、しかし実際には、彼の刑罰論は、刑法学上、特に刑罰論上で区分すれば、いわゆる旧派・古典派に属する「応報刑論」を軸としたものといえよう。この点は、ボザンケが、いわゆる新派・近代派の「目的刑論」の前提である「決定論」、すなわち自由意思を否定して犯罪行為は行為者の悪性の必然的な結果とする「決定論」を拒絶し、「応報刑論」の前提である「自由意志論」を採用していることから明らかである。つまり、ボザンケは、自由意志に基づいて行われた行為、あるいは引き起こされた結果に対して、「応報」として、この行為または結果に応じた刑罰を加える、という刑罰論上の「自由意志論」に立脚しているのである。このことは、「刑罰」という国家活動ですら人間の内面の領域には干渉しえないとするボザンケの主張と並んで、いかに彼が人間の内的な意志作用＝「批判」を重視していたかを裏打ちするものであり、これまで示されてきた「実在意志」論、国家論、での主張を「刑罰」の側面から傍証するものである。ここに、ボザンケの政治思想が、人間の意志を中心に据えたものであることが顕著に表れているよう⁷²。

ところで、今までのところからも、ボザンケが一面で同一としていた「国家」と「社会」を、実質的には区分して前者による後者の恣意的な抑圧を否定していたこと、また「国家」と「個人」に関しても「国家」による同種の抑圧を排していたことが明らかになっている。そしてまた、ボザンケが「障害物を妨害すること」の原理を繰り返し用いることで「個人」の「自発性」（voluntariness）をいかに重視していたか、あるいは「国家」の「社会」への依存性を示すことで「社会」のいわば「自生性」（spontaneousness）を重視していたかも同時に示されている。しかしこうした側面は、以下において検討するボザンケの制度論、および社会政策論によってさらに強力にフォローされる。特に、前者を通じては、「社会」における「制度」が重視されることで「社会」の自生性が、そして後者を通じては、「国家」によるもうひとつの具体的な国家活動たる社会政策のあり方を巡って、人間の意志における自発性が改めて強調されている。そこで、次にボザンケの制度論を概観することにしよう。

第5章 註

- ¹ *PTS*, V, p.190.
- ² *PTS*, V, p.188.
- ³ *PTS*, V, pp.174-175.
- ⁴ *PTS*, V, p.298.
- ⁵ *PTS*, V, p.175.
- ⁶ *PTS*, V, p.173.
- ⁷ *PTS*, V, pp.188-189.
- ⁸ *PTS*, V, p.216.
- ⁹ *PTS*, V, p.189.
- ¹⁰ *PTS*, V, p.188.
- ¹¹ *PTS*, V, p.195.
- ¹² *PTS*, V, p.99.
- ¹³ *PTS*, V, p.190.
- ¹⁴ *PTS*, V, p.192.
- ¹⁵ *PTS*, V, p.191.
- ¹⁶ *PTS*, V, p.191.
- ¹⁷ *PTS*, V, p.192.
- ¹⁸ *PTS*, V, p.192.
- ¹⁹ *PTS*, V, p.194.
- ²⁰ *PTS*, V, p.193.
- ²¹ *PTS*, V, p.194.
- ²² *PTS*, V, p.196.
- ²³ *PTS*, V, p.198.
- ²⁴ *PTS*, V, p.200.
- ²⁵ *PTS*, V, p.196.
- ²⁶ *PTS*, V, p.182.
- ²⁷ *PTS*, V, p.195.
- ²⁸ *PTS*, V, p.189.
- ²⁹ *PTS*, V, p.198.
- ³⁰ *PTS*, V, pp.198-199.
- ³¹ *PTS*, V, p.139.
- ³² *PTS*, V, p.199.
- ³³ *PTS*, V, p.199.
- ³⁴ *PTS*, V, p.215.
- ³⁵ *PTS*, V, p.216.
- ³⁶ *PTS*, V, pp.201-202.
- ³⁷ *PTS*, V, pp.201-202.
- ³⁸ *PTS*, V, p.205.
- ³⁹ *PTS*, V, p.204.
- ⁴⁰ *PTS*, V, p.203.
- ⁴¹ *PTS*, V, p.203.
- ⁴² *PTS*, V, p.209.
- ⁴³ *PTS*, V, pp.205-206.
- ⁴⁴ *PTS*, V, p.206.
- ⁴⁵ *PTS*, V, p.206.
- ⁴⁶ *PTS*, V, p.207.
- ⁴⁷ *PTS*, V, p.207.
- ⁴⁸ *PTS*, V, p.208.
- ⁴⁹ *PTS*, V, p.205.
- ⁵⁰ *PTS*, V, p.214.

-
- ⁵¹ PTS, V, p.211.
⁵² PTS, V, p.208.
⁵³ PTS, V, p.208.
⁵⁴ PTS, V, pp.209-210.
⁵⁵ PTS, V, p.211.
⁵⁶ PTS, V, p.212.
⁵⁷ カント、加藤新平他訳「人倫の形而上学」、野田又夫責任編集『世界の名著第39巻 カント』(中央公論社、1979年) 476頁。
⁵⁸ PTS, V, p.211.
⁵⁹ PTS, V, p.212.
⁶⁰ PTS, V, p.213.
⁶¹ Hobhouse, *op.cit.*, 1918, p.120.
⁶² マルクーゼ、前掲書、1961年、437-440頁。
⁶³ Morrow, *op.cit.*, 1984, p.103.
⁶⁴ Joad, *op.cit.*, 1938, p.182.
⁶⁵ PTS, V, p.216.
⁶⁶ Sweet, *op.cit.*, 1997, pp.92-93.
⁶⁷ Nicholson, *op.cit.*, 1990, p.221.
⁶⁸ John Deigh, "On the Right to Be Punished: Some Doughts", *Ethics*, Vol.2, No.2, 1984, p.191.
⁶⁹ Max Atkinson, "Justified and Deserved Punishments", *Mind*, n.s., Vol.78, No.311, 1969, p.356.
⁷⁰ Hugo Adam Bedau, "Retribution and the Theory of Punishment", *The Journal of Philosophy*, Vol.75, No.11, 1978, p.601.
⁷¹ PTS, V, p.216.
⁷² 「応報刑論」および「目的刑論」に関しては、丸山雅夫「第10講 学派の争い」、阿部純二他編『刑法基本講座〈第一巻〉—基礎理論・刑罰論—』(法学書院、1992年) 参照。

第6章 ボザンケの制度論

1. 「制度」

そもそも、ボザンケによれば、「制度」(institution)とは、「法」や「国家」と同じように、「一般意志」や「実在意志」の具体化である。この点を、ボザンケは、前述のルソーの「一般意志」概念に言及しながら以下のように述べる。

「コミュニティの諸習慣および諸制度は、いわばそれを構成するあらゆる私的な意志の永続的解釈である。こうして、あらゆる私的な意志から、そして一定の集会の投票からただちに区別されるものとしての現実的かつ具体的な意味内容を、ルソーのいう一般意志にあてがうことが可能となる。」¹

「制度は、ひとりの精神よりも多くの人の精神の目的ないし感情を暗に意味し、また多かれ少なかれその永遠的な具体化を暗に意味する。」²

つまり、ボザンケの場合、「制度」とは、個々人の意志を貫く「一般意志」や個人の「実在意志」の内容として、個人の「現実意志」よりも完全なもの、すなわち「ある瞬間に意志作用において個人の精神を動揺させる明白な諸観念よりはるかに完全なもの」³と位置づけられる。したがって、「実在意志」「一般意志」としての「制度」との関係の中で、「個人」は内的な「批判」を行い、「共通善」や「最善の生活」の実現へと足を一歩進めることが可能となる。その意味で、ボザンケによれば、「制度」とは、理性的な意志の発展のための諸条件を供する倫理的なものである⁴。

しかし、「制度」はそれだけでは十分な「一般意志」ないし「実在意志」の具体化とはいえない。ボザンケは、「実在意志のこうした〔制度における〕表現は不完全」であり、「社会の諸制度の複合体は、まさに学問の体系が真理の不完全な表明であるのと同じく常に不完全だ」⁵と断じている。それゆえ、こうした「制度」における欠陥、すなわち「一般意志」ないし「実在意志」の不完全な具体化という欠陥を補い、かつ「制度」の間の調整や修正を行う機関および作用が必要となる。そしてこの作用を担当するものこそ、ボザンケによれば「国家」にほかならない。ボザンケはいう。

「そして、国家はすべての制度の生きた批判、つまり修正や調整として考えられる。そしてそれにより諸制度は、人間の意志の対象において合理的役割を果たすことが可能となる。(中略) 諸制度は、排他的なものとしては、停滞と病弊の犠牲である。唯一家族のためだけに生きている、あるいは唯一教会のためだけに生きている気性の人間 (temper) を考えてみよ。諸制度が生きた精神的な存在であるのは、国家の運動と循環 (the movement and circulation) の中に取り入れられる (taken up into) 場合のみである。その結果、国家は、この意味において、何ものにもまして、多数の人間ではなく、生活の生きた概念である。」⁶

つまり、「制度」は、「国家」があって初めて「制度」としての機能、すなわち「一般意志」「実在意志」の作用を発揮するのである。ボザンケは、この点を、前出の「国家」の「強制力」に触れながら以下のように論ずる。

「国家とは、あらゆる諸制度の生きた批判者として、必然的に強制力であり、そして最

終的にそれは、唯一承認され、かつ、正当化される強制力である。」⁷

かくして、ボザンケは、「制度」のヒエラルキーを総体的に内包し、「制度」の「一般意志」＝「実在意志」としての機能を十全に果たさせるものとして「国家」を理解するのである。

しかしながら、ボザンケはこのように述べることで、制度それ自体を「国家」が独断で創設し、整備することを訴えているのではない。むしろ、ボザンケによれば、「制度は、特別の法令（ordinance）がなくとも成長しうる」⁸ものであり、「法」の制定や国家活動によらない「制度」、つまり「社会」における自生的な「制度」をボザンケは重視するのである。そしてその自生的な「制度」を代表するものとして、ボザンケは「家族」（family）、「私有財産」（private property）、「近隣」（neighbourhood）、そして「階級」（class）を挙げている。

2. 「家族」

ボザンケは、「家族」を「国家に先立つものではなく、むしろ国家の精神と保護に依拠した成長物」と定義して⁹、「家族」を「国家」なしではその本来の制度的機能を發揮し得ないものと位置づける。しかし、このことによって、ボザンケは、「家族」は解体され「国家」に吸収され得るものだと主張しているのではない。むしろ、ボザンケによれば両者は完全に区分され、また「国家」による「家族」内部への干渉もまた排除されなければならない。ボザンケはいう。

「家族が近代の文明的なコミュニティ（modern civilized community）の中に存在するように、家族は社会および国家にとって必要なものである。が、しかし、家族は社会および国家とは絶対的に異なるものである。」¹⁰

つまり、ボザンケは「社会」と「国家」との関係と同様に、「家族」と「国家」の相互依存性を示唆しつつ両者を明確に区別するのである。それでは、ボザンケにとって「家族」とはどのような機能を持つ「制度」であろうか。

ボザンケによれば、人間が「家族」をつくることはある意味で自然のことであるため、人間の精神に与える影響も大きい。ボザンケはいう。

「そしてこのように“自然的”であることで、家族の観念は、他のどんなものよりも、人間全体を支配する力を持つ。」¹¹

加えて、ボザンケによれば、「家族」は人間にとって「自然界に最もちかいところに立つ」、「いわば目的と意識の領域」への「最も小さな一歩」¹²であり、「家庭」（household）は「市民精神の構造において独特の場所をもつ」ものである¹³。なぜならば、「家族」は「動物存在の最も普遍的な事件」でありながらも、そこにおいて「感覚と理念的目的〔共通善〕との自然の結合」が可能となる場でもあるからである。つまり、ボザンケは、「家族」という自然的なコミュニティの中での各人の間の関わりあい、すなわち「家族」内部での親や子供といった「他者」との小さな社会的な交流の中に「共通善」や「最善の生活」といった「理念的目的」が現出し、家族の成員がそうした目的への自らの責務を学ぶことで「魂の

形成」(soul molding)¹⁴が初歩的に可能になると論ずるのである¹⁵。それゆえ、ボザンケは「家族」の成員間のどんな些細な関わりであってもそこには「理念的目的」が現出すると論じ、一例として「家族」における「食事」を次のように説明している。

「独り身 (a lonely individual) の食事は、恐らく、せいぜい優雅で真つ当な (lawful) 快楽である。しかし、家族の食事は、過度の緊張を強いる宗教的なもの (over-strained religionism) を別として、実際にはその内にサクラメント、つまり聖なる儀式的根源的な諸要素を持ち、そしてそれにも拘らず、その諸要素はその名では考えられないほど効果的なものである。」¹⁶

つまり、「家族」内の「食事」でさえも、ボザンケによれば、単に食事をする場としてではなく、親から子へと種々の事柄が伝授されかつ子供がそれらを学ぶ、という濃密な人間交流の場として、すなわち「共通善」や「最善の生活」の実現のための第一歩の場として重要な意味を持つのである。そしてボザンケによれば、親がこのような食事等を通じて「子供たちを訓練すること (training)」で、「家族」は「共通善に対して必要不可欠の論理的支配力をもつ」ことが可能となり¹⁷、また「共通善」を目ざすいわば「協同的」人間、あるいは「利他的」感情をもつ人間を生み出すことも可能となる¹⁸。ボザンケはいう。

「大まかに言って、協同的な個人は、市民生活によって要求されるものとして、家族において唯一生み出されう。」¹⁹

「私には、協同意志 (the co-operative will) の感覚、“共生の技術” (the art of living together) といったものへの幼いころからの常なる習慣化が、(中略) 社会理論にとつての健全な出発点であるように思われる。こうした習慣化の後に、例えば、真の社会意志に関する学説が、明白かつ堅固な事実の承認としてのものになるのである。」²⁰

ボザンケが、「文明は家族なしで考えられるかどうかを議論することは、人間が変わりうるかどうかを議論することと同じように無駄なこと」²¹と断ずるのは、以上のような「家族」の位置づけによる。

ところで、こうした「協同的」な人間を育てるのは、当然のことながら「家族」そのものを形成し、それを経済的にやりくりする「親」である。ボザンケはいう。

「十全に訓練され、かつ必要な技能や知識を授けられた人間 (the fully trained and equipped human being) は、世間では浅薄なもの (superficial) では決してありえない。そして十全に訓練され装備された人間の産出は、真の家族を形成する〔親の〕能力、また家族の要求を満たす〔親の〕能力に依拠している。」²²

それゆえ、「親」は「子供の訓練」に加えて「家族」を養うために「自分の生涯の仕事にうまく適合している状態を維持」しなければならない。つまり、「親」(特に「父親」)は「家族」の世帯主として生計を立て、「家族」を扶養する義務を負うことになる。そしてこうした生活の糧を稼ぐ親の「経済的」な活動は、ボザンケによれば、それが「人間の世界における諸要素として作用」する結果、単に物質的な活動ではなくなる。ボザンケはいう。

「“経済的”なものとなっている条件は、物質的であることをやめる。条件というものは、

動因であり、利害であり、目的に対する手段である。(中略)例えば、経済的な条件は、永遠性を要求することで、親と子の関係において、倫理的観念にとって必要な普遍性の最も単純な形態を導出するのである。」²³

かくして、ボザンケは、世帯主が「家族」を扶養する局面において、「親」であることの意味を強調するのである。

ところで、こうしたボザンケの家族論は、彼がダーウィン (Charles Darwin: 1809-1882) やスペンサーの進化論を解釈し直し、いわば理想主義哲学と進化論とを統合させた²⁴、彼独自の「自然淘汰論」とつながっている²⁵。ボザンケによれば、従来進化論で示されてきた「生存競争」の意味、すなわち子孫を残すのに成功する環境への「適者」と子孫を残すのに失敗する環境への「不適者」との同種間の個体間の競争、という意味は、その言葉の意味として不適切なものである。むしろ、「生存競争」および「自然淘汰」とは、人間の精神における理性的なるもの、道徳的なるものの「生存競争」のことであり、「生活を整頓しそして環境を扱」う「理性」の力によって一時の感情や動物的本能を精神のレベルで修正して行くことである²⁶。つまり、「生存競争において最も力強いものの生存」とは「全体として最も合理的なるものの生存」²⁷のことであり、「生存競争」とは人間やコミュニティでの「共通善」の実現を押し進める理性の「目的論」的競争である²⁸。そして、ボザンケによれば、こうした精神の内面における淘汰作用は、「家族」における「親」であることと密接に結びついている。ボザンケはいう。

「よく主張されるような、自然淘汰が個人の存在の破壊を通じて排他的に作用するといことは正しくない。論点は存在ではなく親であること (parentage) である。」²⁹

つまり、ボザンケは、人間の内面における合理的なるもの＝「適者」を、「親であること」や「親としての自覚」に結びつけ、各人の内面的領域における合理的なるものと非合理的なるものとの「競争」は「親」であるという意識の獲得＝内的「批判」作用を通じて為されると論ずるのである。それゆえ、ボザンケの場合、「家族」における「親であること」の自覚、つまり意志の内的な「批判」作用を失念・解消させるような企ては、全て否定される。この点をボザンケは、「一般意志」の具体化であった国家活動、つまり公的なイニシアティブと「親の立場」との関係を説明しながら、以下のように論じている。

「わたしは、一般意志が実在することを信ずるし、またその結果として生ずる、国家のメンバーの生活を最も完全に発展させるために、国家によるイニシアティブの行使の結果として生ずる市民社会の権利と義務を信ずる。しかしまたわたしは、最大限可能な範囲で両親や諸個人自身に対して責任を残さないで、生まれたすべての諸個人の存在を、異論なしで保障するようなこのイニシアティブの適用は、性格にとって致命的な濫用であり、また究極的には社会生活にとって破壊的な濫用であると確信する。」³⁰

「我々は、妻や子供の扶養に関して父親を救済するために、あるいは自分の両親の扶養に関して成人した子供を救済するために、(中略)より一般的な立法を通じて我々の公的イニシアティブを決して使うべきではない。」³¹

さらに、ボザンケは、こうした「家族」の領域への「国家」の介入により、「親であること」の自覚＝内的「批判」を解消させ、「共通善」実現を阻んだ「最悪の実例」として、有名なアメリカの「ジューク一族」(Jukes family)のケースを挙げる。「ジューク一族」とは、実在した一家に与えられた仮名で、その一家の精神薄弱の遺伝と社会的に墮落した行動との関連は、19世紀の社会学的な、あるいは優生学的な研究対象となっていた。ボザンケは、このデータをもとに、「ジューク一族」の「1200人もの子孫」の「公的救済および刑務所での支出」で「260000ポンドもの費用がかかった」ことを指摘し、「家族」への国家干渉、つまりボザンケのいう「自然淘汰」「生存競争」への公的な干渉が、「共通善」や「最善の生活」の実現に何らの結実しないものであることを示すのである³²。

こうして、ボザンケは、「親」(特に「父親」)としての立場を強調し、その「親」としての責務を幾分かでも免除させるような国家活動をすべて否定するのである。無論、「国家」は「家族」に対して全く干渉を行わないわけではない。ただ、それも、ボザンケの場合、「生存競争」を前提にした「社会的な意味合いにおける自然淘汰の維持」³³に限定され、「家族」の扶養の集団的な保障に関しては全面的に否定されるのである。

3. 「私有財産」

次に、ボザンケは、「家族」の延長線上に「私有財産」という「制度」を位置づける。ボザンケによれば、「財産」とは以下のように定義される。

「財産制度が本質的に暗に意味するところの、生活の見通し(outlook)は、(中略)家庭によって要求されるものと同一の広がりをもつ。財産制度は、以下のような事実可依拠している。すなわち、個人の生活(それは家庭の生活としてのものを除いては不完全である)における意志を表すためには、物質的な世界を諸観念の働き(service)で成型する力(a power of moulding)がなければならず、そしてそれは自由な取得や利用によって条件付けられる、という事実にある。」³⁴

つまり、ボザンケによれば、「財産制度」は、人間の内的世界による外的世界の統御という側面、あるいは人間の「性格」による周囲の「環境」の変革が示される場であり、各人の意志作用、すなわち「我々の諸概念や我々の諸能力が表現される」場である³⁵。そしてボザンケによれば、こうした「財産制度」における各人の意志作用を通じて、人間ははじめて社会的な存在となり、また個人の殻を破った社会的な意志や精神を実感することが可能となる。ボザンケはこの関係を次のように説明する。

「社会精神は、生活の外的条件を、永続的な自己充足かつ自己表現の手段として扱うことに自由でない人間においては実感されない。」³⁶

それゆえ、ボザンケは、人間の意志の反映する場としての「私有財産」を次のようにまとめている。

「部族(clan)から始まり、そして発展した国家によって完成された財産の社会制度において、“現実のものとなった意志”(realised will)あるいは幸福に関する永続的な概念は、

正しいものとしての地位を占める。(中略) 人間は彼が完全に個人として区別されるときにのみ完全に社会的と理解され得る。」³⁷

こうして、ボザンケは、各人は財産所有者としての「個人」たることによって初めて社会的な存在となると逆説的に論じ、「私有財産」という制度は社会的存在としての人間にとって必要不可欠なものであることを訴える。それゆえ、「財産制度」は、人間の意志の反映する場として、「単に未来に対する備え (provision) という観念ではないし、ましてや、諸欲求を、日ごと生ずる通りに確かに満たすもの」でもない。ボザンケはいう。

「財産制度は、食物や衣服に対する必要な注意と、我々の生活や、我々を頼っている種々の生活を十分に重んずる (making the most of) という観念とを結びつけるのである。」³⁸

したがって、ボザンケにあっては、「私有財産」をもたないことは、自らの意志を表明する場、つまり精神によって物質的世界を支配することを示す場を持たないがゆえに、人間が自らの意志や精神を放棄していることと同義である。ボザンケはいう。

「意志をもたない存在は、それだけ財産ももたず、そして財産をもたない存在は、それだけ現実意志も持たない。」³⁹

となれば、「財産」をもたない子供は「意志」をもたない存在である。ボザンケはいう。

「若き子供たちは財産を保持し、かつやりくりするべきだ、とは提案されない。なぜならば、彼らが円熟した生活に関する個別化された見解をもっていないということは誰でも知っているからである。」⁴⁰

他方、「共通善」の実現を目指す、成熟した理性的・道徳的な大人は「子供や動物のそれのように、そのときそのときの諸欲求、諸必要の除去で満足させられることは不可能」である⁴¹。それゆえ、「私有財産」とは子供あるいは動物のように「単に次々と沸いて出る欲望を満たすための装置 (arrangement)」ではなく⁴²、人間の生活面での「先見」(foresight) や「やりくり」(management) といった、未来を見越した合理性を反映する場として、成熟した理性的・道徳的な大人の「行動かつ表現の一般的かつ普遍的手段」である。その意味で、「私有財産」の原理に反対する学説は、「すべて家族における子供の理想への選好」⁴³を示すものであり、「動物的利己主義への巨大な衝動を与える」ものである⁴⁴。

それゆえ、ボザンケによれば、「私有財産」の分配が「国家の諸機能へと委譲されるのであれば、ばかげた結果となる」⁴⁵。つまり、彼は、人間の「先見」や「やりくり」といった理性の力が遺憾なく発揮される「私有財産」という「制度」が、「国家」による干渉を受けないものであることを強調するのである。

4. 「近隣」

ボザンケは、さらに「制度」として、「家族」と異なり、「血縁を通じてではなく接触(contact)を通じて」生まれる「近隣」を挙げる。ボザンケは「地区」(district) と「近隣」とを以下のように説明する。

「我々の地区は我々の近隣である。(中略) 我々が、少なくともイギリスの経験において

直ちに気づくことは、我々の各々が、人々と一心同体である（concentric）種々の地区に属しているということである。こうした諸地区の各々は様々な目的を表しており、その実際の諸目的のために大変な混雑が帰結しているとも言われる。しかし、我々を取り囲む、組織された地方（locality）各々の明白な目的を知覚すること、つまり我々の健康、公的な秩序、教育、窮乏の救済、そして宗教に関する関心を、その地方―それは地図上の様々な境界線、あるいは恐らく様々な境界線によって表現される―の我々の見解に従ってもつことは、有益な訓練である。こうした境界線の各々は、近隣精神における共通の思考および感覚の要素―ある共通の利害―を示唆するものである。」⁴⁶

つまり、ボザンケによれば、「近隣」とは、各人の精神にとって世界に関する「直接的な絵像」⁴⁷、かつ「全体としての社会」のいわば縮図であり、そこでの社会的な「訓練」は、人間の内的「批判」作用を通じて人を道徳的に成長させるものである。ボザンケはいう。

「近隣はむしろ全体としての生活の見本である。というのは、概して、社会組織の必要な要素すべてを近隣は含んでいるに違いないからである。近隣は、日常の直接的な感覚認識（sense-perception）によって我々にやってくるものすべてを含んでいる。近隣は、我々の家族外の人々との偶然の会合や処遇すべてであり、そしてすべての社会・政治問題のより身近な、そしてより確かな例証である。というのは、近隣は、我々がそのトータルな働きの中で知り、そして感じる生活の文脈であるからであり、それは我々が書類あるいは風説から収集するだけの事柄では不可能なものだからである。」（強調―ボザンケ）⁴⁸

かくして、ボザンケは、「地域（region）の統一」としての「近隣」を「道徳的ないし物理的必需品」と位置づけ、「近隣」が「人間性の小宇宙（a microcosm of humanity）」であると論ずる⁴⁹。ボザンケにあつては、「近隣」のような「我々を、我々の最も近い環境と結びつける倫理的観念」を「無視すること」は、「一般的な生活から、その生命力、その感覚的な健康、強靱さ、そして美しさを剥奪する」ことである。

しかし、こうした「近隣」の意味は現今では失われつつあるとボザンケはいう。ボザンケによれば、「近代の都市の生活においては」、「近隣」の原理は大部分「無視されている」。例えば、「選挙区」（electoral districts）が「単なる選挙民のこれこれの限定として扱われる限り」、また「選挙区民」（constituency）がその「単なるメンバー」として扱われる限り、「近隣の生活は無視されている」⁵⁰。それゆえ、ボザンケは、「近隣」の「倫理的観念」である「制度」としての有効性を訴えながら、同時に近代において見失われつつある「近隣」の意義を強調するのである。

ところで、ボザンケのいう「近隣」とは、現代風に言えば、いわば「地域」の「コミュニティ」のことであるがゆえに、「近隣」は、お互いがお互いを助け合う「援助」ないし「慈善」の領域でもある⁵¹。ボザンケは「近隣」と「慈善」の関係を次のように規定する。

「近隣は、特に慈善と礼儀の領域であり、あり得るすべての種類の直接的な人間関係における正しい振る舞いの領域である。」⁵²

それゆえ、ボザンケにとって「慈善」は、「近隣」のサーヴィス、言い換えれば「近隣者」

ないし「近隣」に住む友人のような援助を意味する。ボザンケはいう。

「我々にとって“慈善”は“近隣のサービス”(neighborly service)を意味する。」⁵³

「〔慈善の〕援助は我々が、窮境もしくは不運な状況にある友人もしくは親類に与えるように、正確に与えられるべきである。」⁵⁴

しかし、ボザンケによれば、こうした「慈善」も現今では「近隣」と同じく本来の機能を発揮してはいない。なぜならば、現状では、慈善団体が乱立し、その各々が独自に活動する結果、無秩序・無計画な慈善、すなわち「援助や施与の重複 (overlapping)」という事態が生じ、「近隣」が混乱に陥っているからである。むしろ、ボザンケによれば、こうした無秩序・無計画の下で実施される慈善は、逆に人間(貧民)に悪影響を及ぼすものである。ボザンケはいう。

「大なる危険は、ある計画をもたないこと、それゆえ全体において他の人々に為されるべき善に関する明白な概念なしで、他の人々の生活に干渉することに存する。これは最も重い責任である。」⁵⁵

「末訓練の婦人―訪問員や彼女のアドバイスに関するレポートは、しばしば哀れなほど無益であり、彼女らに基づいて行動することは、欺瞞そして慈善のあらゆる害を促進するであろう。」⁵⁶

それゆえ、ボザンケは、「慈善」を「人間の福祉の高貴で明確な概念」のもとで実践するためには、「慈善」を行おうとするすべての人間や機関の間に、ある計画に基づく「近隣のサービスにおける協調活動」⁵⁷および「仕事の分割」が必要であると論ずる。その意味で、ボザンケの「制度」としての「近隣」論とは、「近隣」および「慈善」の再発見と、「地区の有機的な組織化」⁵⁸、および「慈善の混沌とした状態の秩序立って友愛的な近隣」への変換を訴えるものである⁵⁹。

ところで、こうした「近隣」や「慈善」も、「家族」と同様、その前提として「国家」がなければ存在し得ない。むしろ、「国家」の枠組みがあつてはじめて「人々は自らが所属することを選択したところの地区の完全なメンバー」となり⁶⁰、「近隣」や「慈善」もまたその存在意義を強く訴えることができる。そしてこの場合、特に「慈善」の場合、「国家」は、具体的には、「救貧法」(the Poor Law)という形で「近隣」の領域に現れてくる。つまり、ボザンケは「近隣」や「慈善」に関して、すでに「国家」=「救貧法」を前提にしており、前述の「近隣」や「慈善」の再組織により「国家」の「知的な救貧法行政があらゆる点で進められる」⁶¹ことを期待している。しかしながら、このことは、ボザンケが「国家」による「近隣」や「慈善」の領域への干渉を承認していることを意味しない。ボザンケの場合、むしろ反対で、彼は「家族」と同様、「近隣」、すなわち「慈善」の領域には「国家」が干渉すべきではないと論じて、「近隣」の自生性を重視している。この点は、「慈善」の対象たる「貧民」を巡る後述の議論で明らかになるが、しかしそのためには、ボザンケの挙げた代表的な「制度」の四例目である「階級」に関する彼の議論をまず検討しなければならない。

}

5. 「階級」

ボザンケによれば、当時の民主制国家においては「階級」はもはや政治的な「制度」としては存在していない。ボザンケはいう。

「“階級”は民主的な諸国においてはもはや政治的制度ではない。ある人間の投票が、最小限の資格で彼には保障されており、また彼の実際的な影響力は、(中略) 出自や職業 (occupation) によるのではなく、彼が自らの資質ないし自らの財産 (possessions) によって行使しうる力に依拠している。」⁶²

しかしながら、ボザンケの目には、政治的な意味での「階級」は存在しないとしても、当時の現実社会ではなお「階級」が厳然と存在し、かつ社会的な機能を果たしているように映った。「しかし他方で、社会的な交際において、実際には、階級は制度として存在する。」⁶³それゆえ、こうした「階級」の存在を正確に認識し、その機能を把握することも、「現実」の中の「理想」を追求する真の政治哲学の課題である。この点を、ボザンケはプラトンの『国家』での議論に言及しながら、以下のように述べる。

「そして、プラトンの概念の具体化ではないもので、健全な政治哲学というものとは存在しない。その中心的観念は以下のような点である。すなわち、政治家、軍人、労働者といったコミュニティにおけるあらゆる階級の人間はある種の精神の独特な型式—それはコミュニティの成員を自らの役割に適するようにする—をもっているということ、そしてコミュニティはお互いの関連におけるこうした精神の諸型式の作用に本質的に存していること、そしてそのことが共通善への服従を構成するということである。」⁶⁴

こうして、ボザンケは、「階級」を前提にして、それを「共通善」との関係の中で検討することが真の政治哲学であると主張する。それでは、ボザンケの考える「階級」とは一体どのようなものであろうか。

ボザンケは、その点を「階級」を意味とする“class”を語源的に検討しながら明らかにしている。ボザンケによれば、「プラトンのいう階級は、“genera”、つまり部族、拡大した諸家族」であり、「ドイツ語の階級である“Stände”は「地位 (statutes)、立場、身分 (estates)」を、そして「フランス語の“état”は「実際には職業 (trade) のこと」をそれぞれ意味する。しかし、「古代ローマの言語の“classis”は、公的な貢献へと“召還すること” (a summoning)」であり、英語の“class”はそこに語源をもつ。そしてボザンケは、この文脈で“class”という言葉解釈し、それを「あらゆるバラバラの職業 (employment) ではなく、様々な職の集団全体と大雑把に結びついた性格および立場 (position) のための言葉」として捉える。ボザンケはいう。

「しかし、[「階級」によって人は公的な貢献へと「召還」されるという] その観念はなお残存しうる。我々の“class”という言葉は、我々が独特な貢献のために呼び出される (called out) ところの集団ないし団体として考えられうる。」⁶⁵

「原理上は、倫理的観念として、階級は家族や近隣を超えたところに男女を導く。そし

て同じ理由から、彼を彼自身の中でより深遠なところへと導く。彼が階級において獲得するものは、自分の家庭の扶養（support）のために生計を立てるという一般的な必要に、特別の目的（point）を付加する複雑な特性（qualities）および知的能力（capacities）である。原理上、彼の個人的な貢献は、彼の意識における社会精神であり、（中略）社会全体の論理によって要求される形態である。彼は、社会が彼に要求する貢献を果たすことで“公的な労働者”である。そしてその貢献は原理上、特殊で、独特で、かつ示差的（distinctive）であるというまさしくその理由から、彼は階級において、自らが相違によって一致団結された統一体のメンバーであることを感じる。」（強調－ボザンケ）⁶⁶

こうして、ボザンケは「召還」という機能をもった「階級」を、各人が公的な貢献を果たす場と考え、それがなお「制度」として重要な役割を果たしていると論ずる。

ところで、ボザンケによれば、各人の「階級」を決定づける要素は「職業」（vocation）である。つまり、各人が公的な「召還」を通じて「独特な貢献」を果たすのは、具体的には「職業」を通じてである。ボザンケは、「階級」を「ある者の職業に含まれる貢献と立場の型式を示唆する」ものとし、かつ「職業」を「精神の倫理的構造を構成する主要観念のひとつ」と位置づけて、以下のように述べる。

「我々は“彼は何もの？”という一般的な質問に、人間の事業ないし職業の名をいうことでいまだに回答する。家族や近隣は個人の生活を下から支え、かつ彩る。が、職業は個人の生活の特徴づけ（stamp）、それを成型する。有機的な世界（the organising world）のより確実かつ明確な召還の要求（summons）は、意識の特定の中枢からより深遠な応答を抽出するか、あるいはそうした中枢においてより具体的な形態をとる。（中略）個人は、自分に伝えられた自らの本性をもつ。それは、共通善への独特の貢献（a distinctive service）を果たすのに必要なものを身につけるよう命じられ召喚されるからである。彼は、“何ものか”になる。それは、社会的観念における要素の具体化である。」⁶⁷

さらに、ボザンケは、「職業」を通じての公的な領域への「召還」に、各人の「個性」の具体化を見出す。ボザンケはいう。

「こうした個性は、ある意味では、倫理的観念全体であるが、しかしとりわけ個性は職業の観念に具体化される。我々の職業は、我々の近隣のごとく、通例、もちろん、それとの関係において、精神と肉体の両者の特徴付ける。」⁶⁸

加えて、「職業」は「階級」の決定要素であることから、「階級」もまた「個性」と深い関連をもつ。ボザンケはいう。

「従って、ある者の階級は、それがある者の職業に含まれる貢献と立場の型式を示唆するという意味において、ある者の個性の本源（centre）に接近する。」⁶⁹

無論、ここでいわれる「個性」は、前述のように、ミルが唱えたような消極的個性ではもちろんない。ボザンケはいう。

「端的に言えば、個人は、原子としてではなく、（中略）関係の術語として、独特であるか、あるいは独特な階級に属するものである。これが、真の意味での個性によって意味さ

れるものである。」⁷⁰

かくして、ボザンケは「社会の結合の紐帯は、類似性ではなく、最も高度な個性ないし特殊化に存する」と論じ、各人の「職業」こそ「個性」そのものであると論ずるのである。要は、「私が必要とされる貢献を社会に対して果たしていると感じること、また私を除いては誰も果たしえない貢献を私は社会に対して果たしていると感じること」が、ボザンケにあっては「個性」の実感である。

そして以上の議論から、ボザンケが、いわば「社会」における「分業」(the division of labour)を重視していることもまた明らかである。ボザンケは、「分業」に人間の理性的能力の伸張を見出し、次のように論及する。

「個人の意識の独特の知的能力に更に一層の理解が置かれるのは、分業、つまりある者のサービスへの、別の者による返礼が、コミュニティにおいて顕著になるときである。」⁷¹

「あなたの特別な能力 (special powers) および役割が私の要望 (need) を満たし、また私の特別な能力および役割があなたの要望を満たす。そして我々の各々はこのことを承認し、我々はそれを喜ぶ。独特な貢献に関するこうした倫理的観念、あるいは独特な階級の貢献は、もちろん、多少意識された差異における同一性を含んでいる。」⁷²

それゆえ、ボザンケによれば、社会分業が進まないことは、「精神として考えるならば、社会が強烈かつ決定的な知的能力を発展させない」ことである。ボザンケはいう。

「特殊化された役割が存在しないと述べることは、発達した知性が存在しないということと述べるのと同じことである。」⁷³

こうして、ボザンケは、「階級」という「制度」、あるいはそれが示唆する、「個性」の具体化としての「職業」を全面的に承認するのである。ボザンケにあっては、「階級」もまた「実在意志」「一般意志」の具体化として、各人の内的「批判」、および「共通善」の実現に貢献するものである。

ところで、ボザンケはこのように「階級」の存在意義を訴えるが、しかしそのことは、彼が差別的な「階級」の存在を唱えていることを意味しない。何となれば、ボザンケは、職能集団のような「労働者の階級」は「存在すべき」としながらも、他方で「労働者の階級性カースト (castes) は存在すべきではない」⁷⁴と論じ、また「職業」に関しても、それが「格付け (graduation) という意味」において「階級」を決定するものではない、と断じているからである⁷⁵。つまり、ボザンケは「階級」を平等に扱い、かつてプラトンが示したような価値的に差別された「階級」の存在を訴えているのではない。この点は、ボザンケがプラトンの階級論を評価しながらも、そこでは人間が自らに必ずしも適職ではない職業に閉じ込められ、その結果、プラトンの描く国家が硬直したもの、「閉じたもの」、そして弱きものになっている、と批判していることから理解される⁷⁶。

6. 「貧民」

そしてボザンケは、こうした「階級」論の敷衍として「貧民」論を展開している。ボザ

ンケによれば、「階級」が存在意義をもつのは、「階級」が何らかの社会的な役割を担っている場合においてのみであり、それを失った「階級」や、「社会」から遊離した一部の特権的な「階級」は真の意味での「階級」ではない。ボザンケはいう。

「“階級”が役割に順応する力を失ったり、あるいはその力を獲得しないとき、(中略)階級が万事であり、それが優位および特権に関する絶対的かつ不動の法則であるように見える。(中略)こうした“階級”の体系は、そのメンバーにとって、あるいはコミュニティにとって、はたまたその両者にとって抑圧であり得る。」⁷⁷

それでは、現状においては、こうした役割なき「階級」は存在しないのであろうか。

この点に関して、ボザンケは「貧民階級」をそのような「役割」なき「階級」として挙げる。ボザンケは、現存する「貧民階級」が現状ではそれなりの「役割」を持っていることを一応は認める。ボザンケはいう。

「“貧困はひとつの地位になっている”といわれる。“社会的落伍者”(déclassés)は、他者の善性(goodness)を刺激するという消極的(passive)な社会的役割を伴って、社会の階級になっている。」⁷⁸

しかし、ボザンケによれば、人間の「同情および自己犠牲の永続的な対象」を表す「階級としての“貧民”の制度」は、本来あってはならない「奇妙かつ嘆かわしい制度」である。何となれば、「貧民階級」に属する人々は「社会」に対する「役割」をもたずに、他の「階級」や人々に依存した「従属的な地位」(a dependent status)にあるからである。事実、ボザンケによれば、かつての古代ギリシャの都市国家にあっては、「貧民」という地位は存在しなかった。ボザンケはいう。

「ギリシャ人は“貧民”に関してはほとんど語らなかった。なぜならば、ギリシャ人はこうした地位を承認しなかったからである。それは、ギリシャ人にとって、役割無き階級、政体(the body politic)の混乱状態(dislocation)を意味していた。」⁷⁹

また、現代にあっても、「貧民」はたとえ存在するとしても、彼らは基本的に何らかの「役割」を担うべき「市民」であり、人はみな「市民性」(citizenship)をもつ点で平等であるとボザンケはいう⁸⁰。

「我々は、民主政治の市民であること(democratic citizenship)の観念から出発する。近代国家においてすべての者は市民である。この点ですべての者が平等である。最も広い意味ですべての者は、お互いそして全体に依存している。しかし、家族を除いて、階級と階級との間、あるいは人間と人間との間の特定の依存に関する仮定は存在しない。義務と責任(obligations and liabilities)は無数に存する。しかし、それらは相互的であり自発的である。社会全体によって一般的に規定される諸条件の中で、市民は独立している。」⁸¹

それゆえ、今求められるのは、「貧民を〔彼らがそれぞれ担うべき〕役割へと連れ戻すこと」であり⁸²、「“社会的落伍者”」としての「制度」を存続させることではない。それでは、「貧民」が貧困状態を脱出し、「市民精神」を持つ「市民」として「独立」するにはどうしたらよいのであろうか。

この点を、ボザンケは人間の意志に焦点を当てることで検討している。ボザンケによれば、「貧困」をはじめとする種々の問題は、すべて人間の意志や「性格」の問題である。ボザンケはいう。

「道徳的な視点は、問題は不運のせいにする事で解決される、という視点を意味しない。道徳的な視点は、人間を経済的な抽象概念としてではなく、歴史や観念、そして自らの性格をもった、生きた自己として扱う視点を意味するのである。」⁸³

それゆえ、「貧民」から「市民」への脱却、「従属」から「独立」への転換は、すべてその人の意志にかかっている。この点を、ボザンケは前出の「性格」と「環境」を巡る議論に触れながら、次のように述べている。

「独立を持続させるためには、内面的には意志及び観念におけるある種の完成 (completeness)、外面的にはある程度の環境の支配における成功を必要とする。」⁸⁴

それゆえ、「市民」としての要件を欠く「貧民」とは、自らの意志の「完成」に到達していないもの、「環境」を支配し得ていないもの、あるいは「性格」の弱きものである。

しかしながら、ここでボザンケは「貧民」を二つに区分している。ひとつは、「貧民」でありながらも将来において「市民精神」を復活させ「市民」として活躍し得る「貧民」、言い換えれば自らの「批判」的意志作用＝「性格」をなお堅持している貧民であり、もうひとつは「市民」としての復活が容易には望めない貧民、言い換えれば自らの「批判」的意志作用を放棄し、道徳的な改善が困難な貧民である。さらに、ボザンケはこうした区別に基づき、前者を「困窮」(distress)の状態にあるもの(「困窮者」)、あるいは「例外的な不運」に晒されている者とし、後者を「ポーパー」(pauper)あるいは「窮乏者」(destitute)と位置づける。

そしてボザンケにとって、前述のような「近隣」における「慈善」とは、なお自由意志や「性格」を保持しながらもそれを失う傾向にある「貧民」、つまり貧困にありながらも「市民」としての復活が見込める「貧民」を対象とする。それゆえ、ボザンケのいう「慈善」の原理とは、なお「性格」を保有している「困窮者」の「市民精神」を「支援」し「強化」し「復活」させることであり⁸⁵、かつ彼が「ポーパリズム」へと転落するのを「予防」することである⁸⁶。

他方、こうした「市民精神」の復活はすべての「貧民」には望めない、という現実的な認識もボザンケにはあった。つまり、自由意志を放棄し、もはや「性格」の改善が望めない「窮乏者」「ポーパー」、ないし「性格のいかれたもの」(a screw loose in character)⁸⁷としての「貧民」である。ボザンケは、彼らを「市民精神」の持たないものとして、以下のよう述べる。

「ポーパリズムの精神は、すべての社会階級において見出されうるものであり、その精神とは市民精神 (the citizen mind) の薄弱を意味する。そしてその薄弱のために、ポーパリズムは状況 (situation) に対応することができない。言い換えれば、ポーパリズムは、社会精神への不完全な参加である。(中略) ポーパリズムは、原理的に、そして諸事例の非常に

多くにおいて、市民精神の不足と結びついている。」⁸⁸

また、ボザンケにあっては、「市民精神」とは「性格」の「独立」および「環境」の「支配」を意味するものであったことから、「ポーパー」らの「ポーパリズム」とは、社会が人間に要求するレベルで生活を送ることができない状態のことをいう。ボザンケはいう。

「ポーパリズムの外的な事実、環境を、社会的な標準が要求する程度で支配することに失敗していることを意味する。(中略)したがって、ポーパリズムは、外的事実として、自らを維持すること、つまり自活すること (to maintain oneself) に失敗したことである。」

89

そしてボザンケによれば、後述のように、彼ら「ポーパー」は「慈善」が扱う対象ではなく「国家」による救済、すなわち「救貧法」による救済の対象である。この点を、ボザンケは、「慈善」が「援助することのできるもの」(helpable)と「できないもの」(unhelpable)とに区別しながら、次のように述べる。

「慈善を申し込む“救貧法ケース”(“援助することができないケース”)は救貧法に送られる。救貧法に適用されていた“援助することができ”ケースは慈善に任される。」⁹⁰

こうして、ボザンケは、「貧民」の意志の状況に鑑みて彼らを「性格」のなお健全な「困窮者」と、そうでない「ポーパー」とに二分し、後者を「慈善」ではなく「国家」(救貧法)による援助の対象と位置づけるのである。

7. 「慈善」

そしてボザンケは、「貧民」に関する以上の分類を前提にして、「国家」とは区別される「慈善」の仕事を議論している。前述のように、ボザンケにとって「慈善」とは、「性格」をなお保持しつつもややもすれば「ポーパリズム」へと転落しそうな「困窮者」を対象とし、彼らの「性格」の「独立」を復活させることを目的とするものであった。それゆえ、「困窮者」の「独立」を侵害するような慈善、つまり通常思われるカネやモノを恵むという慈善行為はボザンケによれば真の慈善ではない。「救済を“管理すること”は、それを“供給すること”から区別されねばならない。」⁹¹むしろ、ボザンケの場合、そうしたデタラメな「施与」(doles/alms-giving)や無計画な慈善は、人間の「独立」や「性格」を挫かせ、人間を「環境」や「他者」に全面的に依存させる代物であり、また一時的かつ例外的な貧困にある「性格」のなお健全な「困窮者」を、逆に「ポーパー」へと転落させる危険をはらむものである。ボザンケはいう。

「[無計画の施与のような] こうした場当たりのな(chance) 干渉ほど、性格を傷付けるものはない。」⁹²

「施与は、[慈善の] 重複、迂闊な公的もしくは準公的な救済管理とともに、ポーパリズムへの降下を形成する。」(強調-ボザンケ)⁹³

それゆえ、ボザンケのいう「慈善」とは、金銭的・物質的な仕事を本質とするものではなく、むしろ精神的な活動である。それでは、その精神的活動としての「慈善」の仕事と

は、具体的にはどのようなものであろうか。

ボザンケの論理に従えば、貧民に限らず、人間は自分の将来のためにさまざまな準備を常日頃から行い、自分のことは自分で行う、という「自活」のための「性格」の「独立」が重要な要素となり、それは結果として「儉約」(thrift)の奨励につながる。それゆえ、「性格」を損なわせない計画的な「慈善」も、ボザンケにとっては「施与」の拒絶を経由して「儉約」の奨励という精神的な作業につながることになる。この点をボザンケは以下のように説明している。

「そして社会発展の法則によって、通常の条件の下にある個人と家族は、個人のエネルギーと互いの援助の行使によって、自らを維持しなければならない。そしてこうした条件(terms)に基づいて、唯一、それらはコミュニティに対して最善の尽力を果たすことができる。それゆえ、個人が生活のいたるところで自活するのを助けること、そして家族に本来備わっている責務(obligation)と愛情の感覚を強化することが、社会的な運動(social effort)の主たる目標であるべきなのである。社会的な目的を持つすべての立法ないしボランティアの活動は、この基準で判断されるべきである。この目的を促進すればそれは正しいし、この目的を無効化すればそれは誤っている。」⁹⁴

他方、前述のように、「国家」＝「救貧法」による援助は、「儉約」や「先見」などの精神的な作用精神を持たない「ポーパー」に対してなされる。ボザンケは、「慈善」による援助を申請したもののそれが受理されずに、「国家」(救貧法)の救済に回される「貧民」の心性を、申請の「拒絶」に関連して次のように説明している。

「説明を伴った〔慈善による援助の申請の〕拒絶は、援助と同様に重要である。人々はすぐに諸君がなぜ援助し、そして援助しないのかについて理解する。そしてそれが人々を教育する。(中略)彼らは、不潔、だらし無さは援助を要求する資格ではないことを学ぶ。彼らはエネルギーと回復の見込み(resource)が、援助者たち(the helpers)が喜んで妥協するところの諸性質であるということを学ぶ。つまり、彼らは、先見、勤勉(industry)、やりくりの欠如から生じる種々の必要を満たし得る機関(agency)は、存在しないということを学ぶのである。」⁹⁵

かくして、ボザンケは、「慈善」が対処する「貧民」と「国家」が対処する「貧民」とを厳格に区分し、「市民精神」の復活が望める「貧民」や「性格」がなお健在な「貧民」を「慈善」の対象にするのである。

そして以上のような議論から、いかにボザンケが「慈善」、つまり「近隣」という「制度」の、いわば「国家」からの独立的作用、つまり「社会」の自生性を重視していたかは一目瞭然である。ボザンケは「救貧法」という名の「国家」を前提にし、それが現実に機能することで「慈善」が有効な作用を発揮すると論じながら、「国家」の「慈善」の領域への侵入を峻拒しているのである。

8. ボザンケの制度論

以上、ボザンケの「制度」論を検討してきた。そこでは、ボザンケにあっては、現実社会の様々な「制度」が人間の「実在意志」や「一般意志」の具体化であること、またその理性的な「制度」が各人の内的な「批判」を促す、いわば人間を道徳的に発展させる手段であること、つまり個人は「制度」の中で成長し、自らの自由意志の特徴を「制度」において発展させることが可能になることが示された⁹⁶。そして同時に、いかにボザンケが「家族」「近隣」「慈善」「階級」といった「制度」の「国家」からの一面での独立性、すなわち「社会」の自生性を尊重していたかも明らかになった。同時にここには、前述のように「社会」と「国家」とを形式的には同等のものと位置づけながらも、いかにボザンケが実質的には両者を区分していたかを示す証拠もそろっている。

無論、こうしたボザンケの制度論にも批判が寄せられた。たとえば、ギンズバーグは、「制度」に「実在意志」あるいは「一般意志」が宿るとするボザンケに議論に疑問を呈し⁹⁷、またカリットも「制度」＝「一般意志」であるとするボザンケの議論に異論を唱えた⁹⁸。カリットはいう。

「私はこうしたこと〔制度は実在意志を表現するということ〕を信ずる理由を理解できない。というのも、私には次のように思われるからである。すなわち、制度は、あるものははじめから悪しき制度であり、またあるものはそのような悪しき制度になってゆくものだ、ということがある。」⁹⁹

また、現実の制度がカリットのいうように、必ずしも人間の「実在意志」や「一般意志」を具体化しないという批判は、プラムナッツによっても為された¹⁰⁰。さらに、「制度」のひとつであった彼の階級論にも批判が寄せられ、モロウは、ボザンケが階級の階層構造そのものに何ら問題を見出していない点を指摘し¹⁰¹、またターナー（Frank M. Turner）はボザンケの階級観を19世紀末から20世紀初頭にかけて固定化されつつあった階級構造の反映として批判した¹⁰²。さらに、トマスも、ボザンケの「階級」観はボザンケ自身が属する中産階級（middle-class）の利益や理念を擁護するものだとして批判した¹⁰³。

確かに、「制度」は「一般意志」などの具体化ではないとする批判は、いわゆる悪習や悪弊に属する“悪しき”制度が、今尚広く存在していることから妥当なようにも思われる。しかし、前述のように、ボザンケの政治哲学の目的は、社会の「制度」を、それ自体のままで分析するのではなく、「全体」やその背後にあるものをも視野に入れつつ、その本来的性質や目的に従って判断、定義することにあった。その意味で、こうした批判は、ボザンケがよって立つ理想主義の前提を無視したものであることから、必ずしも有効な批判とはいえない。

また、ボザンケの「階級」観に対する批判も、確かに彼が階級そのものを問題視しなかったのは事実であるし、またそれが当時のイギリス社会の現実を反映しているとの指摘も一面で妥当である。しかし、ボザンケの階級論は、「階級」を通じて社会における差別的なヒエラルキーを提唱するものではなかった。実際、ボザンケは「カースト」のような「階

級」は認めず、また「特権階級」や「貧民階級」を否定することで、いわば「垂直的」ではなく「水平的」な「階級」の構成を考えていた。その意味で、オッターらの指摘のように、ボザンケは、社会主義者とは対照的に「階級」を経済的術語としてではなく、むしろそれを「共通善」や「最善の生活」を実現させるという「役割」や「機能」の側面から捉え直し、機能的に区別されつつも価値的には平等な「階級」の存在を正当化したといえよう¹⁰⁴。したがって、ボザンケの階級論が当時のイギリスの階級構造を一面で具体化したもののだとしても、その議論が、当時の中産階級の経済的利害を代弁するものだとする批判は当たらない¹⁰⁵。

むしろ、ボザンケの制度論にあって特筆すべきは、次の二点であるように思われる。一つは、ボザンケの近隣論である。前述のように、ボザンケは倫理的な「制度」として「近隣」を挙げ、その復活を訴えていたが、この「コミュニティ」としての「近隣」概念の提示およびその強調こそ、他の思想家には見られないボザンケのいわば独創的思想である。そして彼のこの「近隣」観念は、やがてアメリカのユニークな多元主義者であり、かつボストンのソーシャルワーカーであるメアリ・P・フォレット (Mary Parker Follett: 1868-1933) の書『新しい国家』(The New State) に結実することになった¹⁰⁶。フォレットは、「近隣」という「集団」が多様性と相違性をもち、そうした「近隣集団」の「相互浸透」を通じて「統合しつつある国家」が現出し、この「国家」こそ真の民主政治に基づく「新しい国家」であると論じたが¹⁰⁷、こうした彼女の思想はボザンケに多くを負うものであった¹⁰⁸。実際、ボザンケも、「[フォレットの]『新しい国家』は、その近隣という集団の扱いにおいて、私の『哲学的国家理論』の最後の章に多少依拠」するものであり、自分の「近隣」概念がアメリカに渡ったことを自ら指摘している¹⁰⁹。その意味で、ボザンケの思想がフォレットを通じてアメリカで実践に移され、アメリカのみならず「社会福祉」全体の領域に彼の思想が影響を及ぼした点は特筆に価する。

しかし、この点に関して、政治思想史上においてそれ以上に重要なことは、ボザンケの思想がいわゆるフォレット流の「多元主義」に結実した点、言い換えれば、彼の政治思想には「集団」を基礎とする「政治的多元主義」の要素が内に秘められていた点である。実際、ボザンケは、当時「国家」内部において噴出し始めていた「集団」(group)について、以下のように述べている。

「様々な集団—それは主として近隣の集団であり職業上の集団である—の組織化および調整として、国家は以前よりも小さくなるどころか、ますます大きくなってきている。(中略) 実際、組織の形態はこれからも次々に生まれるに違いない。」¹¹⁰

さらに、ここからボザンケは、「集団」を通じて「個人」が活躍の場を見出す「新個人主義」(a new individualism) を提唱する。

「ただし、群集 (crowd) の観念は完全に過去のものである。(中略) 我々は、様々な集団を通じて芽生える新個人主義を必要とするであろう。国家のメンバーは—それが人 (person) であろうと諸集団であろうと—群集の単位ではなく、様々な集団の体系におい

て実現されかつ顕現した充実した個人であり、多面的な活動 (activity) であろう。」¹¹¹

このように、ボザンケは「集団」の重要性を十分に認識し、「一元的」な「国家」像とは程遠い多元主義的な見方を自ら示すのである。確かに、ニコルス (David Nicholls) の指摘のように、ボザンケは「集団」の重要性は認めていたものの、なおそれを「国家」に包含されるものとしており¹¹²、また多元主義的な内容の認識をもちつつも「集団」の問題を明確な形で打ち出すことはできなかった¹¹³。しかし、ヴィンセントがバーカーの「多元主義」の発想はボザンケに由来すると指摘し¹¹⁴、またチャップマン (John W. Chapman) も、ボザンケの理論についてフォレットやリンゼイ、バーカーに先行する多元主義的な要素を見出しているように¹¹⁵、ボザンケの政治思想が「多元主義」との思想的な連続性を内に秘めていたことは確かである。そしてこの側面は、ボザンケが「国家」と「社会」を実質的に区分していたのに留まらず、彼の政治思想が「国家主義」ではないことを証明するものとして重要な意味をもつ。フォレットが、アメリカで過剰な個人主義を反動的に生み出した「国家を崇拜し、個人を無視する」思想＝「国家主義」に対する責任を、ボザンケではなく、彼を「誤って解説している人々」にその責任を求めているのは、このためである¹¹⁶。

さらに、ボザンケの制度論にあって特筆すべき第二点は、「制度」は元来「慣習」の意味を内包していることから、サージェント (L. T. Sargent) の指摘のように¹¹⁷、彼の政治思想におけるその「保守思想」(conservatism) 的な側面である。そもそもボザンケのいう「制度」とは、ヴィンセントも指摘するように、過去から現在までの幾世代もの思想を具現するものである¹¹⁸。実際、ボザンケも「もちろん、国家は社会の倫理的伝統を、それが具体化されかつ保持される慣例や制度とともに含んでいる」¹¹⁹と論じ、「制度」を歴史的な時間の経過の中で途絶えることなく受け継がれてきた「伝統」の具体化であるとしている。ただし、この場合、「保守思想」といっても、それは歴史の流れの中で鍛えられた「制度」にこそ人間の真の意志(「実在意志」「一般意志」)が宿る、とする意味の「保守思想」であり、ホブハウスが批判したような¹²⁰、何らの改革を目指さない単なる「現状維持」(Status Quo)、あるいは「体制擁護」としての思想ではない。何となれば、「一般意志」を巡る議論において、ボザンケは不断の改革を生み出す「議会制」を承認していたし、また権利論において彼は「国民」の「抵抗の義務」さえも承認し、さらに後述の「社会政策」論においても、現状に問題があることを認めて正当な国家干渉としての社会改革を積極的に唱えているからである。その点は、「制度」が時として、本来の「制度」ではなくなり、悪習や因習に転落する可能性を内包していることを、ボザンケ自身が以下のように認めているところからも明らかである。

「しかし、悪の本質は、精神の役割が、社会体系の中での自由な論理的適合という精神の特質から切り離されるということである。制度は化石化してゆく (has become ossified)。そのとき制度は、理論ないし生きた有機体のように諸事実や諸必要にあわせて自らの形を変える代わりに、自らを異質の原理に釘で打ちつける。そしてその制度は社会の論理における誤謬となるか、あるいは社会本体における死せる器官となるのである。」¹²¹

つまり、ボザンケの「保守思想」的側面とは、歴史や伝統、慣習や制度を尊重しながらも、革命的でドラスティックな改革を避けるというバーク（Edmund Burke: 1729-1797）流のものといえる。ボザンケの政治思想に対するウラムの評価、すなわち「バークによって和らげられたルソー」との評価はその意味で妥当なものといえよう¹²²。

ところで、「社会」の自生性を強く訴えるボザンケの「制度」論であったが、この中で彼は「近隣」概念の敷衍として「慈善」のあり方について言及していた。しかし、そこでの彼の物質的援助の基本的排除、「貧民」の差別的処遇、「国家」による制限的援助の主張は、次章で検討するボザンケの現実政策観とともに、彼の思想に対するもうひとつの評価、すなわち「個人主義」「レッセ・フェール」主義といった評価が下される土壌を形成し、かつそれに対する批判の根拠をなしている。しかし、同時にそれは、「障害物を妨害すること」の原理等ですでに示されたように、ボザンケがいかに人間の意志の領域や「個人」の自発性、そして人間の「性格」を尊重していたかを改めて示すものとなっている。それゆえ、ボザンケの「社会」の自生性に関する見解が示された現在、今度は「個人」の自発性に関する見解を、「障害物を妨害すること」の原則のより具体的な説明でもある彼の「社会政策」論を通して検討しなければならない。同時に、イギリス政治思想批判においてすでに示された、ボザンケのミル批判のもう一つの柱である、ミルの社会政策論に対する批判も、次にあわせて検討しなければならない。

第6章 註

¹ PTS, V, pp.114-115.

² PTS, V, p.277.

³ PTS, V, p.115.

⁴ Vincent, *op.cit.*, 1990, p.159.

⁵ PTS, V, p.115.

⁶ PTS, V, pp.140-141.

⁷ PTS, V, p.141.

⁸ PTS, V, p.276.

⁹ PTS, V, p.279.

¹⁰ PTS, V, p.250.

¹¹ PTS, V, p.279.

¹² PTS, V, p.250.

¹³ PTS, V, p.279.

¹⁴ PIV, VI, p.91.

¹⁵ Morefield, *op.cit.*, 2002, p.157,169.

¹⁶ PTS, V, pp.279-280.

¹⁷ PTS, V, p.280.

¹⁸ Jones, *op.cit.*, 2000, p.100.

¹⁹ EASP, XIV, p.99.

²⁰ SE, I, p.xl.

²¹ PTS, V, p.281.

²² PTS, V, p.280.

²³ PTS, V, p.278.

²⁴ Emmet, *op.cit.*, 1989, pp.108-112.

²⁵ 19世紀末のイギリスでは、1859年発表のダーウィンの『種の起原』(*On the Origin of Species by Means of Natural Selection*)において示された進化論的主張が、生物学の領域を越えて様々な学問分野に知的影響を及ぼしていた時期である。ボザンケもその影響を受け、「わたしは自然法則あるいは物理的法則から人間の行動、宗教等に至るまでの継続性を中斷なく示したい。」という意識から、自己流に「自然淘汰論」を提示し、それを自己の社会思想に連結させた。BBF, XX, p.109.

²⁶ Cf. EASP, VIX, pp.94-96.

²⁷ EASP, XIV, p.97.

²⁸ したがって、ボザンケがここで言う「自然淘汰」の「自然」とは、あるがままの自然、あるいは何らの方向性をもたない「機械論」的な「自然」ではなく、ひとつの方向性をもった「目的論」的な「自然」のことである。Cf., PIV, VI, p.367, R. E. Stedman, "Nature in the Philosophy of Bosanquet", *Mind*, Vol.93, 1934, p.327, 334.

²⁹ SII, XV, p.156.

³⁰ EASP, XIV, p.92.

³¹ EASP, XIV, p.104.

³² EASP, XIV, p.102.なお、ボザンケがここにおいて「ジューク一族」を引用することなどから、彼の思想を「優生学」的と指摘する議論もある。Rodney Barker, *Political Ideas in Modern Britain: In and After the Twentieth Century, Second Edition* (London and New York: Routledge, 1997), p.70. また、Boucher (ed.), *op.cit.*, 1997, p.64n8.参照。

³³ SII, XV, p.154.

³⁴ PTS, V, p.281.

³⁵ PTS, V, pp.281-282.

³⁶ EASP, XIV, p.117.

³⁷ EASP, XIV, pp.109-110.

³⁸ PTS, V, p.282.

³⁹ PTS, V, p.282.

⁴⁰ PTS, V, p.282.

⁴¹ EASP, XIV, p.117.

⁴² EASP, XIV, p.111.

⁴³ EASP, XIV, p.113.

⁴⁴ EASP, XIV, p.114.

⁴⁵ PTS, V, p.242.

⁴⁶ PTS, V, pp.284-285.

⁴⁷ PTS, V, p.285.

⁴⁸ PTS, V, pp.285-286.

⁴⁹ PTS, V, p.286.

⁵⁰ PTS, V, p.287.

⁵¹ ボザンケの慈善理論は以下の論考で展開されている。Bernard Bosanquet, "The Principles and Chief Dangers of the Administration of Charity", *International Journal of Ethics*, Vol.3, 1892-1893, pp.323-336, Bernard Bosanquet, "Charity Organization and the Majority Report", *International Journal of Ethics*, Vol.20, 1910, pp.395-408.なお前者はH.C.Adams (ed.), *Philanthropy and Social Progress. Seven Essays* (New York: Crowell, 1893), pp.249-268.にも収録されている。

⁵² PTS, V, p.286.

⁵³ EASP, XIV, p.61.

⁵⁴ EASP, XIV, p.66.

⁵⁵ EASP, XIV, pp.61-62.

⁵⁶ *EASP*, XIV, p.68.

⁵⁷ *EASP*, XIV, p.61.

⁵⁸ 無論、ボザンケはこうした慈善のあり方を、彼が所属していた「慈善組織協会」のそれと同じものとして解説している。同協会の組織はバッキンガム・ストリート (Buckingham Street) にある「中央事務所」(a central office) とロンドンに 39 ある「地区委員会」(District Committees), すなわち各救貧法地区 (Poor Law Union) に 1 つ以上存在する地域密着型の組織から成っているが、ボザンケによれば、とりわけ「地区委員会」—それはちょうど各救貧法地区 (Poor Law Union) に 1 つ以上存在する—の仕事が重要である。

⁵⁹ *EASP*, XIV, pp.64-65.

⁶⁰ この点に関連して、ボザンケは古代ギリシャの欠点を「近隣」と「国家」の関係に求めている。「他方、古代の都市国家においては、地区は全く力強いものであった。国家はほとんど感覚的事実であった。国家のメンバーは本質的に友人であり、近隣者であり、こうした人々は仕事や娯楽で一日中会っていた。地区がこのような国家を吸収するとき、十分な感覚的な無拘束はありうるが、我々が自由と呼ぶものは欠乏している。とりわけ、国家とその理念的な目的は、明らかに血肉とされてはいない。大なる法的体系は、国家が近隣であることをやめるまで創造されない。個人的な親交や“厄介な事件”(hard case) が、普遍的な法の観念をあいまいにする。代議政治の可能性は—それに関する政治的信念はまず作用しない—想像されない。」*PTS*, V, p.288.

⁶¹ *EASP*, XIV, p.65.

⁶² *PTS*, V, p.289.

⁶³ *PTS*, V, p.289.

⁶⁴ *PTS*, V, p.6.

⁶⁵ *PTS*, V, p.291.

⁶⁶ *PTS*, V, p.291.

⁶⁷ *PTS*, V, p.290.

⁶⁸ *PTS*, V, pp.292-293.

⁶⁹ *PTS*, V, p.291.

⁷⁰ *PTS*, V, p.292.

⁷¹ *PTS*, V, p.290.

⁷² *PTS*, V, p.292.

⁷³ *PTS*, V, p.293.

⁷⁴ *CC*, XIII, p.355.

⁷⁵ *PTS*, V, p.290.

⁷⁶ *PTS*, V, p.229.

⁷⁷ *PTS*, V, pp.293-294.

⁷⁸ *PTS*, V, pp.294-295.

⁷⁹ *PTS*, V, pp.296-297.

⁸⁰ Cf., Rooff, *op.cit.*, 1972, p.46.

⁸¹ *EASP*, XIV, p.254.

⁸² *PTS*, V, p.297.

⁸³ *EASP*, XIV, p.78.

⁸⁴ *EASP*, XIV, p.255.

⁸⁵ *EASP*, XIV, p.256.

⁸⁶ *EASP*, XIV, pp.256-257.

⁸⁷ *EASP*, XIV, p.67.

⁸⁸ *EASP*, XIV, p.255.

⁸⁹ *EASP*, XIV, p.255.

⁹⁰ *EASP*, XIV, p.65.

⁹¹ *EASP*, XIV, p.66.

⁹² *EASP*, XIV, p.62.

⁹³ *EASP*, XIV, p.64.

⁹⁴ Bernard Bosanquet, Lecture on Charitable and Social Work, 15/4/01, Family Welfare Association Papers, quoted by Jane Lewis, "The Boundary between Voluntary and Statutory Social Service in the late Nineteenth and early Twentieth Centuries", *The Historical Journal*, Vol.39, No.1, 1996, p.161.

⁹⁵ *EASP*, XIV, p.67. なお、ボザンケは、「慈善」による援助はこのように相手の事情を考慮して、慎重に為されるべきであると主張するが、その具体的な接し方については、相手のことを思えばこそ一時の感情によるのではなく、「精査」(inquiries)に基づき友愛をもって「事務的な調子」(business-like)で為されるべきだとも述べている。彼は「わたしは甘い言葉や仰々しい「同情」はあまり役に立つとは思わない」と断じたうえで、次のように言う。「原則として、私は、思いやりのある法律家や医者調子を〔慈善に〕望んでいるのである。(中略)わたしは、こうして処される精査が尊敬すべき人々にとって苦痛であるとは思わない。というのも、そこでは援助を見知らぬ人に申し込むさいに必ず伴う苦痛を超越しているからである。問題が分別よく彼らのまえに提示されるなら、彼らは、なぜ家族の全環境を知ることが必要なかをすぐに理解し、そして次のような可能性を正しく認識すると私は考える。すなわち、更なる知識が、最初彼らには浮かばなかった援助方法を明示するという可能性をである。」*EASP*, XIV, p.66.

⁹⁶ アンドルー・ヴィンセント、森本哲夫監訳『国家の諸理論』(昭和堂、1991年)168頁。

⁹⁷ Ginsberg, *op.cit.*, 1919-1920, p.92, 99.

⁹⁸ Carritt, *op.cit.*, 1935, p.148.

⁹⁹ *Ibid.*, p.149.

¹⁰⁰ プラムナッツ、前掲書、1988年、87頁。

¹⁰¹ John Morrow, "Ancestors, Legacies and Traditions: British Idealism in the History of Political Thought", *History of Political Thought*, Vol.6, No.3, 1985, p.514.

¹⁰² Frank M. Turner, *The Greek Heritage in Victorian Britain* (New Haven and London: Yale University Press, 1981), p.440.

¹⁰³ Thomas, *op.cit.*, 2000, p.117.

¹⁰⁴ Otter, *op.cit.*, 1996, p.50, Morrow, *op.cit.*, 2000, p.495.

¹⁰⁵ Morrow, *op.cit.*, 2000, p.498.

¹⁰⁶ 田村浩志、前掲書、2002年、197頁。

¹⁰⁷ M・P・フォレット、榎本世彦他訳『新しい国家—民主的政治の解決としての集団組織論—』(文眞堂、1993年)第28-33章、および解説373-376頁。

¹⁰⁸ 三戸公・榎本世彦『フォレット、経営学・人と学説』(同文館、1989年)125頁、註12)。

¹⁰⁹ そもそも、ボザンケの「近隣」概念は、前述のように、アメリカ人のコイトとの「トインビー・ホール」での対談を契機としていた。それゆえ、ボザンケは、フォレットも同じくアメリカ人であることから、「近隣」概念は「ただ自国に戻っただけだ」と述べている。

PTS, V, p.xvii.

¹¹⁰ *PTS*, V, p.lviii.

¹¹¹ *PTS*, V, pp.lviii-lix.

¹¹² D・ニコルス、日下喜一他訳『政治的多元主義の諸相』(御茶の水書房、1981年)11頁。

¹¹³ 萬田、前掲書、1986年、249頁。

¹¹⁴ ヴィンセント、前掲書、1991年、270頁。

¹¹⁵ John W. Chapman, "Voluntary Association and the Political Theory of Pluralism", in J. Roland Pennock and John W. Chapman (eds.), *Voluntary Associations* (New York: Atherton Press, 1969), pp.95-97. 田村、前掲書、2002年、103頁。

¹¹⁶ フォレット、前掲書、1993年、166-167頁。

¹¹⁷ Lyman Tower Sargent, *Contemporary Political Ideologies: A Comparative Analysis, Third Edition* (London: The Dorsey Press, 1975), p.64.

¹¹⁸ ヴィンセント、前掲書、1991年、168頁。

¹¹⁹ *SE*, I, p.272.

¹²⁰ 河合、前掲書、1968 年、274 頁。

¹²¹ *PTS*, V, p.294

¹²² ウラム、前掲書、1968 年、75 頁。

第7章 ボザンケの社会政策論

1. 「社会政策」(1)、「社会政策批判」

ボザンケは、「国家それ自体はよき生活の外的条件を維持する任務に制限される」ものの、「その諸条件」は人間の「現存する生活」との関係なしには考えられないとして、前述の権利論、刑罰論などで示された国家活動以外にも、人間の実生活と直結した国家活動が存在することを示す¹。そしてそれは、「国家」内で生じた種々の問題を解決するために「国家」が行う政策、すなわち「社会政策」を巡るボザンケの議論に結実している。

ボザンケによれば、「国家」やその「社会」は各人、特にその「性格」によって構成されている。

「社会の個々のメンバーはとりわけ一つの性格、一つの意志であり、全体としての社会は、意志と性格が“ブロック” となっている一つの建造物である。」²

それゆえ、「社会政策」が目的とする社会改良や社会改革は、各人の「性格」を通じて為されなければならない。ボザンケによれば「社会改革においては、性格が条件中の条件」³であり、「人間の精神の気質」こそが「条件の中の決定的な条件」である⁴。したがって、ボザンケの場合、各人の「性格」を出発点とした社会改革、「社会政策」のみが唯一正当化されるものである。ボザンケは、「社会政策」の具体的な内容を構成する「国家」の活動、すなわち法の制定、あるいは行政活動といった公的な活動を以下のように論ずる。

「あらゆる類の公的な活動によって人間性を改革しようとするさい、諸君は消極的な方法、つまり間接的な方法で、積極的な結果を目指しているのである。しかしまた、諸君が採用するこうした方法は、消極的ないし間接的ではあるが、もちろん為されるべき積極的な事柄に関する形態をとる。繰り返して説明しよう。我々はみな積極的な結果、つまり人間の魂の卓越を求めている。我々が使用しうる方法は法であり、公的な行政的な方法であり、あるいは私的な管理方法である。法や行政的な方法は、直接的に外的な活動を扱い得るのであってそれ以外は何も扱い得ない。それゆえ、法や行政的な方法は、性格に影響を与える結果に対して間接的な方法以上のものではありえない。」⁵

つまり、法の執行や行政活動に見られる「国家」活動は、「性格」、つまり人間の意志作用に直接的な影響を与えない「障害物を妨害すること」に則った消極的活動であるとボザンケは改めて論ずるのである。この点を、ボザンケは、さらに以下のようにも解説している。

「我々の共通の目的は魂の卓越であると私は述べた。この目的に対する唯一の方法、つまり社会改革者として我々が用いる唯一の方法は、法的な規定 (legal provisions) であり、また公的な行政活動、あるいは私的な管理活動に存する。そしてそれらは、外的な環境を除いて、直接的には何ものにも全く影響を与えることができないのである。それゆえ我々の目的は唯一間接的に促進されうだけである。そしてその理由のために、偉大な技術や最善の調整が、改革に関する我々の方法を用いる際に必要とされるのである。あらゆるケースにおいて、諸君が為されんと想像する事柄を単に為すことは、それ自体を無効にする

政策である。」(強調-ボザンケ)⁶

それゆえ、ボザンケの考える「社会政策」としての国家活動とは、結局のところ、各人が自らの意志作用をもって「共通善」といった目的を目指す、という「個人」の自発的な活動を、外部からいわば「遠巻き」に援助するものであり、それは人間の「自助」(self-help)を背後から支えるようなものである。ボザンケはいう。

「私が意味する、社会生活の本性によって決まる真の社会的かつ建設的な方法とは、人間の精神から創造的な反応を呼び起こしうるような便宜や機会を創り出すことである。」⁷

「したがって、私が示唆する〔公的な政策の正当性を判断する〕社会的な基準とは、個人の性格および自己の責任の促進という昔からの原理(time-honoured principle)である。(中略)むしろ、人々が自助を為すのを助ける、ということを物語る、聞きなれたフレーズが強調されるほうがよい。」⁸

こうして、ボザンケは「社会政策」としての国家活動を、各人の「自助」を促進するものと位置づける。

無論、ボザンケはこう述べることによって国家干渉を否定しているわけでは決してない。実際、ボザンケは、自らの国家論、社会政策論には「純粋な不干渉の政策」は含まれず、またその国家活動も「節制(temperance)や儉約を説教すること」だけに限定されないと論じている⁹。要は、人間の意志作用に間接的に影響を与えることで、人間の精神が敏感にそれに反応を示し、彼自身がそれを通じて自らを変え、周囲を変えてゆく、ということが期待される国家活動こそ正当なものである。その意味で、前述のように、ボザンケが「国家」の活動を「障害物を妨害すること」という機能に制限するのは、彼が人間の内的な意志作用＝「批判」作用を重視しているのに加え、その意志作用が「社会」を変革する、つまり「性格」が「環境」を改変する、と考えていることに起因している。この点は、前述のようなミルの「性格」による「環境」改変の議論に、ボザンケが共感的であったことから確認される。それでは、ボザンケの考える正当な活動としての「国家」の「社会政策」とは、実際にはどのようなものを内容とするのであろうか。

ボザンケによれば、たとえ前述のような「障害物を妨害すること」の原理に則った正当な国家干渉だとしても、人間の意志への影響は免れ得ない。ボザンケはいう。

「公的権力によって為されるあらゆる活動は、どんなに些細なものでも、性格及び知性の領域への侵害(encroachment)の一つの局面をもつ。それは、たとえ課税により調達された財源を使うことだけだとしてもである。」¹⁰

そしてボザンケは、国家干渉と人間の意志および「性格」との関係を、改めて以下のよう述べる。

「しかし、実際、最も重要な点であり、かつ我々が観察しなければならないことは、こうした物質的諸事実は、それらが精神や意志にゆだねられるにつれて、国家の強制〔の領域〕には接近しがたく、そして他方、物質的諸事実は、それらが純粋かつ単純な国家の強制〔の領域〕に接近しうるにつれて、それらは、自らの性格、すなわち、それらは精神や

意志にゆだねられる、という性格を失うであろう、ということである。」¹¹

このように、ボザンケは人間の「性格」や意志への影響という観点から、「国家」の行う「社会政策」に対して慎重な態度を示す。それゆえ、ボザンケは、現実採用された、あるいは採用される見通しの具体的な「社会政策」を、容易に承認するような主張は展開しない¹²。たとえば、ボザンケは、「国家」による学校給食を、「家族」（両親）の責任を軽減させる国家干渉として、それを健全な家族体を崩壊に導くものと批判する。そしてボザンケは、現状において必要なものを学校給食ではなく、自発的基金によって賄われる女性救済委員であり、彼女らが各学校に配属され、子供や「家族」を調査し、激励し、各ケースに必要な援助を決定する、という措置が必要だと訴える¹³。

また、ボザンケは、労働者階級への「国家」による無料医療サービスを「粗雑で機械的な方便」（a rough and mechanical makeshift）であると断じ、その施策を、病院、「救貧法施療院」、「無料慈善施療院」等の間に無用な競争を惹起する元凶として批判する。そして、必要なのは、労働者の理想的な医療条件を労働者自身が選ぶ「家族医」（family doctor）によるサービスであると論じ、「国家」により選定された医者による無料医療サービスを、従来の医療施設を破壊し、同時に患者から医者を選択権を剥奪するものだと厳しく批判する¹⁴。

さらに、ボザンケは「国家」による老齢年金も、各人が老齢のために準備するのをやめさせる有害かつ過剰な国家干渉と理解する。ボザンケはいう。

「性格と能力は我々が留意するものであるが、しかし我々は気まぐれから性格と能力に留意するのでなく、人間の幸福に関する中枢かつ決定的な力としてそれらを信用することから留意するのである。もし諸君が私に以下のこと、すなわち国家によって供される老齢年金が、長い目で見れば、賃金労働者（the wage-earner）の賃金を減らすことなく老人をより快適な境遇（position）に置くのだ、ということ信じさせるのであれば、私は自分の反対が誤りであったことを認めなくてはならない。しかし私はその類のことを一切信じない。私が信ずるのは、こうした措置が、労働者階級の境遇の増大しつつある改善を阻むものである、ということである。」¹⁵

こうして、ボザンケは、「国家」による学校給食や労働者への無料医療サービス、あるいは老齢年金のすべてを批判する。さらに、ボザンケは、労働者の雇用問題に関しても、臨時的な雇用の抑制（常勤化）は「克服し得ない不運」を妨げるとしつつ¹⁶、失業者の援助計画は、その援助の対象から精神的に墮落した習慣的な失業者（the chronic unemployed）、彼の別の表現を用いれば「残余者」（Residuum）¹⁷を排除しない限り、不成功に終わるであろうと予見する¹⁸。そして、ボザンケはただ単に、失業者のために「何かが為されなければならないという観念」を「蔓延させること」は、それ自体「惨めな階級を創造する強力な要因」であるとし¹⁹、安直に失業者への対策を講ずること自体を批判するのである。

他方、ボザンケは、教育政策・人口政策に関しても言及しており、それは、彼がミルの主張を社会政策の面から批判するという形で示されている。その批判の対象は『自由論』

の第五章で論じられた国家による教育と人口政策に関する議論である。

ボザンケによれば、ミルが唱える国家干渉の正当性の基準は、ボザンケが「国家干渉の原理」で説いたような「国家が効果的に維持することができる良き生活の外的条件であるか否か」、あるいは「強制的権力が良き生活の促進に向かつて何をなすことができ、あるいはできないのか」ではなく、むしろ「自己と他者との間の境界線」、つまり「他人に迷惑をかけているか否か」に存している。しかし、ボザンケは、「境界画定」の原理に基づくミルのこうした国家干渉の議論は「国家干渉の全体の問題に混乱を招く」²⁰のものであると断じ、その混乱がミルの国家教育についての議論において看取されると論ずる。

ミルは政府や大衆による個性の抑圧を警戒した『自由論』の中で、国家による全面的な統制教育には賛同しないものの、「国家が、その市民として生まれたあらゆる人間の教育を、ある一定の標準まで要求し強制すべきであるということは、ほとんど自明の公理ではなからうか」²¹として、教育を義務付ける法律の成立、そしてその施行手段として国家試験の導入を唱えている。ミルは言う。

「この法律を励行する手段は、すべての子供たちにわたって行われる、幼少時にはじまる国家試験以外にはありえないであろう。(中略) 毎年一回試験は更新され、だんだん学科の範囲が広げられて、ある最小限度の一般的知識をすべての人々が獲得し、さらにはこれを記憶することが、事実上義務付けられるようにされるべきであろう。」²²

ミルの義務教育の主張は、後述のように、ボザンケが正当な国家活動として「義務教育」を挙げていることから²³、ボザンケの主張と一致する。しかし、ミルの唱える、人間を学力的に選別する国家試験の導入は、ボザンケにとっては「国家」の各人の内面的領域への過剰な干渉であった。ボザンケは、ミルの提示するこうした試験制度の導入を「道徳的義務を強制するもの」と位置づけ、その「試験による個人の審査」を正当な国家干渉の「体系から外れつつある」もの、つまり時代に逆行する各人の道徳的領域への侵害と捉えて批判する²⁴。

さらに、こうしたボザンケの視座は、イギリスにおける人口過剰への対策としてミルが提唱する、結婚への国家の介入の問題にも向けられる。ミルは「人口過剰であるか過剰になる恐れのある国」では「結婚する当事者たちが、一家を支える資力のあることを示すことができないかぎり、結婚を禁止するという大陸の多くの国々における法律は国家の正当な権力をこえるものではない」²⁵と論ずる。これに対し、ボザンケは、人口減少のきっかけは「国家」(法)による強制ではなく、むしろ「家族」にゆだねられるべきものと主張する。ボザンケは、人口調節に関して、「家族が、そしてそれのみが、その力で人口に関する正しい調節を為しうる (has the right adjustment of population in its power)」と論じ、「国家」が介入しなくとも「人口の増大」や「外見上の減少」といった事態は、「家族」自体による人口調節によって回避し得ると断定する²⁶。それゆえ、ボザンケはミルの政策提唱を次のように批判する。

「貧困によって子どもたち自身に対し起こりうる害悪と、そして人口過剰によって他者

に対し起こりうる害悪の両方の理由で、家族を扶養する手段を示すことができない人々に対し結婚を禁ずるのは正しいとする〔ミルの〕示唆は、さらに驚くべきことである。これは権威的干渉が不可避免的にその干渉の目的を無効にするに違いないケースである（ただし、非常に明確な物理的あるいは精神的欠陥を根拠にしたものを除く）。不確定な未来の責任に直面し、かつそれに対処する潜在的な力を評価することができる他者の予見というものとは存在しない。こうした責任を考慮した慎重さの産物が、人口減少の傾向に見出されるのである。（中略）責任が仮定されるところにできるかぎり十分にその責任を残しておくのが、法がなしうる最善のことであり、そして強制が達しうるものよりも深くエネルギーの源泉に訴えることができるのである。」²⁷

かくして、ボザンケは、ミルの人口政策と、前出の教育政策（国家試験の導入）の議論を、過剰かつ不当な国家干渉を唱えるものと断じて、その主張を批判するのである。ボザンケは、イギリス政治思想批判において、ミルの論理では、ミルが擁護しようとしていたはずの個性がミル自身の論理によって「滅却」させられていると論じていたが、以上の批判はそれを裏付けるものである。つまり、ボザンケによれば、ミルが国家活動を各人の意志の発展や内的作用、つまり「障害物を妨害すること」の原理ではなく「境界画定」の原理を基準としたために、ミルにあっては道徳的な意志作用という観点そのものが欠落し、その結果各人の内的「批判」作用を無視した国家活動が堂々と提唱されているのである。ボザンケが、ミルの議論に、各人の個性の「擁護」を目論んだにもかかわらず結局その「滅却」を招いている、という「絶望的な混乱」²⁸を看破するのは、こうした論理によるものである。

ところで、ボザンケによる「社会政策」を巡るこうした批判の対象は、「国家」主導の政策のみに絞られない。つまり、民間の企業や慈善団体の唱える社会政策的な政策に関しても、それが各人の自由意志の領域に踏み込み、各人の「批判」作用を解消させるようなものであれば、それらはすべてボザンケによって否定される。そしてその点は、当時、大規模な民間の慈善団体であった「救世軍」(the Salvation Army) に対するボザンケの批判によって明らかになっている。

2. 「社会政策」(2) - 「救世軍」ブース批判 -

「救世軍」はウィリアム・ブース将軍 (William Booth/General Booth: 1829-1912) によって創設され、キリスト教に基づく伝統的な慈善観をもって、当時の貧民全般に対して援助や慈善を無差別的に施していた。他方、ボザンケは、前述のように、「慈善」は「性格」がなお損なわれていない「困窮者」のみにその対象を絞ると論じ、いわば差別的な「慈善」を唱導していた。この両者の思想的な対立は、やがて現実の論争へと発展し、彼らは慈善のあり方や救貧政策をめぐる議論を戦わせることになった。

「救世軍」は、前述のようなボザンケの唱える援助方法、すなわち「貧民」を、精神的に墮落した「窮乏者」「ポーパー」と「困窮者」に区別し、後者のみに「慈善」を施すとい

う方法を中身の伴わない形式主義として批判し、「主」の名の下で、「避難所」(shelters)や「給食施設」(soup-kitchens)等の施設を設けながら、万人に対して無差別的な慈善運動を展開していた²⁹。こうした「救世軍」、すなわちブース将軍の主張は、当時のヴィクトリア時代の貧困を剔出したと言われる³⁰、1890年刊の『最暗黒のイギリスとそこから抜け出す道』(*In Darkest England and the Way Out*)に結実した。そこにおいて、「救世軍」ブース将軍は、「救貧法」を前提にしてそれを擁護するボザンケの主張を一面的なものと決めつけ、「わたしは実践家であるから、今日の現実を取り扱う」³¹として「救世軍」の無差別的な慈善を正当化した。さらに、ブース将軍は、貧民や失業者のために「都市コロニー」(安宿泊所、授産場等の設置)、「農業コロニー」(自国農業への帰農)、そして「海外コロニー」(南アフリカ、カナダ等への移民)の三つの政策を掲げて、大規模な計画を提示した³²。

これに対し、ボザンケは、前出のブース将軍の著作『最暗黒のイギリスとそこから抜け出す道』を意識してその名をつけた『誤った路上にある最暗黒のイギリス』(*'In Darkest England' on the Track*)³³の中でブース将軍の主張を批判する。ボザンケは、ブース将軍が貧民数を「膨大」と仮定すること自体が誤っているとし³⁴、「救貧法」の「厳格な」方法によってポーパリズムは実数においても、また1857年から1887年までの30年間の人口増加の割合においても減少していると主張する。さらに、ボザンケは、ブース将軍が「貧民」を一階級のごとく、「社会」の動きから外れた固定的かつ「永遠的なもの」と仮定することも誤謬であるとして³⁵、前述の「階級」論で示されたように「貧民」を「社会と密接な関係」をもつものと理解する。ボザンケは「貧民」を以下のように比喩的に述べている。

「我々は、ヘドロ(sludge)やよどんだ水を扱ってはいない。もし比較対照(comparison)が見出されなければならないのであれば、我々は上昇と下降の流れで一杯な海で水泳をしている人々を扱っているのである。」(強調-ボザンケ)³⁶

そしてボザンケは、ブース将軍が唱えるような貧民への無差別的慈善は、貧民を自分で自分の生活を切り開き、自分の将来に対して準備を行うようには促さず、反対に慈善に頼る無責任な貧民ばかりを増大させると批判する。たとえば、「救世軍」が設置する「避難所」という収容施設を、ボザンケは次のように位置づけている。

「食糧や貧民の避難所に関する直接的な物質的供給は、コミュニティにとって災い(curse)であると理解される。(中略)物質的に必要なもの(physical needs)は、無視されるべきではないが、しかしそうした必要は唯一精神の反応を抽出する方法によって満たされるのである。」(強調-ボザンケ)³⁷

さらに、ボザンケは、ブース将軍による「救世軍」の説明、すなわち「我々が欲しているものは、もし放っておかれたら、海洋の真ん中で浸水している船の船員と同じく、悲惨なほどに非業の死を遂げるであろうような人々を、深海から救い出す社会の救命艇の制度であり、社会的救命艇の一群である」³⁸という説明をもじって次のように述べている。

「諸君の救命艇の一群は、全く偽りの救助船である。それは、誤った光で船を岩礁に乗り上げるように船に罫を仕掛けるのである！」³⁹

さらに、ボザンケは、前述のようなブース将軍の大規模な計画も問題の核心に迫るものではないとし、「農場コロニー」といった「非常に注意深い差別的な小さな計画」は「健全でオープンな空気のワークハウス」として成功する可能性があるとしつつも、ブース将軍の唱える計画の大半は不成功に終わるであろうと予見するのである⁴⁰。

このようにして、ボザンケは、国家主導の人口政策や教育政策のみならず、民間主導、慈善団体主導のコロニー設置などの政策を批判するのである。無論、ボザンケがこうした態度をとるのは、そうした政策が「大規模」であるという理由からではなく、人間の意志作用に鑑みないものであるためである。ボザンケは物質的な必要を満たす国家干渉、あるいは民間の援助に関して、次のように説明している。

「物質的に必要なものに関心を払わなければならないのは真実である。しかし人間における性格の発展および自己の責任に関する意味を離れて、そうした必要に実際に関心を払うのは間違いである。」⁴¹

かくして、ボザンケは、「社会政策」の正否は、それを実施するのが「国家」であろうと民間であろうと、各人の意志作用を重視するという観点から、そして意志や「精神」的なものは「物質」的なものよりもの優位にあるという観点から判断されねばならない、と論じ、人間の意志の領域を考慮しない保障には反対の立場をとるのである。

ところで、「救世軍」は、元来、万人に無制限な援助を与えよとするキリスト教的な伝統的慈善思想に立脚した団体であることから、ボザンケによるこうした「救世軍」批判は、従来のキリスト教における慈善思想に対する彼の批判でもある。そして実際、ボザンケは、そのような慈善を示唆する聖書の一節を独自に解釈し直し、前述のような自己流の「慈善」概念をその文脈で正当化している。ボザンケによれば、キリスト教の精髓は「聖書」の「字義」ではなくその「精神」で理解されるべきである。ボザンケはいう。

「聖書の原典研究 (criticism) を強調する必要は無い。というのも、聖書において我々が持つ諸観念とは、よその風土 (other soils and climates) から収集されたものであり、そしてその諸観念は字義においてではなく精神において唯一正確に適用し得るものであることを否定するものはいないからである。」⁴²

そしてここから、キリスト教に基づく従来の貧民への援助方法も再考される。ボザンケによれば、ただ単に貧民への施与を強調したり、闇雲に人間の哀れみや同情、自己犠牲を唱えることは、むしろ本来のキリスト教の精神に反するものであり、結局は、前述のように「貧民」という「階級」の承認につながるものである。ボザンケはいう。

「恐らくは大部分ユダヤ教の経典から、また同様に新約聖書から受け継がれた哀れみや無私という観念は、近代世界においては機械のごとく決まりきったもの (mechanical) となり、誤った階級の概念と結びつく傾向にある。」⁴³

しかし、ボザンケによれば、こうした単なる施与としての「慈善」の観念、さらにその結果としての従属階級としての「貧民」という観念は、真のキリスト教の精神に基づくものではない。ボザンケはいう。

「キリスト教の慈善の真実かつ最も高度な観念は、社会のある部分に付随しているものとしての従属的な地位に関するこうした概念からは程遠いものである。」⁴⁴

それでは、ボザンケの考えるキリスト教における真の慈善とはどのようなものであろうか。ボザンケはこの点を、総括的に以下のように論究している。

「もし貧民が制度でなければならないのであれば、制度としての“貧民”に関する完全な近代的概念は、少なくとも、黙認という陥穽 (the pitfall of acquiescence) を避けるべきである。仮に、キリスト教の精神の熱情と愛情 (fire and love) が〔施与や献金といった〕一つの利益 (gain) という形になることを認めたとしても、なおその対象者は、精神ないしコモンウェルスの真の意味内容との関係の中に組み入れねばならない。最も弱った状態にある人間への献身 (devotion) は、最も強き状態での人間の可能性への献身と切り離されてはならない。そしてその可能性とは、役割無き貧民の最も不幸な状態においても存在するものであるか、あるいは少なくともそこに象徴されるものである。」⁴⁵

つまり、ボザンケは、「貧民への自己犠牲は墮落した地位 (a vicious status) の維持への貢物 (tribute)」を意味するのではなく、「弱き人間性を強きものにする」ことを柱とするものでなければならないと論じて⁴⁶、改めて人間 (貧民) と「社会」、「コミュニティ」、そして「国家」との関係、およびそこから生ずる各自の「役割」、さらにはその前提としての各人の依存なき状態、すなわち人間の「独立」、「自立」を強調するのである。ウェッブ (Beatrice Webb: 1858-1943) の指摘のように、こうした議論を通じて、ボザンケはいわば「自己犠牲という奉仕 (service) の感情を、神から人間に (from God to man) 移しかえ」⁴⁷、またボーピット (Graham Bowpitt) の指摘のように、キリスト教の教会の精神的な目的とは離れてこの世の道徳的・社会的改善に捧げられた「慈善」を唱導することで、「慈善」に新種の正当性を与えたのである⁴⁸。

3. 「社会政策」(3) - 正当な国家干渉 -

このようにして、ボザンケは「国家」ではなく民間主導の政策だとしても、それが各人の意志や「性格」を考慮に入れないものであれば不当な干渉行為であると訴え、現実には提案された様々な「社会政策」案を批判するのである。しかし、ボザンケがこうした批判を展開したとしても、彼があらゆる「社会政策」やあらゆる国家干渉を否定するのでないことは、前述のところから明らかである。すなわち、「性格」の「独立」や「自助」を促進するもの、あるいは人間の「自己改革」 (self-improvement) を促進する国家干渉や「社会政策」は、ボザンケにとって正当なものである。それでは、「国家」がそれを促すところの「自助」ないし「自己改革」とは、具体的にどのようなことを内容としているのであろうか。この点をボザンケは以下のように論じている。

「文明的な国民の意識は、こうした〔真の意味での〕自由の重要性に深く敏感である、とよく指摘されるが (グリーン)、その結果、自己改革というあらゆる作業は、自由の達成のための努力として、酒類の束縛、無知の束縛、ポーパリズムの束縛の打破によって最

も効率的に一般の聴衆に示されうる。」(強調引用者)⁴⁹

つまり、ボザンケによれば、アルコール中毒、無知・文盲、ポーパリズムなどの克服こそ「自己改革」の代表格であり、真の「自由」を実現するための「努力」である。したがって、こうした各人の「自己改革」を促す「社会政策」、つまり各人の「自助」努力を前提にしたアルコール中毒からの脱却、「無知」や文盲からの脱却、そして「ポーパリズム」からの脱却を、いわば「国家」が間接的に後押しするような「社会政策」は、まさしく「障害物を妨害すること」の原理に即した正当な国家干渉である。

実際、ボザンケは、正当な「社会政策」として「酒類商業の公営化 (municipalising)」による、人間の「飲酒癖を妨害すること」をまず挙げている⁵⁰。当時、イギリスでは、労働者階級の道徳的墮落を救うという観点から禁酒運動が盛んであり、ボザンケの師匠であるグリーンも積極的に禁酒を世間に訴えていたが⁵¹、ボザンケも同様の根拠から、酒類営業の公営化を正当な「社会政策」と理解している。

また、ボザンケは、正当な国家干渉＝「社会政策」として、子供たちへの「義務教育」の実施を、「文盲を妨害する」ものとして挙げている⁵²。ボザンケはいう。

「国家は、基本的な初等教育の諸条件を供給するように取り計らい、そしてそうすることで、こうした諸条件が現実のもの (reality) になるように疑いもなく強制を行使する。(中略) 公教育の実際の仕事は、ある条件が維持されるように国家が努めるという方向にますます進みつつある。そして両親の関心と公共精神が両親を導いて、その条件を利用するに至るのである。」⁵³

さらに、ボザンケは、酒類販売、義務教育以外にも正当な国家干渉の例をいくつか具体的に挙げている。たとえば、ボザンケは、「賃金」といった「生活に密着した物質的諸条件」は、「障害物を妨害することと、精神や意志の実際の鼓舞との間の非常に興味深い中間領域」を占めるものであり、その領域への安易な国家干渉は否認されるものの、いわば「ケース・バイ・ケース」によってその干渉も正当化されると論ずる。また、ボザンケは、各人への「住宅供給」も正当な国家干渉＝「社会政策」の一例として挙げ、供給される側の「自助努力」がなければそれは「意志作用の根拠への侵略」であるとしながらも、「健全な住居は最善の生活における要素」であるとして、そうした国家干渉を承認している⁵⁴。

加えて、ボザンケは、こうした正当な国家干渉＝「社会政策」として、「ポーパリズムの束縛」からの脱却を促す国家活動を挙げる。この点は、「ポーパリズム」の束縛を受けている「ポーパー」「窮乏者」を扱うのは「国家」＝「救貧法」である、としていた前述の制度論においてすでに示されている。

しかしながら、この「ポーパリズムの束縛」からの脱却を「国家」が「障害物を妨害すること」の原理に則って促す、というボザンケの論理には、一見矛盾が生じているようにも思われる。というのは、彼の論理に従えば、「ポーパー」に「障害物を妨害すること」の原理に即して「国家」が干渉しても、彼らはすでに「性格」の「独立」を失い、「市民精神」や自由意志を放棄した貧民であることから、「国家」による間接的措置がそこで奏効するは

ずはないからである。つまり、「ポーパリズム」からの脱却を促すという国家活動は、その対象が、「自己改革」的なないし「自助」的な意識および覚悟を欠く「ポーパー」であるがゆえに、「国家」が「障害物を妨害すること」に留まる限り何らの効果を生み出さないことが予定されているのである。

しかし、ボザンケはこのことを深く自覚していた。なぜならば、ボザンケは「ポーパー」の処遇は「国家」が行うとしたが、この場合、「国家」は、国家干渉の原則のいわば「例外」的措置として彼らの内面にまで干渉を行う、ということを彼自身が承認しているからである。では、「国家」が「ポーパー」や「窮乏者」を、その内面的な領域にまで及んで救済する方法とはどのようなものであろうか。

この点に関して、ボザンケは、「国家」＝「救貧法」による「ポーパー」「窮乏者」への援助を、かつての「救貧院」である「ワークハウス」(workhouse)における救済、すなわち「院内救済」(indoor relief)に限定する。ボザンケはいう。

「儉約が実行されず、性格の独立が損なわれるとき、その終着点はワークハウス(workhouse)である。」⁵⁵

ここで、ボザンケが「院内救済」に「ポーパー」への国家干渉を限定するのには、二つの理由がある。第一に、当時、政府により貧民全般に対し「ワークハウス」外で広く与えられていた「院外救済」(outdoor relief)では、前述のような「ポーパー」の内面的な領域への「国家」による干渉が行われえない、という点である。ボザンケによれば、「ワークハウス」内部で「院内救済」として「ポーパー」に施される国家干渉は、「慈善」が行うような単なる「健康、ないし読み・書き・算術の欠如の治療」ではない。むしろ、「ワークハウス」ではこうした「慈善」のような条件的なサービスは放棄され、「ポーパー」の内面から叩きなおす「全人格の治療」が例外的に施されることになる⁵⁶。つまり、「院内救済」によって、「ポーパー」への「国家」による全面的矯正が可能となるのである。そして第二に、「院外救済」は、貧民にとっては、前出の「ポーパリズム」を生む要因である「施与」と同じもの、すなわち両者とも一様に「富」として映るものであり、それが「ポーパリズムの束縛」からの脱却に対して有効な救済策にはならないことが挙げられる⁵⁷。ボザンケは、「院外救済」に関して、その貧民に及ぼす悪影響を以下のように解説する。

「金は巡り合わせから手に入る、医療救済は慈善もしくは救貧法から得られる、公的基金からの院外救済は応募の際に幸運であるなら手に入る、それゆえ人々は“運を天にまかせる”のに慣れるようになってしまい、自分もっているものを上手にやり繰りしないことに、またよくある病気といった場合のために準備しないのに慣れるようになってしまうのである。ましてや、仕事の不景気な時期や老齢のための準備などはあり得ない。彼らは恩恵を得るために公的ないし準公的な機関 (office) に行く習慣を形成してしまうのである。」⁵⁸

つまり、ボザンケは、国家援助としての「院外救済」は、「ポーパー」の改善に役立っておらず、もし従前通りそうした救済が貧民全般に与え続けられるのであれば、「ポーパー」

はますます墮落すると主張するのである。ボザンケはいう。

「わたしは、院外救済を、貧困として知られる社会悪の徴候に関するあらゆる不適切な処遇と同列に見る。」⁵⁹

むしろ、「院外救済」の廃止によって「ポーパリズム」が減少したことを、ボザンケは以下のように実例を挙げて説明している。

「15000 人のある地方の地区で院外救済を廃止することで、ポーパリズムは人口の約 12 分の 1 から約 100 分の 1 へと減少したのである。」⁶⁰

かくして、ボザンケは、「ポーパー」への「国家」による「院外救済」は廃止されるべきであり、代わりに救済が「施与」とはならない「院内救済」、すなわち「ワークハウス」での救済のみが「国家」による救済として認められるべきだと論ずる。ボザンケは、「ポーパー」を対象とする「国家」による援助＝「院内救済」を、「慈善」による援助と区別しながら、改めて次のように説明している。

「私は、あらゆる窮乏のありふれた事例が、優しさと人間的なケアをもって、しかし厳密な調整のもとで、それでいて安楽さの規模は低い状態で、ワークハウスで扱われることを望む。私は、最終的には先見や不屈の努力を挫いてしまう例外的な不運 (exceptional misfortune) のすべての事例は、救貧法とは別個に親戚や隣人の忠順なケアを通じて、私的な技術や判断によって扱われることを望む。わたしは院外救済として知られる、貧民ではあるが窮乏ではない人々に不足する物資を国家が補うこと (State supplementation) は完全にやめることを望む。」⁶¹

このように、ボザンケにあっては、「性格」の損なわれた「ポーパー」は「慈善」の対象から外され、代わりに、かつては「マッドハウス」とも称された「救貧院」の生まれ変わりとしての「ワークハウス」へと送致され、彼らに全人格的な治療＝「院内救済」が施されることになる。こうしたボザンケの議論は、前述のように、「貧民」そのものが彼の議論では例外的な存在であったとはいえ、前出の彼の「刑罰」論、すなわちどんな犯罪者も「市民精神」や「性格」の持ち主であり、刑罰も「障害物を妨害すること」の原則の内にある、という議論とはあまりに対照的な議論であり、かつ積極的な国家干渉論である。

ところで、こうした「ポーパー」を巡るボザンケの社会政策論では「救貧法」と「慈善」の連携が前提にされているが、この点は、ケンブリッジの著名な経済学者である A・マーシャル (Alfred Marshall: 1842-1924)⁶²とボザンケとの間で繰り広げられた「救貧法」と年金を巡る論争によってさらに明らかになっている。マーシャルは、「救貧法」を存続させつつ年金を導入することは「非常に高価な衣服がつぎはぎ細工で作られること」⁶³と理解し、非効率という側面から現行の救貧法体制の限界を指摘する。また、マーシャルは、国民所得が 1834 年当時の 4 倍となった現在においては財政的に貧民をより寛容に扱うことが可能になったとして⁶⁴、「友愛協会」(Friendly Society) などに持続的に自分の賃金を拠出し、未来にたいして準備を怠らない人々 (貧民) には「院外救済」が認められるべきだと主張する⁶⁵。さらに、マーシャルは、救貧法行政に労働者階級の代表者が含まれるべきことを示

唆しつつ、「救貧法」の非効率を克服するために「救貧委員」(Poor Law Guardians)と民間の慈善団体との連携が必要であるとして、民間の主要な慈善団体には「半-公的地位」が与えられるべきだとも主張する⁶⁶。

これにたいし、ボザンケは⁶⁷、マーシャルの議論のほとんどが「詳細な事柄に関して誤解」していると決めつけたうえで、民間の主要な慈善団体が公的性質を帯びるべきとするマーシャルの見解を、「厳格な」救貧法政策によっては提議されるものではないとして否定する。そしてボザンケは、救貧法下の「救貧委員」はあくまで「救貧委員」として一般的規則に従って公的基金の下で行動すべきであり、各人の「性格」や能力の回復といった問題は「救貧委員」ではなく「慈善」が取り組むべき問題であると主張する。むしろ、ボザンケによれば、「救貧委員」は民間の慈善団体が為すべき仕事をするのではなく、「1834年の救貧法報告の著者たちによって指摘された事柄」を考慮して、あくまで「救貧法」の救済を続行すべきである⁶⁸。つまり、ボザンケは「国家」サイドである「救貧法」と、民間サイドである慈善団体との分業体制を改めて主張することで、主な民間の慈善団体の半-公的団体化というマーシャルの提案に反対するのである。さらに、ボザンケは、「院外救済」は受給者の人間性に悪影響を及ぼし、「儉約」の精神をくじかせるだけでなく、賃金の低下を惹起するとして、マーシャルの唱える「院外救済」の活用をも否定する。

ボザンケのこうした批判に対し、この後、マーシャルはさらに以下のように反論している。マーシャルは、自分が「詳細な事柄に関して誤解」していると主張するボザンケの見解を誤りであるとし、自分は13年以上も「救貧法」を綿密に研究しており、またそこでの研究成果も現実の慈善活動での知見に照らし合わせて得られたものだとして反論する。さらに、マーシャルは、自分はボザンケと同じく安易に「院外救済」を承認する「極端に手緩い」政策には反対であるが、しかし自分の計画は「儉約」を挫かせるような「手緩い」政策ではなく、逆に「儉約」を促進するものである、とも論じている⁶⁹。

いずれにせよ、マーシャルは民間の慈善団体の半-公的団体化、及び「院外救済」の承認を提唱する一方で、ボザンケは厳格な救貧法政策を唱え、「国家」=「救貧法」と民間(慈善)との役割分担を提唱していたことが以上から改めて確認される。

4. ボザンケの社会政策論

以上、ボザンケの社会政策論の検討を通じて、彼のいう「国家干渉」の具体的な中身を検証してきた。そこでは、ボザンケにあっては、「国家」による「社会政策」「社会改良」はあくまで人間の意志や「性格」を通じて為されるべきであること、そしてそれは具体的には人間の「自助」や「自己改革」を促進するようなものに限られること、さらにこうした点は「国家」に限らず民間の企業や慈善団体の行う大規模な政策においても同様であるべきこと、ただし意志や「性格」を放棄した「ポーパー」に関しては、その人間を全人格的に矯正するために例外的にその内面にまで及ぶ大胆な国家干渉が認められることなどが明らかになった。つまり、ボザンケは、「天はみずから助くものを助く」の諺のごとく、各

人の「性格」を重視し、その精神的向上、内的意志作用＝「批判」作用、そして「自助」作用に期待を寄せながら、「社会政策」としての国家活動を前出の「障害物を妨害すること」に則る形で改めて説明して、国家活動の最低限度の領域と国家の積極的な役割を同時に描いているのである⁷⁰。それゆえ、ボザンケの社会政策論の本質は、ハリス（Jose Harris）およびブーシェの指摘のように、「国家」による干渉を承認しつつも「国家」に「環境」を形造る強大な役割を付さず、国家干渉を各人の道徳的発展の促進という目的のための手段と位置づけ、それ自体目的ではない「社会政策」を唱える点にあるといえよう⁷¹。ボザンケの唱える「社会政策」＝国家活動が、あくまで人間の「性格」の伸張や発展のための「できるようにする国家」（the enabling State）を理論化したものといわれる理由はここにある⁷²。

しかしながら、こうしたボザンケの「社会政策」論は、彼の「貧民」および「慈善」論とともに様々な批判を受け、そしてその批判を通じてボザンケに対するもうひとつの評価、すなわち「自由主義者」「レッセ・フェール」主義者としてのボザンケ像が構築されることになった。特に、ボザンケの唱えた、「貧民」を「慈善」の「援助」に「値するもの」と「値しないもの」とに区別するという方法には、彼がその理論的リーダーを務めていた「慈善組織協会」に対する批判という形で、多くの批判が寄せられた。例えば、ギルバート（Bentley B. Gilbert）は、ボザンケの「貧民」を「救済に値する」「選ばれし貧民」と「救済に値しない」「地獄の亡者としての貧民」とに区別する方法を、「最も正統派のカルヴァン主義聖職者と同じくらい厳格なもの」⁷³と指摘して、その手法を社会福祉の側面から批判した。さらに、ローズ（Michael E. Rose）は、ボザンケのこのような議論の特徴を「厳格な個人主義と自助の主張、僅少な役割を除く国家援助の拒絶、そして救済に値するものと値しないもの（deserving and undeserving）との区別」の三点に求め、ヴィクトリア時代の貧困思想を特徴づける「自助原則」⁷⁴とボザンケの思想を結びつけながら、その議論を「ヴィクトリア時代の態度においてあらゆる最悪なるものを縮図的に示す」ものと批判した⁷⁵。同様に、モワット（Charles Loch Mowat）も、ボザンケの唱える「慈善」の方法を、「その形態、働き、観念において、ヴィクトリア時代の生活及び社会の特徴的産物」と位置づけ⁷⁶、オウエン（David Owen）もまた、ボザンケの「慈善」に関する見解を「ヴィクトリア時代の社会改革を先導した因習的な諸仮定を制度上の形式において具体化した」ものと位置づけて批判した⁷⁷。さらに、リムリンガー（Gaston V. Rimlinger）は、ボザンケのこうした主張を、「貧困の問題を政府の干渉なしに解決しようとする、自由市場社会の主要な努力を顕現させるもの」として批判し⁷⁸、同じくウッドワード（Calvin Woodard）も、ボザンケを「レッセ・フェール」主義者と断じた⁷⁹。

確かに、「自助」を強調するボザンケの議論は、以上のような「社会政策」に関する彼の見解に加えて、すでに前述の国家論や「性格」の議論においても示されていた。その意味で、「自助」を基調とするボザンケの政治思想がヴィクトリア時代の支配的観念である「自助原則」との何らかの関連性を有していることは指摘し得る。しかしながら、ボザンケは、前述のような彼のイギリス政治思想批判や、国家論などから明らかに理解されるように、

決して「原子論的個人主義」も、「レッセ・フェール」主義も、「反国家干渉主義」も唱えるものではなかった。事実、「社会政策」論では、酒類販売、義務教育、「ポーパー」の処遇に加え、「住宅」や「賃金」を巡る国家干渉も否定してはおらず、とりわけ「ポーパー」に関しては例外的にその人間の内面的な領域への干渉をもボザンケは認めていた。確かに、エメット (Dorothy Emmet) の指摘のように、ボザンケの「国家」活動に関する「障害物を妨害すること」の原理は、前述のように積極的な国家活動を演繹し得た原理とはいえ、やや「ネガティブ」で「慎重」な印象を与えるものともいえ⁸⁰、またボザンケのミルの政策提言に対する批判も、元来ミルの『自由論』がなお国家干渉を最小限にとどめ⁸¹、パターナリズムの拒絶をもくろむものであることから⁸²、ミルの主張との比較においてはボザンケがミル以上に「自由主義」的、「レッセ・フェール」的であるともいえる⁸³。しかし、ボザンケを「レッセ・フェール」主義の思想と位置づけるのが誤りであることは、これまでの議論ですでに明らかなのに加え、以下のような彼の「レッセ・フェール」批判、および「社会主義批判」からさらにはっきりと理解できる。

「諸君は、自力で救済策を講じるように人々を自由にさせておく〔国家の〕不干渉 (abstention) の政策を除いてはどんな実行可能な〔生活の諸条件の〕修正はない、と推論しがちである。しかしこれは、レッセ・フェールの誤謬である。他方、諸君は、(中略) こうした〔国家の〕活動によって、人間の魂の善を単に刺激するだけではなく、実際にその善を〔直接に〕惹起することができると仮定しがちである。しかしこれは、陳腐な社会主義の誤謬である。」⁸⁴

つまり、カーター (Matt Carter) の指摘のように、ボザンケは、「国家」が何らの活動をするべきではないことを主張しているのではなく、また「国家」はあらゆることを引き受けるということを主張しているのでもなく、「国家」はその両者の中間の道を行くべきだと主張しているのである⁸⁵。その意味で、グリーン (E. H. H. Green) の指摘のように、ボザンケは前述のように「国家主義」や「全体主義」、あるいは「非自由主義」や「パターナリストティック」な思想を唱えるものではないが、同時に「反国家主義」、「レッセ・フェール」主義、すなわち国家干渉を一切認めないとする思想を展開しているわけでもない⁸⁶。むしろ、そこで示されている思想は、「レッセ・フェール」でも「パターナリズム」でもない、「共通善」や「最善の生活」を柱としつつ「国家」と「個人」の有機的連関を示唆する政治思想であると言えよう。したがって、ボザンケの議論の中で「原子論的個人主義」や「レッセ・フェール」主義とも取れる主張は、オッターの指摘のように、「個人」を社会的関係において理解し、そして「社会」から隔離された「個人」は虚妄であるとする哲学的理想主義の文脈の中で読まなければならない⁸⁷。

ところで、「社会政策」とは資本主義社会で生じた諸問題を解決するために為されるものであるが、その問題を単なる「問題」としてではなく資本主義社会の「矛盾」と捉え、それを私有財産制の廃止、生産手段および財産の共有・共同管理、計画的な生産と平等な分

配によって解消し、平等で調和のとれた社会を実現しようとする「社会主義」思想に対して、ボザンケはどのような見解をもっていたのであろうか。この点は、ボザンケと、当時社会主義団体として成長しつつあった「フェビアン協会」、とりわけそのリーダー格のウェッブ夫妻との論争を通じて明らかになっており、そこではまた、彼の「一般意志」論、国家論、制度論、そして社会政策論などの要点が改めて示されている。そこで、次章では、ボザンケと「フェビアン協会」との対立を、歴史的な流れを含ませながら検討することにしてしよう。

第7章 註

¹ PTS, V, p.299.

² EASP, XIV, p.73.

³ EASP, XIV, p.75.

⁴ EASP, XIV, p.74.

⁵ EASP, XIV, p.217.

⁶ EASP, XIV, p.227.

⁷ EASP, XIV, p.220.

⁸ EASP, XIV, pp.220-221.

⁹ EASP, XIV, p.220.

¹⁰ PTS, V, p.179.

¹¹ PTS, V, p.184.

¹² Bernard Bosanquet, *The Social Criterion: or How to Judge of Proposed Social Reforms* (Edinburgh and London: Blackwood, 1907), EASP, XIV, pp.213-228.

¹³ EASP, XIV, pp.221-224, cf., McBriar, *op.cit.*, 1987, pp.84-86.

¹⁴ EASP, XIV, pp.224-225.

¹⁵ EASP, XIV, p.227.

¹⁶ EASP, XIV, p.88.

¹⁷ ボザンケは「残余者」を「窮乏」「ポーパー」と同様、「習慣的貧窮者」(indigent)として「性格」の欠陥者と見なす。唯一「一時的困窮」のみが、ボザンケの場合、「性格」の損なわれていないものを意味し、「慈善」の対象となる。

¹⁸ EASP, XIV, pp.81-82.

¹⁹ EASP, XIV, p.85.

²⁰ PTS, V, pp.61-62.

²¹ Mill, *op.cit.*, 1977, p.301, 訳 336 頁。

²² Mill, *op.cit.*, 1977, p.303, 訳 338 頁。

²³ PTS, V, p.178.

²⁴ PTS, V, p.63.

²⁵ Mill, *op.cit.*, 1977, p.304, 訳 340 頁。

²⁶ PTS, V, pp.280-281.

²⁷ PTS, V, pp.63-64.

²⁸ 無論、こうしたボザンケの批判が妥当であるかどうかは別の問題である。事実、ライアンは、ミルにとっての主要な問題は、国家に対する個人の問題ではなく、あらゆる形態の社会的圧力に対する個人の問題であるとしている。Alan Ryan, *The Philosophy of John Stuart Mill, Second Edition* (London: Macmillan, 1987), p.235. また、ニコルソンも、ミルの立場の重要性は政府の干渉が一般の幸福のための便法となることにありとしている。Nicholson, *op.cit.*, 1990, pp.156-157.

- ²⁹ McBriar, *op.cit.*, 1987, p.60.
- ³⁰ Bob Holman, "Prevention: the Victorian Legacy", *The British Journal of Social Work*, Vol.16, No.1, 1986, pp.2-3.なお、ホウルマンは、ヴィクトリア時代の貧困を剔出した書物として、もう一人のブース、すなわちチャールズ・ブース (Charles Booth) の『ロンドン民衆の生活と労働』 (*Life and Labour of the People in London*) を挙げている。
- ³¹ William Booth, *In Darkest England and the Way Out* (London: International Headquarters of the Salvation Army, 1890), p.79.
- ³² *Ibid.*, Pt. II, ch.2,3,4. 山室武甫『人類愛の使徒ウィリアム・ブース』(玉川大学出版部, 1970年) 81-96 頁。
- ³³ Bernard Bosanquet, 'In Darkest England' on the Wrong Track (London: Swan Sonnenschein, 1891), *EASP*, XIV, pp.23-48.
- ³⁴ *EASP*, XIV, p.27.
- ³⁵ *EASP*, XIV, p.27.
- ³⁶ *EASP*, XIV, p.27.
- ³⁷ *EASP*, XIV, pp.226-227.
- ³⁸ Booth, *op.cit.*, 1890, p.43.
- ³⁹ *EASP*, XIV, p.34.
- ⁴⁰ *EASP*, XIV, p.35.
- ⁴¹ *EASP*, XIV, p.226.
- ⁴² *PTS*, V, p.295.
- ⁴³ *PTS*, V, p.295.なお、ボザンケは、このような決まりきった慈善の一例として、西欧で6世紀頃から行われはじめ、19世紀にはほぼ全廃された一種の宗教税である「十分の一税」(tithe) を挙げている。
- ⁴⁴ *PTS*, V, p.296.
- ⁴⁵ *PTS*, V, pp.297-298.
- ⁴⁶ *PTS*, V, p.298.
- ⁴⁷ Beatrice Webb, *My Apprenticeship* (London: Longman, 1926), p.112.
- ⁴⁸ Graham Bowpitt, "Evangelical Christianity, Secular Humanism, and the Genesis of British Social Work", *The British Journal of Social Work*, Vol.28, 1998, p.683.
- ⁴⁹ *PTS*, V, pp.134-135.
- ⁵⁰ *PTS*, V, p.178.
- ⁵¹ 当時の労働者は、与えられた半日の暇を有効に使うことなく、飲酒に使い、道徳的に墮落するケースが多かった。行安茂、前掲論文、1982年、16頁。
- ⁵² *PTS*, V, p.178.
- ⁵³ *PTS*, V, p.63.
- ⁵⁴ *PTS*, V, p.185.
- ⁵⁵ *EASP*, XIV, p.64.
- ⁵⁶ *EASP*, XIV, p.238.
- ⁵⁷ ボザンケは、ポーパリズムを生み出す要因として「富」(wealth)と「不運」(misfortune)を挙げている。デタラメな「施与」やそれと「院外救済」との重複的慈善は、貧民にとっては「富」になりかねない。*EASP*, XIV, p.255.
- ⁵⁸ *EASP*, XIV, p.64.
- ⁵⁹ *CC*, XIII, p.346.
- ⁶⁰ *EASP*, XIV, p.70.
- ⁶¹ *CC*, XIII, p.342.なお一般的には援助し得ない「窮乏者」や「ポーパー」には、「残余者」(residuum)や(習慣的)「貧窮者」(indigent)も含まれる。
- ⁶² マーシャルは、若いころ多くの都市の貧困街を訪れ、貧民状況を観察した経験から、その貧困を排除するために経済学の研究に入ってしまった。関本安孝『新版経済学史』(梓出版社, 1978年) 397-398 頁。
- ⁶³ Alfred Marshall, "Poor-Law Reform", *Economic Journal*, Vol.2, 1892, p.372.

- ⁶⁴ *Ibid.*, p.376.
- ⁶⁵ *Ibid.*, p. 372.
- ⁶⁶ *Ibid.*, p. 378.なお、マーシャルがここで民間の慈善団体として挙げているのは、ボザンケが所属していた「慈善組織協会」である。
- ⁶⁷ Bernard Bosanquet, "The Limitations of the Poor Law", *Economic Journal*, Vol.2, 1892, pp.369-371.
- ⁶⁸ *Ibid.*, p.369.
- ⁶⁹ Marshall, *op.cit.*, 1892, p. 372.
- ⁷⁰ Pearson and Williams, *op.cit.*, 1984, p.154.
- ⁷¹ José Harris, "Political Thought and the Welfare State 1870-1940: An Intellectual Framework for British Social Policy", *Past & Present*, No.135, 1992, pp.132-133, David Boucher, "Evolution and Politics: The Naturalistic, Ethical and Spiritual Bases of Evolutionary Arguments", *Australian Journal of Political Science*, Vol.27, No.1, 1992, p.102.
- ⁷² Dorothy Emmet, "Viewpoint: Bosanquet's Social Theory of the State", *The Sociological Review*, Vol.37, No.1, 1989, p.117, Vincent, *op.cit.*, 1992, p.716.
- ⁷³ Bentley B. Gilbert, *The Evolution of National Insurance in Great Britain* (London: Michael Joseph, 1966), p.52.
- ⁷⁴ 毛利健三『イギリス福祉国家の研究－社会保障発達の諸画期－』（東京大学出版会, 1990年）149頁。
- ⁷⁵ Michael E. Rose, *The Relief of Poverty, 1834-1914, Second Edition* (Hampshire and London: Macmillan, 1986), p.26.
- ⁷⁶ Mowat, *op.cit.*, 1961, p.xi.
- ⁷⁷ David Owen, *English Philanthropy 1660-1960* (London: Oxford University Press, 1965), p.211.
- ⁷⁸ Gaston V. Rimlinger, *Welfare Policy and Industrialization in Europe, America, and Russia* (New York, London, Sydney and Toronto: John Wiley and Sons, Inc., 1971), p.58.
- ⁷⁹ Calvin Woodard, "Reality and Social Reform: the Transition from Laissez-faire to the Welfare State", *The Yale Law Journal*, Vol.72, No.2, 1962, p.327.
- ⁸⁰ Emmet, *op.cit.*, 1989, p.117. また、同様の指摘は、北岡勲他『政治学序説』（御茶の水書房、1987年）94-95頁でも見られる。
- ⁸¹ 柴田卓弘『イギリス自由主義の展開－古い自由主義の連続を中心に－』（早稲田大学出版部, 1991年）14頁。
- ⁸² R. F. Kahn, "J. S. Mill-Ethics and Politics", in C.L.Ten (ed.), *Routledge History of Philosophy Volume VII* (London and New York: Routledge, 1994), p.63.
- ⁸³ Emmet, *op.cit.*, 1989, p.110, 125.,
- ⁸⁴ *EASP*, p.217.
- ⁸⁵ Matt Carter, "Ball, Bosanquet and the Legacy of T.H.Green", *History of Political Thought*, Vol.20, No.4, 1999, p.685.
- ⁸⁶ Green, *op.cit.*, 2002, pp.42-43.
- ⁸⁷ Otter, *op.cit.*, 1996, p.188.

第8章 ボザンケと「フェビアン協会」

1. 社会主義批判

前述のように、19世紀後半、特に1880年代のイギリスでは「社会主義」の「復活」という現象が見られた。たとえば、ハインドマン（Henry Mayers Hyndman: 1842-1921）が創設した「社会民主連盟」（Social Democratic Federation-SDF）や、モリスによるその分派としての「社会主義同盟」（Social League）、さらにウェッブ夫妻など多くの著名な社会主義者を輩出した「フェビアン協会」などは皆この1880年に成立を見ている。また、「イギリス労働党」（British Labour Party）（1906年結成）の前身である「独立労働党」（Independent Labour Party）が結成されたのもこの頃（1893年）であり、いわばイギリスでは「あらゆる色合いの社会主義」が「ふんだんに」この時期に生み出されることになった¹。そしてこうした動きに歩調をあわせるかのように、1880年後半から90年代にかけて、イギリスではマルクス（Karl Marx: 1818-1883）の著作が広範に読まれ始めるのであった²。

ボザンケも、当時の「現代思想」である社会主義思想に目を向け、社会主義がミルやスペンサーなどの自由放任主義を批判しているなどの点に対してそれなりの評価を与えていた³。しかしながら、ボザンケの社会主義に対する基本的な立場は、前述のような彼の制度論における「私有財産」、および「階級」に関する見解から容易に予想されるように、いわば「反社会主義的」なもの、「資本主義的」のものであった⁴。それゆえ、ボザンケは、自らが社会主義を緻密に分析する以前から、「わたしは社会主義者ではない」と明言して⁵、社会主義に反対する立場を鮮明にしていた。そして彼のそうした立場は、その後、「個人主義」と「社会主義」とを「哲学的に考察する」という彼自身の作業によって、より詳細かつ明快に示されることになった⁶。

ボザンケは、一般にいわれる「個人主義」と「社会主義」という術語を「経済的」という枠組みの中で捉え直し、それぞれを「経済的個人主義」（Economic Individualism）と「経済的社会主義」（Economic Socialism）と命名する。そしてボザンケは、前者を「私有財産に基礎づけられた競争の体系」、後者を前者の諸機能の「集团的編成」（a collective organization）、つまり私有財産によらずに公的権力による社会編成と理解し、これを次のように論及する。

「経済的社会主義は、社会的な目的を、まさにそれ自身の力によってではなく、それを公的権力が自由に使用できる強制的動因もしくは制裁（compulsory motives or sanctions）の力によって成就させるための配置である。」⁷

そしてボザンケは、公的権力が社会の目的を社会成員に強制的に実現させる結果、各人における「批判」的意志作用、つまり「精神と知性の深化」が解消され、人間の内面的作用としての道徳性、彼の言葉では「個人の意志に宿る社会的気質」（the social constitution）もまた消失すると論ずる。それゆえ、ボザンケによれば、「経済的社会主義」下の社会とは、個々人の意志作用や道徳性に介された有機的関係を前提にしない。ボザンケはいふ。

「経済的社会主義は、社会有機体を前提にする必要がない。それは、外見上その有機体の生活の代理である。」⁸

他方、ボザンケによれば、「経済的個人主義は社会有機体を前提とする」⁹。つまり、「経済的社会主義」と対照的に、各人の道徳性・意志作用を重視し、人間社会の有機的関係を前提とするのが、「個人主義」＝「経済的個人主義」である。

さらに、ボザンケは、「全体としての生活の価値を扱う哲学的意味においては、あらゆるものが道徳的である」という立場から、「個人主義」と「社会主義」とを「道徳的」という枠組みの中で捉え直し、それぞれを「道徳的個人主義」(Moral Individualism)と「道徳的社会主義」(Moral Socialism)と命名する。そしてその両者に関して、ボザンケ以下のように説明する。

「道徳的個人主義は、生活の唯物論的もしくはエピクロスの見解 (the materialistic or Epicurean view) である (それは合理的に解釈されるなら、そう言われるべき事柄を多く持ち合わせている)。そして道徳的社会主義はこれに対立する見解であり、その見解とは、社会を個人の道徳的本質とするものである。」¹⁰

「わたしは、道徳的個人主義を、実際のあるいは理論上の利己主義 (egoism) の意味で、そして道徳的社会主義を (この後者は世間に受け入れられている表現ではないが) 人間の道徳的性質は彼の社会的性質に存するという、実際のあるいは理論上の承認 (recognition) の意味で話すつもりである。」¹¹

つまり、ボザンケは「道徳的個人主義」を「利己主義」、そして「道徳的社会主義」を「利他主義」、彼の言葉では「心の奥底で、あらゆる健全な人間が気にかける唯一のもの」と規定するのである。そしてボザンケは、単に「社会主義」か「個人主義」かという二者択一的な問いの設定、あるいは人間を「社会主義者」か「個人主義者」かのどちらかに振り分ける方法を誤謬とし¹²、「経済的社会主義が、それとともに道徳的社会主義もしくは道徳的個人主義のいずれを伴うものであるのか」¹³という問題設定こそ有効なものであると論ずる。それでは、ボザンケにとって、「経済的社会主義」は「道徳的社会主義」か「道徳的個人主義」のどちらを伴うものなのであろうか。

ボザンケは、その確答を得るために「経済的社会主義」の特徴を三つ挙げる。

第一は、「経済的社会主義」が「私有財産」の原理に反対する点である。ボザンケは言う。

「このこと〔私有財産原理の反対〕は直ちに、経済的社会主義を、かつて見られた二人の偉大な社会有機体の解説者ーわたしはアリストテレスとヘーゲルのつもりで言うーから切り離す。」¹⁴

前述のように、ボザンケは「私有財産」を、各人が「自己の意志を自己の生活における振る舞いにおいて現実のもの (reality) にする」場として考えていた。そしてボザンケによれば、「私有財産」についてのこうした考え方こそ「アリストテレスとヘーゲルの学説が意味するもの」である¹⁵。それゆえ、ボザンケは、「私有財産」の「権利」(財産権) および「私的所有権」(private ownership) に反対する論説はすべて「社会有機体の本質への完全な無知を示す」ものであり¹⁶、「財産」とは人間の「権利」ではなくむしろ「義務」であると論ずる。しかし、ボザンケによれば、「私有財産」のこうした意義を無視するのが「経済的社会

主義者」にほかならない。ボザンケはいう。

「財産が一つの重責 (burden) でありうる、ということが〔経済的〕社会主義者によって承認されているとはこれまで一度も考えられなかった。」¹⁷

そしてボザンケは、「私有財産」という「条件なしには、社会有機体も道徳的社会主義もあり得ない」と論じ、「経済的社会主義者」を「道徳的社会主義を信ずる者ではない」、つまり「経済的社会主義」は「道徳的社会主義」を伴うものではないと断ずるのである。

第二は、「経済的社会主義」が人間の「儉約」及び「貯蓄」(saving) を軽視し、同時に「救貧法」の緩和的措施を採る点である。ボザンケは、前述のように人間の「先見」や「やりくり」、そして「儉約」を重視していた。しかし、こうした「先見」や「自制」(self-control)こそ、ボザンケによれば「道徳的社会主義」を基礎づけるものである。ボザンケはいう。

「以下のことが明瞭に理解されるべきである。すなわち、儉約は、少なくとも諸君自身の重責を負うべく決意 (resolution) の形で、利己的ではなく非利己的な性質であり、そして道徳的個人主義ではなく道徳的社会主義にとっての最善の土台であり最も良く知られたその傾向の兆しである、ということである。」¹⁸

つまり、ボザンケは、「先見」や「自制」を介しての「儉約」や「貯蓄」の励行により、自己に降りかかってくる災厄に対処しようとする常なる心構えこそが、人間を「利己主義」から離れさせ「道徳的社会主義」＝「利他主義」へと変える契機と考えるのである。しかし、ボザンケによれば、こうした人間の側面を軽視ないし無視するのが「経済的社会主義」にほかならない。ボザンケは、「経済的社会主義者」が各人の「儉約」への決意を無視し、各人への「儉約の教化 (inculcation)」を冷淡に見ることで、逆に各人の「儉約」をくじかせている点を指摘する。

さらに、ボザンケによれば、人間の「儉約」を軽視するこうした「経済的社会主義」的な傾向は、これまでのイギリスにおける「救貧法」の政策に内包されている。ボザンケは、過去に生じた種々の社会的害悪は「故意に緩んだ、そして“〔経済的〕社会主義的”な救貧法から直接に生じて」おり、「虐待された子供達を供給したのは大部分公的な諸制度である」と断ずる。そのうえで、ボザンケは、「救貧法の援助の総計を減らすこと、つまり、行政をより緩んだものではなく厳格なものにすること、甘いもの (lenient) ではなく厳格なもの (harsh) にすること」が必要であると訴える¹⁹。この場合、「救貧法」の「緩んだ」援助とは、「ワークハウス」以外で貧民に救済を与えるという前出の「院外救済」を意味する。つまり、ボザンケは、「経済的社会主義」的な「院外救済」を、「ポーパー」に「儉約」の観念を失念させ、同時に「道徳的社会主義」の土台を切り崩すものと理解するのである。こうして、ボザンケは、人間の「儉約」の軽視という「経済的社会主義」の特徴を剔出しながら、「儉約」の重視、「国家」＝「救貧法」による「ポーパー」への援助の「院内救済」への限定を改めて訴える。

そして「経済的社会主義」の第三の特徴は、それが「社会」の「階級」や人間の「個性」を十分には理解していない点である。この点に関連して、ボザンケは人間の「仕事」(work)

や「労働」を以下のように論ずる。

「社会有機体の各単位は、彼と全体との諸関係を、自分自身の特殊な仕事、そして意志において具体化しなければならない。」²⁰

「もしすべての人が、各人により達成される利得を分け持つのなら、それは巨大でかつ常に増殖している労働 (the gigantic and ever-increasing labour) を通じて唯一可能である。」²¹

つまり、ボザンケは、各人が自己を表現して「社会」に独特に貢献する手段を人間の「仕事」や「労働」に見出すのである。「労働者は、自らの仕事のなかで、すべてのものにたいする自らの意味を考慮に入れる。」²²そして前述のボザンケの制度論で見たように、彼の場合、こうした「労働」を指示する各人の「職業」には人間の「個性」が具体化し、「階級」もまたその「職業」を示唆するものとして人間の「個性」に接近するものであった。しかしながら、ボザンケによれば、こうした労働観、職業観、階級観をもたず、それゆえ人間の「個性」をも十全には把握していないのが「経済的社会主義」にほかならない。ボザンケはいう。

「わたしは、経済的社会主義が個性の深遠さを正しく評価しているとは思わない。」²³

むしろ、「経済的社会主義」は、「階級」の間の闘争や「階級」そのものの廃絶を訴える思想であり、「道徳的社会主義」の意味する「階級」や人間の「個性」とは著しく異なるものである。こうして、ボザンケは「個性」や「階級」に関する「経済的社会主義」の誤解を指摘しながら、改めてその真意を提示するのである。

そして以上のように「経済的社会主義」の三つの特徴を剔出したボザンケは、結論として、「経済的社会主義者」は「自己の計画準備を性格の本質のうえに、つまり社会的意志、道徳的意志のうえに基礎づけることを無視」した思想であると断定する。そしてそこからボザンケは、「経済的社会主義」は「道徳的個人主義」と「道徳的社会主義」のどちらを伴うか、という最初の問題に立ち返り、「経済的社会主義」は「社会有機体をひとつの有機体としてではなく、むしろひとつの機構装置として、換言すれば、道徳的社会主義の視点からではなく道徳的個人主義の視点から扱った」思想であると断定し、同時にその思想に自分が批判的であることを明示するのである²⁴。

2. 「フェビアン協会」批判

ところで、ボザンケは、こうした「経済的社会主義」批判を根拠にしながら、様々な社会主義思想に関して、その具体名を挙げながらさらに議論を展開している。ボザンケは、社会主義思想の大本たるマルクス主義に関してその基本的な内容について把握し²⁵、マルクス主義を社会有機体説のようなものとはかけ離れた「唯物論」として批判する。ボザンケによれば、「マルクス的な見解に、唯物論の響きがある」のは「確実」であり、「その観念は、意志そして意識が“付帯現象”(epiphenomena)であり、それらは原因ではなく、結果であるというもの」²⁶である。ボザンケはいう。

「人間が生きている世界は、彼自身である。しかしもちろんそれは精神への表象

(presentation) によって構成され、厳密な物理的因果関係によって構成されているのではない。」²⁷

こうして、ボザンケは、マルクス主義の唯物論的な見解に対して批判的なコメントを述べる。しかし、こうしたボザンケによるマルクス（主義）批判は、前出の「経済的社会主義」の諸相と無関係ではないが、直接にそれらを考慮して展開されたものではない。むしろ、ボザンケにとって、「経済的社会主義」を体現する社会主義思想・団体、つまり彼の「経済的社会主義」批判の真の対象であったのは、オッターが指摘するように、当時社会主義団体としてひとときわ成長が著しかった「フェビアン協会」およびその思想であった²⁸。

ボザンケは、「フェビアン協会」がひとつの社会主義団体としてアイデンティティを確立し、大枠で初期「フェビアン」の思想および第一次世界大戦前までの「フェビアン社会主義」の輪郭が定まるとされる『フェビアン社会主義論集』(*Fabian Essays in Socialism*)の議論を²⁹、前出の「経済的社会主義」と「道徳的社会主義」の区別を「直視」するものではないと断ずる³⁰。また、『フェビアン社会主義論集』の第二版（安価版）のダストカバー（dust-cover）で描かれた挿絵、すなわちトップ・ブーツを履き古風な帽子をかぶった豊満な特権的ジェントルマンが、両手に拳銃を持った労働者に狙われているという階級闘争の描写を、ボザンケは「このうんざりさせる階級憎悪の表示」と評して、同書の「階級闘争」的発想を批判している³¹。さらに、ボザンケは、「フェビアン協会」のメンバーであるショー（Bernard Shaw: 1856-1950）やウォーラス（Graham Wallas: 1858-1932）らの唱える国家主導の諸政策を、「両親としての、あるいは息子、娘としての責任を強いずに、すべての子供、あるいはなお悪いことにすべての大人にたいする扶養」を「集団的に保障」するものとして、彼らの主張を人間の「性格にとって致命的」なもの、また「究極的には社会生活にとって破壊的」なものとして批判している³²。実際、ボザンケは、次のようにも「フェビアン協会」を批判している。

「私の見解とは、良きものが社会主義から生ずるかもしれないが、しかしまだそれは生じてはいないこと、そしてその源泉は個人主義的・唯物論的（Individualistic-materialistic）であること、そして現今の人々（フェビアン）はなおその強い徴候を示していること、以上である。（中略）わたしは、彼らフェビアン協会の人々とは誰一人としても実際に協力し合うことが決してできない。」³³

かくして、マルクス主義以上に激烈な批判を「フェビアン協会」に向けたボザンケは、ジョーンズが指摘するように、まさしくその協会の「執拗なまでの敵対者」となったのである³⁴。

しかしながら、その一方で、ボザンケは、ほかのイギリスにおける社会主義思想やその運動、またそれに準ずる思想・運動等に対しては好意的な態度をとった。例えば、ボザンケは、イギリスの労働者階級の手により設立された諸組織、すなわち「労働組合」（Trades-Unions）や「友愛協会」（Friendly Societies）、「協同組合」（Coöperative Societies）、そして「住宅金融共済組合」（Building Societies）を、人間の「個性」の発展形態として高く

評価している³⁵。また、ボザンケは、コールにより提唱された職能代表的「ギルド社会主義」(Guild Socialism)や、労働組合主義としての「サンディカリズム」(Syndicalisme)に、それらの階級観等に異論を唱えつつも部分的に賛同し³⁶、さらに「自由党急進派」を名乗っていたボザンケ自身も後に(まだウェッブ夫妻が深く関与するに至っていない段階の)「労働党」に共感的になっている³⁷。そしてこうした点は、以下のようなボザンケによるイギリスの協同組合運動に対する好意的評価からも明らかである。ボザンケはいう。

「私は、ただ分配と生産の両方の協同組合運動について言及しなければならない。もちろん、その運動の価値について多くの疑念が抱かれていることを私は知っている。しかし、その運動が、概して、そのメンバーに先見、組織化、そして管理統制力(administrative control)を身につけさせる上向きの力(an upward force)であることは疑う余地がない。」³⁸

さらに、ボザンケは、「性格」および「意志」の「奇跡」、あるいは「意志によって環境を変えることの例」として「ロッチデールの先駆者たち」、すなわち 1844 年の「ロッチデール公正先駆者組合」設置に見られる協同組合運動を挙げ³⁹、以下のように評価する。

「例えば、イギリスにおける協同組合運動の歴史を調べてみよ。中間商人なくして自らの食料雑貨類を手に入れ、それゆえ消費者の利益を交え、商業上の理由で儲けようとしないうことを望んだ数人の労働者が、ひとつの店をはじめることによって団結し、消費者の間で利益を分割する単純な体系を考案した。こうした協同に関する単純な行動および計画から、イングランド、そしてスコットランドにおける巨大な協同組合運動が現出したのだ。そしてそれは、まさにイギリスの民主政治の発展の中で最高の重要性をもつ倫理的、教育的、かつ経済的な力であった。」⁴⁰

そしてこのように、ボザンケが「フェビアン協会」に対しては批判的であるにもかかわらず、労働組合主義、「ギルド社会主義」、そして協同組合運動には好意的であった理由は、ヴィンセントが指摘するように⁴¹、彼がそれらを国家主導のものではなく、個人の意志や「性格」に基づく「自助」や「自治」によって生まれたものと理解していたことによる⁴²。つまり、ボザンケの「ギルド社会主義」などへの一定の評価は、国家主導や官僚エリート中心の社会主義のイメージを彷彿させる「フェビアン社会主義」⁴³に対する批判の裏返しである。それゆえ、ボザンケの「経済的社会主義」批判とは、「下からの運動」、「下からの社会主義」に対してではなく、「フェビアン協会」に代表される官僚主義的、国家主導的、集産主義的、エリート主義的な「上からの社会主義」に向けられたものであるといえる。後年、ウェッブ夫妻が、『ソビエト・コミュニズム』(Soviet Communism: A New Civilisation?)を出版して、後に官僚主導の社会主義へと発展したソ連を礼讃したことは、この点を確認するうえで示唆的である⁴⁴。

ところで、事実上「フェビアン協会」批判であったボザンケの「経済的社会主義」批判および彼の思想は、「フェビアン」らによって当然歓迎されるはずはなかった。例えば、その協会の中心人物であるシドニー・ウェッブ(Sidney Webb: 1859-1947)は、かつてはドイツの経済学者のシェフレ(Albert Schäffle: 1831-1903)の『社会主義の精髓』(Die Quintessenz

des Sozialismus) を英訳したボザンケの業績⁴⁵を高く評価していた⁴⁶。しかし、ボザンケの社会主義論が明示された後、シドニー・ウェブはボザンケのその主張に憤激し⁴⁷、彼にたいする好意的評価を一変させて、「ボザンケ氏とわたしは、あらゆる点で到底同意ができないのは明らかだ」と述べるに至っている⁴⁸。また、ボザンケと同じくグリーン門下でありながら、ボザンケと思想的に袂を分かっていった「フェビアン協会」のメンバー、シドニー・ボールも、彼の主張を的外れのものとしたうえで、我々社会主義者の議論は様々な機構装置の改革に関して多くの議論を費やすものの、しかし結局は人間性の発展、つまり「性格」の発展を目的とするものであると主張して、逆に現存の社会体制を維持しながら「道徳的社会主義」の実現を訴えるボザンケ議論を実現不可能な単なる「抽象的な道徳的理想主義であり超越論」として批判している⁴⁹。

かくして、ボザンケと「フェビアン協会」との対立は決定的なものとなった。そしてこの両者の対立がさらに先鋭化し、両者の思想的な相違がより鮮明なものになって現出するのが、一般に「19 世紀の思考に終止符を打ち、社会問題に対する新しい取り組み方に道を開いた」⁵⁰とも評される、「王立救貧法委員会」(1905-1909)を巡る議論においてであった。それは、前述のような社会主義批判の中の、救貧政策に焦点が絞られた両者の論争であり、現実の政策提言という形でさらに洗練化されたボザンケの救貧政策を巡る主張が、「フェビアン協会」、特にその指導者であるウェブ夫妻の主張と全面的に衝突し、ボザンケが「フェビアン協会」を正面から批判する場となった。そこで、ボザンケのこれまでの国家論、制度論、社会政策論を締めくくる意味をこめて、彼の現実政策論のいわば「クライマックス」に相当する「王立救貧法委員会」を巡る政策論争、およびその周辺の政策論議にメスを入れることにしよう。

3. 「王立救貧法委員会」

「王立救貧法委員会」が設置される以前、イギリスでは、1834 年の「救貧法改正法＝新救貧法」の下で中央集権的な救貧制度が一応確立しており、救済を受ける貧民は救済を受けていない独立労働者の状態よりも低い状態で処遇されるという「劣等処遇」の原則、さらに「ワークハウス」以外での救済＝「院外救済」を認めないという「ワークハウスシステム」の原則の下で、救済が抑止的・刑罰的なものとして実施されていた。しかし、救貧法行政の弛緩（「院外救済」の復活）、貧困の慢性化、慈善の無秩序な乱立に伴いその体制の限界が表面化し、政策に対する一定の修正が必要となった。その対応として、国からは、「救貧法」と慈善との範囲についての公式見解として、1869 年に地方自治庁長官ゴッシェン (G. J. Goschen) による「覚書」が出され、他方、慈善側からは既存の乱立する慈善の組織整理を目的とした「慈善組織協会」が設立されて、両者は 1870 年代を通じて密接な協力関係をもつようになった。しかし、1880 年代の大不況期（社会主義の復活期）に大量失業が発生するとこうした体制で事態に臨むことは不可能になり、改めて国側から 1886 年に地方自治庁長官チェンバレン (Joseph Chamberlain: 1836-1914) による「通達」が出され、従

来の「救貧法」と慈善事業の二制度に加えて、地方自治庁が中心となった失業者救済のための「公共事業」制度が新たにそこに含まれることになった。しかし、不熟練の臨時労働者がその地方当局に流入したことから、最終的にはそれも単なる救貧機関になり、逆に救貧法当局と無用の競合、対立が惹起されるようになった。さらに、「慈善組織協会」が慈善の組織化に最終的に失敗したのを受けて、事態は大混乱に陥り、イギリスの救貧行政は行き詰まりの様相を見せていた⁵¹。

こうした事態を打開するために 1905 年 8 月に制定された「失業労働者法」(Unemployed Workmen Act) は、3 年間の時限立法として、前記の三機関の連携等を唱えることでこの混乱を解決しようとするものであった。しかし、それは、失業者処遇にあたっては何らの新しい救済原則ももっておらず、そのためにイギリス議会では様々な批判が噴出した。そしてこうした諸々の批判をかわすために設置が決定されたのが、保守党バルフォア内閣最後のジェスチャアとも言われる⁵²「王立救貧法委員会」であった⁵³。

それゆえ、20 名弱からなるこの委員会に付託された事柄も「貧民の救済に関する諸立法の実施状況」と、「深刻な産業不況の時期において、雇用の不足によって生じる困窮に対処するため救貧法の外部で採用された各種の方策」についての調査であり、そのうえで「救貧法をどのように改正し、その行政をどのように改善し、もしくは困窮の対策としてどのような新たらしい立法が必要であるかを検討し、報告すること」であった⁵⁴。しかし、この委員会は途中内部分裂を来し、多数派と少数派の二派が形成され、それぞれが別々の答申、すなわち「多数派報告」と「少数派報告」を提出するという異常事態となった。

しかし、委員会が二派に分かれたとはいえ、それらは現行救貧行政に何らかの欠陥があること、そしてそれを改善すべき時期に来ていることでは認識が一致していた。また、救貧委員会(Board of Guardians)の廃止、州(County)ないし特別市(County Borough)へのその権限委譲・資産移管、一般混合型ワークハウス(general Mixed workhouse)の解体、收容者の専門的施設における処遇、抑止的行政の改善、などの点でも両者は同意を得ていた⁵⁵。しかし、「多数派」は、民間の職業安定紹介事業の全国的体系(a national system of labour exchanges)、法定の「公的扶助当局」(a public assistance statutory authority)、「公的扶助委員会」(public assistance committees)、そして「自発的援助委員会」(voluntary aid committees)の設置等を提案し⁵⁶、1869 年のゴッシェンの「覚書」で示唆されたような国(「救貧法」)と民間(「慈善」)の協同を改めて提唱した。これに対し、「少数派」は「公的扶助登録官」(registrar)の創設、1834 年モデルの全体的解体、窮乏の種々のカテゴリーに対応する多元的な委員会の設置、窮乏に関する単一的カテゴリーの観念の放棄、そして労働能力者(able-bodied)を処遇する別機関＝「労働省」の設置を唱えていた⁵⁷。

そしてこの両報告の作成に深くかかわっていたのがボザンケと「フェビアン協会」のウェット夫妻であった。ボザンケは、彼自身はこの委員会の直接のメンバーではなかったが、委員に任命されていた妻ヘレンや、同じく委員であった親友ロックらとともに、「多数派報告」の作成に携わった。実際、「多数派報告」は、モワットによってボザンケおよび「慈善

組織協会」のビジョンを表したものと解され⁵⁸、その委員会のメンバーであったベアトリス・ウェブも「多数派報告」を「バーナード・ボザンケによって導かれた」⁵⁹ものと指摘している。また、ボザンケの姪エレン・P・ボザンケ (Ellen P. Bosanquet) もヘレンへの書簡の中で、多数派の見解の中にヘレンと並んで「相当ボザンケの見解があるにちがいないと思っています」⁶⁰とも述べている。他方、「フェビアン協会」の有力者であるウェブ夫妻も、シドニー・ウェブは、ボザンケ同様、この委員会の直接のメンバーではなかったものの、妻ベアトリス・ウェブが委員に任命されていたことから「少数派報告」作成という形でこの委員会に深く関与した。実際、「少数派報告」はコール (Margaret Cole) によってウェブ夫妻の手によって作成されたと指摘され⁶¹、また委員であったベアトリス・ウェブ自身も「少数派報告」は自分ら夫妻の中心的思想を表現した「ナショナル・ミニマム」(National Minimum) 理論の「哲学的基礎」をもつと述べている⁶²。さらに、ウェブ夫妻が「フェビアン協会」の中心的人物であったことから、「少数派報告」は実際には「フェビアン協会」の意見を主導的に盛ったものとも理解されている⁶³。それゆえ、事実上、ボザンケによる「少数派報告」批判はウェブ夫妻批判、および「フェビアン協会」批判を意味し、ウェブ夫妻、特にシドニー・ウェブによる「多数派報告」批判はボザンケ夫妻批判、および「慈善組織協会」批判を意味している。それでは、両者はどのような提案を行い、そしてどのような点で相手の主張を批判したのであろうか。

4. ウェブ夫妻の主張

ウェブ夫妻、特にシドニー・ウェブによる「多数派報告」批判＝ボザンケ批判、および「少数派報告」擁護は、彼とボザンケとの論争が掲載された1909年4月の『ソシオロジカル・レビュー』(*The Sociological Review*)⁶⁴、およびウェブ夫妻による共著『イギリス救貧法政策』(*English Poor Law Policy*)において明示されている。シドニー・ウェブは、この委員会が「1834年の原理」を破棄し、「慈善組織協会」の政策の知的破綻を暴露し、救貧法体系全体を「打ち壊し、粉碎し、破壊」⁶⁵したことを両派の見解の一致点として提示した。また、「1834年の救貧法」の概念そのものがその活動面において消極的であり、積極的ではないということ、また「救貧」を「公的扶助」に、「ポーパリズム」を「要保護性」(necessitous)にそれぞれ用語を改正すること、さらに「劣等処遇」の原則や「ワークハウスシステム」を放棄することに関しても両報告は一致を見ているとした⁶⁶。加えて、シドニー・ウェブは、1907年の時点でイギリスの救貧法システムから抽出される三つの特徴、すなわち救貧申請者を身体的精神的改善により「治療」という「治療的処遇」、「ポーパー」であるか否かに関係なく国家が特定のサービスを受給者にすべて給付する「普遍的給付」、そして本人が好むと好まざるとにかかわらず個人を社会が最良と考える方法で扱う「強制」、という三つの特徴を「1907年の原則」と呼び、その原則においても両派は同意を見ているとした⁶⁷。

しかし、シドニー・ウェブは、現状では1834年の「新救貧法」の制定以来、その原則

が破棄されるように設置されてきた種々の公的機関と、旧来の救貧法体制、そして民間の慈善団体との間にサービスの「重複と混乱」⁶⁸が存していることを指摘し、この「重複」という事実を「多数派報告」が正視しないことから委員会は分裂したと主張する⁶⁹。とりわけ、シドニー・ウェッブは、「多数派報告」の「公的窮乏当局」「公的扶助当局」の設置の主張を、窮乏を単一当局で扱うという従来の枠組みを出ず、結局これまでのようなサービスの「重複」を温存させるものだとして、次のように言う。

「そうこうしている間に、古い救貧法が〔従来の〕救貧委員会の役割そのものを担うことで“公的扶助当局”の名の下で復興されるであろう。（中略）換言すれば、今、救貧法と新たな特殊化されたサービスとの間に存するサービスの二重、機能の重複は改革されずに残ることになるであろう。そしてそれは〔多数派によって〕提案された著しい新たな公的扶助当局の拡張によって悪化されるであろう！」⁷⁰

これに対し、シドニー・ウェッブは「少数派報告」の提案を、現状の「カオス」を「秩序」に変える計画と理解し⁷¹、その一例として「重複」や二重行政を体系的に調整し「今なお未収集のままである諸寄付」を体系的に回収する「公的扶助登録官」の設置を挙げる。そして彼は、「多数派報告」にはこの計画が含まれていないとして、その報告を批判する⁷²。

さらに、シドニー・ウェッブは、「多数派報告」が単一の窮乏局を選択する理由を、彼らが窮乏を「社会的自立の失敗」と理解している点、そしてその「失敗」の全範囲を通じて市民としての「性格」の欠陥という共通かつ特有の問題があると認識している点、さらにその問題を扱うための共通かつ特有の方法があると信ずる点に求める。それに対し、シドニー・ウェッブは、窮乏に関して何一つ「共通の前兆」を認めず、「少なくともその直接的原因はニーズ同様に種々異なっている」と理解して、窮乏を「国家の一部の病理状態」と見なす。そして「多数派報告」の窮乏に関するこのような視座では、1834年の「新救貧法」の原則や従来の「ポーパリズムの烙印」という制度、さらに「抑止」までもが存続されるとシドニー・ウェッブは理解して、そこに「多数派報告」が「1834年の原理」に立ち返っている点を見いだすのである⁷³。

また、ウェッブの夫人、ベアトリス・ウェッブも、窮乏者、つまり「ポーパー」の5分の2は子供（大部分は孤児）であり、彼らが自らの道徳的欠陥により「ポーパー」になったとは考えられず、老人の窮乏に関しても、1908年に「老齢年金法」が通過した今、その市民的・道徳的性格に鑑みて彼らを「窮乏局」に戻すのは偽善的であるとして、ボザンケを名指しで批判する。また、労働能力者の貧困に関しても、失業を「市民精神」の欠陥の証拠とする根拠はなく、むしろ「社会環境の相対的欠陥」が主として失業の原因であると主張して⁷⁴、ボザンケや「多数派報告」の「性格」の欠陥に関する議論を「初期ヴィクトリアンを大いに喜ばせる抽象的な諸議論」⁷⁵と批判する。

さらに、シドニー・ウェッブは、「多数派報告」が救済申請者たちを本人の意向や必要に関係なく、「公的扶助当局」か「自発的援助委員会」かに振り分け、かつ「公的扶助当局」の下で「劣等処遇」を実施するように提案していると理解し、そこに「1834年の原則へと

回帰しようとする大胆な試み」⁷⁶を見抜いている。つまり、シドニー・ウェブは、諸事実を無視する「多数派報告」のスタンスは、「公的扶助当局」の設置、およびそれと「自発的援助委員会」との連携に表れており、その結果「多数派報告」は「1834年の原理」へと回帰していると理解するのである。

シドニー・ウェブは、以上のような「多数派報告」批判に加えて、「少数派報告」に同調することで種々の政策提言を行っている。シドニー・ウェブは現状における国家の役割について次のように言っている。

「我々が理解することは、公的活動を、かつての抑止的諸条件の下での窮乏の単なる救済に限定する代わりに、我々は国家があるセクションにたいしてあるセクションをあてがうことで、個人の環境への積極的な干渉をますます引き受けていることである。また、国家がこの目的のために救貧法とは無関係の一連の特定諸機関全体を創造していることである。」⁷⁷

こうして、シドニー・ウェブは、「市民生活の基準の普遍的維持は無事に個人の自己利益にゆだねられ得ず」⁷⁸、国家が個人の安寧のために独特の積極的な役割を果たさねばならないことを強調する。そしてそこから、シドニー・ウェブは独自に「抑止」に代わる「予防」の政策を提唱し、慈善と並んで教育、公衆衛生、職業紹介等に携わる諸当局の設置を提案する。そのうえで、シドニー・ウェブは、「多数派報告」の主張するような「単一の窮乏当局」（「公的扶助当局」）がある限り「重複」の解消は不可能であり、予防政策もまた不可能であるとして、改めて「公的扶助当局」の廃止を求める。シドニー・ウェブにとって、今必要なのは「窮乏の有無による区分ではなく、与えられるべきサービスによる区分」である⁷⁹。

さらに、シドニー・ウェブは、「少数派報告」に同調して、労働能力者への国レヴェルでの諸策を提言する。シドニー・ウェブは、「労働能力者全体は、それが放浪者であろうと、ポーパーであろうと、はたまた失業者であろうと、地方当局の所管から除外されるべきであり、そして今叙述された方法で国家的部局（national department）（つまり、労働省）によって扱われるべきだ」とする「少数派報告」に同調して、労働能力者の国家的対処＝「労働省」の設置を提唱する。そしてシドニー・ウェブは、「多数派報告」には「公的扶助当局」や民間の職業紹介体系以外にはほとんど労働能力者に関する政策がなく、そこでは貧困問題もまた真正面から取り組まれていないと批判する⁸⁰。さらに、シドニー・ウェブは、学童の学校教育及び職業訓練時間の拡大（産業からの撤退）、労働時間の短縮、政府の補助金の援助による労働組合保険の拡大、困窮者用の訓練施設や浮浪者用の抑留コロニーの設置といった「少数派報告」の提案を高く評価し⁸¹、その政策が労働組合や「労働党」に支持されるであろうと予見して、その主張に全面的信頼を寄せるのである⁸²。

5. ボザンケの主張

こうしたウェッブ夫妻、特にシドニー・ウェッブの「多数派報告」批判に対し、ボザンケは前出の『ソシオロジカル・レビュー』⁸³、およびその後発表した論文⁸⁴において「少数派報告」批判＝ウェッブ夫妻批判を行う。ボザンケは、両報告には現行の行政を批判的に捉える点で一致点があるとしつつも、「にもかかわらず、二つの報告書ははじめてから環境の解釈において和解しがたい不一致」があるとして、シドニー・ウェッブよりも強く両者の相違点を示している。ボザンケは、「少数派報告」が諸悪の根源を救貧法体系の「根本的性質」に負わず一方で⁸⁵、「多数派報告」はその根源を救貧法体制そのものではなく、その原理の「諸条件への調節の失敗」に求めていると論じ⁸⁶、両者の現状認識の相違を指摘しつつ、「多数派報告」にしたがって救貧法体系の基本原則に欠点はないと主張する。

次に、ボザンケは、「社会改良」、彼の言葉では「社会治療」をなすためには「自己を維持する性格への崇敬」がなければならないとして⁸⁷、各人に対して「社会」により要求されるレベルで自分や自分の「家族」を維持して養うことを要求する。そしてボザンケは、自分や「家族」の維持に失敗した人物を基本的な社会関係すら維持できないものと理解し、彼らを市民的・道徳的性格の欠陥者、すなわち「窮乏者」あるいは「ポーパー」と呼ぶ。そしてこうした欠陥者を扱うのが「公的扶助当局」であるとボザンケは論じて、この当局を「市民的集団生活の本質的機関」と位置づける。その一方で、ボザンケは、「自己維持」や「自己統御」に成功している者、つまり「困窮者」や一般市民には「窮乏ないし要保護性の者」とは「区別」された援助が提供されるべきと主張し、「窮乏者」「ポーパー」と「困窮者」を厳格に区分する。したがって、ボザンケは「窮乏」には独特かつ共通の要素があることを承認する。ボザンケはいう。

「こうした〔多数派報告の〕提案全体は、共通で独特の方法で問題を扱うことを必要とするところの窮乏や要保護性の全範囲には、共通でかつ独特の問題があるという確信に基礎付けられている。」⁸⁸

さらに、ボザンケは、前出の一般市民及び自己維持に失敗していない「困窮者」への援助を、健康診断、注意や勧告といった部分的・条件的な援助に限りながら、他方で「窮乏者」には物質的材料全般、生活の指導といった全面的な救済が与えられるべきと主張する。つまり、ボザンケによれば「窮乏」ないし「要保護」の人物に対して為される救済は「全人格の治療」であり、単なる「健康、ないし読み・書き・算術の欠如の治療」といった条件的な医療サービス、教育サービスではない⁸⁹。そしてそこから、ボザンケは、「窮乏」を、共通の原理や方法が適用される独特の特徴とは考えない「少数派報告」の提案では、真に有効な「社会治療」がなされ得ないとして「少数派報告」を批判する⁹⁰。

このようにして、ボザンケは、「多数派報告」の「公的扶助当局」の設置に関する主張に同調し、それを「社会治療」の諸策の一環と理解する。そしてボザンケは、「少数派報告」のように「窮乏」を単一当局で扱わず、種々の公的サービスによって扱うのであれば、各専門に閉じこもったエキスパートによる部分的な処遇・改善のみが期待され、真の「全人格

的治療」は実現できないと考えるのである⁹¹。

さらに、ボザンケは、「公的扶助当局とそのサービスの外に、〔多数派の〕委員たちは、同一の仕事におけるある程度の公的責務及び承認を受け入れる条件で、慈善の入場」を考えているとして、「慈善」を「ボーパー」ではない貧民、すなわち「困窮者」を扱う器官、彼の言葉では「公的扶助と等しく市民的集団生活の本質的器官」と理解する。そしてボザンケは、「慈善」を「直接に公的基金を利用する国家組織サービスのやり方よりも、その方法において自由であり、またその計画において進取的」であるとし、かつ「社会改良の仕事における最善の方法及び配置は（中略）私的慈善の事業や発明性によっている」⁹²と主張して、「慈善」の意義を強調する。ボザンケはいう。

「慈善に社会扶助計画の仕事を与えないことは、実際には、社会発明の主要な実験室を閉じることである。」⁹³

無論、ボザンケは、「少数派報告」も自発的事業、すなわち「慈善」の意義を認めているとする。しかし、ボザンケは、「多数派報告はさらに進んで、公的基金で賄われる公的援助装置の外部に自発的援助が体系化されるべきことを望んで」おり、それが「自発的援助委員会」の設置の主張つながっていると理解する⁹⁴。そしてボザンケは、イギリスでなされてきた膨大な慈善事業を「多数派報告がその促進を望む体系」に基づくものと理解し⁹⁵、「国家」の中に占める「慈善」の重要な役割を改めて次のように示唆する。

「我々がすでに示したような特徴、方法、私的慈善の進取性、発明性というのは、国家組織の諸方法への好ましい補助であることが示される。（中略）この方向〔社会治療の自発的サイドの発展〕に向かうその時期〔最近 50 年〕の運動は、非常に重要でありかつ非常に強力であるように思われるがゆえに、阻止され得ないものである。」⁹⁶

こうして、ボザンケは、「国家」（「公的援助当局」＝「救貧法」）と民間（「自発的援助委員会」）との分業を唱える「多数派報告」の見解を、真の「社会治療」を提唱するものとして理解し、それが時代の趨勢として今後も強力かつ有効なものであり続けることを確信するのである。

さらに、ボザンケは、ウェッブ夫妻の批判的であった「1834 年の原理」への回帰について触れ、「1834 年の原理」に見られる「消極的效果」と、「多数派報告」の「個人の回復的処遇」との間にはコントラストがあるとしながらも⁹⁷、そこには表面的な断絶以上のものは存しないとして次のように述べる。

「しかし全く明らかなことは、多数派が〔1834 年の委員会と〕同一の仕事を継続していること、そして市民の意志に対する〔1834 年の委員会と〕同一の信念に依拠していることを、彼ら自身が理解していることである。」⁹⁸

「1834 年の消極的長所に生命を与える積極的信仰は、今日の“個人の回復的処遇”を示唆する種々の確信と断絶していない。」⁹⁹

こうして、ボザンケは「多数派報告」と「1834 年の原理」との内的連関を示唆する。さらに、ボザンケは、「1834 年の原理」のひとつである「劣等処遇」も「不適切な処遇」では

ないとして、その原理の本質を、差別的処遇により各人が自己維持を貫徹するという積極的効果に求めている。ボザンケはいう。

「したがって、劣等処遇の原理は真に近代の公的扶助の原理と継続的であり、救済の回復的目的を邪魔するような処遇の残酷さを含むものではない。」¹⁰⁰

こうして、ボザンケは「多数派報告」における「劣等処遇」の提唱を評価し¹⁰¹、「1834年の原理」を積極的に20世紀初頭のイギリスによりみがえらせようとするのである。ボザンケによれば、今求められるのは「制度及び制度外部の両者において、一般に“寛大な”と称される部分と対峙する、一般に“厳格な”と称される部分の目標及び政策」¹⁰²であり、厳格な「1834年救貧法」への回帰である。

さらに、ボザンケは「少数派報告」＝ウェッブ夫妻が提案する「公的扶助登録官」に触れ、「少数派報告」は「公的扶助当局」と「自発的援助委員会」との連携を一顧だにしないことから、その「公的扶助登録官」も有効に活用されはしないと主張する。また、ボザンケは、「少数派報告」＝ウェッブ夫妻の提唱する予防政策に関しても、真の予防策とは「扶養家族の統御を含む自己統御と、親の代わりとして国家をもつこととの間にある一線」を明確に区分し続けることにあるとして¹⁰³、「窮乏」「要保護性」の人物と「困窮者」や一般市民とを区別しないウェッブ夫妻の提案を「問題把握の失敗」の事例として否定する。ボザンケによれば、「ボーパー」を扱う「国家」と、「市民精神」への「自由なアピール」から各人の偉大な力を引き出す「標準的な市民精神を支援する予防機関」とは絶対的に区別されなければならない。ボザンケはいう。

「少数派報告の提案のもとでなされ得る予防的なものすべてにとって、同じもの、あるいはよりよきものが多数派報告のもとでなされ得る。しかし、多数派報告の諸提案のもとでなされ得る最善のものは、少数派報告のもとではなされ得ない。というのは、効果的予防の諸条件がそれらによっては排除されているからである。“国家”は効果的に情報を与え、アドバイスを与え得る。そして一般的安寧に必要な諸条件を主張することで、ある標準を維持しうる。しかし、それは選抜された諸個人にカネの富を与えることはできない。(中略)そのさい、主たる予防力は弱められ、かつ破壊される。」¹⁰⁴

こうして、ボザンケは、「予防」を、各人自身による「自己統御」と国家干渉との間の厳格な一線を明確にすることに求め、「多数派報告」の予防体系はそれを含んでいるものの、「少数派報告」はその点を見落とし、「市民の失敗に関する一般的性質」を承認しそこなっていると批判するのである。

この点は、労働能力者への「少数派」の諸策に関するボザンケの批判においても同様である。ボザンケは、労働能力者の問題を正面から取り組んでいることでは両報告とも同じであるとしつつも、なおそこには「諸観念の根本的確執」があるとして次のように述べる。

「その結果、多数派報告においては、失業者は、労働能力者の中のすべての要保護の人物を扱う公的扶助と自発的援助が取り扱う範囲に入る。分離〔少数派〕報告書においては、病気を除く労働能力者の中のあらゆる要保護の人物は、主として失業者を扱う為に構成さ

れた別の当局〔労働省〕が取り扱う範囲に入る。」¹⁰⁵

そして、ボザンケは労働能力者を「要保護」（「窮乏」）か否かで分類することで、あくまでそれには救貧事業が関係するとし、ウェッブ夫妻の主張するような窮乏も困窮も一緒くたにした「労働省」による国レベルでの処遇に異論を唱える。それは同時に、ボザンケが「多数派報告」の「協同」「回復」「差別」という労働能力者処遇の3原則に同調していることを示すものである¹⁰⁶。

5. ボザンケと「フェビアン協会」

以上、ボザンケと「フェビアン協会」との関係を、彼の社会主義論、および「王立救貧法委員会」でのウェッブ夫妻との対決を通して概観してきた。まず、ボザンケは「経済的社会主義」の諸相を剔出することで、「フェビアン協会」を批判した。そこにおいて、ボザンケは、社会有機体を唱えるヘーゲルやアリストテレスに従いながらその支柱でもある私有財産制を肯定し、また「儉約」を奨励しながら「経済的社会主義」的な救貧法政策を批判し、さらに「階級」を「職業」や「個性」と結び付けながら階級闘争、階級対立の主張を退けたのであった。こうしたボザンケの社会主義批判は、それがまだ教条的社会主義と非社会的な不当利得の社会立法を通じての統制との間の区別すら明確ではなかったと言われる時期での議論であること¹⁰⁷、またボザンケ自身、ソ連などのいわゆる「20世紀の社会主義」を体験していないことなどから¹⁰⁸、厳密な意味での社会主義批判にはなり得てはいない。しかし、こうしたボザンケの議論から、ミアヘッドおよびレトウィンの指摘のように、彼が社会主義（「経済的社会主義」）を、「唯物論」であることに加え、それが古典的な個人主義（「道徳的個人主義」）の最悪の特徴（利己主義）を相続するものとして批判していたこと¹⁰⁹、またハリスの指摘のように、ボザンケが「経済的社会主義」を「家族」や「個人」の行動の倫理的土台に対する「脅威」と理解していたことが明らかになっている¹¹⁰。そしてそこには、前出のボザンケのイギリス政治思想批判で示された「原子論的個人主義」批判と並んで、彼の制度論で示された「家族」、「私有財産」、「近隣」、「慈善」、「階級」に関する彼の見解、すなわち「社会」における自生性の強調が如実に反映されている。さらに、ボザンケの「フェビアン協会」批判全体、およびそれを裏打ちする彼の協同組合主義や「ギルド社会主義」への一定の評価からは、ボザンケがいわゆる「国家主義」、「官僚主義」をいかに排し、人間の内的＝「批判」的意志作用、およびそれに基づく「自助」や「自己改革」をいかに尊重していたが示されており、「個人」における自発性を強調するボザンケの論理が再び現出している。ボザンケの政治思想の整合性のみならず、「社会」の自生性や「個人」の自発性への彼の着眼がここにも見出される。

また、「王立救貧法委員会」での論争を通じて、ボザンケは「フェビアン協会」、とりわけウェッブ夫妻の救貧思想を批判した。そこでは、ウェッブ夫妻が救貧法体制の根本的解体を企図したが、ボザンケは「救貧法」を保持しつつ、（「1834年の原理」に回帰するように）その厳格な適用をもくろんだこと、またウェッブ夫妻が窮乏を性格の欠陥として特別

扱いすることをやめて「公的扶助当局」や「自発的援助委員会」の設置に反対したのに対し、ボザンケは「窮乏」を「市民的性格」の欠陥と捉えて「窮乏」を別個かつ単独的に扱う「公的扶助当局」の設置と、「困窮者」に「限定的治療」を施す「自発的援助委員会」の設置を唱えることで官民両サイドの連携的体制を唱えていたことが明らかになった。また、ウェブ夫妻は、全般的な貧困や失業に対処するために「公的扶助登録官」や「労働省」の設置を主張して国レベルの政策を提言したのに対し、ボザンケは貧困や失業をあくまで道徳的原因によるものと理解し、「公的扶助」と「慈善」という従来の枠組みの中で貧困や失業に対処すべきと論じていたことも明らかになった。つまり、ウェブ夫妻は、貧困を個人の性格的・道徳的問題とは理解しないで窮乏と困窮を同レベルで扱い、それを「社会問題」として認識し、「公的扶助登録官」や「労働省」といった国レベルの政策でそれを予防しかつそれに対処することが国家の「義務」であると論じた。一方で、ボザンケは、貧困を個人の「性格」の問題に還元して、道徳的観点から「窮乏」を「困窮」から分け、貧困を「社会問題」ではなく道徳的な「個人的問題」として認識し、民間（「自発的援助委員会」）による救済を「困窮者」に限定し、そして国による救済を「窮乏」に限定することが「国家」の「義務」であると論じたのである。ここに、前述のボザンケの社会主義論以上に、「貧困」の原因や国家干渉の役割などを巡るボザンケとウェブ夫妻、および「フェビアン協会」との見解の相違が明確になっている¹¹¹。

ところで、救貧法体制をラディカルに否定し、貧困を「社会問題」として認識したウェブ夫妻の主張には、新しい貧困観に基礎付けられた革命的な社会政策の提唱がある。たとえば、モワットは、「王立救貧法委員会」をボザンケに見られる「旧観念」とウェブ夫妻に見られる「新観念」との「戦場」と称し、ウェブ夫妻の主張に「福祉国家の前兆」を見出している¹¹²。また、ウッドルーフ（Kathleen Woodroffe）も、ベアトリス・ウェブ自身が指摘しているように、ウェブ夫妻の「少数派報告」の提案に「ナショナル・ミニマム」の基礎を理解している¹¹³。それゆえ、ウェブ夫妻の主張は、「フェビアン協会」とともに、その後におけるイギリスの社会福祉国家の基礎を提供した議論といえ、極めて画期的なものといえる。

反対に、従来のように貧困を「社会問題」ではなく「個人的問題」と理解していたボザンケは、「窮乏」を特別扱いする「1834年の原理」に固執し、「劣等処遇」の原理や抑止の原理の現代への復興を唱えていたことから理解されるように、なお「旧観念」に縛られ続け、積極的な社会政策の提唱、あるいは「国家」による福祉の基礎付けに失敗したと言える。しかし、このことは、むしろ彼の政治思想の特質をそのまま表現するものである。何となれば、ウェブ夫妻の主張した貧困全般への無差別な国家によるサービスの提供へのボザンケによる批判、およびそれに基づく「窮乏」への差別的処遇の彼の唱導は、彼が「ポーパー」を、自由意志を放棄し道徳的意志作用を持たない者と見ることに起因しており、人間の「批判」的意志作用や「性格」中心に据え、「個人」の自発性に期待を寄せる彼の理想主義的スタンスそのものがここで改めて示されているからである。また、ウェブ

夫妻が反対する「国家」と「慈善」の連携へのボザンケの賛同的主張も、「国家」の扱う領域と民間の扱う領域の明確な区別を通じて、「社会」における「近隣」「慈善」の意味を強調し、「社会」における自生性を改めて示すものとなっている。前出の社会主義論同様、ボザンケの政治思想の整合性、およびそこにおける「社会」の自生性、「個人」の自発性への彼の視点がここにも看取される。

だが、無論、ボザンケが国レベルからの福祉の基礎づけに失敗していることは明らかである。しかしながら、社会福祉の領域へのボザンケの貢献がゼロであったかという点、実はそうでもない。というのも、ボザンケの「フェビアン協会」との論争や、前出の彼の慈善論、あるいは彼の社会政策論には、ルイス（Jane Lewis）の指摘のように、「個人」の生活や習慣を「個人」自身が中心となり、変えることが、「社会」の進歩を確実にする唯一の方法だという確信が伏在している¹¹⁴。そしてこのように、「個人的問題」という視点から問題にアプローチし、貧民各人に民間の慈善団体がいわば「ワン・バイ・ワン」方式で接し、そこから被救済者の処遇を行う、という論理こそ、エメットの指摘のように、今日、各人を個別的に処遇する、という現代の社会福祉の大きな柱である「ケースワーク」（casework）の原理そのものである¹¹⁵。実際、社会福祉の領域では、ボザンケの思想および「慈善組織協会」が「ケースワーク」の先駆であるとするのは定説となっており¹¹⁶、（そこから彼を「個人主義」者・「レッセフェール」主義者とする誤解が生まれているとはいえ）社会福祉への貢献がボザンケの思想にあったのは確かである。その意味で、「ケースワーク」原理の先駆者としてのボザンケの議論は、国家による社会福祉の基礎づけには失敗しつつも、前述のメアリー・フォレットの一件とあわせて、いわば「社会」ないし「個人」による社会福祉の基礎づけには少なからずの貢献を果たしているといえよう。

ところで、この「王立救貧法委員会」は、前述のように途中内部分裂が生じ、二つの答申が提出されるという異常事態へと発展したために、結局は現実問題への有効な方策は立てられなかったと言われている¹¹⁷。しかしながら、コールによっては、「王立救貧法委員会」の設置がその後数年間の自由党内閣による一連の社会改良立法の前兆と指摘されるように¹¹⁸、この後イギリスではいくつかの改革が施され、そしてそれは大筋でボザンケらの唱導した「多数派報告」に沿う形のものとなった。例えば、「リベラル・リフォーム」の頂点ともいわれるロイド・ジョージ（David Lloyd George: 1863-1945）らが推進した1911年の「国民保険法」で採られた路線は、「救貧法」と連続関係にあることなどから「多数派報告」の基本路線に従うもので、むしろそれは「少数派報告」へのアンチテーゼでもあった。また、イギリス政府は、「救貧法」を前提に改革を唱えたボザンケらの主張を尊重し、差し当たり「多数派報告」の路線での「救貧法の人道化」として、量的な改善を行った¹¹⁹。

他方、ウェッブ夫妻は、こうした現実を前に「少数派報告」の見解が政府への影響力をもたないこと、社会改革の担い手として期待されていた「自由党」への「浸透」戦術が失敗に帰したこと、そして1890年代以降保持してきたハイ・レベルの政策形成過程への自己の影響力が失墜したことを悟り、自らの思想と行動を問い直すようにせまられた¹²⁰。1909

年、「王立救貧法委員会」終結後、ウェッブ夫妻はただちに「全国救貧法解体委員会」を組織し、改めて現行の救貧体制の廃止や、「Self-help の原則」から「State-help の原則」への転換を主張した¹²¹。そしてやがて、ウェッブ夫妻が「少数派報告」において暗示した「ナショナル・ミニマム」は、1918 年労働党の公式な政策となるに至り、その後も彼らの提案はイギリスをはじめとする多くの国々に具体化されていった。しかしそれは、裏面で、ボザンケらの「多数派報告」の主張が現代において有効視されなくなることを意味していた。イギリス理想主義、そしてボザンケの名前そのものが忘れ去られてゆくのはこうした背景にもよるといえよう。

ところで、ボザンケの政治思想においてはさらにもう一つの批判が存在する。それは、すでに見たようなボザンケの国家論の延長としての彼の国際関係論において噴出した、国内的な意味における「国家主義」ではなく、対外的な意味での「国家主義」、すなわち国際的な平和維持機構を承認せず、「国家」を超越した政治組織を一切認めないとする「国家主義」との批判である。それは、一見、前述のように、ボザンケが「国家」を最高の政治組織と位置づけている以上、彼の論理から当然に導き出されうる帰結と思われがちであるが、しかし、実際には、ボザンケは「国家」という組織を相対化させ、国際的な政治組織を承認する議論を明確に展開している。それは、同時に、前述の「国家」論で示された「国家」の「権威」に関する「事実上」性についてのボザンケの主張、すなわち「国家」は現状において最高であるに過ぎず、アプリオリに「国家」に「権威」や最高性が付与されるのではないとする主張を、彼が国際関係論を論じながら改めて確認していることを意味している。本論文では、論理展開の都合上、この点の検証は最後の章で行うことになったが、しかしボザンケの国際関係論は、彼の政治思想・国家論の本質をさらにクリアなものにしているという点で極めて重要な検証領域である。次章でその検証を試みたい。

第 8 章 註

¹ イギリスの「社会主義の復活」に関しては、関嘉彦『社会主義の歴史 2』（力富書房、1987 年）213-225 頁、村岡健次・川北稔、前掲書、1986 年、195-98 頁参照。なお、イギリス社会主義の消長に関しては、C・A・R・クロスランド、関嘉彦監訳『福祉国家の将来（1）』（論争社、1961 年）115-142 頁、河合秀和『現代イギリス政治史』（岩波書店、1974 年）98-155 頁参照。

² Otter, *op.cit.*, 1996, p.141.

³ EASP, XIV, p.138. なお、社会主義者であるウェッブ夫妻のミル批判に関しては以下を参照。Willard Wolfe, *From Radicalism to Socialism: Men and Ideas in the Formation of Fabian Socialists Doctrines, 1881-1889* (New Haven and London: Yale University Press, 1975), p.278.

⁴ McBriar, *op.cit.*, 1987, p.131, Peter Allan Dale, "Gissing and Bosanquet: Culture Unhoused", *Victorian Newsletter*, Vol.95, 1999, p.15.

⁵ EASP, XIV, p.15.

⁶ Bernard Bosanquet, "The Antithesis Between Individualism and Socialism Philosophically Considered", *Charity Organisation Review*, Vol.6, 1890, pp.357-368, CC, XIII, pp.304-357. これは1890年2月21日に「フェビアン協会」で実施されたボザンケによる講演であり、「フェビアン協会」での講演としては異例とも思われる徹底した社会主義批判を内容とするものであった。なお、当時、「フェビアン協会」は部外者による様々な講演を実施していた。名古屋忠行『フェビアン協会の研究』（法律文化社、1987年）71-76頁。

⁷ CC, XIII, p.315.

⁸ CC, XIII, p.316.

⁹ CC, XIII, p.317.

¹⁰ CC, XIII, pp.307-308.

¹¹ CC, XIII, p.309.

¹² *EASP*, XIV, p.138.

¹³ CC, XIII, p.321.

¹⁴ CC, XIII, p.322.

¹⁵ CC, XIII, pp.330-331.

¹⁶ CC, XIII, p.329.

¹⁷ CC, XIII, p.332.

¹⁸ CC, XIII, p.337.

¹⁹ CC, XIII, p.340.

²⁰ CC, XIII, p.354.

²¹ CC, XIII, p.355.

²² CC, XIII, p.355.

²³ CC, XIII, p.354.

²⁴ CC, XIII, p.357.

²⁵ Vincent, *op.cit.*, 1992, p.722n.13.

²⁶ *PTS*, V, p.27.

²⁷ *PTS*, V, p.29.

²⁸ Otter, *op.cit.*, 1996, p.50, p.189, pp.192-193.

²⁹ この点に関して、関嘉彦氏は、そもそもフェビアン主義の統一の見解を示す聖典に当たるものがないとしつつも、「しかし1889年に発表した『フェビアン社会主義論集』がその思想の輪郭を定め」と述べている。関、前掲書、1986年、226頁。

³⁰ CC, XIII, p.311.

³¹ *EASP*, XIV, p.127.

³² *EASP*, XIV, p.92, 105. ただし、こうしたボザンケによる「フェビアン協会」批判が妥当なものであるかどうかはまた別の問題である。例えば、一般に『フェビアン社会主義論集』及びその協会は「階級闘争の精神」よりもむしろ「社会再建の精神」で満たされたものと解されている。Kirk Willis, "The Introduction and Critical Reception of Marxist Thought in Britain, 1850-1900", *The Historical Journal*, Vol.20, No.2, 1977, p.456. また、ウラム、前掲書、1968年、112頁。さらに、ボザンケは、一般に「フェビアン社会主義」の本質と理解されるウェッブ夫妻の提唱した4原則、すなわち、民主的であること、漸進的であること、非道徳的なものではないこと、立憲的で平和的であること、という4原則(Bernard Shaw(ed.), *Fabian Essays in Socialism, 1920 Edition* (London: George Allen & Unwin, 1920), p.35.)への直接的な言及を避け、「フェビアン協会」の核心的部分に対する批判は行っていない。

³³ *BBF*, XX, p.74.

³⁴ Jones, *op.cit.*, 2000, p.92.

³⁵ *EASP*, XIV, p.195.

³⁶ *SH*, XV, pp.195-269.

³⁷ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, pp.97-98.

³⁸ *EASP*, XIV, p.30.

³⁹ 「ロッチデール公正先駆者組合」に関しては、中川雄一郎『イギリス協同組合思想研究』

(日本経済評論社、1984年)第4章参照。

⁴⁰ VDI, VII, p.116.

⁴¹ Andrew Vincent and Raymond Plant, *op.cit.*, 1984, p.121.

⁴² 事実、コールの「ギルド社会主義」は、いわば「フェビアン協会」の官僚主義、集産主義への批判から生まれたものである。日下、前掲書、1967年、130-132頁、藤原保信『二〇世紀の政治理論』(岩波書店、1991年)63頁。

⁴³ 日下喜一、前掲書、1967年、101-126頁、名古忠行、前掲書、1987年、170-194頁参照。ただし、名古忠行氏は、近時、ウェッブ夫妻は「決してたんなる国家社会主義者とか官僚的社会主義者ではなかった」としている。名古忠行『イギリス社会民主主義の研究—ユーロピアと福祉国家—』(法律文化社、2002年)189頁。

⁴⁴ ウェッブ夫妻の対ソ認識、関係については、水谷三公『ラスキとその仲間』(中央公論社、1994年)181-187頁参照。

⁴⁵ Bernard Bosanquet (ed.), *The Quintessence of Socialism. By Dr.A.Schäffle. English edition translated from the eighth German edition under the supervision of Bernard Bosanquet* (London: Swan Sonnenschein, 1889).

⁴⁶ Sidney Webb, "Socialism in England", *Publications of the American Economic Association*, Vol.4, 1889, p.41. ただし、シェフレは、シュンペーター (Joseph Alois Schumpeter: 1883-1950) が指摘したように、社会主義者ではなく、「社会有機体」説に立った経済学者であると一般には理解されている。シュンペーター、東畑精一訳『経済分析の歴史3』(岩波書店、1957年)970頁、同『経済分析の歴史4』(岩波書店、1958年)1794頁。また、ボザンケのシェフレに対する共感が、ボザンケの「わたしは、社会主義の土台はまだ個人主義的であるという著者〔シェフレ〕の確信に徹底的に同意するものである」と述べていることから明らかに、あくまで社会主義と個人主義との関係についてのシェフレの見解に対するものであったことを見過してはならない。Bernard Bosanquet, "Preface" to A. Schäffle, *The Impossibility of Social Democracy; being a Supplement to "The Quintessence of Socialism"*. Translated from the fourth German Edition by A. C. Morant (London: Swan Sonnenschein, 1892), p.viii.

⁴⁷ McBriar, *op.cit.*, 1987, p.114.

⁴⁸ Sidney Webb, "The Moral Aspects of Socialism", *International Journal of Ethics*, Vol.7, 1897, p.80.

⁴⁹ Sidney Ball, "The Moral Aspects of Socialism", *International Journal of Ethics*, Vol.6, 1896, p.294, 308. ただし、実際には、ボザンケと「フェビアン協会」間にも種々の共通点がない訳ではない。例えば、マクブライアが指摘するように、「フェビアン協会」はボザンケと同様に「道徳的社会主義」と「経済的社会主義」をめぐる議論を経て誕生している (McBriar, *op.cit.*, 1987, p.114.)。また、ウェッブ夫妻が「フェビアン社会主義」に関して、「我々は、我々自身の個人的な発展を完遂させることよりも、我々がその一部を形成する社会有機体を改善するのに一層の注意を払わねばならない」と述べ、ボザンケと同じく「社会」を「機械」としてではなく「有機体」と理解していることや (Shaw(ed.), *op.cit.*, 1920, p. 58, Cf., A. M. McBriar, *Fabian Socialism & English Politics: 1884-1918* (Cambridge: Cambridge University Press, 1962), p.157.)、ボールの論評に見られるように、ボザンケと同様、その協会が「有害な社会制度の除去による人間性の改革」という優れて「理想主義的」な目的を他の社会主義団体と一線を画して持ち合わせていることも看過されてはならない。McBriar, *op.cit.*, 1987, p.174, ウラム、前掲書、1968年、118頁。

⁵⁰ ブルース、前掲書、1984年、310頁。

⁵¹ この間の経緯については、安保則夫「1905-9年の王立救貧法委員会について—イギリス失業政策史との関連において—」(関西学院大学経済学研究会『経済学論究』第35巻第1号、1981年)43-48頁参照。

⁵² McBriar, *op.cit.*, 1987, p.175.

⁵³ 安保則夫、前掲論文、1981年、49-50頁。および José Harris, *Unemployment and Politics* (Oxford:

Clarendon, 1972), p.247. 小山路男『西洋社会事業史論』(光生館, 1978年) 212頁。

⁵⁴ *Reports of the Royal Commission on the Poor Laws and Relief of Distress*, Cd.4499, 1909, Royal Warrant, p.vii. なお、主たる委員の横顔については、大沢真理『イギリス社会政策史』(東京大学出版会, 1986年) 244頁, 註12) 参照。

⁵⁵ 高野史郎「1930年救貧法(統一)法の成立過程(上) - 1909~1930 -」(『明治学院論叢社会学・社会福祉学研究』第175号, 1971年) 53頁。

⁵⁶ *Reports of the Royal Commission on the Poor Laws and Relief of Distress*, Cd.4499, 1909, Majority Report, p.422.

⁵⁷ *Reports of the Royal Commission on the Poor Laws and Relief of Distress*, Cd.4499, 1909, Separate Report, p.1208. Cf., Vincent, *op.cit.*, 1984, pp.347-348.

⁵⁸ Mowat, *op.cit.*, 1961, pp.160-161, p.164.

⁵⁹ Beatrice Webb, *Our Partnership* (London: Longmans, Green and Co., 1948), p.432.

⁶⁰ E. P. Bosanquet to Helen Bosanquet, 19 Feb. 1909, Bosanquet Papers, quoted by McBriar, *op.cit.*, 1987, p.285.

⁶¹ マーガレット・コール, 久保まち子訳『ウェブ夫人の生涯』(誠文堂新光社, 1982年) 131頁。マクブライアは、「少数派報告」作成に見られたようなウェブ夫妻における連携が、「多数派報告」作成にさいしてのボザンク夫妻に存していたかに関しては定かではないとしている。McBriar, *op.cit.*, 1987, p.285.

⁶² Beatrice Webb, *op.cit.*, 1948, p.452.

⁶³ Edward R. Pease, *History of the Fabian Society* (London: A. C. Fifield, 1916), p.215.

⁶⁴ 『ソシオロジカル・レビュー』での論争に関して、シドニー・ウェブとボザンクのどちらが先に稿を起したかについては研究者によって意見が分かれている。マクブライアはウェブが議論をおこし、その論文を見てボザンクが反論したとしているが、ヴィンセントはボザンクが先でそれへの応答としてウェブの主張を見ている。McBriar, *op.cit.*, 1987, p.323, p.323n, Vincent, *op.cit.*, 1984, p.357. 本稿ではボザンクの議論がウェブの論文への反論となっていると考え、マクブライアの見解を採用した。

⁶⁵ Sidney Webb, "The Reports of the Poor Law Commission. II. The End of the Poor Law", *The Sociological Review*, 1909, Vol.2, No.2, p.128.

⁶⁶ *Ibid.*, pp.120-130.

⁶⁷ Sidney Webb and Beatrice Webb, *English Poor Law Policy* (London: Longmans, Green and Co., 1910), pp.270-271, pp.267-268, pp.275-277.

⁶⁸ Sidney Webb, *op.cit.*, 1909, p.133.

⁶⁹ *Ibid.*, p.135.

⁷⁰ *Ibid.*, p.135.

⁷¹ *Ibid.*, p.137.

⁷² ウェブはこのほかに多数派の唱える「公的扶助当局」が非民主的であると批判している。*Ibid.*, pp.137-138.

⁷³ Sidney Webb and Beatrice Webb, *op.cit.*, 1910, p.281.

⁷⁴ *Royal Commission on the Poor Laws and Relief of Distress*. Reports on Scotland, Cd.4922, 1909, pp.274-281.

⁷⁵ Sidney Webb and Beatrice Webb, *The Prevention of Destitution* (London: Longmans, Green and Co., 1920), p.9.

⁷⁶ Sidney Webb and Beatrice Webb, *op.cit.*, 1910, p.282.

⁷⁷ Sidney Webb, *op.cit.*, 1909, p.131.

⁷⁸ *Ibid.*, p.132.

⁷⁹ *Reports of the Royal Commission on the Poor Laws and Relief of Distress*, Cd.4499, 1909, Separate Report, p.1006.

⁸⁰ Sidney Webb, *op.cit.*, 1909, p.138.

⁸¹ *Reports of the Royal Commission on the Poor Laws and Relief of Distress*, Cd.4499, 1909, Separate Report, Pt. II, ch.v.

- ⁸² Sidney Webb, *op.cit.*, 1909, pp.138-139. なお、「少数派報告」を作成したベアトリス・ウェッブは、労働能力者についての諸提案は前出の「救世軍」のウィリアム・ブースに従っている、と述べてブースとの政策の連続性を示唆している。Beatrice Webb, *op.cit.*, 1948, p.369.
- ⁸³ Bernard Bosanquet, "The Reports of the Poor Law Commission. I. The Majority Report", *The Sociological Review*, Vol.2, No.2, 1909, pp.109-126, *EASP*, XIV, pp.231-252.
- ⁸⁴ Bernard Bosanquet, "Charity Organization and the Majority Report", *International Journal of Ethics*, Vol.20, 1910, pp.395-408, *EASP*, XIV, pp.253-264.
- ⁸⁵ *EASP*, XIV, p.233.
- ⁸⁶ *EASP*, XIV, p.231.
- ⁸⁷ *EASP*, XIV, p.237.
- ⁸⁸ *EASP*, XIV, p.239.
- ⁸⁹ *EASP*, XIV, p.238.
- ⁹⁰ *EASP*, XIV, p.233.
- ⁹¹ *EASP*, XIV, p.245. なお、ボザンケは、「公的扶助当局」が非民民的であるとの前出のウェッブの批判に対し、それを事実誤認とし、かつデモクラシーのみに判断の基準を求めることに異論を唱えている。*EASP*, XIV, p.237.
- ⁹² *EASP*, XIV, pp.235-236.
- ⁹³ *EASP*, XIV, p.236.
- ⁹⁴ *EASP*, XIV, p.249.
- ⁹⁵ *EASP*, XIV, pp.249-250.
- ⁹⁶ *EASP*, XIV, p.250.
- ⁹⁷ *EASP*, XIV, p.239, 259.
- ⁹⁸ *EASP*, XIV, p.259.
- ⁹⁹ *EASP*, XIV, p.240.
- ¹⁰⁰ *EASP*, XIV, p.241.
- ¹⁰¹ *Reports of the Royal Commission on the Poor Laws and Relief of Distress*, Cd.4499, 1909, Majority Report, pp.423-25.
- ¹⁰² *EASP*, XIV, p.260.
- ¹⁰³ *EASP*, XIV, p.261.
- ¹⁰⁴ *EASP*, XIV, pp.262-263.
- ¹⁰⁵ *EASP*, XIV, p.250.
- ¹⁰⁶ *Reports of the Royal Commission on the Poor Laws and Relief of Distress*, Cd.4499, 1909, Majority Report, Pt.IV, paras., 610, 615.
- ¹⁰⁷ *BBF*, XX, p.48.
- ¹⁰⁸ Thomas, *op.cit.*, 2000, p.116.
- ¹⁰⁹ J. H. Muirhead, "Bernard Bosanquet as I Knew him", *The Journal of Philosophy*, Vol.20, No.25, 1923, p.675, Letwin, *op.cit.*, 1965, p.339.
- ¹¹⁰ Harris, *op.cit.*, 1944, p.33.
- ¹¹¹ Vincent, *op.cit.*, 1984, p.348.
- ¹¹² C. L. Mowat, "The Approach to the Welfare State in Great Britain", *American Historical Review*, Vol.58, 1952, p.58.
- ¹¹³ Kathleen Woodroffe, "The Royal Commission on the Poor Laws 1905-09", *International Review of Social History*, Vol.22, No.2, 1977, pp.137-164.
- ¹¹⁴ Jane Lewis, "Family Provision of Health and Welfare in the Mixed Economy of Care in the late Nineteenth and Twentieth Centuries", *The Society for the Social History of Medicine*, Vol.8, No.1, 1995, p.16.
- ¹¹⁵ Emmet, *op.cit.*, 1989, p.109.
- ¹¹⁶ たとえば、社会福祉の専門書ではなく、そのコンパクトな入門書にあっても、この点は指摘されている。一番ヶ瀬康子他『社会福祉入門』（有斐閣、1979年）114-115頁。
- ¹¹⁷ 榎原朗『イギリス社会保障の史的研究Ⅰ』（法律文化社、1973年）437頁。
- ¹¹⁸ G・D・H・コール、林健太郎他訳『イギリス労働運動史Ⅲ』（岩波書店、1957年）第3

章。

¹¹⁹ 高島進『イギリス社会福祉発達史論』（ミネルヴァ書房，1979年）154頁。

¹²⁰ 岡真人「ウェッブ夫妻の社会主義像試論」（『社会思想史研究』第2号，1978年）139頁。

¹²¹ 名古、前掲書、2002年、235-236頁。

第9章 ボザンケの国際関係論

1. 「国際社会」

ボザンケの国際関係に関する議論を明らかにするために、まず世界の中の「国家」をボザンケがどのように理解していたかを見なければならない。ボザンケは「国家」と世界の関係を次のように述べている。

「端的に言えば、国家はアーク (ark)、つまり箱舟である。その箱舟の中で、個々の市民の頭脳と心 (head and heart) の財宝全体が、無秩序でありかつ敵意に満ちている世界のただ中で保持されかつ守られるのである。」¹

そしてボザンケによれば、こうした世界を漂う「箱舟」としての「国家」こそ我々を育て、我々を我々たらしめるものである。ボザンケは言う。

「このように観察された場合、我々の国 (country)、国家は単純に我々がもつすべてである。数え切れないほどのさまざまな要求が国家の外から我々のもとにやってくるが、しかしそれらすべては皆国家を通じてであり、国家を条件としている。(中略) 国家なしでは、我々は何ものでもなく、まただれでもない。国家は我々にとって世界の価値の媒介者 (vehicle) である。」²

このように、ボザンケは、「国家」の中で人間や文明といった「財宝」は世界の荒波から守られると論究する。そしてこうした「国家」を支える共通の経験や伝統は、前述のように「ネーション」と深い関係にあるとボザンケは説く。ボザンケは言う。

「広く言えば、国ないしネーションの限界は、共通経験の限界である。つまり人々が同じ精神や感情を共有し、そしてお互いの生き方を理解することができ、お互いを大目に見ることができるような共通経験の限界である。」³

それゆえ、「世界」における「国家」は「ネーション」「民族」を限界とする「民族国家」、つまり「国民国家」でなければならない。前述のように、ボザンケは、古代ギリシャのポリスにはじまるさまざまな「国家」の諸形態の中から近代の「国民国家」を真の「国家」と理解し、それを「そのメンバーが共通の経験によって効果的に結び付けられた最も広範な編成」⁴と捉えていたが、その点は、国際関係の面からも論証されている。

では、国際社会における「国家」の対外的な条件とはどのようなものであろうか。この点を、ボザンケは次のように述べている。

「国家の必然的な使命を果たすために、国家は結局強くなければならないことを必要とする。ナポレオンの時代を生きた人々はこれに関して疑いをもつものはいない。国家が自らを助けることができないのなら、一体だれが国家を助けるというのだろうか？」(強調－ボザンケ)⁵

「国家は我々の財宝であるだけでなく、それは我々の財宝を運ぶアーク、つまり箱舟でもある。“世界の中では”正義 (right) は力を通じてのみ唯一浸透する。それゆえ、戦争における強さ (strength) は、国家の機能の中で国家がまず最初に果たすべき条件である。」⁶

そしてボザンケによれば、こうした強靭さをもつことこそ「国民全体」(nation) の尊厳

の一部である。ボザンケは言う。

「無論、強くあることは個人の義務であるように国民全体の義務である。それは単なる予防措置や保険以上のものである。それは個人の人間性ないし発展の一部であり、また国民全体の尊厳の一部である。」⁷

こうして、ボザンケは国際社会での「国家」の第一条件として戦争における強力さ、つまりパワーを提示する。

それでは、こうした「国家」からなる国際社会の実態はどのようなものであろうか。ボザンケによれば、こうしたパワーをもつ「国家」が集まる国際社会では、「国家」が内的に持ち合わせる「非常に高い程度の共通経験、伝統、そして熱意」や「一般意志」が存在せず、その結果国際社会は常に不安定性を帯び、「国家」も他国の圧力との緊張関係にさらされる。そしてある「国家」が、別の「国家」ないし勢力からの干渉で自らの正義や安全が危機にさらされる場合、「国家」による武力行使もやむを得ない。ボザンケは、「国家は〔自国の〕道徳的諸利害の守護者」⁸であるとして、次のように論ずる。

「非常に不完全かつ不確実な世界では、力によって力を撃退するような準備が必要であり、時にはウルティマ・ラティオ（ultima ratio）つまり最終手段によって、危険にさらされている大義（a good cause）を支持することも必要である。」⁹

それゆえ、ボザンケの場合、世界を一つの「コミュニティ」ないし「国家」として扱うことは基本的に不可能であり、また国際社会をつかさどる裁判所や国際法のようなものも基本的には存在し得ない。ボザンケは言う。

「それゆえ、これまでのところでは分散した諸国家の外部及びその上部に共通の心や力をもった一般意志や、“プラエトル”としての法務官、つまり力を表現している裁判官は存在せず、あるのはせいぜい“裁定者”だけであるがゆえに、すべての国際法や条約、慣例は、実際には単に多くの特殊意志のもろもろの同意にすぎず、絶対的に独立した諸統一体のさまざまな意志の同意に過ぎない。その限りで、いろいろな民族つまり国民全体はお互いにとって、昔の著述家書いたように自然状態の中にあり、社会が発明される前の措置された、（しかし完全に想像上の）諸個人のごとくである。」（強調－ボザンケ）¹⁰

「有効な国際法の不在によって、正義が力によって防御されなければならなかったことは疑う余地がない。」¹¹

こうして、ボザンケは国際関係における「国家」を原子論的個人主義の「個人」になぞらえて、かつてホッブズが唱えたような「自然状態」が国際関係において現出していると説く。それゆえ、ボザンケの場合、こうした「自然状態」、つまり無法地帯の国際社会においては、カントらが唱えた国際的平和機関などは非現実的な提唱となる。ボザンケはヘーゲルに依拠しつつ、次のように論究する。

「ヘーゲルは、人道にかなった慣例、協定、諸規則、そして諸条約はありえないし存在しない、とは述べていない。国際法全体は、条約は順守されるべき、という原理に依拠している。しかし、こうしたものすべての背景には、お互い制限された地域において絶対的

であり分散している、その個々の力というものに関しての厳しい現実がある。その結果、実際は、国際法や国際的習慣の枠組み全体はまさに分散した諸意志の同意であり、単一的な一般意志の表現ではない。究極的かつ根源的には、こうした分散した諸意志の各々は、各々自身の幸福に関するそれ自身の概念によって決定されるし、またそうされねばならない。これは、カントやノーマン・エンジェル（Norman Angell: 1874-1967）によって示唆されたような平和のための同盟や連邦制（federations）という方策の中の難点であるとわたしは思う。それらは純粹に事実上（*de facto*）のことである。それらは堅固な共同社会の精神に依拠していない。そしてあらゆる強力な同盟は、その事実によって、それに抗う強力な反対の同盟を、戦争の重大な危険をはらみながら生み出す傾向にある。」¹²

「[国家間同盟のような] こうした統一体の巨大システムが少しでも別のシステムの行く先を侵害したなら災厄は不可避免的なものになる。（中略）恐らく、間一国家的（inter-state）な地域や、あるいは連邦的な組織を拡大することはすばらしいことである。しかしその拡大は、もし統一の生きた意志や感情がそれとともに相並んで拡大しないならば名目的なものにすぎない。」¹³

こうして、ボザンケは、国際法や国際的な習慣、さらには国家間の同盟や連邦制を、「一般意志」ではなく諸国家の「分散した意志の単なる協約」に基づく極めて脆弱な組織と理解し、同時にそうした組織の結成による対抗勢力発生危険性をも指摘する。つまり、ボザンケの場合「我々は国家をさほど要求しないのではなく国家をより要求する」¹⁴ことになる。

さらに、ボザンケによれば、こうしたアナーキーな国際社会では、「国家」の道徳と「個人」の道徳は異なるものとなる。ボザンケは言う。

「ここから言えることは、私的な個人の道徳的立場、すなわち以前に秩序づけられ組織された社会の中で、社会に承認された権利の基礎の上で自らの細かい義務を実施する、という個人の道徳的立場と、国家の道徳的立場、すなわち個人が“世界のなかで”あらゆる危機に直面しているときにその内部で生きることができるような組織された社会を供し、かつ保持しなければならない、という国家の道徳的立場とは根本的な相違があるということだ。道徳の仕事と国際政治の仕事は、両者が協同する目的は同じであるが、原理的に異なる。道徳の直接的な仕事は人生（life）を生きることであり、国際政治のそれは、人生を送ることができるような世界を供することである。」¹⁵

「世界を維持することは世界で生きることとは異なるように、国際政治は個人の道徳とは異ならねばならない。」¹⁶

そしてボザンケは、そうした事態の原因を国際社会のアナーキーそのものに求める。ボザンケは言う。

「私的な個人にとって、主に、少なくとも彼が何をなすべきか、そしてなすべきではないか、を知るのは全く容易である。彼は承認された権利と義務のスキームの中で生きる。そして彼の法的な立場及び受け入れられた義務の立場から出発すれば、彼は自分が利己的

にふるまっているか寛大にふるまっているか、粗暴にふるまっているか丁重にふるまっているか、優しくふるまっているか冷たくふるまっているかを理解することができる。(中略)しかし、原理的に国家はこうしたガイドをもたない。国家は承認されたスキームの中で秩序づけられた生活を送らない。国家が正しいのか正しくないのか、優しいのか寛大なのかは分からない。国家にとって、すべてのケースは変転する諸条件、そして新たな諸条件のもとにあり、そして国家は国家自身の根拠において唯一の裁判官である。」¹⁷

こうして、ボザンケは、「世界の海原で国家はいかに行為すべきか」を示す国際的な道徳的指針が国際社会では欠落しているがゆえに、「国家」のみが行為の唯一の判断主、つまり「裁判官」になると論ずる。それゆえ、ボザンケの場合、「国家」と「国家」が衝突したとき、これを仲裁する別組織というものは基本的に存在しない。衝突した諸国家を裁定し調停するのは、最終的には「戦争」以外にはありえない。ボザンケは言う。

「諸国家は特定の独立した諸統一体であり、それら自身、それらの諸相違や諸名誉の究極的な裁判官である。ペリクレスが言ったように、別の国家からの命令に耐えるであろうような独立した統一体は存在しない。もし耐えるようであれば、その独立はなくなってしまふ。そしてこうしたポイントに立てば仲裁はありえない。戦争は究極的な裁定者である。(中略)そして強くあることが諸国家にとっての義務となるのである。」(強調ーボザンケ)

18

「もし、こうした中で、それら分散した諸国家が衝突したならば、戦争を除いては究極的な解決策は存在しない。」¹⁹

無論、こうした「戦争」という行為は、それが国際関係における「国家」の活動であることに加え、その行為そのものが、前述のように人間の「実在意志」や「一般意志」の行為であることから、道徳的に批難されえない。それゆえ、戦争といった「国家」の行為はまた、殺人や窃盗といった私的犯罪とは性質を異にするものである。ボザンケはいう。

「戦争、財産没収、負債の支払い拒絶といった損失を科する公的行動は、殺人や窃盗とは全く異なる。そうした行為は、私的な個人の行為ではない。それは法の侵犯でもない。(中略)それは、最高権力の行為である。」²⁰

そしてこの両者を一緒くたにすることは、その関係を誤解し、両者を混同しているに過ぎない。ボザンケはいう。

「しかし、そうした〔戦争、財産没収、負債の支払いの拒絶といった〕手段にコミュニティの内部での諸個人の似通った諸行為から借用された名辞を適用すること、言わば誹謗的な述語のもとでそうした手段を諸個人に負わせること、そして道徳的判断を私的な諸行為に基づくのと同様な意味でそれらに下すことは、単なる混乱である。」²¹

「そのうえ、我々は、損失や損傷を惹起する主権の認められた公的諸行為が、私的な犯罪(private offences)という名のもとで諸個人に転嫁されうること否定する。つまり、ある国(country)が戦争を行うとき、誰かが殺人罪であるとか、ある国が支払いを拒絶し、財産を没収し、あるいは併合の政策を採用するとき、誰かが窃盗罪である、といったこと

を否定する。」²²

それゆえ、「戦争」は、ボザンケにあっては「実在意志」や「一般意志」に裏打ちされた公的な正しい行為である。

こうして、ボザンケは「国家」が強くなければならない理由を示しながら、諸国家の間での紛争や戦争の第三者機関による処理を基本的に否定し、「戦争」が「国家」の正当な活動であることを訴えるのである。つまり、ボザンケにあっては、戦争はまさしく「国家」の資質が問われる「現実の激烈なテスト」²³である。

以上のような議論から、ボザンケが全世界の人間の連帯やその普遍的性質を示唆する「人類愛」(humanity)という観念にたいしてネガティブな態度をとることが予想される。ボザンケはこの点を「言語」を例に用いながら説明する。ボザンケによれば、世界各国のさまざまな言語は「人類にとってお互いの精神に入り込む一つの手段」であり、相互理解への「障壁となるべきではない」が、しかしそれは「その栄光及び個性において維持」されるべきものである。それゆえ、ボザンケは、各国の言語をすべて廃棄して作られる普遍的な人工言語のようなものを否定して次のように述べる。

「民族の諸言語の代用としてのそれ〔普遍的な言語〕は、現実のあらゆる民族精神つまり国民精神と両立しない死んだレヴェルの知性、すなわち文学及び詩の破壊を意味するであろう。」²⁴

このようにして、ボザンケは言語を例にとり、それぞれの「国家」のそれぞれの国民的業績を称揚しながら「人類愛」といった人類の共通性に関する観念を基本的に否定する。それゆえ、ボザンケの場合、「人類愛」をベースにした「世界国家」「世界連邦」もまた存在し得ない。ボザンケは「実際には人類愛の共同社会は存在しない」と述べ、「人間性の質」(quality)は、それが文化であろうと人道であろうと、すべての人間の生活に共通しているものにおいてよりは、むしろ偉大で文明的なさまざまな民族つまり国民全体の生活」の中において「発見」されうると断言する²⁵。この点をボザンケは次のように言う。

「地球上の人間すべてを一つの集合体として考えるさい、我々は彼らの中に共通の性格を見いだすことはできない。(中略)したがって、端的に言えば、〔国家の目標である〕最善の生活を実現する義務は、人類の群衆にたいする義務と和解するようには示され得ない。我々の主要な忠誠は質というものに対してであり、群衆にたいしてではない。」²⁶

こうして、ボザンケは「人類愛」とともに「世界国家」の観念を基本的に否定するのである。

以上、ボザンケの国際社会における「国家」の位置の分析を導入として、彼の考える国際関係の実態を明らかにしてきたが、そこでは「国家」の条件として、まずそれが「国民国家」であること、そして強靱さ、すなわちパワーをもたねばならないこと、さらにそのような唯一のアクターとしての「国家」が数多く存在する国際関係では国家間の同盟や連邦制は基本的に否定され、「戦争」が唯一の諸国家を裁定するものであることが示された。こうしたボザンケの議論は、一見するところでは、世界秩序における道義の要素を無視す

る、国際関係論上の「古典的リアリズム」、あるいはサビジャー (P. Savigear) の指摘のように、パワーと国益を考慮した「リアル・ポリティーク」(Realpolitik) ないし「勢力均衡」(balance of power) の立場に接近するものとも言えよう²⁷。しかし、ボザンケは絶対的に「国家」のみを称揚し、「国家」の枠組みを超越する政治組織の存在を否定した訳ではなかった。例えば、ボザンケは次のように述べている。

「しかし、私は国民国家よりも大きな統一体がこうした諸条件を満たしうるようなことは決してない、と示唆するのではない。(中略) また、私は、世界国家においてすらある遠い時点で実現されるのは不可能である、と言うのでもない。」²⁸

また、ボザンケは「人類愛」という観念に関しても、その観念は「かなりの程度完全である哲学的思考の中に場所を確保しなければならない」²⁹としてその価値を認めている。さらに、ボザンケは「最高の意味での人類愛」という観念が「人間のいるところに現出していないとは言わない」³⁰として、「人類愛」の存在そのものも部分的に承認している。つまり、ボザンケは「国民国家」を越えた国際法や国際的同盟、「世界国家」や「人類愛」等を完全に否定するのではなく、それを将来における「可能性」、言い換えれば人類の進歩によって遂げられる一つの目標と捉えるのである。実際、ボザンケは、その可能性を実現させるための方策を、以上の現状分析的な議論を前提にしながら、独自の戦争論、平和論、そして「愛国心」(patriotism) 論を展開することによって明らかにしている。

2. 戦争と平和－「愛国心」－

ボザンケは、戦争の発生要因を分析し、戦争の要因を除去するための方策や条件－平和への途－を提示し、独自の「愛国心」を唱導することで、「国家」を越えた国際的な政治組織の成立を明確に承認している。それゆえ、最初にボザンケの考える戦争の具体的な発生要因を検討しなければならないが、その前に戦争そのものの究極的な原因ともいえるべき「悪」全般をボザンケがいかに理解していたかを簡単に検討する必要がある。

ボザンケは、戦争を人類において基本的に不可避なものと理解する。ボザンケはいう。

「戦争は不可避の裁定者であり、国家は戦争というテストにすべてかかっているのである。」³¹

そして戦争がなくなる究極的な理由を、ボザンケは、「悪」全般が人間界においては決して消滅するものではなく、また現状でも常にそれはこの世界で跳梁跋扈していることに求める。ボザンケは戦争を「悪」全般と結び付けながら次のように論及する。

「わたしには、悪と災難が世界では永続的であるに違いないのは確実なことだと思われる。なぜなら、人間は自己矛盾的な存在であるからだ。(中略) そして戦争を、不正の他のあらゆる形態とは別個の特別の悪魔によって操られるかの如く、例外的なケースとして扱う理由は原理的にあり得ない。」³²

こうして、ボザンケは、人間が有限な存在である以上、戦争は例外的な現象ではないと論ずる。つまり、ボザンケにとって戦争は一つの災害であり、ある意味で日常的なもので

ある。「災厄が我々に降りかかってきたとき、真に驚くような人間はいないように思われる。」³³それゆえ、戦争は「通常の人々の単純かつ自然な結果」である³⁴。ボザンケは言う。

「人間は良心をもち、彼が生活以上に価値づけるものをもち、それでもなお彼の良心は誤りがちである間は戦争の根は存在するのである。」³⁵

このようにして、ボザンケは戦争の非消滅性を「悪」全般の観点から指摘して、国際平和に関してややペシミスティックな態度を取る。しかし、このことは、ボザンケが戦争の勃発を礼讃したり、あるいは平和への希望を捨てていることを意味しない。何となれば、ボザンケは戦争発生要因分析を通じて、平和への方策を示唆しているからである。

ボザンケによれば、国際社会において「国家」の対外的な方向を決定するのは、外交と似た類いのものではない。「国家の精神と諸目的が明白に示され、そしてその行動の基礎が確立されるのは国内政策においてである。」³⁶それゆえ、戦争が勃発する最大の要因は「国際的問題」ではなく「国内的問題」に存する。ボザンケはこの点を次のように論ずる。

「諸事実により接近して観察してみると、明白なことは、国外的な衝突 (conflict) の原因は国内の混乱 (disorganization) にあるということであり、概して国内に秩序のあるところには国外的な衝突の要因はないということだ。喧嘩腰の人は彼の精神においてよく秩序づけられていない。彼は、精神において確実に、そして肉体においてもかなりの可能性で悪く組織されているのだ。(中略) 戦争の原因は国家が内的に病気になったときであるとプラトンは言う。諸国家が内的に分裂すればするほど諸国家は外的に衝突するようになる。」

37

それゆえ、ボザンケの場合、戦争を回避する最善の方策は、「国家」をより広範な国際的組織の中へと組み込むことではなく、「国家」そのもの、つまり国内をより良く秩序づけることにある。ボザンケの言葉を用いれば、平和のために必要なものは「国家」の「内的騒動 (internal distraction) の諸原因の除去を至る所で確保するような誠実かつ辛抱強い努力」³⁸であり、また「歴史によって割り当てられたその領土」内で「生活しているすべての人間の諸能力に自由範囲 (free scope) を与える、という国家の適切な目標」を「国家」が「達成する」ことである³⁹。それゆえ、戦争の要因は、「国家」がこうした目標を達成できない状態にあること、つまり「国家」内部に現存する現状への不満に求められる。ボザンケは言う。

「満足している人々は戦争をすることを欲さない。そしてよく組織された共同社会の中では人々は満足している。戦争は、共同社会における不満の要素から生ずるに違いない。つまり、内部で自らが欲するものを獲得していない人々 (あるいはそれはもっているがしかしそれを失うことを心配している人々)、それゆえ対外的な冒険で、安全保障ないし利益を模索している人々である。」⁴⁰

そしてボザンケは、こうした「共同社会のより良い組織に抵抗する」不満分子の具体例として、「軍」を排他的に掌握する「特権階級」や「抑圧された宗教的信仰」、さらに「抑圧された国民感情」等を挙げ、これらすべてを「国家の外部に自らの望みや野心を投じて

しまいがちであり、そして他の集団において国家に対する憤慨を生み出しがち」なものと規定する⁴¹。さらに、ボザンケは、こうした「国家」内部の不満が国際関係に反映された具体例として、自由貿易に対する抑圧・侵害を挙げる。ボザンケは言う。

「さまざまな国民国家からなる体系は、貿易及び交流に関する普遍的な自由を含む。(中略)これにたいする干渉を、私は内的な騒動の結果であると捉える。そしてそれは、戦争の主な要因である“あなたの利得は私の損失”という学説を生じさせるのである。」⁴²

こうして、ボザンケは「人間の交際への諸制限は明白に有害」⁴³であると論じて、保護貿易的な「敵意ある関税」を、戦争の要因としての「国内の混乱」の対外的具体化と理解する⁴⁴。

ところで、ボザンケによれば、「国家」がこのように無秩序・混乱の状態にあることは本来の「国家」の姿ではない。つまり、戦争が引き起こされるのは、「国家」が真の「国家」ではないからである。この点をボザンケは結論的に次のように明言する。

「したがって、戦争は究極的には国家が国家である限りにおいてではなく、国家が国家ではない限りにおいて、国家に属するのである。」(強調-引用者)⁴⁵

こうして、ボザンケは戦争を真の「国家」の属性とは理解せずに、それをあくまで偽りの「国家」の産物と理解する。ニコルソンの指摘のように、ボザンケの場合、戦争は「国家」の必然的な特徴ではなく、むしろ「国家」の「国家」としての自らの潜在性を満たすことに失敗している一つの兆候である⁴⁶。

さらに、ボザンケは「国家」の義務を平和の追求と関連させて述べる。ボザンケは「国家の義務」を次のように論究する。

「個人が究極的かつ永久に自らの良心に従わねばならないように、国家も自らの良心に従わねばならない。」⁴⁷

そして国際関係における「国家」の義務とは、「国家」間で結ばれる契約や条約を遵守することである。ボザンケはいう。

「しかしながら、約束と条約は公的目的を具体化する諸行為である。そしてここにおいて国家は、国家の側において、よき信頼を維持する義務がある。」⁴⁸

しかし、ボザンケによれば、「国家」は、こうした具体的な義務以上に、より重要な義務をもつ。それは平和への努力である。ボザンケはいう。

「国家は個人のように、そのさまざまな役割及びさまざまな関係に関して責任がある。そして国家は、もちろん、その諸責務やそこから結果として起こるものと首尾一貫する限りにおいて、平和を求め平和の達成に向かって努力するように義務づけられている。」⁴⁹

こうして、ボザンケは、「戦争」を人間が有限な存在である限りなくならないとしつつも、国際社会における真の「国家」の義務を平和の追求に求める。ボザンケによれば、戦争は「この上ない愚行」(the crowning stupidity)⁵⁰であり、「侵略を含むような目的に固執するのは国家の本性ではない」⁵¹。

それでは、こうした戦争を予防するために「国家」はどうしたらよいのであろうか。当

然ながら、戦争の要因は国内にあるのだから平和への一步は国内の整備からである。ボザンケは「平和への王道は自国で正しいことをする (do right at home) こと」として⁵²、次のように述べる。

「それゆえ、外的な関係の健全性は、まず第一に、そして真っ先に、自国の社会制度・政治制度内部での平等の精神、そして生活における最善なるものの承認にかかっているのであり、強力かつ巧みな諸国家の融合、あるいは諸共同社会の融合にかかっているのではない。」⁵³

つまり、ボザンケによれば、「戦争予防策」としてまず必要なものは、「国家」間の関係改善や「国家」間の見解の相違の修正、あるいは「国家」そのものの消滅ではなく、「国家」を前提としたうえでの国内の改善、つまり「国家」の秩序化・組織化であり、「利己主義や侵略と対峙する国家の本性」を実現させることである⁵⁴。それゆえ、ボザンケは、国際社会における「国家」の第一の機能をパワーに求めつつも、「国家」が国外にのみ視点を定めた過剰な軍備拡張には賛同しない。ボザンケはこの点を以下のように論じている。

「我々はこうした基礎で、平和を欲するなら戦争に備えよ (*si vis pacem, para bellum*)、という決まりにしたがって平和を確保することが企図されるなら、その計画は自己矛盾である、ということ認めなければならない。(中略) この矛盾が軍拡競争の根である。」⁵⁵

ボザンケはこうに述べ、「常に2つの有り得る対抗勢力の中で、各々が原理的に他の国家よりも強くなることを目的としなければならない」という「矛盾」こそが「あらゆる解決を排除している」⁵⁶として軍拡競争を否認する。それゆえ、前述のような、ボザンケの唱える「国家」の強靱さとは、他国に侵略されても安全を確保し得るような最低限の軍勢力を意味するものと解釈され得る。

ところで、ボザンケによれば、戦争を行わない真の「国家」を組織するためには、その「国家」の国民の「愛国心」が必要である。つまり、真の「国家」は真の「愛国心」があってはじめて内的な秩序を成立させ得る。ボザンケは「愛国心」に関して次のように言う。

「それゆえ、平和の源泉である愛国心は国家への日常的な徹底的な忠誠に存する。これは、特権や独占を排除する調和的な内的組織の手段であると我々は主張する。」⁵⁷

このように、ボザンケは国民の「国家」にたいする忠誠意識を真の「国家」の必要条件と理解する。しかし、ボザンケのいう「愛国心」は以上のような国への忠誠といった通常の意味合いだけを内包するものではない。ボザンケは、「国家」への忠誠の一例である「祖国のために死するは楽しく名誉なり」 (*dulce et decorum est pro patria mori*) という伝統的な愛国心を見くびる訳ではない⁵⁸としつつも、真の「愛国心は、共有されることによって滅じられないような最高善 (supreme goods)」をもつ「国」を、「我々が望むこと」にあると論ずる⁵⁹。つまり、ボザンケの場合、単に盲目的に国を愛したり、自国に「虚栄や私益の勝利」を望むという「愛国心」は否定され⁶⁰、逆に、忠誠を誓いつつ国が「最高善」や「最高価値」をもつことを、言わば要求的に訴えることこそ真の「愛国心」とされるのである。

さらに、ボザンケはこうした「最高善」などの「精神的な善」の特質を次のように論究

する。

「真実でありかつ安定したものは唯一精神的な善だけである。世俗的で物質的な諸目標は欺瞞的であり危険であり、また不和 (strife) の根である。(中略) 精神的な善によって、我々は、我々の部分 (portion) が縮小されることなく、他者によって共有され得るようなものを意味し、物質的な善によっては、そうされ得ないものを意味している。」⁶¹

こうして、ボザンケは「最高善」といった「精神的な善」によっては、人間の間の衝突や不和は惹起されないと論ずる。そしてボザンケはその根拠を、「最高善」や「最高価値」への信念に内在する特徴に求める。ボザンケは、「美、真理、親愛といった最高の諸価値への信念」には人間を「組織する力」(the organising power) があり、「最高の諸価値は拮抗するものでなくまた人を戦闘的にしえない」⁶²のものであると論ずる。それゆえ、ボザンケの場合、「国家」が「最高善」「精神的な善」、あるいは「真善美」といった「最高価値」をもつことは、「最高善」が人間と人間とを結び付けるように、「国家」と「国家」がそれによって調和的に結合・組織されることを意味している。したがって、国による「最高善」の所有を要求する前述の「愛国心」は、「国家」間の戦争を回避するための方策であり、また前述のような平和の追求を義務とする真の「国家」成立のための必要条件である。ボザンケはこの点に関して、「愛国心」と「一般意志」とを結び付けながら、新たな国際社会像を次のように提示する。

「我々が主張することはこうである。すなわち、このような愛国心によって包まれ、それゆえ憤慨の原因がないように組織され、また調和を認める目標や方法で結合された諸国家からなる世界には、すべての共同社会の統一体 (body)、精神、そして感情によって堅固に裏打ちされた (単なる外的な協約ではない) 真の一般意志が育つであろう、ということだ。こうした場合に、真の国際道徳が創造され、そして国際政治は、私的な道徳の本性へと、それらは決して同一ではないにせよより緊密に接近するであろう。」⁶³

かくして、ボザンケは、「愛国心」を通じて「国家」は真の「国家」になるのと同時に、「国家」の外殻は打破され、国際的な真の政治的組織・連帯、国家連合、国際道徳、そして世界的な「一般意志」が誕生すると論ずる。しかし、そうであるならば、「国家」に具体化されると論ぜられたボザンケのいう「一般意志」は、「国家」でその最終的かつ最も広範な具体化が完了し得ないことになる。ボザンケはいう。

「我々が理解することは、人間社会の本質はある共通の自己、生活、意志に存しており、そしてそれらは、社会のそのものによって、あるいは社会そのものにおける個人によって行使され、かつそれらに属する、ということである。我々がどの表現を選択するかは重要ではない。こうした共通の自己の真なるもの (reality) が、「一般意志」という名を授けられるのである。」⁶⁴ (強調－引用者)

つまり、ボザンケによれば、「一般意志」は「国家」を超えた政治組織にも具体化されるのである。したがって、前述の「愛国心」を含むプロセスを踏めば「平和のための国家連合」も人類にとっては可能なものとなる。ボザンケは言う。

「我々が主張することはこうである。すなわち、共有されることによって滅じられない最高善の国を我々が欲する、という愛国心は、諸価値の正しい評価を保証するものであり、それゆえ国内外で富と権力を扱うさいの正義及び合理的な組織を保証するものだということだ。こうした愛国心は、組織するという国家としての機能の完全さを欲しかつ支持しながら、本質的に戦争の諸要因を破壊する方向に向けられた唯一の力である。さまざまな民族つまり国民全体の嫉妬心や虚栄心といった、実体のない敵愾心の源泉ですら、究極的にはこうした愛国心をもつ同一世界では存在し得ない。こうした精神の気質は、諸国家の集団を内包する堅固な一般意志の唯一の見通しを供する。その発現形態としての、平和の強制執行のための諸国家の同盟はよき仕事をするであろう。」⁶⁵

つまり、「最高善」を国に求める「愛国心」は、諸国家をまたぐ世界的な「一般意志」の成長に貢献する、いわば「超国家的」な「愛国心」である。それゆえ、国際社会での政治組織に関して問題となるのは、もはやそれが「国家」であるか否かではなく、「愛国心」を通じて生まれる「超国家的」な「一般意志」をそれが具体化しているか否かである。ボザンケはその点を以下のように述べている。

「私見によれば、〔国民国家と超国家的な組織に関する問題への〕解答は一般意志の概念から抽出される。そしてその概念は、現実の共同社会の存在、そして同一の精神や感情を共有するような性質の存在を含んでいる。（中略）都市国家、国民国家、コモンウェルス、連邦制、世界国家は問題ではない。すべての強力の後には、一般意志がなければならない。そして一般意志は共同体の精神を表現しなければならない。その他の政府の装置はすべては外的なものであり、先制的なものである。」⁶⁶

さらに、ボザンケはこうした議論の延長として、人類全体が一般意志をもつ可能性についても言及している。

「私は強く理解する、もし人類が一般意志をもつことができれば、それは真の（real）共同社会の性格を発展させるに違いない、ということ。」⁶⁷

このようにして、ボザンケは「愛国心」の本質を、国民が自らの「国家」に忠誠を誓うということ以上に、国民が「国家」が「最高善」をもつように「国家」に要求することに求めることで、「国家」の枠組みを越えた「国際協調主義」（internationalism）の思想を自らの議論に取り込むことに成功する。ボザンケの国際関係論は、一度は現状分析的に「国家」のみからなる国際社会像を描くものであったが、しかしそれだけではなく、独自の「愛国心」概念の導入によって、「国家」を越えた政治組織をも承認する新たな国際社会像を描くものであったのである。

3. 外交政策批判と「国際連盟」

ところで、ボザンケは「国家」や戦争を巡るこうした分析をベースとして、当時のイギリス外交や国際情勢について多くの論評を行っている。実際、ウラムが指摘するように「ボザンケは、政治理論家でもありまた政治分析家でもあった」⁶⁸といえ、こうしたボザンケの

側面は、以上の彼の国際関係論の応用編ともいうべきものに相当することから看過されてはならない。

ボザンケは、当時の世界の支配的観念である帝国主義 (imperialism) の具体化としてのイギリス連邦 (the Commonwealth) に言及している。ボザンケによれば、イギリス連邦は前述のような「一般意志」に基づくものではない。ボザンケは言う。

「さまざまな民族からなるイギリス帝国は、その中に種々の保護領 (dependencies) が含まれている点で、〔一般意志の〕条件を満たさないと私は信ずる。」⁶⁹

「実際、イギリス連邦と呼ばれているような全体構造においては、はるか遠い地点でしか真の一般意志はありえない。イギリス連邦の本質は、文化のより低いレベルにある保護領を含むことである。」⁷⁰

また、ボザンケはイギリスのインドに対する植民地政策についても、以下のように述べている。

「イギリス人はある一つの効果的な自治共同社会をインド人全住民で建設することはできない。それは両者にとって悲劇であり、非効率であろう。」⁷¹

さらに、ボザンケは、イギリスの南アフリカに対する植民地政策、またその政策の延長としてのブーア戦争 (Boer war) に関しても、そこには「一般意志」の成長が見られないとしてイギリスの外交政策を批判する⁷²。ボザンケはいう。

「トランスバールのブーア (the Boers of the Transvaal) の事例において、(中略) 部外者が達せられる生活の価値について独善的に意見を述べることは思慮なきことである。」⁷³

また、こうした視座はボザンケの連邦制に対する評価でも同様であり、「連邦制は、アメリカ合衆国のように国民の様相を呈する明瞭かつ強い傾向を帯びないかぎり、不成功に終わりがちである」として、アメリカ以外の連邦制には消極的な態度を示している⁷⁴。こうして、ボザンケは、本章の前半で示された彼の議論を応用して、イギリスの対外政策やアメリカ以外の連邦制を「一般意志」の具体化、つまり真の政治組織とは理解しないのである。

しかし、ボザンケは、ウィルソン (Thomas Woodrow Wilson: 1856-1924) が提唱した 1919 年設立の「国際連盟」に対しては好意的な態度をとった。ボザンケの妻であるヘレンによれば、このボザンケの「国際連盟」に対する態度は次のようなものであった。

「かつて、彼は効果的な国際連盟の可能性をあまり信賴していなかったが、しかし後に彼はその確信的な支持者になった。」⁷⁵

さらに、ボザンケの友人である前出のミアヘッドも、ボザンケは当初、諸国家の同盟は「単にお互いに対する、より密集した諸強国の配列に通じがちである」ことから、なお「国際連盟」のような諸組織を信用しなかったが⁷⁶、「やがてボザンケは、1919年に設立された国際連盟の熱心な支持者になるに至った」⁷⁷と述べて、ボザンケの「国際連盟」に対する積極的評価を指摘している。

実際、ボザンケは、本章の後半で示された彼の議論を応用しながら、「国際連盟」を「愛国心」の結晶であり、世界的な「一般意志」に裏打ちされた国際的な組織と理解していた。

ボザンケは「統一するという営み」(the unifying activity)は「国家とともに終わることはできない」と明言して、「国際連盟」に見られるそのような諸国家の統一作業を肯定している⁷⁸。そしてボザンケは、完全な「一般意志」が「国家」という枠組みを越えた政治組織で見いだされるのであれば、「国民国家をより広範な権威の協同形態へと修正することにおいて技術的な困難は存在しない」と改めて論じて⁷⁹、「国際連盟」に対する期待を意欲的に次のように述べる。

「わたしは国際連盟を人類の希望と頼みの綱 (refuge) であると信じる。」⁸⁰

「もし国際連盟が実際のものとなれば“最高”(supreme)という言葉は国民国家に適用されるものとしては誤解させるものになる。」⁸¹

こうして、ボザンケは「国際連盟」の機能の十全な発揮に多大の期待を寄せるのである。

さらに、本章後半で明らかになったボザンケの主張、すなわち「国際協調主義」に関する主張は、陸相として軍制の大改革を行ったイギリスの政治家であり哲学者でもあるホールデンの『より高度な国民性』(Higher Nationality)での議論に対する賛辞という形でも確認できる。ホールデンは1913年に公刊されたこの著書の中で、イギリス帝国、カナダ、そしてアメリカ合衆国は伝統、理念、法、言語、利害において多くを共有していると論じ、その3カ国が「主権国家間の真の調和(unison)を打ち立てる」ために団結すべきことを提唱したが、ボザンケはこうしたホールデンの提唱を、真の「愛国心」や超国家的な「一般意志」に基づくものとして歓迎している⁸²。

加えて、こうしたボザンケの主張は、第一次世界大戦後にドイツをヨーロッパから排斥しようとする思想や運動を、ボザンケが批判するスタンスにも表れている。そもそも、ボザンケは、ヨーロッパがその歴史、文化、伝統に鑑みて、一つの「一般意志」ないしそれに準ずるものをもち得ると理解していた。ボザンケは言う。

「少なくともヨーロッパ人に関する限り、種々の国家は、プラトンやヘーゲルによって言われるように、種々の国民からなる一つの倫理的家族のメンバーである。それらは、個々の使命ないし役割によって特徴づけられ、そしてその使命ないし役割は〔ヨーロッパの〕あらゆる国家にたいして人間の生活への独特の貢献を供する。」⁸³

そしてこうした観点から、ボザンケは、大戦後、イギリスとドイツが「ヨーロッパにあるすべての共同社会」(強調-ボザンケ)とともに種々の仕事を「分担する」ことを期待する⁸⁴。それゆえ、ボザンケは当時のドイツ排斥運動やそれを支える思想を次のように厳しく批判する。

「しかし平和が戻ってきたとき、ドイツないしプロシアは意図的に屈辱を与えられ、ヨーロッパ諸国の家族から排除されることを要求する態度は、私の感覚にとっては実際に不愉快であるし、また私の判断では自己満足の態度であり、道徳的に極度に危険であり、政治的に馬鹿げているものである。」⁸⁵

こうして、ボザンケは、第一次世界大戦中は情動的に「連合国(Allies)の支持に全霊を傾けドイツの犯罪を呪」っていたものの⁸⁶、戦中時代から、戦後のドイツがヨーロッパから

排除されることを拒否し、ドイツとの協調路線を提唱しながら、「一般意志」や「愛国心」によって裏打ちされた「国際協調主義」的な議論を展開するのである。

こうした議論から、もはやボザンケの議論が国際社会において「国家」のみが絶対的な政治組織と理解し、国際的な政治組織を認めないとする指摘が誤りなのは明白であろう。ボザンケは、イギリス連邦や新たな連邦制には否定的であったものの、アメリカ合衆国や「国際連盟」、ホルデンの協調政策等に賛同し、自らが定義した「愛国心」や「一般意志」概念を用いながら、「国家」の枠組みを越えた政治組織を肯定してゆくのである。

4. ボザンケの国際関係論

このようにして、ボザンケの国際関係論は展開された。そしてそこでは、「国家」はパワーをもち、国際社会では「国家」が裁判官であり戦争が「裁定者」と位置づけられながらも、紛争や戦争の要因は「国際問題」としてではなく「国内問題」として扱われ、「国家」をより良く整備し秩序づけることで戦争は回避されると論ぜられた。さらに、そのような戦争を行わない真の「国家」を建設するためには、「国家」に対し「最高善」「精神的善」をもつように要求する「愛国心」が必要であるとされ、そしてその「愛国心」によって世界的な「一般意志」が成長し、「国家」の枠組みを超越する国際的な平和維持機構が成立され得るとも論ぜられた。つまり、ブーシェやカトリン(G. E. G. Catlin)、そしてギビンズ(John R. Gibbins)の指摘のように、ボザンケは確かに国際関係に関してペシミスティックではあったが、しかし「国家」がより高度で組織されたより包括的な道徳的コミュニティに取って代わられる可能性を否定せず⁸⁷、「国際連盟」の本分を認識し⁸⁸、国際的な道徳や倫理もまた「民族」や「国民」の境界線を越えて伝導されてゆくものだとすることを信じていたのである⁸⁹。それゆえ、ボザンケの国際関係論の特徴は、強いパワーをもった「国家」を大前提にしながらも、独自の「愛国心」、そして「一般意志」概念によって「国家」そのものを越えるプロセスもがその議論の中に組み込まれた点に求められる。特に、ボザンケの唱える「愛国心」は、同じくブーシェの指摘のように「国際協調主義」と両立しない概念ではなく⁹⁰、「国家」を愛することで「国家」を越えた政治組織を生むという、いわば「国民国家中心主義」と「国際協調主義」を橋渡しする概念として彼の国際関係論の中枢に位置するものと言える。その意味で、ホアンレの指摘のように、ボザンケの国際関係論とはまさに「愛国心の哲学」⁹¹であるといってもいいであろう。

ところで、このような議論には、前述のような国際関係論上の「古典的リアリズム」や「リアル・ポリティーク」、あるいは「勢力均衡」の側面は影を潜め、反対に20世紀になって大きく採り上げられた国際関係論上の「アイデアリズム」的な側面が看取される。何となれば、ボザンケが、世界的な「一般意志」の成長を前提にしながら、国際関係から過剰なパワーの要素を排除する平和維持機構を承認し、そしてまたそうした意志の前提である「正しいこと」、すなわち「最高善」や「最高価値」への共通感覚の存在を承認し、また軍備拡張や同盟間のパワーの対立を拒否し、「勢力均衡」による平和の到来を否定している

からである。しかし、無論、ボザンケは「国家」そのものの消滅や、戦争の絶対的消滅を唱えてはおらず、また「国家」の完全武装解除や絶対平和主義、また国への忠誠のない「愛国心」を承認してはいない。それゆえ、ボザンケの議論は「リアル・ポリティーク」あるいは「リアリズム」を十分認識したうえでの「アイデアリズム」の主張として捉えられよう。その意味で、カー（E. H. Carr）やジョードは、ボザンケを「国際道義などというものを信じようとしないうリアリスト」と位置づけたが⁹²、むしろ両方の思想を、ボザンケ独自の「愛国心」概念を導入することで融合させた思想であったといえよう。カトリンの指摘のように、ボザンケは「最高善」の諸国同盟と「国民国家」という「神の国」の両者によって貫かれた議論を展開しようとしていたのである⁹³。

さらに、こうしたボザンケの国際関係論が、前述のような彼の国家論と矛盾なく有機的に結びついていることもまた明白である。ボザンケによれば、「国家」は「最高の政治組織」として位置づけられていたが、しかしその定義は「事実上」（*de facto*）の性質を帯びるものであった。すなわち「国家」はその「事実上の究極性（*ultimateness de facto*）」によって他の「無数の集団や結社」から区別されたのであり⁹⁴、アプリアリに、絶対的に「国家」の「究極性」が唱えられた訳ではなかった。したがって「国家」の相対性、すなわち「国家」を超越した政治組織を承認する余地がボザンケにあったことを証明する彼の国際関係論は、彼の国家論と矛盾するものとはいえず、むしろ彼の国家論を改めて裏打ちするものといえる。スイートの説明を用いれば、ボザンケが国家論で「国家」に権威や強制力を付与して、「国家」を高く位置づけるのは、それは「国家」ないし「国民国家」の本来備わった性格によるものではなく、「世界国家」のような「国家」の外部ないし「国家」を超越した「権威」が存在していない、という現状からである。ここに、ボザンケの政治思想は対外的にも「国家主義」でないことが示されており、この点は、彼の国際関係論における一般意志論、すなわち「一般意志」がグローバルなレベルで存在する限り、国際的な国家のための根拠も存在しうる、とする彼の主張からも見出されよう⁹⁵。

ところで、ボザンケの国際関係を巡る議論にはこれまで多くの批判が寄せられ、たとえば、ホブソンはボザンケの国際関係論を「倫理のおよび政治的国际主義に対する防壁」として批判し⁹⁶、ホブハウスもまた同様の批判を展開した。特に、ホブハウスによる批判は、その後に続いたペリー（R. B. Perry）、コウカー、クロスマン（R. H. S. Crossman）、ミルン、サビジャー、エメット、コプレストン（S. J. F. Copleston）らによる批判の基調をなすものであった⁹⁷。では、ホブハウスはどのようにボザンケを国際関係論に関して批判したのであるうか。

ホブハウスは、ボザンケの国際関係論を次のように解釈する。ボザンケのいう「一般意志」は「正義」の内容を最終的に決定するものであり、かつそこでは「国家」が「一般意志」の具体化として最高の政治組織である。その結果、「正義」は各々の「国家」独自のものとして成立することになり、国家間の紛争を解決するような共通の基準が国際社会には存在しえなくなる。それゆえ、ボザンケの議論では、国際関係において各国は何らの道徳

的な抑制 (moral restraints) に拘束されず、紛争解決の手段として武力に訴えることが承認かつ奨励されている。ホブハウスはこのように解釈し、ボザンケの議論を「国民国家」を絶対化し、「力は正義である」と主張し、「戦争」を正当化かつ理想化し、国家の増強化を図る「危険かつ欠陥」的な議論と批判した。ホブハウスによれば、ボザンケの国際関係論は「道徳的批判を越えたところに国家を位置づけ、戦争をその存在において必要な事柄と制定し、人類愛を非難し、国家の連邦制や国際連盟を否認する」⁹⁸のものであった。実際、ホブハウスは、1917年の夏のロンドンへの空襲爆撃を目撃して、こうした事態はヘーゲル＝ボザンケ流の「邪悪で間違った学説の目に見える形での明瞭なる結果」であると自分の息子に記している⁹⁹。

しかしながら、すでに明らかなように、こうしたホブハウスの批判は妥当性に欠けるものである。何となれば、実際のボザンケの議論では、「最高善」が人間そして「国家」を調和・統合させる共通の基準として示され、また「国家」に対する「道徳的批判」の存在も、「国家」の「最善の生活」の提供と「平和の追求」という「義務」を通じて間接的に示唆され、さらに「国家」はパワーをもつ必要があるとされつつも軍備縮小や平和への途が積極的に模索され、そして何よりも「国際連盟」といった「国家」を越えた政治組織、あるいは同盟が、彼自身の論理によって積極的に承認されたからである。それゆえ、ホブハウスによる批判は、本章の前半で示されたボザンケの議論、すなわち既存の国際社会を現状分析的に描出した議論にのみ焦点を当てたものといえ、「戦争」の発生要因の分析や軍拡批判、独自の「愛国心」概念の創出やそれに基づく超国家的な「一般意志」や「国際協調主義」の提示といった、彼の国際関係論の核心的側面をほとんど捨棄したものである。モロウの指摘のように、ホブハウスのボザンケ解釈は「極端に批判的な解釈」と言わざるを得ない¹⁰⁰。

確かに、バーンズ (C. D. Burns) の指摘のように、ボザンケの議論が「国家」の内的関係に偏っており、国際関係論の本来のフィールドである「国家」の外的関係に関する検討が乏しく、国家間の重要な側面を見落とす危険があることは事実である¹⁰¹。しかし、ボザンケにとって政治哲学の課題はそのまま「国家論」の課題でもあったこと、それも「国家」という「現実」の中に潜む「理想」を抉り出すことにあったことを忘れてならない。「国家」を中心にして「国際関係」を捉えるボザンケの理想主義的政治思想の立場が、現在において真の「国際関係」論になりえていないのはやむをえない結果であるが、しかしそのことはボザンケが自らの立場を貫徹した証拠でもある。

以上、ボザンケの国際関係論を通観してきたが、そこから判明したことを一言で言えば、ボザンケが「国民国家」を中心に据える「リアリズム」的な「勢力均衡」に近い議論を展開しつつも、国際的平和同盟や国際的政治機構を承認する「アイディアリズム」的な「国際協調主義」に近い議論を同時進行的に展開したことであろう。そしてこのことは、ボザンケが「ユートピアニズム」を批判しつつ、同時に「リアル・ポリティーク」をも批判するという、前出のイギリス理想主義全体の特徴、すなわち前述のように「現実主義的理想主

義」の立場を彼が如実に示していることを意味していよう¹⁰²。

ところで、ボザンケは戦争を真の「国家」の属性と見なかったことから、第一次世界大戦とは世界の各国が真の「国家」ではなかったことの証拠でもある。また、戦争を回避する真の「国家」の必要条件は国民の真の「愛国心」であったことから、第一次世界大戦の戦争責任はそうした「愛国心」をもたなかった国民にも求められる。かくして、ボザンケは読者たるイギリス国民に次のように猛省を促す。

「我々は反省すべきである。(中略)我々是我々の国を欲しているであろうか、そして我々自身、我々が知る最善のもの、つまり美や真理や愛や健全な生活というものを欲しているであろうか？こうした絶対確実な価値基準によって我々が、我々自身をそして我々の国を、戦争の究極的な原因たる墮落した利己主義にあらがって守ろうとしているであろうか？」

103

こうして、ボザンケは第一次世界大戦の戦争要因を想起しつつ、今後の平和復帰への第一歩を精神のレヴェルにおける国民一人一人の内的な格闘、すなわち「最大の戦争の原因」たる「利己主義」との各人の「戦争」に求める。その意味で、ボザンケの国際関係論は、「国家」を中心に据えながら戦争と平和という大きなテーマを巡るものであったが、最終的には自らの精神や意識のレヴェルの問題に回帰する、優れて思想的な問題でもあったといえる。まさに、ボザンケの国際関係論は、日常生活の中での各自の「戦争」、つまり他者や他国との「戦争」ではなく自らの欲望との「戦争」を訴える議論でもあったのである。ボザンケの政治思想全体が「意志」の議論で貫かれていることの証左である。

第9章 註

¹ SE, I, p.272.

² SE, I, p.272.

³ SH, I, p.3.

⁴ PTS, V, pp.157-158.

⁵ SE, I, p.273.

⁶ SE, I, p.273.

⁷ SH, XV, p.12.

⁸ PTS, V, p.1.

⁹ SH, XV, p.12.

¹⁰ SE, I, p.273.

¹¹ PTS, V, p.xlix.

¹² SE, I, pp.273-274.

¹³ SH, XV, p.306.

¹⁴ SH, XV, p.278.

¹⁵ SE, I, p.274.

¹⁶ SE, I, p.281.

¹⁷ SE, I, p.274.

¹⁸ SE, I, p.278.

¹⁹ SE, I, p.273.

-
- ²⁰ PTS, V, pp.303-304.
²¹ PTS, V, p.304.
²² PTS, V, p.305.
²³ SE, I, p.275.
²⁴ PTS, V, p.307.
²⁵ SII, XV, pp.13-15.
²⁶ SII, XV, p.291.
²⁷ P. Savigear, "Philosophical Idealism and International Politics: Bosanquet, Treitschke and War", *British Journal of International Studies*, Vol.1, No.1, 1975, p.56.国際関係のこうした用語に関しては、鈴木基史『国際関係—社会科学の理論とモデル 2』（東京大学出版会、2000年）7-8頁、18-24頁参照。
²⁸ SII, XV, p.294.
²⁹ PTS, V, p.305.
³⁰ SII, XV, p.291.
³¹ SE, I, p.273.
³² SII, XV, p.300.
³³ PTS, V, p.xlv.
³⁴ PTS, V, p.xlvi.
³⁵ SII, XV, pp.300-301.
³⁶ SII, XV, p.316.
³⁷ SE, I, p.279.
³⁸ SE, I, p.283.
³⁹ SII, XV, pp.275-276.
⁴⁰ SE, I, p.279.
⁴¹ SE, I, p.279.
⁴² SII, XV, p.295.
⁴³ SE, I, p.281.
⁴⁴ BBF, XX, p.311.
⁴⁵ SE, I, p.279, 282.
⁴⁶ Nicholson, *op.cit.*, 1990, p.227.なお彼の同様の議論は、Peter P. Nicholson, "Philosophical Idealism and International Politics: a Reply to Dr. Savigear", *British Journal of International Studies*, Vol.2, No.1, 1976, pp.76-83.でも展開されている。
⁴⁷ PTS, V, p.1.
⁴⁸ PTS, V, p.301.
⁴⁹ PTS, V, p.xlix.
⁵⁰ SSE, XVI, p.301.
⁵¹ SII, XV, p.311.
⁵² SII, XV, p.309.
⁵³ SII, XV, pp.311-312.
⁵⁴ SII, XV, p.311.
⁵⁵ SII, XV, p.149.
⁵⁶ BBF, XX, p.164.
⁵⁷ SE, I, p.282.
⁵⁸ SII, XV, p.2.
⁵⁹ SE, I, p.282.
⁶⁰ SE, I, p.284.
⁶¹ PTS, V, p.xlv.
⁶² SII, XV, p.vi.
⁶³ SE, I, p.282.
⁶⁴ PTS, V, p.87.
⁶⁵ SE, I, pp.282-283.
⁶⁶ SII, XV, p.271.

- ⁶⁷ SE, I, p.259n10.
- ⁶⁸ ウラム、前掲書、1968年、71頁。
- ⁶⁹ SII, XV, p.294.
- ⁷⁰ SII, XV, p.312.
- ⁷¹ PTS, V, p.307.
- ⁷² Cf., Otter, *op.cit.*, 1996, pp.173-175.
- ⁷³ PTS, V, p.293.
- ⁷⁴ SII, XV, p.297.
- ⁷⁵ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.136.
- ⁷⁶ BBF, XX, p.191.
- ⁷⁷ BBF, XX, p.163.
- ⁷⁸ PTS, V, p.lix.
- ⁷⁹ PTS, V, p.xxix.
- ⁸⁰ PTS, V, p.l.
- ⁸¹ PTS, V, p.302n.
- ⁸² SE, I, p.282,286n16, SII, XV, p.271n1.
- ⁸³ SII, XV, p.275.
- ⁸⁴ SE, I, p.284.
- ⁸⁵ SE, I, p.284.
- ⁸⁶ Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.136.
- ⁸⁷ Boucher (ed.), *op.cit.*, 1997, pp. xxxi-xxxii.
- ⁸⁸ G・E・G・カトリン、竹原良文・柏經学訳『体系政治学—政治社会の原理—』〔上巻〕(法律文化社、1971年) 78頁。
- ⁸⁹ John R.Gibbins, “Liberalism, Nationalism and the English Idealists”, *History of European Ideals*, Vol.15, No.4-6, 1992, p.494.
- ⁹⁰ Boucher, *op.cit.*, 1994, p.694.
- ⁹¹ Hoernlé, *op.cit.*, 1919, p.626.
- ⁹² E・H・カー、井上茂訳『危機の二十年』(岩波書店、1996年) 295頁、Joad, *op.cit.*, 1938, p.182.
- ⁹³ George Catlin, *A History of the Political Philosophers* (London: George Allen & Unwin, 1950), p.522.
- ⁹⁴ PTS, V, p.175.
- ⁹⁵ William Sweet, “Individual Rights, Communitarianism, and British Idealism”, in Yeager Hudson and Creighton Peden (ed.), *The Bill of Rights: Bicentennial Reflections* (Lewiston: The Edwin Mellen Press, 1993), p.273.
- ⁹⁶ J・A・ホブソン、石沢新二訳『帝国主義論』(1977年、大和書房) 214頁。
- ⁹⁷ Hobhouse, *op.cit.*, 1918, R. B. Perry, *The Present Conflict of Ideals* (New York: Longmans, 1918), pp.256-258; Coker, *op.cit.*, 1934, pp.433-435; R. H. S. Crossman, *Government and the Governed* (London: Cristophers, 1939), pp.198-200, Milne, *op.cit.*, 1962, ch7, sect.4, S. J. F. Copleston, *A History of Philosophy, Volume VII, Modern Philosophy: Empiricism, Idealism, and Pragmatism in Britain and America* (New York: Doubleday, 1994), pp.228-229. なお、サビジャーによるボザンケ解釈は、P. Savigear, “European Political Philosophy and the Theory of International Relations”, in Trevor Taylor (ed.), *Approach and Theory in International Relations* (London: Longmans, 1978), pp.32-53.においても同様である。またエメットの批判は、ボザンケの「人類」「道徳的共同体」に対する見解に限ったものであり、ホブハウスのそれよりも好意的なものである。Emmet, *op.cit.*, pp.118-119.
- ⁹⁸ Hobhouse, *op.cit.*, 1918, p.25, pp.100-103.
- ⁹⁹ *Ibid.*, pp.5-6, cf., pp.68-69.
- ¹⁰⁰ Morrow, *op.cit.*, 1982, p.380.
- ¹⁰¹ C. D. Burns, B. Russell, and G. D. H. Cole, “Symposium: The Nature of the State in View of its External Relations”, *Proceedings of the Aristotelian Society*, n.s., Vol.16, 1915-1916, p.300.

¹⁰² 北岡勲、前掲書、1987年、546頁、同、前掲書、1986年、249頁、浅沼和典、前掲論文、1977年、58-65頁。

¹⁰³ *SE*, I, p.283.

結び

1. これまでのまとめ

以上、ボザンケの政治思想を種々の面から検討してきた。ここで、これまでの議論を簡単にまとめるならば、以下のようになる。

ボザンケは、生涯を通じて、活発な実践活動を繰り広げた。特に、ボザンケは「慈善組織協会」や「アリストテレス協会」、「ロンドン倫理協会」等を通じて、現実社会と密接な関係をもった。そしてその実践活動には、「現実」の中に「理想」を見出し、人間の内的な意志作用への干渉を排し、かつ社会の自生的な制度や組織を重視するという彼の政治思想での訴えが反映されていた。したがって、ボザンケは、グリーン、ロック、そしてトインビーの影響のもとで、「知行合一」を目指した「在野の思想家」であった。(第1章)

他方、ボザンケの政治思想は、彼のいう「一般意志」に関する議論から開始された。ボザンケは人間の理性的な意志を「実在意志」と名づけ、非合理的・感情的な意志を「現実意志」と呼んだ。そして前者と後者との間でなされる各人の内面的な「批判」を通じて、「共通善」や「最善の生活」、あるいは「人格の発展」「魂の卓越」は実現するとボザンケは論じた。他方、社会全般にもこうした理性的な意志は存するとボザンケは論じ、その意志を「一般意志」と名づけた。さらに、ボザンケは、「一般意志」および「実在意志」は、議会の「立法者」を通じて「法」および「国家」に具体化されると論じ、「国家」や「法」の目的が「個人」の目的と同じく「共通善」の実現であると論じた。そして「国家」が人間にとって「他者」ではなく自らの真の理性的意志（「一般意志」「実在意志」）の具体化であることから、ボザンケは、いわゆる「自治」の矛盾、すなわち「自己」と「統治」あるいは「国家」と「個人」のアポリアもまたそこでは解決されると論じた。それは、ボザンケが、「法」「国家」「主権」を「実在意志」「一般意志」に根拠づけることで「個人」→「国家」という方向性を示しつつ、他方で「法」「国家」「主権」を「大なる自己」とすることで「国家」→「個人」という方向性をも示して、「国家」と「個人」の相互依存・相即不離の状態を説明する議論でもあった。(第2章)

そしてボザンケは、こうした思想を武器にイギリスの過去および当時の思想家を論難した。ボザンケは、ホブズ・ロックの議論を「実在意志」ないし「一般意志」の表出が見られないものとして、またベンサム・ミル・スペンサーの議論を「自己」と「統治」、あるいは「自己」と「国家」「社会」との積極的関係が見出されない「見かけの理論」として、それぞれを批判した。特に、ベンサム批判およびその「自由」を巡る議論を通じて、ボザンケは各人の消極的な意味での「自由」を前提的に認めつつも、「強制」のない状態よりも理性的な意志による自己決定に「自由」の本義を見出し、また「国家」の役割もそうした真の「自由」への貢献に見出した。さらに、ボザンケは、ミル批判およびその「個性」を巡る議論を通じて、「個性」を「社会」や「国家」、あるいは「全体」との関係の中で現出するものと理解し、原子論的な個人に基づく個性概念を否定した。こうして、ボザンケは、

イギリス政治思想史のまさしく知的伝統である「原子論的個人主義」や「功利主義」を全面的に否定し、「共通善」によって媒介された「個人」と「国家」「社会」の関係を重視するのであった。(第3章)

しかし、このように、「国家」を人間の真の意志の具体化と見、原子論的な「個人」観念を否定したボザンケではあったが、決して彼は「国家」に「個人」を完全従属させるような議論や、人間の間の相違をなくすような議論を展開するのではなかった。ボザンケは、「国家」を「社会」とほぼ同一のものと見なし、また「国家」を絶対的な「強制力」を保持するものと位置づける一方で、その「強制力」が各人の内的な「批判」と相矛盾する要素を内包していることから、国家活動は「障害物を妨害すること」に制限されると論じた。さらに、その国家活動も、「社会」や「個人」の間に「障害物」が存在しない限り正当化されないと論ずることで、ボザンケは「国家」が「社会」や「個人」によって大きく規定され、「国家」は恣意的に活動し得ないことを訴えた。同時にそれは、ボザンケが「国家」と「社会」とを実質的には区分していたことを示すものであった。(第4章)

こうしたボザンケの政治思想は、彼の権利論、刑罰論で如実に示された。ボザンケは、「権利」を「国家」によって「維持」され「承認」されるものと規定して、人権や自然権を否定した。しかし、ボザンケは、それを通じて人間を抑圧するような議論を展開したのではなく、むしろ「国家」は「権利」の「承認」という活動によって「障害物を妨害すること」に制限されることを主張したのであった。また、その「国家」による「承認」も、「社会」の間で行われた習慣的・自動的な「承認」を前提にすることから、彼のいう「国家」は「社会」によって一定の制限を受けものでもあった。他方、国家活動としての「刑罰」に関しても、ボザンケは、犯罪者を人格の持ち主と見据える観点から「障害物を妨害すること」の原理に見合った「応報」的「刑罰」を主張し、犯罪者に関してもその内面への国家干渉を峻拒する議論を展開した。したがって、ボザンケの描く国家像とは、「社会」や「個人」を超越して高くそびえる「国家」ではなく、むしろ「社会」や「個人」を基調とした「国家」のそれであった。(第5章)

さらに、ボザンケが「国家」と「社会」とを実質的には区別していただけではなく、むしろ「社会」の「国家」からの独立性、すなわち「社会」の自生性を尊重していたことが、彼の制度論を通じて明らかにされた。ボザンケは、現実社会の様々な「制度」を、「法」や「国家」と同様、人間の「実在意志」や「一般意志」の具体化と見なし、理性的な「制度」を通じて個人は自由意志の特徴を発展させることができると論じた。そしてボザンケは、「国家」の枠組みの中で「制度」はその本来の機能を発揮しようと論じながらも、「家族」、「私有財産」、「階級」などの「制度」の自生性を重視して、その領域への国家干渉を徹底的に排除した。特に、ボザンケは、フォレットを通じてやがてアメリカの「多元主義」に結実することになる、「制度」としての「近隣」概念を独自に提示し、その領域への「国家」(救貧法)の介入を否定することで、「国家」と「社会」の区別や「社会」の自生性に関する主張のみならず、彼の思想に「国家主義」とは程遠い「多元的国家論」の要素が含まれ

ていることを示したのであった。(第6章)

他方、ボザンケの「個人」の自発性を尊重する議論は、彼の社会政策論において明示された。ボザンケは、「国家」に限らず、民間の企業や慈善団体の行う「社会改良」は、あくまで人間の「意志」や「性格」を通じて為されるべきだと主張し、そこから酒類販売の規制、義務教育、住宅供給などを正当な国家干渉＝「社会政策」と見なした。その一方で、ボザンケは、意志や「性格」を放棄した「ポーパー」に関しては、その人間の「人格」の矯正のために例外的に内面にまで及ぶ大胆な国家干渉を認めた。つまり、ボザンケは、「社会政策」を、(「ポーパー」を除いた)各人の意志の発展や自助を間接的に支えるものと位置づけ、道徳的発展の促進という「目的」のためのいわば「手段」として唱えるのであった。それゆえ、ボザンケの政治思想は、いわゆる「原子論的個人主義」や「レッセ・フェール」主義の思想を唱えるものでもなかった。(第7章)

そしてこのようなボザンケにおける「国家」と「個人」、「国家」と「社会」、あるいは「国家」と「制度」との関係は、彼と「フェビアン協会」との関係においてより明確に示された。ボザンケは、社会主義批判＝「フェビアン協会」批判を通じて、私有財産制を擁護し、社会主義的な「緩んだ」救貧法政策を批判し、そして人間の「個性」が示される「階級」の存在を正当化した。さらに、ボザンケは、「王立救貧法委員会」を巡る議論において、「性格」の欠陥者＝「窮乏者」を差別的に処遇する厳格な救貧法政策の実施と、「国家」の扱う領域と「慈善」＝民間の扱う領域との明確な区別を訴え、「国家」による貧民全般への無差別的サービスの実施を唱えるウェップ夫妻と鋭く対立した。それは、同時に、ボザンケの政治思想が、いかに「社会」の自生性を重視し、かつ「個人」の自発性、道徳性に期待するものであったかを示すものであった。(第8章)

さらに、ボザンケの政治思想に対する別の批判、すなわち「対外的国家主義」との批判が妥当であるか否かが、彼の国際関係論を概観することで検討された。ボザンケは、一旦は現状分析的に、国際社会では「国家」が裁判官であり戦争が「裁定者」とであると論じていた。しかしその一方で、ボザンケは、紛争や戦争の要因を「国際関係」にではなく「国内関係」、つまり「国家」内部に求め、「国家」をより良く整備し秩序づけることで戦争は回避され、平和への道も開けるとも論じた。さらに、ボザンケは、戦争を行わない真の「国家」を建設するためには、「国家」に対し「最高善」「精神的善」をもつように要求する「愛国心」が必要であり、そしてその「愛国心」によって世界的な「一般意志」が成長し、「国家」の枠組みを超越する国際的な平和維持機構もまた成立し得ると論じた。それは、ボザンケが、「国家」にアプリオリに「権威」を付与しているのではなかったこと、また「国家」を超越した政治組織を承認する余地が彼にはあったことを証明するものであった。(第9章)

2. ボザンケの政治思想に対する評価

そして、以上の議論を前提にすれば、従来下されてきたボザンケに対する否定的評価が

妥当なものではないこともおのずと明らかになるであろう。まず、「国家主義」に関しては、一般に政治学では、「国家を最も尊重する主義」、つまり「国家による命令や国家秩序、あるいは国家の軍事的栄光を維持することを至上のものとし、他のすべての価値をそれに従属するものとする」と考える¹思想である。確かに、ボザンケは、「国家」という政治組織を人間の「実在意志」「一般意志」の具体化と見、「国家」の枠組みを高く位置づけ、「国家」の活動もまた高位なる自分自身のそれであるとした。しかし、「共通善」や「最善の生活」が人間にとっての最高の目的であるとし、「国家」を「共通善」実現のための「手段」と位置づけ、「国家」の存立根拠たる人間の意志の領域、つまり内面の道徳的領域の「批判」作用、自発性を最重要視し、「国家」の干渉を人間の「性格」の伸張、「自助」の促進、そして「共通善」の実現にとっての「障害物」の「妨害」という作用に制限したボザンケの主張は、「すべての価値を国家に従属させる」という「国家主義」とは程遠いものである。また、ボザンケは、「国家」と「社会」を区別して「社会」の自生性を重視し、「家族」や「近隣」、「階級」などの「国家」からの一面での独立性を強調し、さらに「国家」も「事実上」最高のもの、「事実上」権威をもつものであると論じ、加えて国際関係において「国家」を超越する政治組織の成立の可能性を示唆していた。ここからも、従来の「国家主義」とのボザンケに対する評価が妥当なものではないことが明らかになる。

また、ボザンケの政治思想を「全体主義」とする評価に関しても、一般に「全体主義」とは政治学では「現実の社会に対立が生じているといないとにかかわらず、人間の思考様式そのものを変えることによって、対立など存在し得ない新しい社会に住んでいるのだと人々に信じさせる企て」²、あるいは「特定の個人あるいは集団が国家権力を絶対的に独占し、国家社会内の個人や集団の利益を国家の利益と一致させるために個人あるいは集団への抑圧」を行うもの³、と定義される。しかし、ボザンケにあっては、彼の「抵抗の義務」や「議会制」の唱導に見られるように、現実の社会には利害衝突や矛盾があることが十分認識されていたし、また「個人」および「集団」への抑圧も、前述のように「個人」の自発性、あるいは「社会」における中間団体などの自生性が尊ばれることで承認されなかった。それゆえ、ボザンケの政治思想を「全体主義」と位置づけることも妥当なものとはいえない。

ただし、ボザンケを「ヘーゲリアン」とする評価に関しては、一面で妥当なものがある。実際、「現実」の中に「理想」が胚胎する、というボザンケの視座は、セロー（René Serreau）の指摘のように、ヘーゲルの有名な「理性的であるものこそ現実的であり、現実的であるものこそ理性的である」⁴という命題に基づくものといえる⁵。また、ボザンケの形而上学での「具体的普遍」の概念やその「個（別）性」の考え方もヘーゲルと同一であり、実際、ボザンケはヘーゲルの『精神現象学』での「真なるものは全体である」⁶という有名な命題をそのまま援用している。他方、政治思想においても、政治哲学の目的や対象に関する点や、「国家」を意志に基礎づけながらそれを重視した点でボザンケとヘーゲルは明らかに同一であるし、またボザンケが近代国民国家を高く評価し、「議会」の中に「一般意志」の

具体化を見る点でも、彼の場合、「抵抗の義務」や社会改良の議論が提示されてはいるものの、ある意味でヘーゲル流の現実肯定的な側面との類縁性が指摘され得る。さらに、「実在意志」と「現実意志」での議論等において人間の意志作用＝「批判」を重視する点にも、ヘーゲルが明確に示す「否定」の契機と、必ずしも同一ではないがしかし一定の共通性が見出され得る。加えて、刑罰論での「刑罰を受ける権利」の主張や、制度論での「家族」の重視、あるいは国際関係の現状分析など、種々の点でボザンケとヘーゲルの議論が酷似しているのは事実である。

しかしながら、ヘーゲル哲学を直ちにボザンケの政治哲学と結び付け、ヘーゲルの政治思想を「国家主義」「全体主義」のそれと捉え、さらにその文脈の中でボザンケを「ヘーゲリアン」と位置づけるのであれば、それは妥当な評価とはいえない。むしろ、ヘーゲルを国家主義者と捉えないとしても、ボザンケとヘーゲルの思想を比較検討すれば、共通点とともに相違点すら浮かび上がってくる。例えば、ヘーゲルが明確にし得なかった国家活動の限界を、ボザンケが「障害物を妨害すること」という原理を打ち出してその具体的な中身を明らかにした点や、ヘーゲルが弁証法的な発展段階において「国家」(Staat)を「市民社会」(bürgerliche Gesellschaft)の不完全性を克服するものとし、両者をいわば垂直的に位置づけていたのに対し⁷、ボザンケは、実際にその点に関してヘーゲルを批判しながら⁸、「国家」と「社会」を水平的に位置づけ、お互いを相補的(reciprocal)なものとした点⁹、あるいはヘーゲルが「民族」(Volk)をそれ自体では「主権」の存在理由にはならないとし、「国家」をいわば「民族」にとって代わるものと位置づけるのに対して¹⁰、ボザンケは「民族」(nation)が「家族」の香気を持ち合わせ、それが「国家」を前もって決定し、かつ方向付けると論じている点¹¹、さらにヘーゲルが「国際連盟」のような「国家」を超越する機関を承認しないのとは対照的に¹²、ボザンケは独自の「愛国心」概念を通じて国際的平和維持機関や「国家」を越えた政治組織の成立可能性を訴えていた点などは、両者の相違点を浮き彫りにするものである。第一、ヘーゲル哲学を特徴づける弁証法的な発想やヘーゲルの歴史観そのものがボザンケには無く、実際、ボザンケ自身も、ヘーゲルの『論理学』(Logik)に「我々が縛られるのを私は認めない」と述べている¹³。以上から、ボザンケがヘーゲルの影響を強く受けたのは事実でありながらも、しかし全面的にはヘーゲルの議論に従っていなかったこともまた事実といえよう。

むしろ、スイートは、ボザンケが「障害物を妨害すること」に国家干渉を限定する点や、「最善の生活」をボザンケが「目的の王国」に近いものと論じている点などから¹⁴、ボザンケの議論にカントの議論との類縁性を見出し、同時にボザンケの階級論や国家論などから、ヘーゲルよりもプラトンからの直接的な影響を看取している¹⁵。さらに、「制度」や慣習、伝統を重んじ、それらを包括した「国家」ないし“コンスティテューション”を称揚しつつも、社会改良を示唆するボザンケの議論は、前述のように、バーク流「保守思想」の側面を含んでおり、そしてその「保守思想」がイギリス政治思想の別の特徴であるならば、彼の政治思想はヘーゲルの亜流ではなく、まさしくイギリス独自のものであったとも

いえよう。いずれにせよ、ランダルが示すようなボザンケの位置づけ、すなわちボザンケの政治思想を「ヘーゲルから直接的に創出されたもの」¹⁶と位置づけることが一面の真理に過ぎない点は指摘でき得る。そしてこの点は、ホルダーの以下のような指摘からも明らかであろう。

「しかしながら、失念してはならないことは、この学派〔イギリス理想主義学派〕に属するといわれる著作者たちは、ヘーゲルの弟子では決してなかったということである。彼らがヘーゲルから強烈な影響を受けたことは疑う余地がない。しかし、彼ら各々は、理想主義の真理を理解しかつ表現するのにさいし自らの独特な方法を持ち合わせていた、非常に自立した思想家である。」¹⁷

他方、ボザンケの政治思想を「個人主義」や「レッセ・フェール」主義と評価するのも、彼が「原子論的個人主義」を徹底的に批判していたこと、あるいは彼が「国家干渉」の原理を唱え、実際に種々の社会政策を承認していたこと、特に「ボーパー」に関しては内的な国家干渉さえも認めていたことから、それが妥当でないことは明らかである。

したがって、ボザンケに対する前述のような両極端の評価は、いずれも妥当なものとはいえない。むしろ、ボザンケの政治思想の「国家」を尊重する側面だけが極端に強調され、その活動の限界面が無視された結果、「国家主義」との判断が、また彼の政治思想の「自助」に関する側面のみが極端に強調され、各人の人格の発展や成長に関する「国家」の積極的な役割が看過された結果、「レッセ・フェール」主義との判断がそれぞれ下されたものと思われる。それゆえ、ボザンケに対する従来の二つの評価は、彼の政治思想に内在する「国家」志向性と「個人」志向性とを、包括的にではなく、それぞれ片面のみを不当に強調・歪曲することで生じたものといえよう。確かに、ボザンケの政治思想の中で交錯している「国家」に向かう方向と「個人」に向かう方向とは、一見するとかみ合わないようにも見える。しかし、ボザンケは分裂的でアンビバレントな思想を唱えていたわけでは決してない。むしろ、それは「共通善」および「最善の生活」、そしてそれを実現する人間の意志作用を中軸にすることで論理的に一貫しており、各人の内的な「批判」を最重要視し、その領域への干渉を徹底的に排することで彼の議論の整合性はもたらされている。つまり、「国家」は「実在意志」「一般意志」の具体化として各人を「最善の生活」へと間接的に導くからこそ価値づけられ、また「国家」は「最善の生活」の手段であるからこそ各人の意志の領域には踏み込むことができないのである。ここに、「人格主義的個人主義」とも称されるべき、各人の人格や自我実現、道徳的自己批判を中枢に据えたボザンケの政治思想の特徴が看取される。また、このことを敷衍すれば、ボザンケにあっては政治が「共通善」という価値目的によって基礎づけられ、政治に積極的・道徳的な意義が与えられたことを意味している。つまり、ボザンケにとって政治はもはや必要悪ではなく、人間存在にとって不可欠の意味をもつものとなっている。事実、そのために、ボザンケは国家活動が「障害物を妨害すること」に限られるとしながらも、その中に種々の国家の機能を含ませることができたのである。イギリスの知的風土たる「原子論的個人主義」を排しつつも「人格」を

中心に据えた「人格主義的個人主義」を唱導し、政治や「国家」を人間にとって消極的ではなく積極的なものとして位置づけた政治思想、少なくともこのような評価は、ボザンケの政治思想に対する評価として妥当なものであろう。

3. ボザンケの政治思想における欠点と現代的意義

無論、こうしたボザンケの政治思想にも脆弱点が無いわけではない。それは、以下のような説明において顕著である。

「諸君は探偵小説や冒険小説といった類のものをよく知っている。つまり、12フィートもの厚みの壁をもつ刑務所に閉じ込められた人間がいて、脱獄不可能という杭が彼に打ち込まれている。しかし、諸君は、英雄が現われ、万事うまくゆくことを知っている。英雄は、恐らく壁をコツコツと叩き、そして中空の場所と出口を発見し、楽々と囚人とともに立ち去る。こうした描写は粗雑なものではあるが、しかしその道徳は、一般に十分に真理を突くものである。英雄が成功するのは、他の誰にも浮かばないある非常に明瞭な観念を思案していたからであり、あるいは他の誰もがあえて挑戦しようとはしないある単純な計画に挑戦しようとする断固たる決断と創意 (pluck and ingenuity) を持ち合わせていたからである。」¹⁸

つまり、ボザンケが信念としていたものは、トマスの指摘のように「精神は無限だ」という原理である¹⁹。そしてこうした視座は、直ちに当時のイギリスの労働者に適用される。

「例えば、イギリスの労働者の生活は“国家”あるいは“共通善”という言葉によって表現される抽象的観念に関心がない。しかし、そもそも彼は遵法的な市民である。彼は他人に干渉しないし、同様の法則で他人の所有物に干渉しない。また彼はその法則によって彼および彼の所有物に干渉しないことを他人に期待している。彼は契約 (bargaining) の公正さを承認し、他人を公正に扱う用意がある。それはまた、彼が他人に自分を公正に扱うことを期待するようにである。(中略) その限りで、専ら彼は忠実な民 (subject) である。もし、彼が社会の善に関する、より完全な感覚を有するのなら、彼は国家の仕事に参加するか、あるいは少なくともこうした仕事に通じているに違いない。そしてそれは、その仕事への自分の仲間たちの役割への関心を通じて、そして自己の階級の利害と社会の善とを結びつける種々の組織への関心を通じてである。彼の精神は、単に社会精神における自らの場所において作用するのではなく、ある程度その場所と全体との間の関連を知覚しているに違いない。(中略) さらに、彼は、家庭や祖国の観念と結びついた、自分の国家に対する感覚を有しているに違いない。」²⁰

確かに、こうした労働者に対する好意的な見方は、ボザンケのいわば「人間皆平等」という人間観を如実に示しており、ある意味で彼の思想のいわば「温厚」的な側面がそこにおいて表出している。しかし、この論理が徹底された場合、前述のように、すべての問題が意志の問題、すなわち本来「社会問題」であるべき問題までもがすべて個人の意志の問題に還元されることを意味している。つまり、ボザンケが極端なまでに人間の意志に期待

を寄せる結果、個人の意志の領域を越えたいわば経済的な面での社会の動態性、変動性に対する認識が彼の場合極めて乏しくなっており、ロビンスの指摘のように、その議論は経済的な生活の道徳的・合理的な重要性を無視するものとなっている²¹。それを裏返せば、エメットの指摘のように、「現実」を直視しながらも彼があまりに「楽観的」(optimistic)であった証拠でもあり²²、また彼のいう「現実」が実は現実そのものではなく、なお観念的に位置づけられた「現実」であったということである。そしてその結果、「温厚」であったはずのボザンケの思想は、すべての責任が「個人」に転嫁されることで「冷酷」「厳格」な思想へと逆転し、オ・サリバン(Noël O'Sullivan)の言うように、それは道徳的な「誠実さ」を人間に対して過剰に要求することから、一種の「狭量」「狭隘」(narrowness)を免れえていない²³。

特に、この点は、彼の貧困観において顕著であった。確かに、人間の意志作用を重視するボザンケの理想主義的立場からすれば、「貧困」が人間の意志の問題とされるのは当然の帰結であるし、またそれに基づき前述のように「貧民」を二分するのも、あるがままの現実を直視するという彼のスタンスをよりよく示しているものといえる。しかし、「個人」の責任と自主性・自主心を強調し、「貧困」を個人の道徳的責任とする結果、ボザンケの政治思想は貧困発生の社会的基盤をあまりに軽視するものとなっており、当時のイギリスにおける貧困の問題を彼が的確に把握していたとはとても言いがたい。むしろ、ボザンケが、資本主義それ自体に内在する種々の問題を、現実にもその問題が露呈していたにもかかわらず正確に認識し得なかった点は、彼の政治思想における欠点として厳しく指摘されねばならない²⁴。

しかし、こうしたボザンケの政治思想の、いわば限界のみを強調するのは公平な見方ではない。むしろ、彼の政治思想には、次のような現代に語りかける側面、すなわち現代的意義が含まれていると思われる。第一に、ボザンケが人間の「性格」や「人格」の発展を「市民精神」という観点で捉えることで、彼の議論が「市民性」の観念によって特徴づけられている点である。つまり、ボザンケは、「人格主義的個人主義」の裏面としての「市民主義的個人主義」と称されるべきものを唱え、いわば「市民性の政治学」を論じているのである。実際、ヴィンセントは、各人に「市民」たることを訴えるボザンケの政治思想に、いわゆる「自由民主主義」下では否定的にしか扱われない「市民としての義務」へのアピールを理解し、そこに今日失われた「市民性」「市民たること」への積極的な意味合い、つまり彼の政治思想の現代的意義を見出している²⁵。また、ボザンケの「市民性」を中心に据えたその国家論から、ハリスは「自由で、平等で、自立的で、倫理的に円熟し、かつ公共精神で満ちた市民の共和国」という国家像を描き出し²⁶、またモロウも近時それをフォレットとは別の意味で「新たな国家」(New State)と言い直して、彼の政治思想に、従来になかった全く新しい国家像を理解している²⁷。いずれにせよ、「市民」に対するボザンケの眼差しは、現代にあっても何らかの可能性を秘めたもの、つまり彼の政治思想の現代的意義のひとつとして挙げることができよう。

第二の意義としては、前述のように、たとえボザンケの議論が「自助」に基礎づけられたものであったとしても、後に多元的国家論にも結実することになった「近隣」の概念を彼が提示して、いわば「コミュニティ」の重要性を強調している点が挙げられよう。つまり、現代風に言い直せば、「自助」と「公助」（＝「国家」）の中間を行く「互助」（＝「コミュニティ」）の重要性をも、ボザンケが「自助」と同時に説いていた点である。実際、ボザンケの政治思想から、その現代的意義として社会福祉における「自助」でも「公助」でもない「第三の道」を見出す動きもあり²⁸、ボザンケの「自助」論との整合性を抜きにすれば、こうした側面も彼の思想の今日的意義として十分とり上げる価値はあろう。

しかし、それ以上に強く示されねばならないボザンケの政治思想の現代的意義は、まさしく彼の政治思想そのものが、今日なお続く政治思想的論争に大きな示唆を与えている点である。これまで見てきたように、ボザンケの政治思想は、オッター、そしてガウスの指摘のごとく、近代の産業革命によって失われた人間の紐帯を「国家」や「コミュニティ」を指向することで回復させつつ、同時に近代において現出した「個人」や「人格」をなお重視する、という両方向的なスタンス²⁹、およびジレンマによって彩られている³⁰。このことは、「国家」と「個人」を巡る伝統的な政治学的アポリアを、20世紀初頭においてボザンケがその両者の緊張を最大限考慮しながら解決しようとしていたことを示している。そしてそれ以来、一世紀を経た現在においても、我々はなお変わらずにそのアポリアに直面し、その確答を得るにいたっていないことは、近時におけるアメリカでのリバタリアニズム（libertarianism）とコミュニタリアニズム（communitarianism）との論争からも明らかである。しかし、この論争を通じて示された思想には、実に、ボザンケのイギリス政治思想批判に見られた彼の思想や、彼の国家論、コミュニティに関する議論との共通点がいくつか見出されている。たとえば、サゴフ（M. Sagoff）は、コミュニタリアニズムの先鋒者として活躍するサンデル（M. Sandel）とボザンケとの思想的な類縁性を指摘し³¹、オッターもまたボザンケの議論と前出のアメリカでの論争との相似点を指摘している³²。さらに、ジョーンズが、2000年に入ってから、ウェッブ夫妻よりもボザンケのほうが我々の時代に語りかけるものは多い、と指摘するのは、こうしたアメリカでの論争を視野に入れたことである³³。したがって、ボザンケの政治思想は、まさに政治を思想的に解き明かそうとするもの、そして「国家」と「個人」のアポリアを解決しようとするものに加え、現今のアメリカでの論争を解明しようとするものにとってもなお示唆に富むものと言い得る。この点こそ、ボザンケの政治思想における現代的意義の三つ目として挙げることができよう。

ボザンケが1923年2月8日に死去してから、ちょうど80年になる。従来、わが国では当然のこと、イギリスにおいてもほとんど忘れ去られていた思想家であるボザンケが、21世紀を迎え、前述のように、少なくとも欧米においては改めて研究対象としてとり上げられ、国外ではボザンケ研究再開の動きが見られる。つまり、ボザンケの再発見とでもいい得る現象である。しかし、このことは、すでにボザンケがこの世を去ったときに予言され

ていたことでもあった。システム哲学を展開したホワイトヘッド (Alfred North Whitehead: 1861-1947) が、ボザンケの死去に際して寄せた言葉に、このことが記されている。

「ボザンケの死は、偉大な喪失であり、まさに巨星逝く (a big man gone) である。近年、私は彼の力量 (size) を益々高く評価していたところであった。また、彼の幅広い視野や真理に対する一途な専心は、彼を一種の靈感を与える人物に仕立て上げていた。彼は、最近 40 年間の思想の新時代を総体的に築いた優秀な人物のひとりであった。私は以下のことを確信する。彼が取り組んだいくつかの主要な原理は、将来における哲学の再構築において具体化されて見出されるであろう、ということである。」³⁴

近時における、アメリカでの論争を通じてのボザンケの政治思想への関心の復興、また現在のイギリスの政治学界におけるボザンケへの熱いまなざしは、まさしくこのホワイトヘッドの予言の妥当性を証明する現象である。翻って、わが国では、若手の政治学者、それも政治思想史をフィールドとする研究者の中にも、ボザンケの名を認知していない者が現れ始めている。その意味で、本論文が、ボザンケの政治思想の解明とともに、現代への何らかの示唆を供し、そしてわが国におけるボザンケ再発見の動きに少しでも貢献できたならば、筆者としてはこれに優る喜びはない。

結び 註

¹ 高島通敏「国家主義」、阿部齋・内田満・高柳先男編、『現代政治学小辞典』（有斐閣、1999年）160-161頁。

² 阿部齋「全体主義」、阿部齋他編、前掲書、1999年、271頁。

³ 柳沢謙次「全体主義」594、大学教育社編『新訂版現代政治学事典』（1998年、ブレーン出版）

⁴ ヘーゲル、藤野渉・赤沢正敏訳「法の哲学」、岩崎武雄責任編集『世界の名著第44巻 ヘーゲル』（中央公論社、1978年）169頁。

⁵ ルネ・セロー、高橋允昭訳『ヘーゲル哲学』（白水社、1973年）127頁。

⁶ ヘーゲル、山本信訳「精神現象学序論」、岩崎編、前掲書、1978年、102頁。

⁷ たとえば、ヘーゲル、前掲書、1978年、§157、特に385頁。

⁸ PTS, V, p. xxxvii.

⁹ William Sweet, "Was Bosanquet a Hegelian?", *Bulletin of the Hegel Society of Great Britain*, No. 31, 1995, p. 51.

¹⁰ ヘーゲル、前掲書、1978年、§279、特に532頁。

¹¹ Morefield, *op. cit.*, 2002, p. 163.

¹² ヘーゲル、前掲書、1978年、§333、特に591頁。

¹³ SE, I, p. 227.

¹⁴ EA, XII, pp. 108-130.

¹⁵ Sweet, *op. cit.*, 1997, pp. 5-6, Sweet, *op. cit.*, 1995, pp. 53-54.

¹⁶ Randall, *op. cit.*, 1966, p. 474.

¹⁷ Haldar, *op. cit.*, 1927, p. v.

¹⁸ SII, XV, p. 167.

¹⁹ Thomas, *op. cit.*, p. 115.

-
- ²⁰ PTS, V, pp.272-273.
- ²¹ Robbins, *op.cit.*, 1982, p.76.
- ²² Emmet, *op.cit.*, 1989, p.123.
- ²³ Noel O'Sullivan, *The Problem of Political Obligation* (New York and London: Garland Publishing, 1987), p.230.
- ²⁴ 小山、前掲書、1978年、176頁。また、毛利、前掲書、1990年、152頁。
- ²⁵ Andrew Vincent, "The State and Social Purpose in Idealist Political Philosophy", *History of European Ideas*, Vol.8, No.3, 1987, p.335.
- ²⁶ Harris, *op.cit.*, 1992, p.132.
- ²⁷ Morrow, *op.cit.*, 2000, p.487.
- ²⁸ たとえば、田村、前掲書、2002年、189頁、197-198頁。
- ²⁹ Otter, *op.cit.*, 1996, p.156.
- ³⁰ Gaus, *op.cit.*, 1983, p.88.
- ³¹ Mark Sagoff, "The Limits of Justice", *The Yale Law Journal*, Vol.92, No.6, 1983, p.1065.
- ³² Otter, *op.cit.*, 1996, p.150.
- ³³ Jones, *op.cit.*, 2000, p.113.
- ³⁴ BBF, XX, p.316.

参考文献

- 阿部齋「全体主義」、阿部齋・内田満・高柳先男編、『現代政治学小辞典』(有斐閣、1999年)。
- Adams, H.C. (ed.), *Philanthropy and Social Progress. Seven Essays* (New York: Crowell, 1893).
- 浅沼和典「イギリス理想主義の国家論—T・H・グリーンを中心にして—」(明治大学政治経済研究所『政経論叢』第46巻第1号, 1977年) 37-69頁。
- Atkinson, Max, “Justified and Deserved Punishments”, *Mind*, n.s., Vol.78, No.311, 1969, p.347-366.
- Ball, Sidney, “Review of B. Bosanquet, *Philosophical Theory of the State*”, *Mind*, n.s., Vol.10, 1901, pp.154-163.
- Ball, Sidney, “The Moral Aspects of Socialism”, *International Journal of Ethics*, Vol.6, 1896, pp.291-322.
- Ball, Terence, “On Re-reading Rousseau and His Critics”, *The Midwest Quarterly*, Vol.21, No.3, 1980, pp.333-346.
- Band, D. C., “The Critical Reception of English Neo-Hegelianism in Britain and America, 1914-1960”, *The Australian Journal of Politics and History*, Vol.26, No.2, 1980, pp.228-241.
- バーカー、E、堀豊彦・柚正夫訳『イギリス政治思想IV』(岩波書店, 1954年)。
- Barker, Rodney, *Political Ideas in Modern Britain: In and After the Twentieth Century, Second Edition* (London and New York: Routledge, 1997).
- ベイ、クリスチャン、横越英一訳『自由の構造』(法政大学出版局、1979年)。
- Bedau, Hugo Adam, “Retribution and the Theory of Punishment”, *The Journal of Philosophy*, Vol.75, No.11, 1978, pp.601-620.
- Bentham, Jeremy, *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation* (New York: Hafner Publishing, 1948).
- Berger, Fred R. *Happiness, Justice, and Freedom: The Moral and Political Philosophy of John Stuart Mill* (Berkeley: University of California Press, 1984).
- バーリン、I、小川晃一他訳『自由論』(みすず書房, 1970年)。
- Booth, William, *In Darkest England and the Way Out* (London: International Headquarters of the Salvation Army, 1890).
- Bosanquet, Bernard, *Selected Essays*, Vol.I in William Sweet (ed.), *The Collected Works of Bernard Bosanquet* (Bristol: Thoemmes Press, 1999).
- Bosanquet, Bernard, *Logic or the Morphology of Knowledge*, Vol.II in William Sweet (ed.), *The Collected Works of Bernard Bosanquet* (Bristol: Thoemmes Press, 1999).
- Bosanquet, Bernard, *The Philosophical Theory of the State*, Vol.V in William Sweet (ed.), *The Collected Works of Bernard Bosanquet* (Bristol: Thoemmes Press, 1999).
- Bosanquet, Bernard, *The Principle of Individuality*, Vol.VI in William Sweet (ed.), *The Collected Works of Bernard Bosanquet* (Bristol: Thoemmes Press, 1999).

- Bosanquet, Bernard, *The Value and Destiny of the Individual*, Vol.VII in William Sweet (ed.), *The Collected Works of Bernard Bosanquet* (Bristol: Thoemmes Press, 1999).
- Bosanquet, Bernard, *Psychology of the Moral Self*, Vol. VIII in William Sweet (ed.), *The Collected Works of Bernard Bosanquet* (Bristol: Thoemmes Press, 1999).
- Bosanquet, Bernard, *Essays and Addresses*, Vol.XII in William Sweet (ed.), *The Collected Works of Bernard Bosanquet* (Bristol: Thoemmes Press, 1999).
- Bosanquet, Bernard, *The Civilization of Christendom and other Studies*, Vol.XIII in William Sweet (ed.), *The Collected Works of Bernard Bosanquet* (Bristol: Thoemmes Press, 1999).
- Bosanquet, Bernard, *Essays on Aspects of the Social Problem*, Vol.XIV in William Sweet (ed.), *The Collected Works of Bernard Bosanquet* (Bristol: Thoemmes Press, 1999).
- Bosanquet, Bernard, *Social and International Ideals*, Vol.XV in William Sweet (ed.), *The Collected Works of Bernard Bosanquet* (Bristol: Thoemmes Press, 1999).
- Bosanquet, Bernard, *Some Suggestions in Ethics*, Vol.XVI in William Sweet (ed.), *The Collected Works of Bernard Bosanquet* (Bristol: Thoemmes Press, 1999).
- Bosanquet, Bernard, *Science and Philosophy and other essays*, Vol.XIX in William Sweet (ed.), *The Collected Works of Bernard Bosanquet* (Bristol: Thoemmes Press, 1999).
- Bosanquet, Bernard, *Bernard Bosanquet and his Friends*, Vol.XX in William Sweet (ed.), *The Collected Works of Bernard Bosanquet* (Bristol: Thoemmes Press, 1999).
- Bosanquet, Bernard, "Preface" to *The Quintessence of Socialism*. By Dr. A. Schäffle. English edition translated from the eighth German edition under the supervision of Bernard Bosanquet (London: Swan Sonnenschein, 1889).
- Bosanquet, Bernard, "Preface" to *The Impossibility of Social Democracy: being a Supplement to "The Quintessence of Socialism"*. By Dr. A. Schäffle. Translated from the fourth German Edition by A. C. Morant (London: Swan Sonnenschein, 1892), pp.v-viii.
- Bosanquet, Bernard, "The Limitations of the Poor Law", *Economic Journal*, Vol.2, 1892, pp.369-371.
- Bosanquet, Bernard, "Preface", *The Social Contract or Principles of Political Right*. By J. J. Rousseau. Translated with an Historical and Critical Introduction by Henry J. Tozer (London: Swan Sonnenschein, 1895), pp.iii-iv.
- ボサンケー、浮田和民訳『國家哲學』(東京専門學校出版部藏版、1903年)。
- ボーサンケット、佐藤賢順譯『論理學の本質』(泰文社、1927年)。
- ボサンケ、鷺尾雨工譯『羅馬美學』(『世界大思想全集』101、春秋社、1936年)。
- バァナアド・ボサンケ、井上政次・鍋島能弘共譯『美學通史』(雄山閣、1944年)。
- Bosanquet, Helen, *Social Work in London 1869-1912* (London: John Murray, 1914, reprint, Brighton: The Harvester Press, 1973).
- Bosanquet, Helen, *Bernard Bosanquet: A Short Account of his Life* (London: Macmillan, 1924).

ヘレン・ボサンケー、田中達訳『家族論』(大日本文明協会、1909 年)、水田珠枝監修『世界女性学基礎文献集成【明治大正編】』(ゆまに書房、2001 年) 第 7 巻。

Boucher, David, "The Creation of the Past: British Idealism and Michael Oakshott's Philosophy of History", *History and Theory*, Vol.23, No.2, 1984, pp.193-214.

Boucher, David, "Evolution and Politics: The Naturalistic, Ethical and Spiritual Bases of Evolutionary Arguments", *Australian Journal of Political Science*, Vol.27, No.1, 1992, pp.87-103.

Boucher, David, "British Idealism, the State, and International Relations", *Journal of the History of Ideas*, Vol.55, No.4, 1994, pp.671-694.

Boucher, David (ed.), *Cambridge Texts in the History of Political Thought: The British Idealists* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997).

Boucher, David and Vincent, Andrew, *British Idealism and Political Theory* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2000).

Bowpitt, Graham, "Evangelical Christianity, Secular Humanism, and the Genesis of British Social Work", *The British Journal of Social Work*, Vol.28, 1998, pp.675-693.

Bradley, A. C., "Bernard Bosanquet 1848-1923", *Proceedings of the British Academy*, 1921-1923, pp.563-572.

Bradley, James, "Hegel in Britain: A brief History of British Commentary and Attitudes (2)", *The Heythrop Journal*, Vol.20, 1979, pp.163-182.

Broad, C. D., The Notion of General Will, *Mind*, n.s., Vol.28, 1919, pp.501-504.

ブルース、M、秋田成就訳『福祉国家への歩みーイギリスが辿った途ー』(法政大学出版局、1984 年)。

Burns, C. D., Russell, B., and Cole, G. D. H., "Symposium: The Nature of the State in View of its External Relations", *Proceedings of the Aristotelian Society*, n.s., Vol.16, 1915-1916, pp.290-325.

Bussey, Gertrude Carman, "Dr. Bosanquet's Doctrine of Freedom", *The Philosophical Review*, Vol.25, No.5, 1916, pp.711-719.

カー、E・H、井上茂訳『危機の二十年』(岩波書店、1996 年)。

Carr, H. W., "In Memoriam: Bernard Bosanquet", *Proceedings of the Aristotelian Society*, n. s., Vol. 23, 1922-1923, pp.263 -272.

Carritt, E. F., *Morals and Politics: Theories of their Relation from Hobbes and Spinoza to Marx and Bosanquet* (Oxford: Clarendon, 1935).

Carter, Matt, "Ball, Bosanquet and the Legacy of T.H.Green", *History of Political Thought*, Vol.20, No.4, 1999, pp.674-694.

Catlin, George, *A History of the Political Philosophers* (London: George Allen & Unwin, 1950).

カトリン、G・E・G、竹原良文・柏経学訳『体系政治学ー政治社会の原理ー』〔上巻〕(法律文化社、1971 年)。

Chapman, John W., "Voluntary Association and the Political Theory of Pluralism ", in J. Roland

Pennock and John W. Chapman (eds.), *Voluntary Associations* (New York: Atherton Press, 1969), pp.87-118.

千葉真「アクィナスー徳の政治と共通善」、藤原保信・飯島昇三編『西洋政治思想史Ⅰ』（新評論、1995年）76-92頁。

Coker, Francis W., *Recent Political Thought* (New York and London: D. Appleton- Century, 1934).

Cole, G. D. H., "Loyalities", *Proceedings of the Aristotelian Society*, Vol.26, 1925-1926, pp.151-170.

コール、G・D・H、林健太郎他訳『イギリス労働運動史Ⅲ』（岩波書店、1957年）。

コール、マーガレット、久保まち子訳『ウェブ夫人の生涯』（誠文堂新光社、1982年）。

コリングウッド、R・G、玉井治訳『思索への旅ー自伝』（未来社、1981年）。

Collini, Stefan, *Public Moralists: Political Thought and Intellectual Life in Britain 1850-1930* (Oxford: Clarendon Press, 1993).

Collini, Stefan, "Hobhouse, Bosanquet and the State: Philosophical Idealism and Political Argument in England 1880-1918", *Past and Present*, No.72, 1976, pp.86-111.

Collini, Stefan, "Sociology and Idealism in Britain 1880-1920", *Archives Européennes de Sociologie*, Vol.19, No.1, 1978, 3-50.

Copleston, S. J. F., *A History of Philosophy, Volume VII, Modern Philosophy: Empiricism, Idealism, and Pragmatism in Britain and America* (New York: Doubleday, 1994).

克蘭ストン、M、小松茂夫訳『自由』（岩波書店、1976年）。

クロスランド、C・A・R、関嘉彦監訳『福祉国家の将来（1）』（論争社、1961年）。

Crossman, R. H. S., *Government and the Governed* (London: Cristophers, 1939).

Cunningham, G. Watts, "Bosanquet on Philosophic Method", *The Philosophical Review*, Vol.35, No.4, 1926, pp.315-327.

Dale, Peter Allan, "Gissing and Bosanquet: Culture Unhoused", *Victorian Newsletter*, Vol.95, 1999, pp.11-16.

ダンテ、平川祐弘訳『神曲』、『世界文学全集3 ダンテ』（講談社、1982年）。

デイヴィッドソン、W・L、堀豊彦、半田輝雄訳『イギリス政治思想Ⅲーベンサムからミルに至る功利主義者』（岩波書店、1953年）。

Deigh, John, "On the Right to Be Punished: Some Doughts", *Ethics*, Vol.2, No.2, 1984, pp.191-219.

Dendy, Helen, "The Protection of Children", "The Position of Women in Industry", in Bernard Bosanquet (ed.), *Aspects of the Social Problem* (London: Macmillan, 1895, reprint, New York: Kraus Reprint, 1968), pp. 46-62, 63-74.

ダイシー、A・V、清水金二郎訳『法律と世論』（法律文化社、1972年）。

ドレッシャー、シーモア、桜井陽二訳『デモクラシーのディレンマ』（荒地出版社、1970年）。

柴田卓弘『イギリス自由主義の展開ー古い自由主義の連続を中心にー』（早稲田大学出版部、1991年）。

Emmet, Dorothy, "Viewpoint: Bosanquet's Social Theory of the State", *The Sociological Review*, Vol.37, No.1, 1989, pp.104-127.

フォレット、M・P、榎本世彦他訳『新しい国家－民主的政治の解決としての集団組織論－』（文眞堂、1993年）。

Friess, Horace L., *Felix Adler and Ethical Culture* (New York: Columbia University Press, 1981).

藤原保信『増補版・政治哲学の復権』（新評論、1988年）。

藤原保信『二〇世紀の政治理論』（岩波書店、1991年）。

藤原保信『西洋政治理論史〔新装版〕』（早稲田大学出版部、1998年）。

藤原保信「英米のヘーゲル研究」、加藤尚武・久保陽一他編『ヘーゲル事典』（弘文堂、1992年）38-39頁。

福田歓一『政治学史』（東京大学出版会、1985年）。

福田歓一「公私問題の政治哲学的基本問題」、佐々木毅・金泰昌編『公と私の社会科学・公共哲学2』（岩波書店、2001年）1-40頁。

Gaus, Gerald F., *The Modern Liberal Theory of Man* (Canberra: Croom Helm, 1983).

Gaus, Gerald F., "Green, Bosanquet and the Philosophy of Coherence", in C.L.Ten (ed.), *Routledge History of Philosophy Volume VII: The Nineteenth Century* (London and New York: Routledge, 1994), pp.408-436.

Gaus, Gerald, "Does Democracy Reveal the Voice of the People?: Four Takes on Rousseau", *Australasian Journal of Philosophy*, Vol.75, No.2, 1997, pp.141-162.

Gettell, Raymond G., *History of Political Thought* (New York & London: Century, 1924).

Gibbins, John R., "Liberalism, Nationalism and the English Idealists", *History of European Ideas*, Vol.15, No.4-6, 1992, pp.491-497.

Gilbert, Bentley B., *The Evolution of National Insurance in Great Britain* (London: Michael Joseph, 1966).

Ginsberg, Morris, "Is There a General Will?", *Proceedings of the Aristotelian Society*, Vol.20, 1919-1920, pp.89-112.

Gooch, G. P., "Introductory: The Victorian Age, 1837-1901", in F. J. C. Hearnshaw (ed.), *The Social and Political Ideas of Some Representative Thinkers of the Victorian Age* (London, Bombay and Sydney: George G. Harpar, 1930), pp.9-29.

Gordon, Peter and White, John, *Philosophers as Educational Reformers* (London: Routledge and Kegan Paul, 1979).

グレイ、ジョン、藤原保信、輪島達郎訳『自由主義』（昭和堂、1991年）。

Green, E. H. H., *Ideologies of Conservatism* (Oxford: Oxford University Press, 2002).

Haldane, R. B., "Bernard Bosanquet 1848-1923", *Proceedings of the British Academy*, 1921-23, pp.572-575.

Haldar, Hiralal, *Neo-Hegelianism* (London: Heath Cranton, 1927).

- Harris, Frederick Phillip, *The Neo-Idealist Political Theory: Its Continuity with the British Tradition* (New York: King's Crown Press, 1944).
- Harris, José, *Unemployment and Politics* (Oxford: Clarendon, 1972).
- Harris, José, "Political Thought and the Welfare State 1870-1940: An Intellectual Framework for British Social Policy", *Past & Present*, No.135, 1992, pp.116-141.
- Harris, José, "The Webbs, The Charity Organisation Society and the Ratan Tata Foundation: Social Policy from the Perspective of 1912", in Martin Bulmer, Jane Lewis, David Piachaud (eds.), *The Goals of Social Policy* (London: Unwin Hyman Ltd, 1989), pp.27-63.
- 挟本佳代『社会システム論と自然』（法政大学出版局、2000年）。
- 長谷川如是閑『現代国家批判』（弘文堂書房、1912年）。
- Hayward, Jack, Barry, Brian, and Brown, Archie (ed.), *The British Study of Politics in the Twentieth Century* (Oxford: Oxford University Press, 1999).
- ヘーゲル、藤野渉・赤沢正敏訳『法の哲学』、岩崎武雄責任編集『世界の名著第44巻 ヘーゲル』（中央公論社、1978年）。
- ヘーゲル、山本信訳『精神現象学』「序論」、岩崎武雄責任編集『世界の名著第44巻 ヘーゲル』（中央公論社、1978年）。
- Hinchman, Lewis P., "The Idea of Individuality: Origins, Meanings, and Political Significance", *The Journal of Politics*, 1990, Vol.53, No.3, pp.759-781.
- Hobhouse, L. T., *Democracy and Reaction* (London: T. Fisher Unwin, 1904).
- Hobhouse, L. T., *The Metaphysical Theory of the State* (London: George Allen & Unwin, 1918).
- Hobson, J. A., *Democracy after the War* (London: George Allen and Unwin, 1917).
- ホブソン、J・A、石沢新二訳『帝国主義論』（1977年、大和書房）。
- Hoernlé, R. F. A., "Bernard Bosanquet's Philosophy of the State", *Political Science Quarterly*, Vol.34, 1919, pp.609-631.
- Hoernlé, R. F. A., "In Memoriam: Bernard Bosanquet", *The Journal of Philosophy*, Vol.20, No.19, 1923, pp.505-516.
- Høffding, Harald, *Einleitung in die Englische Philosophie unserer Zeit* (Leipzig: Theodor Thomas, 1889).
- Holman, Bob, "Prevention: the Victorian Legacy", *The British Journal of Social Work*, Vol.16, No.1, 1986, pp.1-23.
- Houang, François, *Le Néo-Hégélianisme en Angleterre: La Philosophie de Bernard Bosanquet 1848-1923* (Paris: Librairie Philosophique J. Vrin, 1954).
- Houang, François *De L'Humanisme à L'Absolutisme: L'Évolution de la Pensée Religieuse du Néo-Hégélien Anglais Bernard Bosanquet* (Paris: Librairie Philosophique J. Vrin, 1954).
- 掘豊彦「国家目的論の考察」（臺北帝國大學文政學部『政學科学研究年報』第3輯第1部法律政治篇、1936年）1-102頁。

保坂哲哉「イギリスのソーシャル・ポリシー論」、『社会政策叢書』編集委員会編『戦後社会政策の軌跡・社会政策叢書第14集』（啓文堂、1990年）23-43頁。

一番ヶ瀬康子他『社会福祉入門』（有斐閣、1979年）。

市井三郎「オックスフォード学派の非形式論理学」（『思想』、岩波書店、第387号、1956年）29-41頁。

今中次麿『政治学説史』（日本評論社、1931年）。

石井健司「ホブハウスによる「ヘーゲル＝ボザンケ的国家論」批判」（近畿大学法学会『近畿大学法学』第49巻、2002年）315-369頁。

岩崎卯一『社会学の人と文献』（刀江書院、1926年）。

Joad, C. E. M., *Liberty Today* (London: Watts, 1938).

Joad, C. E. M., *Guide to the Philosophy of Morals and Politics* (London: Victor Gollancz, 1947).

Jones, H. S., *Victorian Political Thought* (London: Macmillan, 2000).

Kahn, R. F., "J. S. Mill-Ethics and Politics", in C.L.Ten (ed.), *Routledge History of Philosophy Volume VII* (London and New York: Routledge, 1994), pp.62-97.

金子光一『ピアトリス・ウェッブの福祉思想』（ドメス出版、1997年）。

カント、加藤新平他訳『人倫の形而上学』、野田又夫責任編集『世界の名著第39巻 カント』（中央公論社、1979年）。

樫原朗『イギリス社会保障の史的研究Ⅰ』（法律文化社、1973年）。

柏經學「A.トックヴィルの政治思想のJ.S.ミルに及ぼした影響」（『折尾女子経済短期大学論集』第1号）111-138頁。

河合栄治郎『トーマス・ヒル・グリーン思想体系』、『河合栄治郎全集』第2巻（社会思想社、1968年）。

河合栄治郎『在欧通信』、『河合栄治郎全集』第17巻（社会思想社、1968年）。

河合栄治郎「読書漫筆」、『河合栄治郎全集』第20巻（社会思想社、1969年）。

河合栄治郎『日記Ⅰ』、『河合栄治郎全集』第22巻（社会思想社、1969年）。

河合秀和『現代イギリス政治史』（岩波書店、1974年）。

北岡勲『政治的理想主義—イギリス政治思想の一研究—』（御茶の水書房、1986年）。

北岡勲『イギリス政治哲学の生成と展開』（御茶の水書房、1987年）。

北岡勲「ボースンキット研究（1）」（『法と政治—関西学院大学法政学会—』第9巻第2号、1958年）15-54頁。

北岡勲「ボースンキット研究（2）」（『法と政治—関西学院大学法政学会—』第9巻第3号、1958年）59-100頁。

北岡勲他『政治学序説』（御茶の水書房、1987年）。

小林浩『ルソーと国家』（世界書院、1999年）。

小山路男『西洋社会事業史論』（光生館、1978年）。

日下喜一『現代政治思想史』（勁草書房、1967年）。

日下喜一「B・ボザンケの国家理論」(『拓殖大学論集』第32・33号合併号、1963年)495-504頁。

日下喜一「T・H・グリーンの政治思想」、行安茂・藤原保信責任編集、前掲書、1982年、83-107頁。

Laborde, Cécil, "The Concept of the State in Britain and French Political Thought", *Political Studies*, Vol.48, No.3, 2000, pp.540-557.

Lacock, Darrell Dexter, "The Political Philosophy of Bernard Bosanquet", Diss.Yale University, Ph.D, 1967.

Laski, Harold J., *Authority in Modern State* (New Heaven: Yale University Press, 1919).

Laski, H. J., "Bosanquet's Theory of the General Will", *Proceedings of the Aristotelian Society*, n.s., Supplement, Vol.8, 1928, pp.45-61.

ラスキ、H・J、石上良平訳『国家—理論と実践—』(岩波書店、1952年)。

ラスキ、H・J、飯坂良明訳『近代国家における自由』(岩波書店、1974年)。

Leighton, Joseph A., "An Estimate of Bosanquet's Philosophy", *Philosophical Review*, Vol.32, No.6, 1923, pp.625-632.

Letwin, Shirley Robin, *The Pursuit of Certainty: David Hume, Jeremy Bentham, John Stuart Mill, Beatrice Webb* (Cambridge: Cambridge University Press, 1965).

Lewis, Jane, "Family Provision of Health and Welfare in the Mixed Economy of Care in the late Nineteenth and Twentieth Centuries", *The Society for the Social History of Medicine*, Vol.8, No.1, 1995, pp.1-16.

Lewis, Jane, "The Boundary between Voluntary and Statutory Social Service in the late Nineteenth and early Twentieth Centuries", *The Historical Journal*, Vol.39, No.1, 1996, pp.155-177.

Lindsay, A. D., "The State Recent Political Theory", *The Political Quarterly*, Vol.1, 1914, pp.128-145.

Lindsay, A. D., "Bosanquet's Theory of the General Will", *Proceedings of the Aristotelian Society*, n.s., Supplement, Vol.8, 1928, pp.31-44.

Lindsay, A. D., "T. H. Green and the Idealists", in F. J. C. Hearnshaw (ed.), in *The Social and Political Ideas of Some Representative Thinkers of the Victorian Age* (London, Bombay and Sydney: George G. Harpar, 1930), pp.150-164.

リンゼイ、A・D、紀藤信義訳『現代民主主義国家』(未来社、1969年)。

MacIver, R. M., "Society and State", *Philosophical Review*, Vol.20, 1911, pp.30-45.

マッキーヴァー、R・M、中久郎・松本通晴訳『コミュニティ: 社会学的研究』(ミネルヴァ書房、1975年)。

MacKillop, I. D., *The British Societies* (New York: Cambridge University, 1986).

Mackillop, I. D., "The London School of Ethics and Social Philosophy: an adult education movement of the 1890s", *History of Education*, Vol.7, No.2, 1978, pp.119-127.

- MacMinn, N., Hains, J. R., and McCrimmon, J. M. (eds.), *Bibliography of the Published Writings of John Stuart Mill* (Illinois: Northwestern University, 1945, reprint, Bristol: Themmes, 1990).
- 萬田悦生『近代イギリス政治思想研究—T・H・グリーンを中心に—』(慶應通信, 1986年)。
- 萬田悦生「イギリス理想主義における政治価値の問題」(慶応義塾大学法学部『法学研究』第43巻第10号、1970年) 358-378頁。
- マルクーゼ、H、梶田啓三郎他訳『理性と革命』(岩波書店、1961年)。
- Marshall, Alfred, "Poor-Law Reform", *Economic Journal*, Vol.2, 1892, pp.371-379.
- 丸山雅夫「学派の争い」、阿部純二他編『刑法基本講座〈第一巻〉—基礎理論・刑罰論—』(法学書院、1992年) 122-137頁。
- 丸山武志『オウエンのユートピアと共生社会』(ミネルヴァ書房、1999年)。
- 松本礼二『トクヴィル研究』(東京大学出版会、1991年)。
- McBriar, A. M., *Fabian Socialism & English Politics: 1884-1918* (Cambridge: Cambridge University Press, 1962).
- McBriar, A. M. *An Edwardian Mixed Doubles: the Bosanquets versus the Webbs-A Study in Britain Social Policy 1890-1929* (Oxford: Clarendon Press, 1987).
- Meadowcroft, James *Conceptualizing the State: Innovation and Dispute in British Political Thought 1880-1914* (Oxford: Clarendon Press, 1995).
- Metz, Rudolf, *Die Philosophischen Strömungen in Grossbritannien* (Leipzig: Felix Meiner, 1935).
- Mill, J. S., *Autobiography*, Vol. I of *Collected Works of John Stuart Mill*, ed. by John Robson et al. (Toronto: University of Toronto Press, 1981).
- Mill, J. S., *A System of Logic*, Vol. VIII of *Collected Works of John Stuart Mill*, ed. by John Robson et al. (Toronto: University of Toronto Press, 1974).
- Mill, J. S., "De Tocqueville on Democracy in America [II]", Vol. XVIII of *Collected Works of John Stuart Mill*, ed. by John Robson et al. (Toronto: University of Toronto Press, 1977).
- Mill, J. S., *On Liberty*, Vol. XVIII of *Collected Works of John Stuart Mill*, ed. by John Robson et al. (Toronto: University of Toronto Press, 1977).
- ミル、J・S、大関将一訳『論理学体系—論証と帰納VI』(春秋社、1959年) 17-18頁。
- ミル、J・S、朱牟田夏雄訳『ミル自伝』(岩波書店、1960年)。
- ミル、J・S、山下重一訳『アメリカの民主主義』(未来社・社会科学ゼミナール 28、1962年)。
- ミル、J・S、早川忠訳『自由論』(世界の名著、中央公論社、1967年)。
- Miller, David, Coleman, Janet, Connolly, William, and, Ryan, Alan (eds.), *The Blackwell Encyclopaedia of Political Thought* (Oxford and New York: Basil Blackwell, 1987, reprint, 1993).
- Milne, A. J. M., *The Social Philosophy of English Idealism* (London: George Allen & Unwin, 1962).
- Milne, A. J. M., "The Idealist Criticism of Utilitarian Social Philosophy", *Archives Européennes de*

Sociologie, Vol.8, No.2, 1967, pp.319-331.

三戸公・榎本世彦『フォレット、経営学・人と学説』（同文館、1989年）。

宮本葉子「ベイリオル・コレッジートインビー・ホール設立の歴史的背景に関する一考察」(『奈良女子大学教育学科年報』第12号、1994年) 165-175頁。

水谷三公『ラスキとその仲間』（中央公論社、1994年）。

Monaghan, P. A., "Ball, Bosanquet and the Green Legacy: A Reply to Matt Carter", *History of Political Thought*, Vol.22, No.3, 2001, pp.525-529.

Morefield, Jeannie, "Hegelian Organicism, British New Liberalism and the Return of the Family State", *History of Political Thought*, Vol.23, No.1, 2002, pp.141-170.

Morris, Christopher W., "The Very Idea of Popular Sovereignty: 'We the People Reconsidered'", *Social Philosophy and Policy*, Vol.17, No.1, 2000, pp.1-26.

Morrow, John, "British Idealism, 'German Philosophy' and the First World War", *The Australian Journal of Politics and History*, Vol.28, No.3, 1982, pp.380-390.

Morrow, John, "Liberalism and British Idealist Political Philosophy: A Reassessment", *History of Political Thought*, Vol.5, No.1, 1984, pp.91-108.

Morrow, John, "Ancestors, Legacies and Traditions: British Idealism in the History of Political Thought", *History of Political Thought*, Vol.6, No.3, 1985, pp.491-515.

Morrow, John, "Community, Class and Bosanquet's 'New State'", *History of Political Thought*, Vol.21, No.3, 2000, pp.485-499.

毛利健三『イギリス福祉国家の研究－社会保障発達の諸画期－』（東京大学出版会、1990年）。

Mowat, Charles Loch, *The Charity Organisation Society* (London: Methuen and Co Ltd, 1961).

Mowat, Charles Loch, "The Approach to the Welfare State in Great Britain", *American Historical Review*, Vol.58, 1952, pp.55-63.

Muirhead, J. H., *The Service of the State: Four Lectures on the Political Teaching of T.H.Green* (London: John Murray, 1908).

Muirhead, J. H. (ed.), *Contemporary British Philosophy: Personal Statements*, 1st ser. (London: George Allen and Unwin, 1924).

Muirhead, J. H., "Bernard Bosanquet as I Know", *The Journal of Philosophy*, Vol.20, No.25, 1923, pp. 673-679.

Muirhead, J. H., "Bernard Bosanquet", *Mind*, Vol.32, 1923, pp.393-402.

Muirhead, J. H., "Recent Criticism of the Idealist Theory of the General Will (I)", *Mind*, Vol.33, 1924, pp.166-175.

村上信一郎「知識人と政治」、馬場康雄・岡沢憲芙編『イタリアの政治』（早稲田大学出版部、1999年）206-223頁。

村岡健次・川北稔編著『イギリス近代史－宗教改革から現代まで－』（ミネルヴァ書房、1986年）。

- Murray, Robert H., *Studies in the English Social and Political Thinkers of the Nineteenth Century*, Vol.II (Cambridge: W.Heffer & Sons, 1929).
- 名古忠行『フェビアン協会の研究』(法律文化社、1987年)。
- 名古忠行『イギリス社会民主主義の研究—ユートピアと福祉国家—』(法律文化社、2002年)。
- 中川雄一郎『イギリス協同組合思想研究』(日本経済評論社、1984年)。
- 夏目漱石「日記・断片・上」、『漱石全集』第19巻(岩波書店、1995年)。
- 夏目漱石「別冊・下」、『漱石全集』第27巻(岩波書店、1997年)。
- ニコルス、D、日下喜一他訳『政治的多元主義の諸相』(御茶の水書房、1981年)。
- Nicholson, Peter P., *The Political Philosophy of the British Idealists* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990).
- Nicholson, Peter P., "Philosophical Idealism and International Politics: a Reply to Dr. Savigear", *British Journal of International Studies*, Vol.2, No.1, 1976, pp.76-83.
- Nicholson, Peter P., "A Bibliography of the Writings of Bernard Bosanquet (1848-1923)", *Idealistic Studies*, Vol.8, 1978, pp.261-280.
- Nicholson, Peter, "Thomas Hill Green: Lectures on the Principles of Political Obligation", in Murray Forsyth and Maurice Keens-soper (eds.), *The Political Classics: Green to Dworkin* (Oxford: Oxford University Press, 1996).
- 日本イギリス哲学会『イギリス哲学研究』(第20号、1997年)。
- Oakeshott, Michael, "Review of Bertil Pfannensteill, *Bernard Bosanquet's Philosophy of the State: A Historical and Systematical Study*", *Philosophy*, Vol.11, 1936, pp.482-483.
- Offer, John, "Spencer's Future of Welfare: a Vision Eclipsed", *The Sociological Review*, Vol.47, No.1, 1999, pp.136-162.
- Offer, John, "Idealist Thought, Social Policy and the Rediscovery of Informal Care", *The British Journal of Sociology*, Vol.50, No.3, 1999, pp.467-488.
- 岡真人「ウェッブ夫妻の社会主義像試論」(『社会思想史研究』第2号、1978年) 137-156頁。
- 奥村家造「F・H・ブラッドレイとその周辺」(『立命館文学』第111号、1954年) 490-503頁。
- 大沢真理『イギリス社会政策史』(東京大学出版会、1986年)。
- 大島正徳『近代英国哲学』(三共出版社、1926年)。
- 大島正徳『哲学講座』第13巻(誠文堂、1931年)。
- O'Sullivan, Noel, *The Problem of Political Obligation* (New York and London: Garland Publishing, 1987).
- 大塚桂『ラスキとホップハウス』(勁草書房、1997年)。
- 大塚桂『近代日本の政治学者群像』(勁草書房、2001年)。
- Otter, Sandra. den, *British Idealism and Social Explanation: A Study in Late Victorian Thought* (Oxford: Clarendon Press, 1996).
- オウエン、ロバート、楊井克巳訳『新社会観』(岩波書店、1954年)。

- Owen, David, *English Philanthropy 1660-1960* (London: Oxford University Press, 1965).
- 尾崎和彦『北欧思想の水脈』(世界書院, 1994年)。
- Parker, Christopher, "Bernard Bosanquet, Historical Knowledge, and the History of Ideas", *Philosophy of the Social Sciences*, Vol.18, No.2, 1988, pp.213-230.
- Paul, Leslie, *The English Philosophers* (London: Faber and Faber, 1953).
- Pearson, Robert and Williams, Geraint, *Political Thought and Public Policy in the Nineteenth Century* (London and New York: Longman, 1984).
- Pease, Edward R., *History of the Fabian Society* (London: A. C. Fifield, 1916).
- Perry, R. B., *The Present Conflict of Ideals* (New York: Longmans, 1918).
- Pfannenstill, Bertil, *Bernard Bosanquet's Philosophy of the State: A historical and Systematical Study* (Lund: Håkan Ohlsson, 1936).
- Pilcher, G.T., "Dr. Bernard Bosanquet", *Charity Organisation Quarterly*, No.5, 1923, pp.75-76.
- ブラムナツ、J・P、森本哲夫・萬田悦生訳『政治理論とことば』(昭和堂, 1988年)。
- ポッパー、カール・ライマンド、武田弘道訳『自由社会の哲学とその論敵』(世界思想社、1973年)。
- Primoratz, Igor, "The Word 'Liberty' on the Chains of Galley-Slaves: Bosanquet's Theory of the General Will", *History of Political Thought*, Vol.15, No.2, 1994, pp.249-267.
- Quinton, A. M., "Absolute Idealism", *Proceedings of the British Academy*, Vol.57, 1971, pp.303-329.
- Randall, J. H., "Idealistic Social Philosophy and Bernard Bosanquet", *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol.26, 1966, pp.473-502.
- Reports of the Royal Commission on the Poor Laws and Relief of Distress*, Cd.4499, 1909, Royal Warrant.
- Reports of the Royal Commission on the Poor Laws and Relief of Distress*, Cd.4499, 1909, Majority Report.
- Reports of the Royal Commission on the Poor Laws and Relief of Distress*, Cd.4499, 1909, Separate Report.
- Royal Commission on the Poor Laws and Relief of Distress*. Reports on Scotland, Cd.4922, 1909.
- Richter, Melvin, *The Politics of Conscience: T. H. Green and His Age* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1964, reprint, Lanham, New York and London: University Press of America, 1983).
- Rimlinger, Gaston V., *Welfare Policy and Industrialization in Europe, America, and Russia* (New York, London, Sydney and Toronto: John Wiley and Sons, Inc., 1971).
- Robins, Peter, *The British Hegelians 1875-1925* (New York and London: Garland Publishing, 1982).
- Rooff, Madeline, *A Hundred Years of Family Welfare* (London: Michael Joseph, 1972).
- Rose, Michael E., *The Relief of Poverty, 1834-1914, Second Edition* (Hampshire and London: Macmillan, 1986).

- 蠟山政道「英国理想哲学の発達（上）」（『国家学会雑誌』第35巻第3号，1921年）107-141頁。
- Ryan, Alan, *The Philosophy of John Stuart Mill, Second Edition* (London: Macmillan, 1987).
- Sabine, George H., *A History of Political Theory, Third Edition* (London: George G. Harrap, 1963, reprint, 1966).
- Sabine, G. H., “Bosanquet’s Theory of the Real Will”, *The Philosophical Review*, Vol.32, No.6, 1923, pp.633-651.
- Sagoff, Mark, “The Limits of Justice”, *The Yale Law Journal*, Vol.92, No.6, 1983, pp.1065-1091.
- Sargent, Lyman Tower, *Contemporary Political Ideologies: A Comparative Analysis, Third Edition* (London: The Dorsey Press, 1975).
- Savigear, P., “Philosophical Idealism and International Politics: Bosanquet, Treitschke and War”, *British Journal of International Studies*, Vol.1, No.1, 1975, pp.48-59.
- Savigear, P., “European Political Philosophy and the Theory of International Relations”, in Trevor Taylor (ed.), *Approach and Theory in International Relations* (London: Longmans, 1978), pp.32-53.
- シュンペーター，東畑精一訳『経済分析の歴史3』（岩波書店，1957年）。
- シュンペーター，東畑精一訳『経済分析の歴史4』（岩波書店，1958年）。
- 関嘉彦『社会主義の歴史2』（力富書房，1987年）。
- 関本安孝『新版経済学史』（梓出版社，1978年）。
- セロー、ルネ、高橋允昭訳『ヘーゲル哲学』（白水社、1973年）。
- Shaw, Bernard (ed.), *Fabian Essays in Socialism, 1920 Edition* (London: George Allen & Unwin, 1920).
- 芝田秀幹「河合栄治郎とB・ボザンケ」、河合栄治郎研究会編『教養の思想—その再評価から新たなアプローチへ—』（社会思想社、2002年）209-234頁。
- 白石正樹『ルソーの政治哲学（上巻）』（早稲田大学出版部，1983年）。
- Simhoni, Avital, “British Idealism: Its Political and Social Thought”, *The Bulletin of the Hegel Society of Great Britain*, No.3, 1981, pp.16-31.
- Simhony, Avital, “Idealist Organicism: Beyond Holism and Individualism”, *History of Political Thought*, Vol.12, No.3, 1991, pp. 515-527.
- Smith, Thomas W., “Michael Oakeshott on History, Practice and Political Theory”, *History of Political Thought*, Vol.17, No.4, 1996, pp.591-614.
- Sorley, W. R., *A History of English Philosophy* (Cambridge: University Press, 1920).
- Spencer, Herbert, *The Man Versus the State, Thinkers Library Edition, Second Edition* (London: Watts & Co., 1950).
- Spiller, G., *The Ethical Movement in Great Britain: A Documentary History* (London: The Farleigh Press, 1934).
- Stedman, R. E., “Nature in the Philosophy of Bosanquet”, *Mind*, Vol.93, 1934, pp.321-334.

- 鈴木基史『国際関係－社会科学の理論とモデル 2』（東京大学出版会、2000年）。
- Sweet, William, *Idealism and Rights: The Social Ontology of Human Rights in the Political Thought of Bernard Bosanquet* (Lahman, New York and London: University Press of America, 1997).
- Sweet, William, "Individual Rights, Communitarianism, and British Idealism", in Yeager Hudson and Creighton Peden (ed.), *The Bill of Rights: Bicentennial Reflections* (Lewiston: The Edwin Mellen Press, 1993), pp.261-277.
- Sweet, William "Was Bosanquet a Hegelian?", *Bulletin of the Hegel Society of Great Britain*, No.31, 1995, pp.39-60.
- 多田真鋤『ヨーロッパ近代政治社会思想史』（慶應義塾大学出版会、1996年）。
- 高島通敏「国家主義」、阿部齋・内田満・高柳先男編、『現代政治学小辞典』（有斐閣、1999年）。
- 高島進『イギリス社会福祉発達史論』（ミネルヴァ書房、1979年）。
- 高島進『社会福祉の歴史－慈善事業・救貧法から現代まで－』（ミネルヴァ書房、1995年）。
- 高野史郎『イギリス近代社会事業の形成過程－ロンドン慈善組織協会の活動を中心にして－』（1985年、勁草書房）。
- 高野史郎「1930年救貧法（統一）法の成立過程（上）－1909～1930－」（『明治学院論叢社会学・社会福祉学研究』第175号、1971年）39-71頁。
- 田村浩志『集いと語りのデモクラシー－リンゼイとダールの多元主義論－』（勁草書房、2002年）。
- The Times*, Saturday, February 10, 1923.
- Thomas, Geoffrey, "Philosophy and Ideology in Bernard Bosanquets Political Theory", in W. J. Mander (ed.), *Anglo-American Idealism, 1865-1927* (London: Greenwood Press, 2000), pp.105-121.
- ティトマス、R・M、谷昌恒訳『福祉国家の理想と現実』（東京大学出版会、1967年）。
- Trott, Adam v., "B. Bosanquet und der Einfluss Hegels auf die englische Staatsphilosophie", *Zeitschrift für Deutsche Kulturphilosophie*, Band 4, Heft 2, 1938, S.193-199.
- Turner, Frank M., *The Greek Heritage in Victorian Britain* (New Haven and London: Yale University Press, 1981).
- 上杉健太郎「J.S.ミル政治思想の方法的基礎（I）－J.S.ミル『論理学体系』第6巻を巡って－」（『早稲田政治公法研究』第18号、1986年）109-154頁。
- ウラム、アダム・B、谷田部文吉訳『イギリス社会主義の哲学的基礎』（未来社、1968年）。
- Vincent, Andrew and Plant, Raymond, *Philosophy, Politics and Citizenship* (Oxford: Basil Blackwell, 1984).
- Vincent, Andrew, "The Poor Law Reports of 1909 and the Social Theory of the Charity Organization Society", *Victorian Studies*, Vol.27, No.3, 1984, pp.343-363.
- Vincent, Andrew, "The State and Social Purpose in Idealist Political Philosophy", *History of European Ideas*, Vol.8, No.3, 1987, pp.333-347.

- Vincent, Andrew, "Can Groups be Persons? ", *The Review of Metaphysics*, Vol.42, No.4, 1989, pp.687-715.
- Vincent, Andrew, "Classical Liberalism and its Crisis of Liberty", *History of Political Thought*, Vol.11, No.1, 1990, pp.143-161.
- Vincent, Andrew "Citizenship, Poverty and the Real Will", *The Sociological Review*, Vol.40, No.4, 1992, pp.702-725.
- ヴィンセント、アンドルー、森本哲夫監訳『国家の諸理論』（昭和堂、1991年）。
- 若松繁信『ブルジョア人民国家論の成立』（亜紀書房、1969年）。
- 若松繁信「バーナード・ボウズンキットの市民論」（『北九州大学外国語学部紀要』第48号、1983年）257-288頁。
- ワーノック、G・J、坂本百大・宮下治子訳『現代のイギリス哲学』（勁草書房、1983年）。
- Webb, Beatrice, *My Apprenticeship* (London: Longman, 1926).
- Webb, Beatrice, *Our Partnership* (London: Longmans, Green and Co., 1948).
- Webb, Sidney, "Socialism in England", *Publications of the American Economic Association*, Vol.4, 1889, pp.7-70.
- Webb, Sidney, "The Moral Aspects of Socialism", *International Journal of Ethics*, Vol.7, 1897, pp.80-84.
- Webb, Sidney, "The Reports of the Poor Law Commission. II. The End of the Poor Law", *The Sociological Review*, 1909, Vol.2, No.2, pp.127-139.
- Webb, Sidney and Webb, Beatrice, *English Poor Law Policy* (London: Longmans, Green and Co., 1910).
- Webb, Sidney and Webb, Beatrice, *The Prevention of Destitution* (London: Longmans, Green and Co., 1920).
- Willis, Kirk, "The Introduction and Critical Reception of Marxist Thought in Britain, 1850-1900", *The Historical Journal*, Vol.20, No.2, 1977, pp.417-459.
- Wolfe, Willard, *From Radicalism to Socialism: Men and Ideas in the Formation of Fabian Socialists Doctrines, 1881-1889* (New Haven and London: Yale University Press, 1975).
- Woodard, Calvin, "Reality and Social Reform: the Transition from Laissez-faire to the Welfare State", *The Yale Law Journal*, Vol.72, No.2, 1962, pp.286-328.
- Woodroffe, Kathleen, "The Charity Organisation and the Origins of Social Casework", *Historical Studies: Australia and New Zealand*, Vol.9, 1959, pp.19-29.
- Woodroffe, Kathleen, "The Royal Commission on the Poor Laws 1905-09", *International Review of Social History*, Vol.22, No.2, 1977, pp.137-164.
- 山本新『人類の知的遺産 74 トインビー』（講談社、1978年）。
- 山室武甫『人類愛の使徒ウィリアム・ブース』（玉川大学出版部、1970年）。
- 山下重一『J・S・ミルの政治思想』（木鐸社、1976年）。

山下重一「イギリス理想主義哲学」、飯坂良明・小松春雄・山下重一・関嘉彦『イギリス政治思想史』（木鐸社、1974年）268-290頁。

柳沢謙次「全体主義」、大学教育社編『新訂版現代政治学事典』（1998年、ブレーン出版）

安保則夫「1905-9年の王立救貧法委員会についてーイギリス失業政策史との関連においてー」（関西学院大学経済学研究会『経済学論究』第34巻第4号、1981年）43-64頁参照。

行安茂「T・H・グリーンの生涯とその思想」、行安茂、藤原保信責任編集『T・H・グリーン研究』（御茶の水書房、1982年）3-26頁。

行安茂「イギリス理想主義運動とグリーン学派」（岡山大学教育学部『研究報告』第44号、1976年）35-44頁。

行安茂『デューイ倫理学の形成と展開』（以文社、1988年）。

付録 ボザンケ年譜

年	年齢	
1848.6.14.		イギリス、ノーサンバーランド州アルンウィック (Alnwick) にある小村ロック (Rock) の「ロック・ホール」 (Rock Hall) に 5 人兄弟の末子として生まれる。 父は R・W・ボザンケ師 (the Revd R.W.Bosanquet)。
1848.8.6.		洗礼を受ける。
1855.6.14.	7	「ロック・ホール」の修繕のためにイギリス出国。フランス・ディジョン (Dijon)、スイス・ジュネーブ (Geneva) に滞在 (10.12 まで)。 帰国後はメーフェア (Mayfair) に滞在。
1856.	8	母親が病弱なこと、兄弟が不在なことから、ヨーク州、シャーバーン (Sherburn) の全寮制の進学準備校 (preparatory school) に進学。
1860.	12	エルストリー (Elstree) 校へ進学。
1862.	14	ハロー (Harrow) 校へ進学。
1867.	19	オックスフォード・ベリオル・カレッジ (Balliol College) に進学。 ジョウエット (B. Jowett), T・H・グリーンらの影響を受ける。 新たにピーターズ (F.Peters), ロック (C.S.Loch), ブラッドレー (A.C.Bradley), ハリソン (E.Harrison), モリス・スターリング (Morris Stirling), デイヴィッド・ダンデス (David Dundas) らと知り合う。 マンチェスター (Manchester) の展覧会へ (1 週間) 旅行。
1870.	22	B.A. (Bachelor of Arts) 学位取得のための公式第 1 次試験 (Moderations : Mods) 及び本試験 (Greats) において最優秀成績を収め、人文学 (Lit.Hum : literae humaniores) を卒業。 オックスフォード・ユニバーシティ・カレッジ (University College) のフェロウ (Fellow) に選定される。 兄チャールズ・B・P・ボザンケが「慈善組織協会」 (the Charity Organisation Society) 初代事務局長に就任。
1871.	23	オックスフォード・ユニバーシティ・カレッジのフェロウに着任、個人指導チューター (tutor) 兼任。
1875.	27	兄、チャールズ・B・P・ボザンケが「慈善組織協会」事務局長を辞任。
1876.	28	親友ロックが「慈善組織協会」事務局長に就任。
1878.	30	F・H・ブラッドレー (F・H・Bradley) 『倫理学研究』 (Ethical Studies) が出版される。 シェマン (Schömann) 『アテネの立憲制史』 (Constitutional History of Athens) を翻訳出版。
1881.	33	オックスフォードのフェロウを辞し、ロンドン、エバリー・ストリート (Ebury Street) 131 へ移住 (以後 8 年間下宿生活)。 ポントウレシナ (Pontresina) を旅行。
1881.夏		
1882.	34	T・H・グリーン (1836-1882) 死去。
1883.	35	F・H・ブラッドレー 『論理学原理』 (Principles of Logic) 出版。
1884.	36	グリーンの仕事であったロッツェ (Hermann Lotze, 1817-81) の『哲学』 (Logik) 『形而上学』 (Metaphysik) の翻訳・編集を代行 (共訳)。 「知識の学問としての論理学」 (Logic as the Science of Knowledge) を、セス (A.Seth), ホルデン (R.B.Haldane) 編の『哲学批評論集』 (Essays in Philosophical Criticism) に発表。
1885.	37	処女作『知識と実在性』 (Knowledge and Reality) 出版。 「家内工芸・産業協会」 (the Home Arts and Industries Association) が発足・参加。
1886.	38	「ヘーゲルの『美学』への序論」 (The Introduction to Hegel's Philosophy of Fine Art) を翻訳、序文「あの世に関する真の概念について」 (On the True Conception of Another World) を付して出版。

1887.	39	<p>「慈善組織協会」の「執行委員会」委員長に就任。 「アリストテレス協会」(the Aristotelian Society)に参加。 「ロンドン倫理協会」(the London Ethical Society)が発足。 「慈善組織協会」「執行委員会」委員長を辞す。 「ロンドン倫理協会」に参加(以後13年間)。 「大学公開講座計画」(University Extension Scheme)のコース配置に則り、「トインビー・ホール」(Toynbee Hall)等の場所で講演開始(日曜夕刻)。</p>
1888.	40	<p>『論理学:知識の形態論』(<i>Logic or the Morphology of Knowledge</i>)初版(全2巻)出版。 「アリストテレス協会」副会長(vice-president)に就任。 「家内工芸・産業協会」で講演。 フィレンツェ(Florence)とボローニャ(Bologna)を訪問。</p>
1889.	41	<p>ロンドン・チェルシーのチェイン・ガーデンズ7(Cheyne Gardens)に移住。 『評論・講演集』(<i>Essays and Addresses</i>)出版。</p>
1889.冬		<p>「エセックス・ホール」(Essex Hall)での講演を開始(平日夕刻)。 フィレンツェとボローニャを再訪。</p>
1890.	42	<p>「エセックス・ホール」での講演終了。</p>
1891.	43	<p>『評論・講演集』第2版出版。</p>
1892.	44	<p>『美学通史』(<i>A History of Aesthetic</i>)出版。 グラスゴウ大学(Glasgow University)より名誉学位が授与される。</p>
春		<p>アメリカ・マサチューセッツ州プリマス(Plymouth)の「応用倫理学学校」 (the School of Applied Ethics)の“サマースクール”の講義を、病気のW・ウォーラス (William Wallace)に代わって担当。6週間渡米。</p>
夏		
1893.	45	<p>『キリスト教国の文明』(<i>The Civilisation of Christendom</i>)出版。 ノルウェーに旅行。</p>
夏		
1894.	46	<p>「アリストテレス協会」会長に就任。 ヴァイマル(Weimar)を旅行。 ゲーテ(Goethe)の生家を訪問。</p>
夏		
1895.12.13.	47	<p>ヘレン・デンディ(Helen Dendy)と結婚。 『プラトン「国家」必携』(<i>A Companion to Plato's Republic</i>)出版。 『論理学の本質』(<i>The Essentials of Logic</i>)出版。 『社会問題の諸局面』(<i>Aspects of the Social Problem</i>) (編著)出版。</p>
夏	48	<p>スイス(Switzerland)に旅行(6週間)。</p>
1897.4.	49	<p>ロンドンを離れケイターム(Caterham)に移る。 『道徳的自己の心理学』(<i>Psychology of the Moral Self</i>)出版。 『哲学的国家理論』(<i>The Philosophical Theory of the State</i>)の執筆に着手。 「ロンドン倫理協会」解散。 「ロンドン倫理学・社会哲学学校」(the London School of Ethics and Social Philosophy)設立。</p>
1898.3.22.	50	<p>ギリシャに旅行(4月帰国)。 「慈善組織協会」の「評議会」特別評議員(an additional Member of Council)に就任(死去するまで)。 「アリストテレス協会」会長の職を辞任。</p>
1899.9.	51	<p>ケイタームからサリー州のオークショット(Oxshott)に移住。</p>
1899.9.		<p>『哲学的国家理論』初版を出版。</p>
1900.	52	<p>『プラトン「国家」における青年教育』(<i>The Education of the Young in Plato's Republic</i>)を出版。 「ロンドン倫理学・社会哲学学校」経営悪化のため閉鎖。</p>

春		夫人ヘレンとともにフィレンツェに3度目の旅行（ヘレンは初）。
1901.	53	「慈善組織協会」の「評議会」副議長に就任。
1901. 2.		ウィンチェスター (Winchester), ソールズベリー (Salisbury), ストーンヘンジ (Stonehenge), ニューフォールレスト (New Forest) 等イングランド各地を探訪。
1901.12.		ローマに旅行（3カ月）。
1902.	54	「慈善組織協会」の系列学校「社会学・社会経済学学校」(School of Sociology and Social Economics) 設立。理事長 (chairman) に着任。
1903.	55	セント・アンドルーズ大学 (The University of St. Andrews) 「道德哲学」教授に着任。
		セント・アンドルーズ, ハワード・プレイス (Howard Place) 4 に移り住む。
1904. 7.	56	ノルウェーへ旅行。
		兄チャールズ・B・P・ボザンケ死去。
1905.	57	ホアンレ (R.F. Alfred Hoemlé) に巡り会う。
		イタリアへ旅行。
		保守党バルフォア内閣により設置された「王立救貧法委員会」に「慈善組織協会」のメンバーとして妻ヘレンが委員に選定される。
1907.	59	英国学士院 (British Academy) のメンバーに選出される。
1908.	60	セント・アンドルーズ大学を辞す。オークショットに戻る。
1909.	61	バーミンガム (Birmingham) 大学から名誉学位, 法学博士 (the LL.D. degree) の学位が授与される。
		「王立救貧法委員会」終結, 妻ヘレン「多数派報告」(Majority Report) に署名。
1910.	62	『哲学的国家理論』第2版を出版。
1910. 9.		セント・アンドルーズ大学創立 500 周年記念祝典に参加。名誉学位授与。
1910.10.		個人病院 (a nursing home) に3週間入院, 手術を受ける。
1911.	63	エジンバラ大学 (the University of Edinburgh) でのギフォード・レクチャー (Gifford Lectures) での講義開始（5週間）。エジンバラ, メルヴィル・ストリート (Melville Street) 60 の寄宿舎に移る。
		『論理学：知識の形態論』第2版出版。
		第4回「哲学国際会議」(International Congress of Philosophy) (於ボローニャ) で次回議長に選出される。
1912.	64	エジンバラ大学でのギフォード・レクチャー第2課程が始まる。
		『個性と価値の原理』(<i>The Principle of Individuality and Value</i>) 出版。
		仏語論文「ルソーの政治的諸観念」(<i>Les Idées Politiques de Rousseau</i>) を『形而上学・道德学雑誌』(<i>Revue de Métaphysique et de Morale</i>) に発表。
		「社会学・社会経済学学校」が財政上の問題から「ロンドン経済学校」(the London School of Economics) (ロンドン大学) に接收される。
		アメリカ, ハーバード大学での講義に招聘されるが拒否（個人病院に再度入院）。
1913.	65	『個人の価値と運命』(<i>The Value and Destiny of the Individual</i>) 出版。
		『精神とその対象との区別』(<i>The Distinction between Mind and its Objects</i>) を出版。
1914.	66	第一次世界大戦勃発。
1915.	67	「哲学国際会議」の開催が中止（戦争中のため）。
		『美学3講』(<i>Three Lectures on Aesthetic</i>) 出版。
		「慈善組織協会」の「評議会」副議長職を辞す。
		心臓疾患が悪化する。
1916.	68	「慈善組織協会」の「評議会」議長に就任。
1917.	69	『社会的国際的理念』(<i>Social and International Ideals</i>) 出版。
		「慈善組織協会」の「評議会」議長職を辞す。
1918.	70	『倫理学連想』(<i>Some Suggestions on Ethics</i>) 出版。道德哲学。

1919.	71	<p>第一次世界大戦終了。</p> <p>『倫理学連想』第2版出版。</p> <p>「ベネデット・クローチェの哲学」(The Philosophy of Benedetto Croce)を『クオータリー・レビュー』(Quarterly Review)発表。</p> <p>「クローチェの美学」(Croce's Aesthetic)を『英国学士院会報』(Proceedings of the British Academy)に発表。</p> <p>『ゾアル』(Zoar)出版(ヘレンとの共訳)。</p>
1919. 6.		オックスフォードを訪問。かつての親友ら歓談(最後)。F・H・ブラッドレーと会合。
1920.	72	<p>『哲学的国家理論』第3版を出版。</p> <p>『含意と線形的推論』(Implication and Liner Inference)を出版。</p> <p>『宗教とは何か』(What Religion is)を出版。</p>
1921.	73	『現代哲学における諸極の遭遇』(The Meeting of Extremes in Contemporary Philosophy)出版。
1922.10.	74	<p>オークショットからロンドンのゴールダース・グリーン(Golders Green)に移る。</p> <p>イタリア語の論文を発表。“La distinzione di natuira e spirito”, <i>Giornale Critico della Filosofia Italiana</i>, Vol.3, 1922, pp.59-66.</p> <p>ブラッドレー『論理学原理』第2版出版。</p>
1923.		<p>『哲学的国家理論』第4版を出版。</p> <p>イタリア語の論文を発表。“Il naturalismo e la filosofia del Tusso”, <i>Giornale Critico della Filosofia Italiana</i>, Vol.4, 1923, pp.62-68.</p>
1923. 2. 8.		<p>ロンドンにて死去。</p> <p>『精神の本性に関する3章』(Three Chapters on the Nature of Mind) 未完。死去後出版。</p>
1924.		<p>自叙伝「人生と哲学」(Life and Philosophy)所収のミアヘッド編『現代英国哲学』(Contemporary British Philosophy)が出版される。</p> <p>論文集『科学と哲学』(Science and Philosophy)がミアヘッドの編集で出版される。</p>
1925.		『哲学的国家理論』第4版重版。
1930.		『哲学的国家理論』第4版重版。
1935.		書簡集『バーナード・ボザンケとその友人』(Bernard Bosanquet and His Friends)がミアヘッドの編集で出版される。
1951.		『哲学的国家理論』第4版重版。
1958.		『哲学的国家理論』第4版重版。
1963.		『美学3講』がザ・ライブラリー・オブ・リベラル・アーツ社(The Library of Liberal Arts)から再版される。
1965.		『哲学的国家理論』第4版重版。
1968.		主要作品がニューヨーク、クラウス・リプリント社(Kraus Reprint Co.)から再版される。
1993.		グレッグ・リバイバルズ社(Gregg Revivals)より「哲学モダンリバイバルシリーズ」(Modern Revivals in Philosophy)の一つとして、『哲学的国家理論』第4版が重版される。
1996. 8.		ルーートレッジ社(Routledge)より『国家哲学と福祉の実践ーボザンケ夫妻著作集ー』(全8巻) (The Philosophy of the State and the Practice of Welfare. The Writings of Bernard Bosanquet and Helen Bosanquet. With new Introduction by D.Gladstone) が刊行。
1999. 1.		『バーナード・ボザンケ著作集』(The Collected Works of Bernard Bosanquet. 20 vols. Ed. and intro, by W Sweet.)刊行。

索引

(人名索引。ただし、バーナード・ボザンケは頻出するので除外した。)

ア行

アーウィック (E. J. Urwick) 24, 25, 28,
 赤沢正敏 221, 228
 秋田成就 37, 225
 アクィナス (Thomas Aquinas) 45
 浅沼和典 41, 65, 211, 223
 アダムズ (H. C. Adams) 148, 223
 アトキンソン (Max Atkinson) 125, 128,
 223
 アドラー (Felix Adler) 21
 阿部純二 128, 231
 阿部齋 221, 223, 236
 アリストテレス (Aristotle) 54, 170, 183
 飯坂良明 13, 112, 230, 238
 飯島昇三 65, 226
 池村正法 10, 17
 石井健司 10, 17, 229
 石上良平 68, 230
 石沢新二 210, 228
 市井三郎 13, 229
 一番ヶ瀬康子 190, 229
 井上茂 210, 225
 井上政次 9, 15, 224,
 今中次麿 9, 16, 229
 岩崎卯一 9, 16, 229
 岩崎武雄 221, 228
 ウアン (François Houang) 3, 5, 6, 12, 14, 17,
 33, 50, 66, 91, 228
 ウィリアムズ (Geraint Williams) 13, 168,
 234
 ウィリス (Kirk Willis) 187, 237
 ウィルソン (Thomas Woodrow Wilson) 203
 ヴィンセント (Andrew Vincent) 8, 12, 15,
 34, 37, 48, 66, 89, 92, 93, 146, 147, 150, 168,

174, 187, 188, 189, 190, 219, 222, 224, 236,
 237
 上杉健太郎 91, 236
 ウェッブ、B. (Beatrice Webb) 159, 167, 177,
 178, 184, 189, 190, 237
 ウェッブ、S. (Sidney Webb) 174, 175, 177,
 178, 179, 180, 188, 189, 190, 237
 ウェッブ夫妻 iii, 7, 25, 26, 28, 166, 169,
 174, 175, 176, 177, 181, 182, 183, 184, 185,
 186, 187, 188, 214, 220
 ウォーラス、G. (Graham Wallas) 173,
 ウォーラス、W. (William Wallace) 3, 36,
 240
 浮田和民 9, 16, 224
 内田満 221, 223, 236
 ウッダード (Calvin Woodard) 164, 168, 237
 ウッドルーフ (Kathleen Woodroffe) 33,
 184, 190, 237
 ウラム (Adam B. Ulam) 2, 6, 13, 14, 86, 92,
 147, 151, 187, 188, 202, 210, 236
 ウルフ (Willard Wolfe) 186, 237
 柴田卓弘 168, 226
 榎本世彦 150, 227, 232
 エメット (Dorothy Emmet) 148, 165, 168,
 185, 190, 206, 210, 219, 222, 227
 エンジェル (Norman Angell) 194
 オウエン、D. (David Owen) 164, 168, 234
 オウエン、R. (Robert Owen) 77, 90, 233
 大隈重信 16
 大沢真理 189, 233
 大島正徳 9, 16, 233
 大関将一 91, 231
 大塚桂 10, 16, 17, 233
 岡真人 191, 233
 岡沢憲芙 38, 111, 232

小川晃一 92, 223
 オークショット (Michael Oakeshott) 4, 14, 233
 奥村家造 13, 233
 尾崎和彦 12, 234
 オ・サリバン (Noël O'Sullivan) 66, 219, 222, 233
 オッター (Sandra den Otter) 8, 12, 13, 15, 34, 68, 145, 150, 165, 168, 173, 186, 187, 210, 220, 222, 233
 オファー (John Offer) 92, 233

カ行

カー (E. H. Carr) 206, 210, 225
 カー、H. W. (H. W. Carr) 21, 34, 225
 ガウス (Gerald F. Gaus) 45, 48, 65, 66, 68, 87, 92, 220, 222, 227
 樫原朗 190, 229
 柏経學 93, 210, 225, 229
 カーター (Matt Carter) 165, 168, 225
 加藤新平 128, 229
 加藤尚武 14, 227
 カトリン (G. E. G. Catlin) 205, 206, 210, 225
 カニングガム (G. W. Cunningham) 65, 226
 金子光一 37, 229
 カリット (E. F. Carritt) 39, 64, 144, 150, 225
 河合栄治郎 4, 9, 13, 14, 16, 39, 64, 112, 151, 229
 河合秀和 186, 229
 川北稔 13, 186, 232
 カーン (R. F. Kahn) 168, 229
 カント (Immanuel Kant) 1, 19, 25, 26, 42, 48, 76, 122, 123, 128, 193, 194, 216, 229
 北岡勲 9, 13, 16, 41, 65, 168, 211, 229
 紀藤信義 92, 230
 ギビンズ (John R. Gibbins) 205, 210, 227
 木村健康 9, 10, 16

ギルバート (Bentley B. Gilbert) 164, 168, 227
 キーンズ・ソーパー (Maurice Keens-soper) 66, 233
 ギンズバーグ (Morris Ginsberg) 62, 63, 68, 144, 150, 227
 金泰昌 112, 227
 クイントン (A. M. Quinton) 14, 234
 日下喜一 9, 10, 13, 16, 110, 150, 188, 229, 230, 233
 グーチ (G. P. Gooch) 13, 227
 久保まち子 189, 226
 久保陽一 14, 227
 グラッドストーン (D. Gladstone) 32, 242
 クランストン (Maurice Cranston) 85, 86, 92, 226
 グリーン、E. H. H. (E. H. H. Green) 13, 165, 168, 227
 グリーン、T. H. (Thomas Hill Green) 1, 2, 3, 4, 8, 9, 10, 11, 13, 18, 19, 29, 30, 31, 41, 63, 68, 86, 103, 110, 120, 159, 160, 212, 239
 グレイ (John Gray) 85, 92, 227
 グレン (Marian de Glehn) 22
 クロスマン (R. H. S. Crossman) 206, 210, 226
 クロスランド (C. A. R. Crosland) 186, 226
 グロチウス (Hugo Grotius) 76
 クローチェ (Benedetto Croce) 26, 28
 ケアード (Edward Caird) 3, 9, 35,
 ゲッテル (Raymond G. Gettell) 46, 66, 227
 ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) 36
 コイト (Stanton Coit) 22, 35, 150
 コウカー (Francis W. Coker) 44, 65, 206, 210, 226
 ゴッシェン (G. J. Goschen) 175, 176
 ゴードン (Peter Gordon) 35, 227
 コノリー (William Connolly) 14, 231
 小林浩 67, 229
 コプレストン (S. J. F. Copleston) 206, 210,

226
 小松茂夫 92, 226
 小松春雄 13, 238
 小山路男 189, 222, 229
 コリニ (Stefan Collini) 3, 5, 13, 14, 63, 69,
 90, 105, 111, 226
 コリングウッド (R. G. Collingwood) 13,
 226
 コール、G. D. H. (G. D. H. Cole) 105, 107,
 108, 111, 112, 174, 185, 188, 190, 210, 225,
 226
 コール、M. (Margaret Cole) 177, 189, 226
 コールマン (Janet Coleman) 14, 231
 コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge) 1

サ行

サウジー (Robert Southey) 1
 坂本百大 64, 237
 桜井陽二 93, 226
 サゴフ (M. Sagoff) 220, 222, 235
 佐々木毅 112, 227
 サージェント (L. T. Sargent) 146, 150, 235
 佐藤賢順 15, 224
 サビジャー (P. Savigear) 197, 206, 209, 210,
 235
 サンドル (M. Sandel) 220
 シェフレ (Albert Schäffle) 174, 188, 224
 シェマン (G. F. Schömann) 19, 239
 ジェンティーレ (Giovanni Gentile) 108,
 111
 重森臣広 10, 17
 清水金二郎 17, 226
 シモニー (Avital Simhony) 5, 11, 14, 17, 43,
 65, 89, 93, 111, 235
 朱牟田夏雄 12, 231
 シュンペーター (Joseph Alois Schumpeter)
 188, 235
 ショー (Bernard Shaw) 173, 187, 188, 235

ジョウエット (Benjamin Jowett) 18, 33,
 239
 ジョード (C. E. M. Joad) 108, 111, 112, 124,
 128, 206, 210, 229
 ジョーンズ (H. S. Jones) 3, 11, 14, 17, 108,
 112, 147, 173, 187, 220, 222, 229
 白石正樹 67, 235
 スイート (William Sweet) 7, 12, 15, 32, 33,
 44, 62, 65, 66, 68, 88, 93, 107, 111, 125, 128,
 206, 210, 216, 221, 223, 236, 242
 鈴木基史 209, 236
 スターリング (Morris Stirling) 239
 ステッドマン (R. E. Stedman) 148, 235
 スピラー (G. Spiller) 36, 235
 スペンサー (Herbert Spencer) ii, 1, 10, 71,
 84, 85, 92, 132, 169, 212, 235
 スミス (Thomas W. Smith) 14, 235
 セイバイン (G. H. Sabine) 87, 92, 235
 関嘉彦 13, 186, 187, 226, 235, 238
 関本安孝 167, 235
 セス (A. Seth) 239
 セロー (René Serreau) 215, 221, 235
 ソクラテス (Socrates) 73
 ソネンシャイン (William Swan Sonnen-
 schein) 24
 柚正夫 68, 223
 ソーレー (W. R. Sorley) 1, 12, 13, 37, 235

タ行

ダイ (John Deigh) 125, 128, 226
 ダイシー (A. V. Dicey) 11, 12, 17, 226
 ダーウィン (Charles Darwin) 132, 148
 高島進 35, 90, 191, 236
 高野史郎 33, 189, 236
 高橋允昭 221, 235
 高島通敏 221, 236
 高柳先男 221, 223, 236
 武田弘道 111, 234

竹原良文 210, 225
 タータ (Ratan Tata) 28
 多田真鋤 65, 236
 ターナー (Frank M. Turner) 144, 150, 236
 田中達 16, 225
 谷昌恒 37, 236
 玉井治 13, 226
 田村浩志 10, 17, 69, 150, 222, 236
 ダンテ (Dante Alighien) 36, 85, 92, 226
 ダンデス (David Dundas) 239
 チェンバレン (Joseph Chamberlain) 175
 千葉真 65, 226
 チャップマン (John W. Chapman) 146, 150, 225
 チャーマーズ (Thomas Chalmers) 26
 デイヴィッドソン (W. L. Davidson) 81, 92, 226
 ディッケンズ (Charles Dickens) 36
 ティトマス (R. M. Titmuss) 37, 236
 テーラー (Trevor Taylor) 210, 235
 デール (Peter Allan Dale) 186, 226
 テン (C. L. Ten) 65, 168, 227, 229
 デンディ (Helen Dendy) 23, 36, 226, 240
 トインビー、A. (Arnold Toynbee) 31, 35, 212
 トインビー、A. J. (Arnold Joseph Toynbee) 35
 トウツァー (H. J. Tozer) 54, 67, 224
 東畑精一 188, 235
 トクヴィル (Alexis de Tocqueville) 88, 93
 トマス (Geoffrey Thomas) 7, 14, 43, 65, 111, 144, 150, 190, 218, 221, 236
 ド・モルガン (De Morgan) 36
 ドレッシュャー (S. Drescher) 93, 226
 トロット (A. v. Trott) 88, 93, 236

ナ行

中久郎 111, 230

中川雄一郎 187, 233
 名古忠行 187, 188, 191, 233
 夏目漱石 9, 16, 233
 鍋島能弘 9, 15, 224
 ナポレオン (Napoléon Bonaparte) 58, 192
 ニコルス (David Nicholls) 146, 150, 233
 ニコルソン (Peter P. Nicholson) 8, 12, 14, 15, 33, 38, 47, 61, 66, 68, 108, 111, 125, 128, 166, 199, 209, 233
 野田又夫 128, 229

ハ行

ハイन्दマン (Henry Mayers Hyndman) 169
 バーカー (Ernest Barker) 63, 68, 106, 107, 111, 146, 223
 バーカー (Rodney Barker) 148, 223
 バーガー (F. R. Berger) 91, 223
 パーカー (Christopher Parker) 62, 68, 234
 バーク (Edmund Burke) 147, 216
 挟本佳代 92, 228
 バセイ (G. C. Bussey) 91, 225
 長谷川如是閑 9, 16, 228
 パチスン (Pringle Pattison) 27
 ハーディ (Thomas Hardy) 36
 ハドソン (Yeager Hudson) 210, 236
 バーネット (John Burnet) 3
 馬場康雄 38, 111, 232
 早川忠 92, 231
 林健太郎 190, 226
 ハリス、F. P. (Frederick Phillip Harris) 6, 14, 106, 111, 183, 190, 228
 ハリス、J. (Jose Harris) 37, 164, 168, 188, 219, 222, 228
 ハリソン (E. Harrison) 239
 バーリン (Isaiah Berlin) 85, 86, 92, 223
 バルマー (Martin Bulmer) 37, 228
 バレイ (Brian Barry) 66, 228

- ハーンショウ (F. J. C. Hearnshaw) 13, 227, 230
 バーンズ (C. D. Burns) 207, 210, 225
 半田輝雄 92, 226
 バンド (D. C. Band) 80, 91, 223
 ピアソン (Robert Pearson) 13, 168, 234
 ピアチョード (David Piachaud) 37, 228
 ピーズ (Edward R. Pease) 189, 234
 ピーターズ (F. Peters) 239
 ピーデン (Creighton Peden) 210, 236
 平川祐弘 92, 226
 ピルチャー (G. T. Pilcher) 34, 234
 ヒンチマン (Lewis P. Hinchman) 87, 93, 228
 ファネンステイル (Bertil Pfannenstill) 7, 12, 15, 17, 48, 51, 64, 65, 66, 67, 91, 234
 ファーブル (Henri Fabre) 36
 フォイエルバッハ (Paul Johann Anselm von Feuerbach) 126
 フォーサイス (Murray Forsyth) 66, 233
 フォレット (Mary Parker Follett) 145, 146, 150, 185, 213, 219, 227
 福田敏一 65, 112, 227
 ブーシェ (David Boucher) 8, 12, 14, 15, 92, 148, 164, 168, 205, 210, 225
 藤野渉 221, 228
 藤原保信 13, 14, 65, 92, 110, 188, 226, 227, 230, 238
 ブース、W. (William Booth) iii, 156, 157, 158, 167, 190, 223
 ブース、C. (Charles Booth) 167
 ブラウン (Archie Brown) 66, 228
 ブラッドレー、A. C. (A. C. Bradley) 24, 33, 36, 225, 239
 ブラッドレー、F. H. (Francis Herbert Bradley) 3, 9, 13, 19, 22, 28, 41, 239, 242
 ブラッドレー、J. (James Bradley) 42, 65, 225
 プラトン (Plato) 21, 24, 25, 26, 41, 42, 54, 59, 65, 73, 137, 139, 198, 204, 216
 プラムナッツ (J. P. Plamenatz) 61, 62, 68, 144, 150, 234
 プラント (Raymond Plant) 15, 37, 66, 188, 236
 フリース (Horace L. Friess) 36, 227
 プリモラッツ (Igor Primoratz) 49, 61, 66, 68, 234
 ブルース (M. Bruce) 37, 188, 225
 フレーザー (Sir James Frazer) 27
 ブロード (C. D. Broad) 62, 68, 225
 ベイ (Christian Bay) 86, 92, 106, 111, 223
 ヘイワード (Jack Hayward) 66, 228
 ヘインズ (J. R. Hains) 93, 231
 ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) 1, 5, 6, 9, 10, 40, 41, 42, 65, 97, 125, 170, 183, 193, 204, 207, 215, 216, 217, 221, 228
 ベダウ (Hugo Adam Bedau) 126, 128, 223
 ペノック (J. R. Pennock) 150, 225, 226
 ヘフディング (Harald Høffding) 12, 228
 ベラミ (Richard Bellamy) 5, 14
 ペリー (R. B. Perry) 206, 210, 234
 ペリクレス (Perikles) 195
 ベンサム (Jeremy Bentham) ii, 10, 55, 64, 71, 72, 74, 75, 76, 77, 81, 82, 83, 84, 85, 89, 91, 212, 223
 ホアンレ (R. F. A. Hoernlé) 6, 14, 26, 37, 97, 108, 110, 112, 205, 210, 228, 241
 ホウルマン (Bob Holman) 167, 228
 保坂哲哉 37, 229
 ボザンケ、C. B. P. (Charles B. P. Bosanquet) 18, 20, 239, 241
 ボザンケ、D. (Day Bosanquet) 18
 ボザンケ、E. P. (Ellen P. Bosanquet) 177, 189
 ボザンケ、G. (George Bosanquet) 18
 ボザンケ、H. (Helen Bosanquet) 13, 18, 20, 23, 24, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 36, 37, 92, 176, 177, 187, 189, 203, 210, 224, 225, 241,

242

ボザンケ、R. H. (Robert Holford Bosanquet) 18
ボザンケ、R. W. (R. W. Bosanquet) 18, 239
ボズウェル (James Boswell) 36
ポッパー (K. R. Popper) 6, 108, 111, 234
ホブズ (Thomas Hobbes) ii, 1, 10, 64, 70, 71, 74, 77, 85, 89, 193, 212
ボーピット (Graham Bowpitt) 159, 167, 225
ホブソン (J. A. Hobson) 63, 68, 206, 210, 228
ホブハウス (L. T. Hobhouse) 5, 6, 8, 14, 61, 62, 68, 86, 92, 105, 106, 108, 111, 112, 124, 128, 146, 206, 207, 210, 228
堀豊彦 9, 16, 68, 92, 223, 226, 228
ボール、S. (Sidney Ball) 3, 4, 14, 63, 68, 175, 188, 223
ボール、T. (Terence Ball) 63, 68, 223
ポール (Leslie Paul) 4, 14, 234
ホールダー (Hiralal Halder) 20, 33, 86, 92, 217, 221, 227
ホールデン (Richard Burdon Haldane) 21, 25, 37, 204, 205, 227, 239
ホワイト (John White) 35, 227
ホワイトヘッド (Alfred North Whitehead) 221

マ行

マクキロップ (I. D. MacKillop) 36, 230
マククリモン (J. M. McCrimmon) 93, 231
マクブライア (A. M. McBriar) 7, 15, 33, 34, 36, 79, 91, 93, 166, 167, 186, 188, 189, 231
マクミン (N. MacMinn) 93, 231
マーシャル (Alfred Marshall) 162, 163, 167, 168, 231
榊田啓三郎 111, 231
マッキークヴァー (R. M. MacIver) 6, 106, 111, 230

松本通晴 111, 230
松本礼二 93, 231
マルクス (Karl Marx) 169, 172, 173
マルクーゼ (H. Marcuse) 6, 108, 111, 124, 128, 231
丸山武志 90, 231
丸山雅夫 128, 231
マレイ (R. H. Murray) 41, 64, 233
マンダー (W. J. Mander) 14, 15, 236
萬田悦生 10, 17, 68, 150, 231, 234
ミアヘッド (John Henry Muirhead) i, 3, 21, 22, 24, 31, 33, 35, 38, 41, 63, 65, 68, 71, 87, 90, 92, 110, 183, 190, 203, 232, 242
水田珠枝 16, 225
水谷三公 188, 232
三戸公 150, 232
ミドウクロフト (James Meadowcroft) 7, 8, 12, 15, 44, 65, 106, 111, 231
宮下治子 64, 237
宮本葉子 33, 232
ミラー (David Miller) 14, 231
ミル (J. S. Mill) ii, 1, 10, 12, 64, 71, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 138, 147, 153, 154, 155, 156, 165, 166, 169, 183, 212, 231
ミルン (A. J. M. Milne) 6, 14, 64, 89, 93, 206, 210, 231
ムーア (G. E. Moore) 4, 21
ムッソリーニ (Benito Mussolini) 28, 108, 111
村岡健次 13, 186, 232
村上信一郎 38, 111, 232
メッツ (R. Metz) 13, 33, 109, 112, 231
メレディス (George Meredith) 36
モアフィールド (Jeannie Morefield) 7, 8, 15, 147, 221, 232
毛利健三 168, 222, 232
モナガン (P. A. Monaghan) 80, 91, 232
モラント (A. C. Morant) 188, 224

モリス、W. (William Morris) 41, 65, 169
 モリス、C. W. (Christopher W. Morris) 60, 68, 232
 森本哲夫 68, 150, 234, 237
 モロウ (John Morrow) 7, 8, 12, 15, 86, 92, 111, 124, 128, 144, 150, 207, 210, 219, 222, 232
 モワット (Charles Loch Mowat) 33, 34, 164, 168, 176, 184, 189, 190, 232
 モンテスキュー (Charles Louis de Secondat Montesquieu) 76

ヤ行

谷田部文吉 13, 236
 安保則夫 188, 238
 楊井克巳 90, 233
 柳沢謙次 221, 238
 山下重一 13, 93, 231, 237, 238
 山室武甫 167, 237
 山本新 37, 237
 山本信 221, 228
 行安茂 8, 13, 14, 15, 35, 110, 167, 230, 238
 横越英一 92, 223

ラ行

ライアン (Alan Ryan) 12, 14, 166, 231, 235
 ラコック (D. D. Lacock) 66, 105, 111, 230
 ラスキ (Harold J. Laski) 4, 6, 14, 61, 62, 68, 86, 92, 106, 108, 111, 112, 230
 ラスキン (John Ruskin) 41, 65,
 ラッセル (Bertrand Russell) 4, 21, 210, 225
 ランダル (J. H. Randall) 3, 14, 217, 221, 234
 リーチャー (David Geroge Ritchie) 3, 9, 21, 26
 リヒター (Melvin Richter) 11, 17, 33, 234
 リムリンガー (Gaston V. Rimlinger) 164, 168, 234

リンゼイ (A. D. Lindsay) 4, 6, 13, 14, 63, 69, 85, 92, 107, 111, 146, 230
 ルイス (Jane Lewis) 37, 150, 185, 190, 228, 230
 ルソー (J. J. Rousseau) 4, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 60, 63, 67, 70, 71, 73, 76, 89, 102, 129, 147, 224
 ルーフ (Madeline Roof) 33, 149, 234
 レイトン (J. A. Leighton) 3, 13, 230
 レイバード (Cécil Laborde) 108, 111, 230
 レトウィン (S. R. Letwin) 39, 64, 183, 190, 230
 ロイド・ジョージ (David Lloyd George) 185
 蠟山政道 9, 16, 235
 ローズ (Michael E. Rose) 164, 168, 234
 ロック、C. S. (Charles S. Loch) 19, 20, 21, 25, 33, 34, 176, 212, 239
 ロック、J. (John Locke) ii, 10, 19, 20, 31, 64, 70, 71, 77, 82, 85, 89, 212,
 ロツツェ (Hermann Lotze) 19, 239
 ロビンス (Peter Robbins) 5, 14, 219, 222, 234
 ロブソン (John Robson) 12, 90, 92, 93, 231

ワ行

鷺尾雨工 9, 15, 224
 若松繁信 10, 17, 237
 輪島達郎 92, 227
 ワーズワース (William Wordsworth) 1
 ワーノック (G. J. Warnock) 39, 64, 237